女子文壇

明治四十三年四月廿五日印刷納本
（每月一回廿五日印刷納本）

明治三十七年十二月十九日
第三種郵便物認可



家庭の改良は臺所の改良に始まる。
臺所の改良は瓦斯の使用に依りて完し。

マッチ一本さへあれば、お子様にもお年寄にも、自由に煮炊が出來ますから、皆様が、瓦斯のことを「女中用らず」と仰しゃいます。

それに煤烟や灰燼が立ちませぬので、家の燻る憂なく、塵の出來る心配なく、火災の起る危險なく、臺所が清潔で、場所を取らず納屋を要せず、捻子で火の加減が自由自在ですから、烹物は頗る風味よく出來ます。

三升の御飯は寒中でも二十分（瓦斯代二錢）お湯や煮物は數分間で出來至極重寶で御徳用であります。普通十人位までの御内では竈と七輪とさへあれば充分で、竈は御望みにより御貸し致しますから、臺所改良の費用は僅金貳圓位しかゝりませんどうか御試用の上御高評を願ひます。

神田錦町

東京瓦斯株式會社

電話本局（一三、二五六、五四八、一五七〇、二三〇三、三一五二、三二三九、）

散文詩集の第一聲

河井醉茗著
長原止水裝幀
岡田三郎助挿畫

四六判裝釘華麗
紙數二百五十頁

霧

定價金五拾五錢
送費金六錢

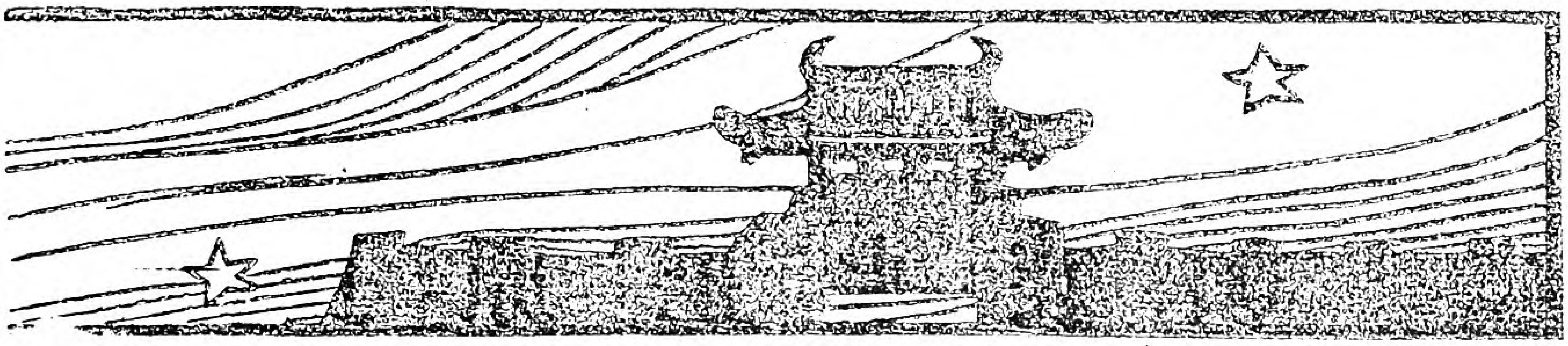
新藝術の精華

製本既成

最も自由なる思想發表の體式として、最も新らしき藝術の試みとして、あが散文詩は漸く文壇にその隆盛を見んとす。この時に當り著者は早くその公にしつゝありし散文詩約百篇を集めて更に世に諮はんとす、これ實に我が散文詩壇の氣運を促進すべき導火線にして、また散文詩を味ひ、散文詩を作らんとするものゝ恰當なる良書なり。

着金即日送本

發行所　東京市京橋區南傳馬町三丁目　東雲堂書店　電本一六三九　振替五六一四



女子文壇五月號（六年六號）目次

【本欄】（一―四四）

（頁ノ二）

薫風

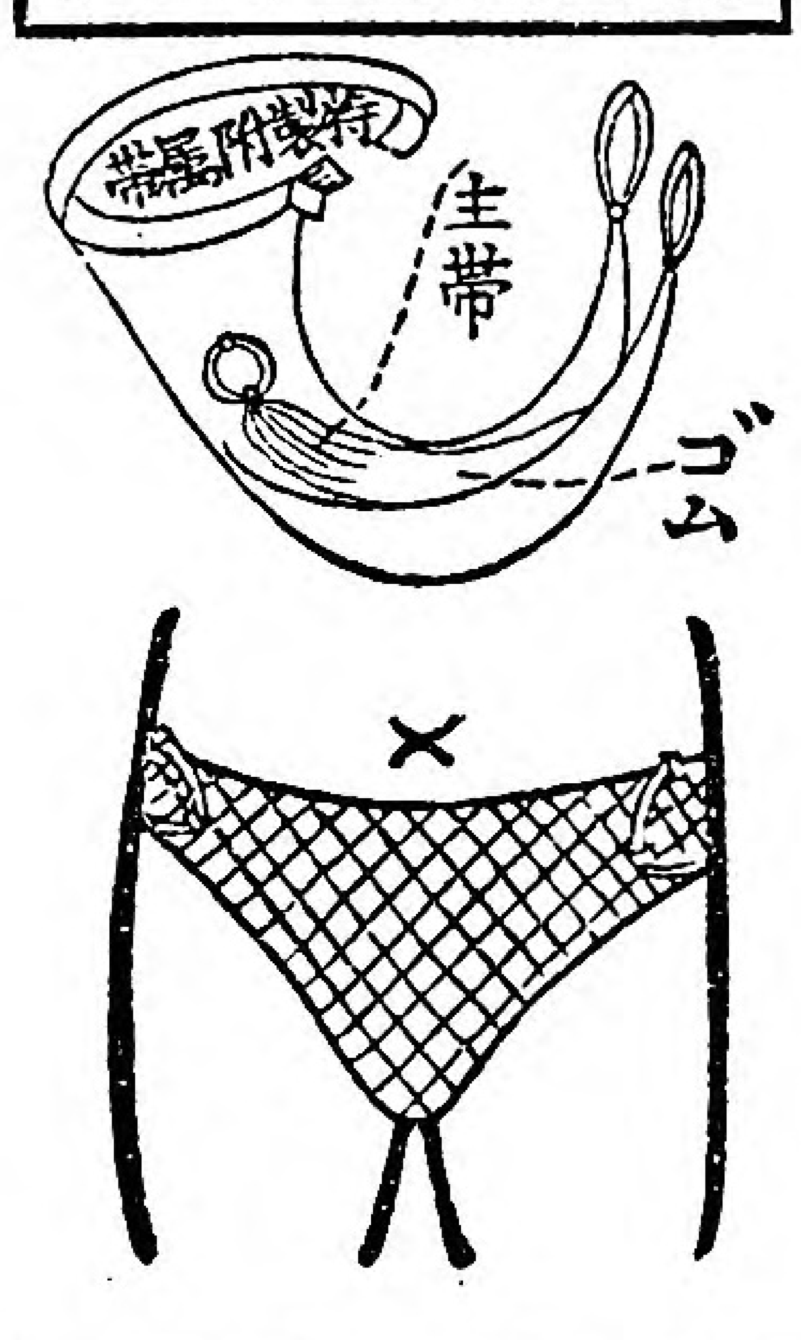


（大江原色版製版印刷）

月経帯の大王

特許安全帯

強き方も決して粗相せず



諸大家稱讃 櫻井堀口兩醫學士推奬 正七位勳五等藤川藥學士鑑製

子宮病ノ原因、月經ノ時ノ紙布脱脂綿ヲ挿入スルニ依ル是其纖維カ局部ニ殘留シテ腐敗シ黴衡ヲ起スカ故ナリ外部ヨリ吸收スル本品ニ依リ豫防セラレヨ本品ハ消毒セル衛生品ニシテ吸收力脱脂綿ノ數倍又產後ヤ白血長血ノ方ニ至極妙ナリ殊ニ御通學及ヒ御出勤ノ御方ニハ缺ク可カラサル良品ナリ

本舗 東京市本郷區湯島天神町三ノ二 安全堂

特約大販賣 牛込袋町二十六 御園おしろい 御園商店

定價
- 安全主帶 特甲一打金六拾錢半打金三拾五錢特乙一打金四拾錢半打金貳拾貳錢
- 附屬帶一筋 特甲金壹圓貳拾錢特乙金八拾錢並製金四拾錢

地方ハ二打ト帶二筋迄金拾貳錢以上ハ一打ト一筋ヲ増ス毎ニ金貳錢ノ郵稅ヲ要ス

本書は婦人の日常缺くべからざる事項を集めて詳細餘す處なし乞ふ世の夫人令嬢たち速に一本を購ひて坐右の友とし給へかし

處世必携 婦女の顧問

定價壹冊（送料共）金貳拾七錢（切手代用卅錢、振替廿八錢）

禮法 料理 裁縫 洗濯 衛生 敎育 法令

！（目次大要）！

服裝●態度●應接●訪問●婚姻禮式●葬儀●衣服敷物の扱方●飲食の注意●外.：：數項

料理の種類●略式料理●常式料理●漬物の製法●魚鳥料理心得●飯のいろ〳〵勝手道具取扱の心得●四季總菜料理法●西洋料理法●外：：：數項

裁縫器具●衣服の寸法及取扱方●地合の撰み方●國旗及夜具の寸法●紋の附所●裁縫に就ての注意●外：：數項

絹及木綿物の洗濯●毛織物の洗濯●革類の洗濯●汚點拔の秘法●洗濯の注意●外 數項

月經●姙娠の徵候●姙娠中の心得：：五項●出產の心得●產後の心得：：四項●產兒に對する心得：：八項●病人と食物及藥●外：：：數項

家庭敎育の必要●夫に對する心得●舅姑及家族親族に對する心得●姑たるの心得●主人に對する心得●外：：數項

民法●戸籍法●郵便法●電信法●諸種の稅法●婦人に必要なる諸種の罰令●外：：：數項

訂正再版

最近就職案内

壹册（送料共）金貳拾九錢
切手代用は卅二錢
振替送金は金三十錢

本書は地方及東京之部に分ち官署會社銀行商店其他の就職手續を示し高等女學校小學校卒業者に適するもの年齡學力を問はざるもの等を詳記す

發行所 東京市神田西小川町二ノ九 盛文社 振替口座東京貳〇四五五番


買！
造花材料
東京日本橋區
横山町壹丁目
天野卯兵衛商店

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

婦人世界

五月一日發行　五卷五號　一冊十五錢

郵税一錢五厘　半年分郵税共一圓五錢　一年分二圓五錢

◎女學校を卒業して結婚する婦人に忠告す……大隈伯爵

◎日清戰爭の時衣服を賣つて駿馬を求めてくれた私の妻……比志島中將

◎乃木大將母堂の臨終に侍して感じた事……山口博士

◎私が外科手術を受けた時の實驗……村井弦齋

脚氣病の治療法發見さる……弦齋夫人

▽脚氣は日本人の國民病なり今や効驗神の如き療法發見す詳細本誌▽

▽米飯を常食とし味噌汁を食する家庭は直に實行し得べし詳細本號▽

◎子供は何ヶ月より副食物を始むべきか……加藤博士

◎侯爵薨去の時内親王殿下台臨の御模樣……佐佐木侯夫人

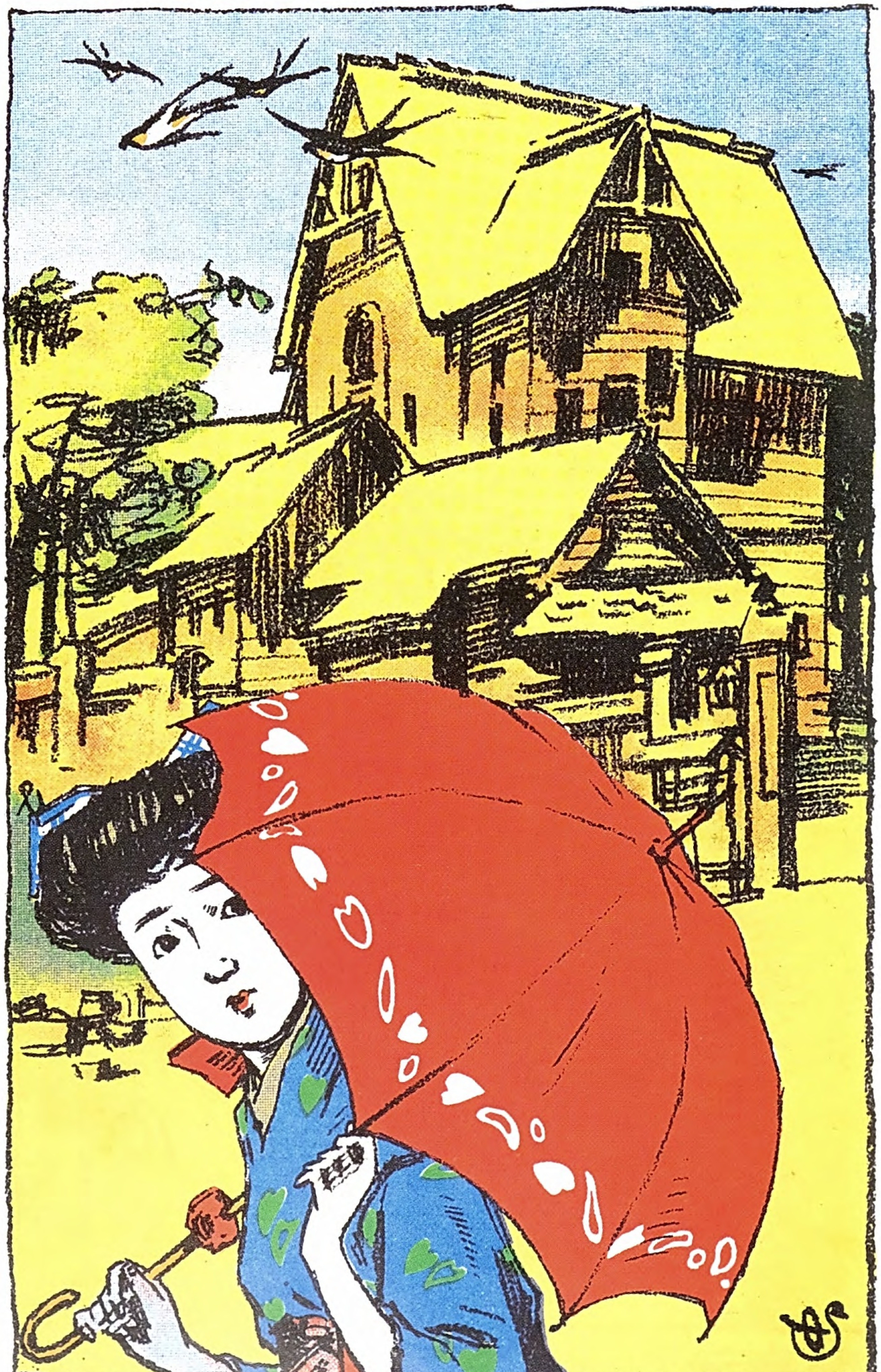
◎神風連に襲はれ姙娠六ヶ月の身で屋根より飛降りた時の話……與倉中佐夫人

◎婦人の芝居見物の利害……村井弦齋

東京京橋南紺屋町（郵便貯金口座參貳六番）賣捌全國書店

實業之日本社

虎の門



皇孫殿下
韓國皇太子殿下 賜台覧

文學博士 上田萬年先生解說
名和永年書

日本歴史畫譚

（全一册）

洋装四六判美本
舶來紙刷密
畫二百個入
定價金六拾五錢
郵稅金八錢

天下第一の美しき歴史畫本出づ、上は天照大神の昔より、下は伊藤博文公の暗殺に至るまで、上下三千歳の著名の事蹟を、一々美麗なる挿畫を以て現はし、之に平易明快なる解說を加へたれば、讀んで面白く有益なばかりでなく、只一目見ただけでも、其美しさ面白さに、少年諸君は吃驚せらるゝであらう、學校の參考書としても、家庭に備へても、之れ程趣味深くして有益なるものは他にあるまい、少年机上の珍寶、家庭團欒の材料には必ず無くてはならぬもの、天下の少年諸君の愛觀を待つ。

▲三越呉服店兒童博覽會にて販賣致居候

文學士 大町桂月訂

ポケット 日本外史 全

洋装菊半截總クロース頗美本紙數約四百頁
▲定價金四拾錢——郵稅金六錢

第四版

新刊

文學士 久保天隨君著

新體 實用書翰文

全壹册——美装——紙數三百餘頁
▲正價金五拾八錢——郵稅金拾錢

發賣元 東京市神田區錦町二丁目角 振替貯金口座第二百六十番 勉強堂書店

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

ご婦人方の待ち兼ねらるゝ

五月一日發行の
第十卷第六號



どんな事が
書いてありませう?

こんなことが書いてある

● 私の妙齢時代（井深花子女史）
● 佛教と家庭（岡田治衛武夫人）
● 雜記帳（與謝野晶子）
● 煩悶者の相談相手（網島佳吉）
● スヰートホーム（内藤千代子）
● 兄の看病と母の奉養（正岡りつ子）
● 流行の爪磨術（莊司化粧師）
● 結婚後の修養法（藤生貞子）
● 枕の草紙（一宮きよ）
● 病氣になつて愛情の濃くなつた女の消息（翠葉）
● 呪はれた寮舍生活（三保野純子）
● 韓人のお産を見た記（犬飼たき子）
● 長命せる老媼の生活（天野榮子）
● 若き婦人の眼の養生（井上溫）
● 家庭教師の弊害（高田清風）
● 初夏の趣味（物集水）
● 端午のちまき（桑原東浪）
● 卒業後の女中見習（をみなへし）
● 京都の女 ● 久留米の風俗 ● 釜山の風俗
● 世話女房日記
● 箱根湖畔の家庭生活（石内富枝）

その體裁は 洋裝菊判紙數二百八頁石版寫眞口繪は大に振つたものである

その價は僅かに 一冊廿錢郵稅二錢である

發行所 東京本町 博文館

何處の本屋でもお取次致して居ますからお早くお買なさい

百聞は一見に如かず

一日發行 五月號 要目

少女

毎月一日發行 定價一册拾錢 送壹錢 半年 郵税共 六拾三錢 口繪挿畫澤山

● 少女小說 **海上の女**（五）……磯萍水
（愈々面白し—危機一髪—短銃を持つた手—滴る血汐）

● 少女小說 **花子の記憶**……小川未明

● **少女の手で作り上げる五千萬圓の輸出品**……田上孤舟

● **仇を討つて主人の鬱憤を霽らした女中お初の美談**……河井醉茗

少女文壇 繪さがし 懸賞 應募あり 面白い

● 少女小品 **鳳仙花**……佐藤緑葉

● **芳枝と八重子**……一色醒川

● 少女小說 **無言の鞭**……西崎花世

● 少女小說 **暗い心**……犬麻呂

● **電信はどうしてかゝるか**……眞下夕陽

● **蟻の一等好きな色**……北谷知孝

● **草や木はどうして寐るか**……鯉岳小史

發行所 東京京橋區大鋸町 女子文壇社 （振替口座東京第壹七貳九番）

最寄書店になくば直接御申込を乞ふ

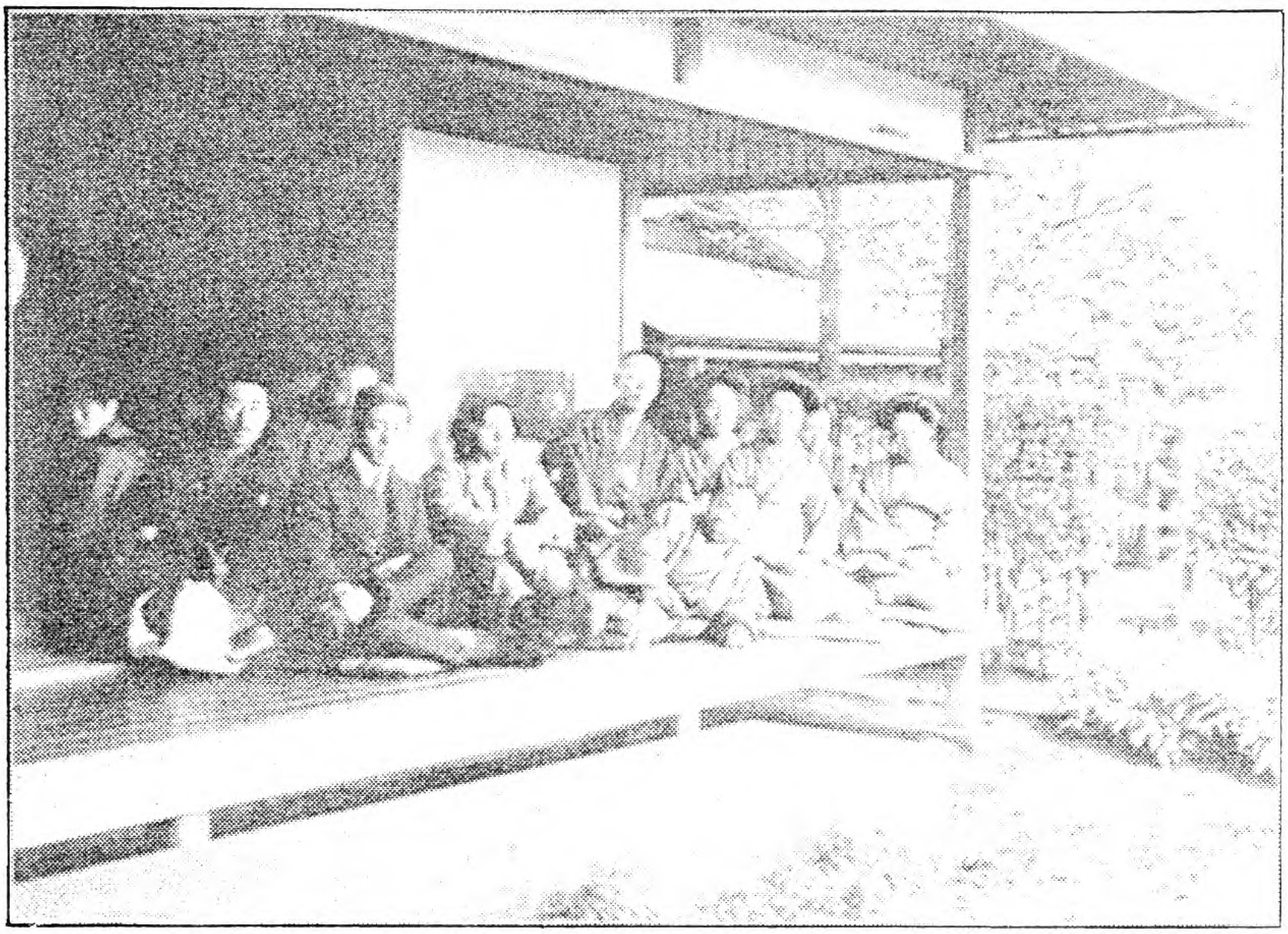
（ろノ四）



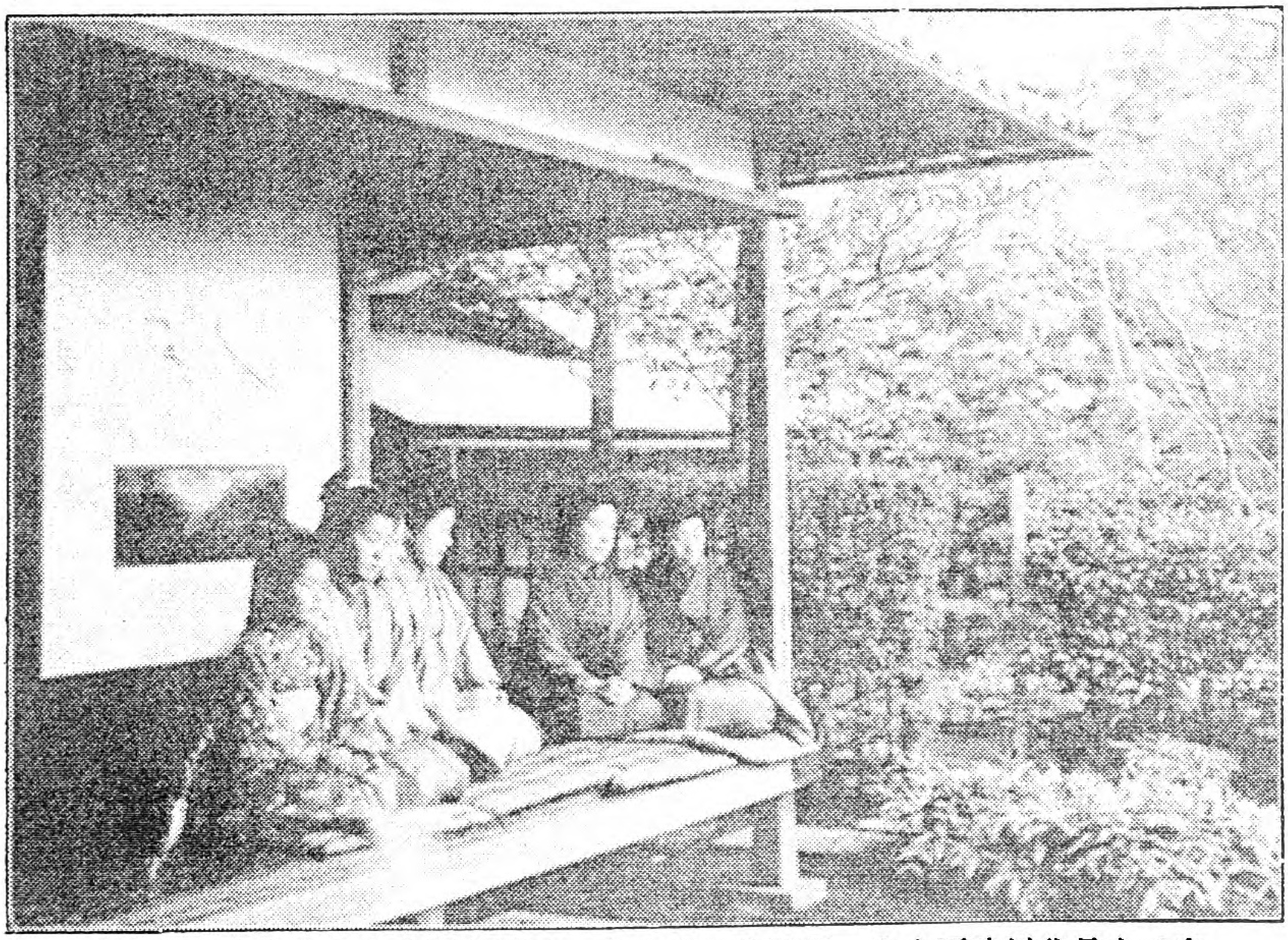
（本欄記事參照）

星ヶ丘茶寮に於ける女子文壇誌友會出席者（四十三年四月十日）

女子文壇誌友會來賓



向て右より與謝野晶子女史、森鷗外氏夫人、横瀬夜雨氏
後列葉山女、鷗外夫人令妹、酔茗、竹久夢二氏、水野葉舟氏



向て右長谷川時雨女史、岡田八千代女史、三宅花圃女史の令息夫人及令嬢

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても平素之を用ゆれば漸次肉體に**純白色**に**變化**し肌を滑にし皺を伸しあれ及吹出物を治し艶美の容貌となる驚くべき効果を有す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の美容新劑

價並製壹圓廿錢特別製壹圓八拾錢

飲んで色白くなる世界唯一輸入新藥

根本的色白くなる内服藥 **サーサパリラ**

英國ロンドン「バーゴイン」製の「サーサパリラ」は峻烈なる**清血劑**にして頑強なる慢性梅毒瘡毒リウマチス皮膚病、猛惡等の病毒及び男女體内の**惡血毒血**且つ惡液を體外に排泄し血液を清淨にし精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艶美**ならしむる奇効顯著の内服水劑なり（注意）從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり

（今回英國より輸入し當館にて一手專賣致候）色白新劑と「サーサパリラ」と内外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

價壹劑二圓七拾錢▲參劑七圓五拾錢▲五劑拾貳圓拾錢

色白特効 ペーアス石鹸

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

此石鹸は**世界第一等**の良品にして化粧品の大王なることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を揭げん**皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質**を治するは此石鹸獨特の靈効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薰るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する内國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ（昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を望む）

以上三種 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

有効保險 前代未發 秘傳奇術

金壹册正價郵税共參拾五錢▲郵券代用は四拾五錢封送の事

（目錄法要）神經衰弱の新療法●陰萎病を必治する新法●陰○の爛れを治
大る●●消渇を必治する法●頑癬の必治法●人造麝香の製法●上等香水
す法法香袋製法●美顔クリーム製造法●音聲を清良にする法●歯痛即治
製製法●髮の脱落するを止むる法●化粧石鹸製法●西洋白粉製法●毛髮
藥生●●臭汗治法●白髮を染る法●髮毛の光澤を美にする新藥●歯磨粉
必法●西洋梳油製造新法●にきび即治法●ほくろを落す法●ピットル酒
製法を夏日室内を爽凉にする法●纖紗類を汚せるインキ斑痕を除く法●
製瓜長一年新鮮に貯ふ法●蚤を驅除する良法●氷を即時製造する法●
白年海壽の奇法●生涯病に罹らざる奇法●人の生死を豫知する法●船中
百り答の底を見る法●百日眠らず體養へざる法●拔毛劑新法●寢入たる
よにずへしむる法●禿頭病必治法●寢入りたる男女の心中を知る法●白
者まを即治法●五十の鐵婆を二八の娘に變ずる法●脚氣病必治法●妖怪
な化す見顯はす神術●人體不死の奇法●千里一足飛行の神術●盜人を見
變はか神術●女に○れらるゝ藥法●硬き毛髮を柔軟にする法●思ふ女を
顯○必す藥法●堅き女の氣を○○す藥法●陰○を長大にする藥法●そば
○す○治法●女を○○にて泣す神藥●夢に戀人と語る秘術●見染し女を
かに藥れる神法●待人來る神術●一生戀中變らぬ秘術●悋氣深き女を
手する●法●閨中の秘藥●即座に男精を増す法●毒蟲に螫れたる時腫ぬ
治効藥催避食の仙術●神速に精力を強む法●即座陰身術●人を眠らす秘
特即ち制眠術●顔赤く吹出物生ずるを治する法●過房を治する妙法●多
法を抑孕する秘法●色慾なき女に情な○せしむる法●記臆力を増進する
情●女術みの仙術●男女梅毒の有無を知る法●淫婦觀破の奇術●黒字夜
法の奇●●老人終身皺取りの奇術●腋臭を治する法●色を白くする内服
光新法脹寶丹の藥法●腹痛速治法●疥癬病の藥法●生たる鯉を遠國へ送
劑法●直瞞を治する法●黄疸を治する法●鮫肌を直す秘法●味嗜の損じ
るるをるす法●痳病の治法●月經の不順を治する法●痳氣の妙劑●歯痛
た治す●法●陰部の臭きを治する法●陰部の虱を去る法●にきびを法る
を新法法頭髮を長くする法●毛生藥の最新法●梅毒必治の新法●便毒必
最の新巾●下疳を治する奇法●胃病の新劑●百日咳の妙法●肺病必治の
治藥●●風豫防の新法●凍瘡の妙法●衣服に酒のしみたるを洗はずして
新す法●火傷即治の秘法●シヤクリ即治法●聲を能くする新術●白髮豫
落新法法土藏の鼠穴を塞ぎ再び明けぬ法●頻小便を治する秘法●頭瘡を
防するる●●耳だれを治する法●いぼを取る法●あざを拔く新法●乳の出
治妙藥目陰部の諸瘡治する法●虎列拉病療治簡易法●梅毒豫防の奇法●
るふ時をを覺す法●年齡により房事の度數●病氣前知の奇術●男女全體
思の色白くし且つ艶美ならしむる法●苺酒を製造する法●富を造るの秘
法●一時に數拾匹の鼠を捕獲する秘法●夏帽子洗濯新法●疊の汚染を落
す新法●新しき鍋釜の鐵氣を止る法●簡易美顔術新法●衣服に油の付た
るを落す良法▲以下數拾法略す（合計壹百四十法あり）着金即刻送本す

專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 **日新館商店**

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

第四回新學期開始

●入會の最好機は來れり

五月卅一日迄は入會金免除の特典あり

▲自宅に在りて業務の傍、高等女學校程度の學術技藝を修得せんと欲するものは速に本會に入れ、本會發行の實用女學講義錄は前記學課の外に我國家庭の事情に參酌して女子必須の諸學藝を遺憾なく講究せしむ。

▲會長 尾崎行雄氏自ら會務を監督し取扱親切也
▲講師 斯道に經驗深き專門大家拾數氏之に當る
▲組織 高女課程以外家政技藝等を加へ實用的也
▲講義 言文一致畫入れ假名付きにて誰にも判る
▲質問 不明の處は何回にても自由に質問を許す
▲雜誌 會員には講義錄の外機關雜誌を毎月進呈

實用女學講義錄

▲本會は中學講義錄を發行して成巧せる深き經驗を基礎として新式の教授法により丁寧懇切に教授す◎小學校卒業位の學力あらば何人にても容易に了解することを得べし

▲會員 の詩歌文章俳句は添削して雜誌に掲載す
▲會費 全學期の會費は都合半月の學費にて足る
▲入會 何時入會するも講義錄は第一號より送る
▲章票 會員には會員章、修業證、卒業證を送る
▲特典 此際至急入會者には入會金を免除すべし

●見本つき規則書 申込次第無代進呈 講義錄第二號は五月一日發行す

東京神田區駿河臺

大日本國民中學會女學部

振替東京四二〇〇番・電話本局(三〇〇四番)(三七〇〇七番)

名門の夫人



伯爵南部利淳氏夫人



子爵小笠原長生氏夫人

正金銀行副支配人西巻豊佐久氏の家庭



（長女豊子）（令息）（西巻氏）（三女さみ子）（二女久和子）（夫人及四女部女子）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

黴毒根治新劑

本劑（藥名ドクトル）は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一の **ばい毒** 根治特效劑藥なり故に黴毒及黴毒に關聯して續發する諸症（即ちばいどく。ひゑ。かさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。瘡毒。ろいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等）ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて **誓って根治** すること確證す從來醫療賣藥等百方手を盡すも全治の效なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ。藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢

生殖機病特效新劑……（獨逸新輸入藥）

内服 ヨヒンビン

拾錠入壹劑 藥價送料共 壹圓九拾錢 郵劵貳割增

本劑は獨逸國伯林大學教授博士スピーゲル氏の發見に係る

る男女 **生殖機不能** 即ち **陰萎病。腎虛。神經衰** 弱遺精。夢精。早漏。過房。元氣衰弱。老衰無力。生殖虛弱。生殖機能障害。早老者。精液精蟲缺乏。不姙娠。冷症。發育不全等に用ひ天下無比 **可驚奇效** ある最新發見藥也 **精力を增進** し生殖器を强健ならしめんと望む者は早く試よ峻烈偉大なる特效眞に **如電光** 世にありふれたる無效賣藥と同一視することなかれ本劑の卓效は高名なる醫師に就て承合せば明白也

奏效確證 美容新劑 やせる藥

壹劑分價送料共參圓廿錢 貳劑分六圓廿錢 特別製分九圓廿錢 着金即刻送藥す

本劑（藥名ヨードチリン錠）は學理實驗に徵したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顏赤くほてり、のぼせ症、卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれは無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脫し美容健康を保ち程よくやせる特效藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇效を知られよ

世界唯一 痳病消渴の根治新藥

痳滅（りんめつ）

痳滅は最も進步したる最新の痳病消渴即治模範藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上效力頗る峻烈なる一新藥を主劑とし是を內服して **痳病消渴** の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち **滅殺** する處方に基き製劑せし新藥に付輕症は壹劑重症は特別製分にては必ず誓て根底より **根治** するを確證す但し彼の舊式洗滌劑の如き迂遠無效有害の姑息藥と異なり奏效確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者豫め之を諒せよ 藥價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢 郵券代用貳割增しの事

わきが 腋臭 全治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても忽 **誓て根治** し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ 價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓參拾錢着金即刻送藥す

毛の必ず生る確證藥

特別製分金五圓三拾錢 大瓶貳圓卅錢 中瓶壹圓廿錢

本劑は米國醫學博士の發明に依り學理實驗に徵したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共腫物の痕、はつぼうはげの痕、やけどの痕、頭髮及はゑぎわの薄き人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮蒼々と發生する特效あることを確證す本劑は從來ありふれたる雜多の毛はゑ藥とは其效勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付幸には玉瓦混同視すること勿れ

以上六藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇愛讀者へ特典提供

與謝野晶子女史著

（木下杢太郎先生表紙畫）

最新刊

女子のふみ

閨秀作家與謝野晶子女史が候文、言文一致、雅俗折衷等の諸文體と溫健、優美、奇警、飄逸等各種の情調とを以て現代婦人界の必要に應じ實用と文學とを調和せる書翰文の一新例を示されたるもの、作例豐富、作法鄭寧、且つ一般の國語漢語に亘り假名遣をも詳述せられたれば、女子書翰文に添ふるに通俗なる假名遣辭典を以てせる至便の好著なり

體裁優美 瀟洒全一冊 正價金四拾五錢 郵送料八錢

小笠原流家元 松岡止波子刀自 共著
大日本禮節學會長 石井泰次郎先生

明治の禮式作法

和裝頗美製 全一册 正價六拾錢 郵送料八錢

發行所 東京市日本橋區檜物町 振替口座東京二三〇番 弘學館 發賣 東京日本橋角 大倉書店 神田區神保町 東京堂

賣捌所 東京市 林六合館○目黒書店。北隆館。東海堂。大洋堂。至誠堂。文林堂。前川書店○大阪市 寶文館○杉本○奥田。盛文館○九州 菊竹書店。長崎書店○名古屋市 川瀨書店。小澤書店○京都市 東枝。若林 其他全國書店

御注文の節本誌に依りたる旨御附記あらば正價の壹割引

女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

賣り切れざる内本日直ちに購入あれ

婦女界

五月一日 第三號 定價一冊五拾五錢 郵税一錢五厘 一年十二冊郵税共一圓七十五錢

◎東宮妃殿下の御修養◎三皇孫殿下の御學事

◎家政の巧拙は直ちに塵溜箱に現はる……田尻博士

▲廿二歳の時藩生を脊負ひて困難を山中に避け涙を揮て苦諫した私の娘時代

▲御殿女中から豆腐屋のかみさんとなりて共稼の成功……實驗

▲適當な嫁を得んが爲め再參死を決した私の經驗……喜悦孝子

▲女子將來の進路は文學と社會事業……女子大學校教頭 麻生正藏

◎空中飛行機に駕して二度まで英佛海峽を横斷せし感想

◎五十餘人の書生を養成した苦心……仁尾樂子

大附錄 〔躑躅〕 二頁大三色版 滿谷國四郎筆

◎婚約後三十二年后宮中奉仕の女官と結婚式を擧ぐる予の心事

◎容色の變つた爲め離縁された前後の悔恨……豊島せつ子

▲家庭の不和が原因で罪惡を犯し遂に斷頭臺上の人たりしを不思議に助かつた私の實驗

▲時代の變遷に伴ふ日本室の裝飾……巖谷小波

▲田園生活の幸福……横井博士

▲女傑廣岡淺子刀自

▲衣裳の着こなし

▲髮の手當法

▲貴婦人の交際ぶり

▲鐵道院の女子雇員

▲應急手當

◎何時も腹に子が居るものと覺悟せよ……村上博士

◎桂總理大臣の家庭◎端午の節句の料理

發兌 東京神田表神保町 振替東京一三五番 同文館 電話本局特四三七、電話本局一五三九 賣捌各地書林

名家の令嬢



鑛山業谷内良造氏令嬢みさを子（實踐女學校卒業）



前文部次官澤柳政太郎氏令嬢しん子



公證人宮本央氏令嬢けい子（學習院卒業）

室内



（愛讀者淡路加藤あさの、幸田ひさえ、麻田みさを）



（愛讀者越後眞柄廣子）


大英國皇室
撰拔御用品
DIEU ET MON DROIT
VINOLIA
愛兒を壯健に且つ快濶ならしめんとす慈母は
必ず評判高き舶來の
ヴィノオリヤァ白粉
ヴィノオリヤァ石鹼
を常に使用す
日本代理店
神戸クローザー商會
慈母も……又た……
ウィノオリヤァクリーム
ウィノオリヤァ石鹼齒磨
ウィノオリヤァ香水
を愛用す
ヴィノオリヤァ會社
倫敦 巴里 紐育

らい病根治新劑

藥名……レプロイス

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介によ る傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多の研究を重ね數千患者の實驗に徴し苦辛經營の末今回始て完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること到底他の類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調合せし粗雜極まる無効舊式藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の惡説に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絶し生涯永久の榮華を完ふせよ。輕症は壹劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す。

藥價送料共壹劑分五圓拾錢特別製分拾圓拾錢

美き聲の出る新藥

發聲藥は古來甚はだ多し然れども其の確効あるものは恐らくは疑はし獨り本劑の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し初めて確實に美聲を發する方法を自得せり本劑は實に無上の發聲藥として千古未曾有世界唯一の靈劑也何程音聲惡しき方又聲出ぬ人にても本劑特別製分を服すれば直に全治し充分なる美聲を發することを確證す

價送料共壹劑分壹圓拾五錢特別製參圓廿五錢

腦病を根治し記臆力を增進する靈劑

記臆增進丸

本劑は獨逸大醫スクリーボワト氏の新處方に基き醫學的の元理に徴し多年實驗の上其奏効確實なるを認め今回發賣するに至りし前代未發の新劑なり故に本劑を服すれば腦病、神經病を根本的に根治し精神爽快智力活潑となり記臆力大に增進し人世百般の見聞更に忘るゝことなきに至る驚くべき峻烈なる特効ありて如何程の健忘者記臆力欠乏者にても一たび本劑を用ゆれば忽ち記臆力大に增進すること誓て確證する所なり論より證據實試一番速に其卓絶顯著なる奇効を知れ

（藥價）七週分四圓五拾錢五週分三圓六拾錢參週分二圓三拾錢壹週分八拾錢（送料）各拾錢宛

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も迅速に安全に快通する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ヶ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を運用せば半年以上の月經閉止にても必ず安全に流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及び血塊惡血毒を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は一劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢（注意）本劑の大盛時を羨み近々怪しき無効なる類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



世界無比　最新發明藥

あざ

入墨は廿日ほくろそばかす、なまず、いぼは拾日目に必ず美麗に除去すること保險附新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も瘢跡を殘さず無痛にて除去し得らるゝことを確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の美質を完うせよ來館者へは山の如き全治者の感謝狀及び除去したる實物を示すべし、ほくろ、そばかす、なまずにては世界唯一の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一は入墨ほくろを除去し又一はそばかす、なまづ、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模様を詳細に記して申込あれば其症に適應する藥を送附すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓（患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす）郵券代用貳割增し送金即刻小包郵送す

以上專賣元　東京市神田五軒町拾九番地　日新館藥房

會員募集

書翰文練習講義錄

手紙の下手な人は末代の損

◎會長 帝國大學名譽教授文學博士 重野安繹

◎懸賞募集＝入會の最好機 今日只今!!!

大町文學士
鹽井文學士
内海文學士
久保文學士
杉山三郊

本會發行の書翰文練習講義錄は文壇の大家が多年の經驗に徵して専ら叮嚀懇切を旨とし最も皆さんに明り易き樣早く熟達する樣と色々心を碎いて筆を執られたのであります▲卒業は滿十ヶ月▲會費僅かに月四十錢▲何と此の短い期間と少い會費とで如何に手紙の下手の人でも一を知れば百に應用することが出來て立派に手紙文がかける樣になる事は皆さんの一大福音ではありませぬか!!!

手紙の上手な人は末代の徳

◎添削質疑無料＝本會々員に限り雜誌『筆の香』毎月一回無料進呈＝講義錄毎月二回發行十ヶ月卒業

稻川雲谿
前田木城
本橋豐洲
大畑重濟

▲講義錄見本附會則無代進呈

東京市本郷區根津宮永町三十五番地

日本書翰學會

海外の愛讀者



竹田俊子　（在米國紐育市）



小山天流子　（在清國上海）

誌友



（長野）青柳さい子



（東京）桝崎佐喜子



（東京）梅村咲子



（東京）谷口はな子



（陸前）高野千代子



（長野）鈴木松子



（越後）齋藤ミヨシ子

誌友諸嬢のお寫眞を寄送願ます、用済次第お返し申すべし、

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

穩健にして摯實優美にして高尚

婦人畫報

五月一日發行 五月の卷 一冊廿五錢 郵稅二錢 六冊稅共壹圓五拾錢 十二冊稅共二圓八拾八錢

書報

附錄 晚春の花 石川寅治筆極彩色美人畫
▼朝香宮殿下と富美宮殿下
▼御進級の各女王殿下
▼閑院宮三女王殿下と御成蹟
▼名家令孃の茶の湯
▼女子美術學館生徒の演せし活人畫
▼各女學校の優等卒業者と成蹟
▼學習院女學部卒業生
▼結納物の色々
▼各女學校の卒業生
▼花見る人、水と女生
▲山脇、女子美術、麴町高女のバザー
▼實踐女學校共立女子職業展覽會…
▼緒方博士在職廿五年祝賀會
▼竹柏會大會
▼婦人矯風會慈善園遊會…
▼名古屋共進會
▼五月幟
▼動物劇…
▼各女學校の卒業生
▼名家の奥樣…
▼少年裁判所
▼令孃鑑

論報は 婦人界の活きたる歷史

讀物は 至誠の籠る淸き泉

讀物

女子と文藝……坪內雄藏
誤れる結婚の末路 井上哲次郎
英傑の士と婦人 井上友一
名を求めざるが婦人の本領 小島德藏
婦人に無くもがなと思はるゝ事 槇山榮次
東京の女と京都の女 幸田露伴
恐るべき嬰兒の下痢症 弘田長
◎千家男爵夫人を訪ふ 婦人記者
◎女學生と臺所 宮川壽美
◎外人通譯として演壇に立つ苦心
◎東京名物◎◎五大將夫人
◎逝きし吾敎子 小野吉勝◎氣のきく女
◎島津惟久の夫人 遠山稻子◎筍料理
◎大岡越前守と今日の家庭
◎女の手にて製造さるゝ煙草… 記者
◎出入商人の見たる奥樣…

東京飯田町四の四 東京社 電話番町二三三九 振替口座一一八一八

新ニキビ藥

内服用 ハイレン

塗布藥で、なをらぬ樣な、頑惡性のニキビも我が新藥の内服に依つて確に根治すべし、詳細は「はがき」にて御申込あれ、皮膚病最新療法と題する冊子を送呈す

東京市神田區南神保町八番地（電車通）

鰯屋藥房 吉羽繁三

美顏秘法



藥學士 藤本 卿先生著述

正二位東久世通禧伯閣下題字

三六版三十余頁 洋裝頗美本

本書は最も有益なる家庭の珍書として上流社會に高評を博したる皮膚の色黑きを白くし●ニキビそばかす顏の小じわわきがの療法及クリーム●白色劑の製法等なり

一部金十五錢特賣提供郵税共金五錢切手にて申込あれ

新案特許『晴雨計』雨か天氣かを豫知する實用具一個三十五錢

申込所 東京大森局區内八景坂 棚橋商店

小說

追懷

鮫島大浪氏著

◎本日發行◎

（女◎主◎人◎公◎肖◎像◎寫◎眞◎入）

定價四拾五錢

郵税四錢

發行所

東京神田區駿河台西紅梅町

文明堂書店

新美文

全一冊二百卅頁
口繪數葉入美裝
定價金貳拾錢
郵稅壹錢五厘

現代の若き女子は如何なる感情を抱きつゝありや又如何なる趣味を持ちつゝありや之を窺んとする者は本書を見よ、或は家庭を材とし或は自然を描き或は人事を歌ひ或は都會を寫す百人百樣の觀察は讀者をして送迎に遑なからしむ、選擇の嚴正にして批評の痛切なる蓋し最新式の文章を學ばんとする者には無双の寶典たるべし

附錄

◉小寒日記……薄田泣菫
◉裏の家……吉江孤雁
◉憧憬……小川未明
◉一轉機……高須梅溪
◉女床屋……兒玉花外
◉拾て犬……岡田八千代
◉火葉……澤村胡夷

家庭日記

全一冊二百卅頁
口繪數葉入美裝
定價二拾錢
郵稅一錢五厘

本書內容

▲お七夜の赤飯と棟上の餅拾ひ
▲草生水日記
▲初めて丸髷に結ふ
▲大呉服店のバーゲンデー
▲憚る處なき女學生の境遇
▲開放したる心の扉
▲晴れの日が近くなる
▲同じ女と生れながら陰と日向の違つた身上
▲未來の博士達の爲に
▲舞臺に出づる迄と出たる後

其他數項

——（附錄）——

最近の日記

三宅花圃
大塚楠緒子
與謝野晶子
岡田八千代
長谷川時雨
國木田治子
尾島菊子
荒川澄子

短篇小說

全一冊二百卅頁
口繪數葉入美裝
定價卅錢
郵稅壹錢五厘

▲奉公人……島崎藤村作
▲水死……森田草平作

懸賞傑作

◉破疊……秋葉清子
◉女客……加藤貞子
◉町の出水……赤崎愛子
◉桃代……佐藤裕子
◉朝顏……吉田駒子

其他美文、書簡文、新躰詩、日記文、和歌、俳句、論文、小說總評豐富滿載

女子名文 新作家



全一冊二百卅頁
口繪數葉入美裝
定價二拾錢
郵稅一錢五厘

庭等作物と對照し其人物を一目瞭然たらしむ。

若き女子が大懸賞應募の小說、美文、詩歌、俳の文藝を興味ある新式編輯法にて統一せるもの。別に日課表あり各自の住所年齡家登載

附錄

○闇夜……服部貞子
○敗者……加藤菊子
○火事……永代美千代
○氣まぐれ者……太田樂子
○新粧……尾島菊子
○六の月……山田くにえ
○姉……故田中久子

東京市京橋大鋸町十二番地　女子文壇社出版　（振替口座東京第壹七貳九番）　賣捌全國書店

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

大好評 紀念保存の價値あり 増刷出來

女子文壇紀念號 満五週年

一月一日發行 例號二倍 三百廿頁 ●本號限り定價三拾錢 郵税貳錢五厘

東京京橋大鋸町 女子文壇社發行 (振替口座東京壹七貳九) 賣捌全國雑誌書店 若し品切の時は發行元へ速に御注文あれ

見落す勿れ

女子文壇第二增刊

都會の婦人

表紙口繪挿畫 竹久夢二氏筆

五月十五日發行

定價金貳拾錢 郵税一錢五厘

女の見たる東京印象記……執筆婦人十餘名

日比谷公園。上野。不忍。神田。神樂坂。芝公園。西片町。根津。洲崎。谷中。銀座。魚河岸。其他

都會の渦捲に漂はされつゝある若き女の眞情……數十篇

長曾我部菊子の入京記を初めとして、冥想的なるもの、思索的なるもの、反抗的なるもの、暗黑的なるもの、實際的なるもの、凡て都會の壓迫と刺戟とに堪へかねて自ら表白し來れる眞情の叫び聲なり

都會生活の實際的方面……十數篇

生活の階級、花やかなるバザーの日、卒業式の前、欺かれたる工女の懺悔、某子爵邸に遊ぶ、お孃樣のお供、東京の女が著しく眼に着く點など各自其人の實驗を書せり

東京の地と東京の女……諸大家談

▲上京する女學生の注意……與謝野晶子

▲暗愁に囚はれたる女性……澤村文學士

▲詩に表はれたる都會……河井酔茗

▲衆議院傍聽記……さわらび女

▲東海道線……一色醒川

▲西の郊外より……水野千枝子

▲南の郊外より……荒川澄子

創作 小說。散文。詩。和歌。俳句。

都會を歩いてゐる女の印象 其他青年文士諸氏執筆

北原白秋、森川葵村、吉井勇、木下杢太郎、水野葉舟、前田夕暮、

日比谷大神宮結婚式の記事……

東京市京橋大鋸町 女子文壇社發行 （振替口座東京壹七貳九） 賣捌全國雜誌書店



女子文壇

第六年第六號

明治四十三年五月一日發行

冷たき土窟に醸されて
若紫の色ふかく
泡さく酒の盃を
唇に含ませよ
暮れゆく春を頷きて
細き腕の冷ゆるかな

心周章つる佐保姫が
旅の日急くか、この夕
人は晩餐に耽る間を
花そこ此處に散りこぼれ
痛ましいかな春の日の
快樂も土にかへりけり

垂るゝ若葉の下がくれ
亂れて細き燈火に
瞳凝らして見入るれば
夢にぬれる蘂の粉や
花なき今も香を吹いて
殘れる春を燒かんとす

泣菫氏『暮春の賦』より

産

森しげ女

富子の大きい、大きい張り切れさうな腹からは、今にも産があるかもしれない。恐ろしい事である。

物心を覺えてから、病氣と云つたら、十二の時大磯へ避暑に行つてゐる中に、輕い痲疹をしたのと、去年の春インフルエンザの念入なのをしたばかりで、二十になる今日まで、おできらしいおでき一つ出來た事もない。それだから苦しい事には經驗がない。經驗がないので、愈〻案じられる。

人は「案じるより生むが易い」と慰め顔に云つてくれる。それも案じることの甚しいのを好く現はした詞で、初産の女の案じ樣はとてもお話にはならないのだもの。

夜だつておち〱眠られはしない。うと〱とすると、いつも産の夢を見る。夢は不思議にも苦しんでゐるところではない。少しの痛みもなく、やす〱と生んでしまふところばかりである。そして其夢が醒めると、一層産が氣に掛かつて來る。

さういふ時に限つて、腹の中では赤ちやんがひどく暴れる。ゆる〱腹を撫でまはすと、やつと大人しくなる。生れてからは可哀いものか知らぬが、腹にゐる間は實に氣味の惡いものである。

産をする場所は、夫の家だの病院だの、里の家だのと、色々の説が出たが、とう〱青山の里で生

む事に極まつた。そこでつい此間富子は大きい腹を抱へて、夫の家からこゝへ遣つて來たのである。

母屋から廊下傳ひに立增をした平家のあるのを産所にして、母親の介抱を受けてゐる。

母親はどう慰めてくれても、産は心配せずにはゐられない。併しそればかりなら、まだ好いが、その外に一つつらい事がある。それは見舞つてくれる夫を待ち暮らす心持なのである。

女中が小走りに遣つて來て、曙町の旦那樣がお出になりましたといふと隠し切れない嬉しさが、富子の顔に溢れる。

女中は赫ら顔にお白いを塗つて、赤いものだらけの着物を着てゐるので、をぢが蛇つかひと名をつけた女中であるが、この時丈は、此女中にでも、着てゐる羽織や、嵌めてゐる指環を皆遣つてしまひたくなるのである。

「どうしたい。小僧はまだ出て來ないかなあ。好い鹽梅だ。丹波君が歸つて來るまで生んでは行けないよ。」

「そんな無理を仰やつては困るわ。さつきお瑩さんが來まして、もう生まれるか知れませんと云ひましたから、今夜から泊りに來てくれる樣に頼みましたの。」

「それは好い。あの人がゐてくれゝば安心だ。」

お瑩さんと云ふのは産婆である。元夫の家に小間使をしてゐたが、優れて賢い女だつたので、祖母が信用して、世話をして嫁に遣つた。その後修行して産婆になつたのである。落付いた親切な人だから、産婆のやうな職業には持つて來いである。

「丹波さんはどうなすつたのでせう。こんな體で獨逸から歸つて來る方を待つてゐるのですもの。あ

ぶない話ね。」
「なにいよ〳〵醫者の手がいる時になれば、どうにでもするよ。併しまあなる丈丹波の歸つて來てからの方が好い。」
四五年前に丹波醫學博士は洋行して、今月中に横濱へ着く船で歸つて來る筈になつてゐる。それを大野夫婦は待ち焦れてゐる。富子は一度も逢つた事のない人だが、この人の上には面白い話があるので名丈は好く覺えてゐる。富子の從弟子の法學士の細君になつた人がある。千葉縣の豪農の娘で、非常に美しい。それが初めての子を難産で死なせた。それから發心して産婆になることにして、産婆學校へ通ひ始めた。二箇月程續いて通學すると、産後餘り勉強したせいか、氣が變になつた。それで人の顏さへ見れば、斷えず同じ事を繰り返すのである。
「廣井先生の憎らしいことつてありませんわ。わけの分からない講義をして生徒をいぢめるのよ。あんな殘酷な人間があるでせうか。生徒を困らせるのを樂みにしてゐるの。」と云つては泣く。さうかと思ふと、すぐに「そのかはり丹波先生は優しいわ。それに誰にでも親切に敎へて下さるの。そして立派な先生よ。それは立派よ。」と云つて、とめどもなく笑ふ。そんな風で狂ひ死に死んでしまつた。その丹波先生なのである。
母親は大野の好む菓子を持つて這入つて來た。
「今日は友子が子供を連れて俊雄の兩親のところへ行きましてね、歸りが遲くなつたら泊つて來ると申しましたのです。それで富子は寂しがつてゐたところでした。」
眞面目な母親に出てこられたのでたとひ夫ではあつても、男の來たのを嬉しがつてゐるのが恥かし

い樣に思ふので富子は顏を赤くしてゐる。

母親の云つた友子といふ妹は、一月ばかり前に玉の樣な男の子を生んだのである、小說などでも生れる子を皆玉の樣だと形容するが、實際これ迄見た赤ん坊といふものは色澤がきたならしくつて、薄毛がもぢや〳〵生えてゐて、氣味の惡い物である。富子は或る時大學の病院で產をした友達を見舞つたことがある。その時懇意な看護婦に案內せられて、施療ではいつてゐる人達の生んだ赤ん坊に湯を使はせるところを見た。寢臺の上に十人ばかり並べて寢かしてある。その赤ん坊の胸のところには、一人〳〵誰の長男とか、二女とか。札が張つてある。成る程から揃へて並べてあると、どれも餘り違はない。生んだ親達にも分かるまい。それがどれ一つ美しくはなかつた。妹の生んだ赤ん坊はそれとは違ふ小さいなりに、目鼻が目鼻らしく出來てゐた。あれなら玉のやうなとも云はれるのである。

電話の鈴が鳴つた。曙町の內から大野のところへ掛かつたのである。夫は聞きに出て行つた。續いて母親も「富さん、お風爐はあとにするでせう、わたしはいつて來ますからね」と云つて、立つて行く。入れ違ひに大野が歸つて來た。

「締めた〳〵。丹波君が昨日歸つて來たさうだ。あしたは午前の內にこゝへくると云ふのだ。もう御都合で何時でもお生みなさい。」

「まあ好かつた。それではわたしが生みさへすれば好い事になりましたわね。どうか友さんの子の樣な子が欲しいと思ひますわ。」

「亭主が惡いから駄目だよ。」

「さうでせうか。」

「どうですか。おい。あした又來るがね、今夜は松井君が來る筈になつてゐるから、己はもう歸るよ。なんだい、その顏は。爲樣のないお孃樣だね。今に赤ちやんが生まれると、おつ母さんだ。好いかい。」

「だつてわたし寂しいのですもの。」

「己だつて寂しいよ。」

「噓々。本ばかり讀んで入らつしやる癖に。」

「本位讀むさ。本の燒餅を燒く奴があるか。己はさう色道專門になるわけには行かない。」

「まあ口の惡い方ね。全く別れてゐては寂しいのですもの。」

「それだから、己が世話をして遣らう、曙町で生めと云つたのに、聞かないのだもの。寂しい位我慢しろ。さうして早く身輕になつて歸つて來るさ。」

「さう仰やると、なんだか子供を邪魔になすつて入らつしやるやうですわ。」

富子の心にはふと結婚した當時、子がいる、子がいらぬと云つて、爭つた時の事が浮かんだ。

「誰が邪魔にするものか。生れて御覽。お前より己の方が可哀がるから。」

「お腹にゐるうちは邪魔で、生れればお可哀がりなさるの。」

「ふん。兎に角その腹の迫り出した風はあんまり立派ではないよ。」

「嫌な方。」

「好きな奴。」

「ほんとにお歸り遊ばしては嫌よ。」

「ではもう五分間。」
女中が、「只今曙町から電話でございまして、松井さんがお出になつて、待つて入らつしやいます
さうでございます」と云ひに來た。
「うん。今ぢき歸ると云つておくれ。」
女中の出て行くのを見送つて、大野は
「丸でイブセンの脚本のやうな工合に下女が出て來る」と云ひながら富子と目を見合せた。
富子は大野を送り出して湯に這入つて、上がつて横になつた。
うと／＼して目を醒ますと、腹が堅くなつた樣で、大變に苦しい。時計を見れば、きつかり十時で
ある、富子は女中を呼んだ。
「お瑩さんはまだお出なさらないかい。」
「今しがたお出になりまして、奧樣のお部室でお話をなすつていらつしやいます。」
「一寸來て戴いておくれ。」
お瑩さんはにこ／＼して這入つて來た。
「大變遲くなりまして。丹波先生がお歸りになりましたつてね、もう御安心です。」
「今すこし眠つたのですがどうもお腹が苦しいのですよ。」
「一寸拜見いたしませう。」
お瑩さんは小さな藥瓶と脫脂綿とを持ち出した。
「その藥をお腹へ塗るのですか。」

「いゝえ」

と笑ひながら云つて、お瑩さんは内診をした。

「奥さん。もうお産になりますよ。」

富子は十月の間覺悟をしてゐた事だが、今更の樣にぎつくりした。顔色も變つたのである。

母親とお瑩さんとで、産褥の支度をする。

「今丹波先生へも曙町へも電話を掛けさせますから、安心して靜かにお休みになつて入らつしやい」

とお瑩さんが云つた。

「え。好くつてよ。母あさん。あなた生んでしまふまで、こゝへ入らつしやつては嫌よ。」

「えゝえゝ、來ませんよ。」

と云つて、母親は出て行つた。

輕い陣痛が起り始めた。僅か三十分許のうちに急に劇しくなつて來た。富子はびつくりした。それでも痛い絶頂は一刹那なので、やれ〳〵と思つてほつと息を衝いた。

近所に嫁に行つてゐる乳母のお悦が、大勢の子供を内に置いて、來てくれた。その外若い女中には氣兼があるのでわざ〳〵頼んで置いた出入りの者の上さんが來た。その内大野も來た。

「とう〳〵生まれるね。丹波君の方はどうだい。」

「先程電話を掛けましたら、今お風爐へ這入つてゐるから、ぢき行くと仰やいました。」

と、お瑩さんが返事をした。

「うん。さうか。大分陣痛の間が近いね。」

大野は苦しむ富子を優しくいたはつてゐる。
間もなく西洋から歸り立ての丹波博士が來た。富子は苦しい中で、どんな人かと思つて見る。湯上りの白赤い細おもての顔がはつきり見える。人間は忙しい中で、餘計な事を考へるものである。富子は此時こんな事を思つた。學者にしろ藝術家にしろ、音樂家にしろ、えらい人は澤山はない。それに立派な容貌の人といふものも少いのだから、それが兩方一人の身の上に出合ふといふことは、極々稀な筈である。併し釋迦や基督はあんなに立派だ。あれは後の人の想像かも知れない。
こんな事を考へてゐるうちに、大野は丹波博士を隣の間へ連れて立つた。二人は西洋では二年程一しよにゐた親しい間柄なのに、久し振で逢つたので、もう産婦の事なんかは忘れた樣に何やら話し合つて笑ひ興じてゐる。
富子はもつと親切にしてくれても好ささうなものだと思つたが、又思ひ返して見た。いやいや。笑つてゐようが、座睡をしてゐようが、産科の技術では、日本に外に眞似手のない丹波博士がゐてくれるのだから、難有いと思はなくてはならない。併し憎らしいのは夫である。人の苦しむのを餘所事の樣に思つてゐるのだらうか。
そんな事を思つてゐたうちは、まだ〳〵色々な事を思ふ丈の餘裕があつたのである。そのうち、息を衝く隙もない樣に、後から〳〵と陣痛の波が打寄せて來た。
大野も來て富子の兩手を握つてゐてくれる。苦しい最中に。きちやうめんの夫は、富子の頭が枕から落ちさうになるのを、枕の眞中へ持つて行かうとする。「どうぞ其儘にして置いて下さい」と云ひたいのだが、それ丈の詞數はとても口から出ないのである。お瑩さんも又布團の眞中へ富子の體を持つ

て行かうとする。これも情ない。

丹波博士が「イルリガアトルを」と云つた。この苦しい中に、どうするのかと思つてゐるうちに、夫とお瑩さんとで、無理に富子の體の位置を直した。

それが濟むと、恐ろしい痛みで。何か出掛かつたやうな心持がする。富子は全身の力を籠めていきみ出さうとしたが、息が續かないので、少し出掛かつた物が後へ戻るやうである。さうするとすぐ又痛んで來る。又力一ぱいにいきむ。こんな事が二三度繰り返される。後へも先へも行かないやうな心持がする。縱ひ體は碎けても、現状の儘ではゐられない。どうにかしなくてはならないと、富子は思つた。そして目も口も綻びるかと思ふ程力を出して、自分の耳にさへ異樣に聞えるやうな、恐ろしい叫聲をした。

「もうい〳〵」

丹波博士が云つた。後一息で本當の産は濟んだ。

「おぎあや」と餘り冴えない聲で泣いた。

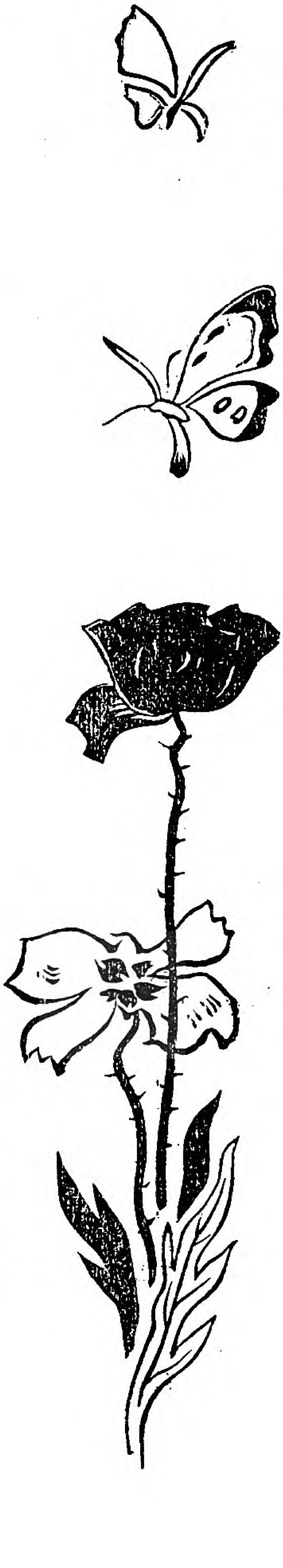
母親が這入つて來て、富子に水を飲ませた。富子はやう〳〵の事でほつとため息を衝いた。

後にお瑩さんの話に、初産には珍らしい輕い産であつたさうだ。富子はそれでは重かつたら、どうだらうと思つた。

赤ん坊に次の間で湯を使はせてゐる。家ぢゆうのものが集まつてゐるのが、富子にも知れる。それに誰一人男とも女とも云ふ聲がしない。富子は女だなと思つた。

間もなく胎盤が出た。これで産はすつかり濟んだのである。

母親は赤ん坊を連れて來て見せた。
「母あさん。女でせう。」
「さうですよ。」
富子は一目赤ん坊を見て、失望せずにはゐられなかつた。昔の支那人は女の子を瓦に譬へたといふことだか、どうもこれは慥かに瓦の方であると思はれる。それなのに、母親も大野も平氣な顔てその赤ん坊を眺めてゐる。なぜ變にきたない子だと云はないかと、富子は不審に思つた。
段々人が歸つたと見えて、富子の周圍はひつそりしてくる。默つて目を瞑つてゐると、枕元で母親と大野とが話をしてゐるのが聞える。
「友さんの子が餘り綺麗だつたので不平なんてすよ。」
察しの好い夫は、もう富子の心持を知つてゐるのてある。
「生れた許で分かるものてすか。お祖父さんもなか〳〵丈夫な、賢しさうな子だと云ひましたよ。」
母親はこんな事を云ふ。賢い子か、不肖な子か、いくらお祖父さんにでも、そんな事は分かるまいと、富子は思つた。（完）



美人の系統

山路愛山

美人の系統

昔は、美人が田舎から出ると言ふ樣な事をよく言つたが、又漢の明妃の話もあるが、私は然うは思はない。

私は美人はどうしても男の澤山集つてゐる所に多いと思ふ、從つて美人の出るのはどうしても田舎より都の方だと思ふ。

都と言つても殊に長い歷史を持つてゐる所に多い事は言ふまでもない。

つまり自然陶汰―或は雌雄陶汰であろうか―の結果に外ならぬ。又之は階級的制度の行はれて居る所に多い、所謂美しく粧はふ時間と餘裕とを持つて居る貴族の間から美人が現れるのは當然の事である。しかし是は過去から取つた説明であつて、眞の美人は如何なるものであるかと言ふ樣な事ではない。以上の意味から言ふと、日本では先づ京都を美人の多い所と言はねばならぬ。

なぜかなれば、或は人種に由る事もあろうが、京都が有して居る千有餘年の歷史と、其間に於ける男女交際の自由とが、大なる影響を及ぼした事は疑をはさむ餘地がない。彼の釆女と稱して全國から姿の好い女を集め、舍人として姿の好い男を集めた、そこに起つた雌雄陶汰は勢ひ美人を多く出した譯である。然し世の變遷につれて多少美なるものゝ定義はかはる。

過去から引いて今に至るまで、其美の定義はいつも男子から出てゐる、之から後、或は女同志で美を作り合ふかも知らないが、少くも今までは男子の理想、男

子の必要につれて女の美が動いて來たのは事實である。

平安朝の優美な時代から、戰國時代の美人になると弱々しいものよりも、健氣な美人が多く出た。

徳川家康は俗に七人衆と謂ふ通り、妾を七人持つて居つたが、其七人は各目常に乘馬して戰場までも家康に從つたのである。

これが頓て天下が太平に成り、江戸幕府の基礎がすはると、女は再び弱いものと成つた。御承知でもあろうが江戸幕府の時代には、女を連れて旅行する事が眞にむづかしかつた。箱根山に嚴重な關所があつて、女を連れて通るには、女手形と言ふものが無ければどうしても通られなかつたものである。



諸大名が參勤交代の時も、奥方は必ず江戸の屋敷に殘して置た、從つて是等の女は旅をする必要がない、雪駄ばきて歩ける樣な狹い天地に置かれた爲に、庭をさまざまに作つたり、室を飾つたりして僅に趣味を求める樣に成つた、造りごとが盛に成つて、脆細い弱々しい美人が多くなつたのである。

武士の天下の滅びたのも或は此からであるかもしれないが、明治御一新後封建の扉が破れて、我も人も自由の空氣を胸一パイ吸へる様になつたと同時に、烈しい生存競争が起つた。萬里の波を渡つても、海外へ夫に從つてゆかねば成らぬ様に成つた、健にして美なるものを要求する様に成つたのである。

然るに下流の女たちは、工場稼ぎと云ふ事が盛になつて、多くは此處に入る様になつた。工場では其勞働に堪へ得る強いものを欲して居るが、それに堪へ得る女自身は次第に身體が衰へてくる。強さを要しつゝ弱きものをつくつて居る。ために之等の社會からは日に日に美が衰へて行く様に思はれる。

貴人の美は多く弱い美であると言ふ人があるかも知れない、又是は然うかもしれない、然し今の社會の組立てでは貴人の外に美人を出す事は少ない様に成つてゐるのである、此が一般の基礎が定まつて平民が樂に成つたなら平民的、強にして且美なる女が出るだろうと思ふ。それは女の幸福な時代であろうと思ふ。

女子の獨立

女子の獨立と言ふ言葉は、即ち男子の獨立と言ふ言葉で、裏と表の相違だけである。此意味から言つて私はそれは不可能の事だと答へるよりしかたがない。

人一人あるはよろしからず

此言葉の通り、男一人で暮してゆく事は吾々には不可能の事である、又女から言つても女一人でやつてゆかれぬ事がある、どうしてもこゝは男と女と助け合つて、夫婦と言ふものを形造つて相助けてゆかねばならないのである。——が！所でひるがへつて職業と言ふ方から、獨立と言ふ事を見ると、今の社會は天然に背く様になつて來たのである。

天然は男女相助けてゆく様に造られてあるのに、社會は人間を獨立させられる様に組立てられつゝある。

男子の負擔は女子にくらべて實に大きい、家族を養つてゆかねば成らぬ、女にくらべて交際も廣いし、萬事につけて、女子よりも金が多くかゝる、從つて月給なども高く貰はねばやつてゆかれない、ところで今の

敎育が女子も男子と、或る程度まで同じ道を歩み得る樣になつた、女にも職業が授けられる樣になつて來た。そこで女は男の樣にものゝかゝりがいらないので、同じ仕事を男よりも安値い月給でやる、こうなると職業の原則から同じ仕事なら安値い方にたのむのが當然の事になつてくる、こうして女子の職業は日に日に增してゆき、男子の職業は割かれてゆくのである。

例へばこゝに敎員の夫婦があるとする、夫は月に三十圓、妻は二十圓とるとすると一家の上には五十圓の收入がある譯であるから、夫一人でかせぐよりも好い樣で、其實社會と言ふ大きいものゝ上から眺めると、五十圓の其中には天然と社會とがそむいてゆく、苦い味が加はつて居るのである。

女子解放問題などと言ふ問題は服從時代には起らぬ事で、こう言ふ聲のあがるのは旣に事實がよほど進んで來てからの事である。

女子の獨立と言ふ樣な事は御一新後、明治十年頃まで歐米の學問が盛に勢を得て、國學漢學が地に落ちた時、男女同權論など稱へられて、森有禮氏の結婚の新儀式などおこつたのであつた。それから十一年頃から又保守的思想がおこり始めて此等の聲がしづまり始め、十三四年頃と殆んど昔風に一洗された樣であつた。然し其時にもミッションスクールでは割合に女權を說女子敎育に力をつくして、こゝに習ぶ女子たちに西洋流の女德を敎へこんだ爲、一部にはなほ女子問題が殘つて居つたが、二十三年頃には之も全く下火になつて、保守的思想が行き渡つて居つた。それから越えて二十八九年日淸戰爭が終つてから、世界との交涉が俄に大きくひらけ、從つて女子敎育も盛に成り、引つゞいて今に至つて三度大なる女子獨立の聲が揚つたのである。

が私などの考へるには、どうしても人生と職業の調和をはかるには、やはり職業は男子の手にゆだね、女は內に働いてそこに新らしい意味を探し出す方がよいと思ふ。

こう言ふと女を奴隸視すると言ふかも知れないが、

我々男子の側から言へば、やはり男も女と家族の奴隷に成つて居る、家族の束縛はやはり男の首にかゝつて居るのである、出來る事なら私なども、一人に成つて思ふ樣に働いて見たいが、それは前にも言つた通り「男やもめにうぢがわく」てやつぱり出來ぬ事であるから、つまり人生の意義を無視せずして、時代の要求に應ずる樣に努力するのが宜いと思ふてゐる。（談）

淋しき女

楠田白茗

冷たかりし君が唇おもひつゝ風のちまたをかへるかなしさ
灰となりし火鉢の上に手をかされ泣きたる後の二人がありけり
活字する機械の音のひゞき來る應接室のさびしきをんな
ストーヴにいさゝかのこゝろ溫味よりなほも悲しき二人となりぬ
十六の妹あるにこゝろつきし今日このごろの淡き悲しみ
卓上に投げ出されしわがかひな冷たくなるを見まもりてあり
さびしさに堪へぬ夕は街に出て蓄音器などきく癖となる
更けし夜の電車の隅にうづくまりけものゝごとく寢る男あり

美しく善き娯樂

農學博士　横井時敬

園藝の趣味は深くして高尙なものである。且男よりも女の方が萬事に緻密である所から園藝のことにも亦適して居ると言つてよいと思ふ。

其種類が花とか、野菜とか、果物とか、言ふやうに多くは美しい柔かい優しいものであるから、女子の天性にも適して居る。

アメリカなどには大分大仕掛な園藝が行はれる、又道具なども「女子用何々」と言ふ樣に出來てゐる。（然し之を日本に持つて來ると男子用に丁度適すのであるが）それて園藝學校と言ふ學校があつて、男子も女子も學ばせて居るが、年々の志望者が、男子よりも女子に多いそうである。

先年私が行つた時、見た園藝學校は、男生が二十人程に女生が三十人程であつた。

其學校では花壇の競爭と言つた樣な事をして居つた。行つて見ると男子の作つた花壇は實に感服しない、美

術思想のない極く粗末なものであつたが、女子のこしらへた花壇には見るべきものが多かつた。

こう云ふ學校を卒業したものは、園藝場を設けて、園藝の爲に力をつくすと云ふ事を目的としてゐると彼の地の新聞に見えた。

此樣な職業は女の職業としては誠に適當はしい事と思ふ。

社會の下層を見ると所謂勞働者たちの一家、夫婦共稼ぎと言ふ樣な、あはれむべき家にあつては、實に見るに堪へない生活をしてゐる。夫は外へ出て働く、是はあたりまへの事であるが、妻が夫と同じく外の仕事をするので家事が自然おろそかになる、子供なんかうつちやりばなして、泣けば錢でもくれて買喰ひをさせる、母が自ら其子に慰安を與へると言ふ樣な事はないのである。

家庭の教育と言ふ樣な事は見たくても見る事が出來ぬ。此樣な不自然な慰安のない生活に居るものは、實に「あはれ」と言ふより外言葉がない。

今は、我も我もと都會へやつてきて、都は人が增えるばかりである、こう言ふ苦しい都の中に、何の慰安もなく唯日々の生計に追はれて居るよりも、郊外へ引移つて、男は外で働き、女はうちで多少なりとも土地を耕やして、職業として草花なり野菜なり果物なりを養ふたならば、小供もそばに置く事が出來る譯である、隨がつて母が自ら少しなりとも教育する事が出來るのである、それが無邪氣な娛樂ともなり、健康の助けともなるのである。

困るのはそれを職業とする餘地のない中等社會の下の方の人たちであらうが、中流から上流にかけては、すれば出來る餘地があるのであるから、之等の人は奮つて園藝を行つたらよかりそうなものであるが、此階級の女子になると、誠につまらない虛榮心に囚へられて、手が荒れるとか日にやけて色が黑くなるとか言つて手を出さぬ人が多い。なかには又交際に忙はしい人もあらうが、こう言ふ人は人を雇ふてゞも、せめて見て樂しむ爲にでも行れば宜くはあるまいか、然し園藝と言ふ事がてんで厭ひであるなら問題外であるが、園藝思想は、實に高尙なる美しい、意味深い、無邪氣な仕事であるから、なるべく小供の時からこう言ふ思想を養はせ、又小學校とか殊に高等女學校などであつたなら、一週間に一二時間は其ために時間をさいても好からうと思ふ。如何程園藝の好きな人でも、全然習はぬ

事は出來ぬのであるから、こうしたらそれ等の人の心を益し、又好まぬ人たちにも多少なりとも其趣味を味はせる事が出來るやうになる。

田舍などで園藝を愛する人を往々見受けるが、田舍に居る人たちは其周圍が田野であるだけ殊更に其必要を說くに及ばぬ。人の集つて居る都、人と人との絕えず接し合つて居る都にあつて、始めて園藝の大なる必要を見るのである。人と人との交際は實に苦しいものである、其頭腦を用ふ事の如何に激烈いかは言はずともわかつて居よう、スペンザアは「夜會の苦しみ」と言ふ事を言つてゐる、あの躍り狂うてゐる夜會から歸つてほつとする、アヽ今日は過失が無かつたかと思ふ時言ふに言はれぬ勞れを感じる事であらう、實に人と人との交際程氣苦勞な頭腦を用ふものはない、こう言ふ事ばかり續いてゐては人間の身體が續かない、そう言ふ場合に全く之と正反對に、一種の意味を以て接しなくても、よい草花果樹野菜などに對したならば、どれ程の慰安であろう。

日本の人は娛樂と言ふ事を贅澤視して居つたが、娛樂なくして眞實の勉勵の出來るものではない、よく働き、而してよく遊ぶと言ふ事は人間の生存上誠に大切な事である。

此意味から言つても、園藝は之等の人の娛樂に適して居ると言はねばならぬ。

人と人との交りには、噓を言はねばならぬ、僞りを言はねばならぬ、目と目、耳と耳は常に戰つてゐる、然るに草や木に對しては何等の僞りも其用をなさぬ、目や耳のない植物には又噓を言つても承知しない、水を持つて行つて肥料だと言つてかけても一向きゝめがないし、寒い日に暖いなあと言つても花は咲かない、こちらのしむける眞實によつて動くのだから邪念をおこす餘地がない、之れ知らず〳〵の間に精神の修養にもなるのである。

何事によらず自ら蒔いた種を自ら收穫ことの喜びは外の人の味はひ知らぬ所である。まして美しき花を見、味のよいものをとりいれる事の出來る園藝の趣味は、手を下す人にしてはじめて得られる喜びである。

私などは、子供をそだてるのもよいが、子供はそれ病氣だの、轉んだの、泣いたのと言つてごた〳〵して苦勞ばかり多いが、園藝の方は何もそんなに、夜の目も眠らぬまでの苦勞をしなくても、丈がのびる、花が咲く、果がなると云ふふうに、其成長が早いだけ、又樂

みが多い樣に思ふてゐる。
必ずとは言へないが、女は概して身體の構造上あまり頭腦を用ふては衞生に惡く、ヒステリーの樣なものになるのであるから、娛樂と言ふ事は男よりも必要であろう。
健全なる精神を宿すには、健全なる身體を要するのであるから、小供の時から園藝的の思想を養成して、之に娛樂を求める樣になつたなら、必ず喜ばしい結果が得られる事と思ふ。
大隈伯は、私の健康は園藝から來てゐると言はれたが、之は眞理であると思ふ。（談）

花いろ〳〵

S M

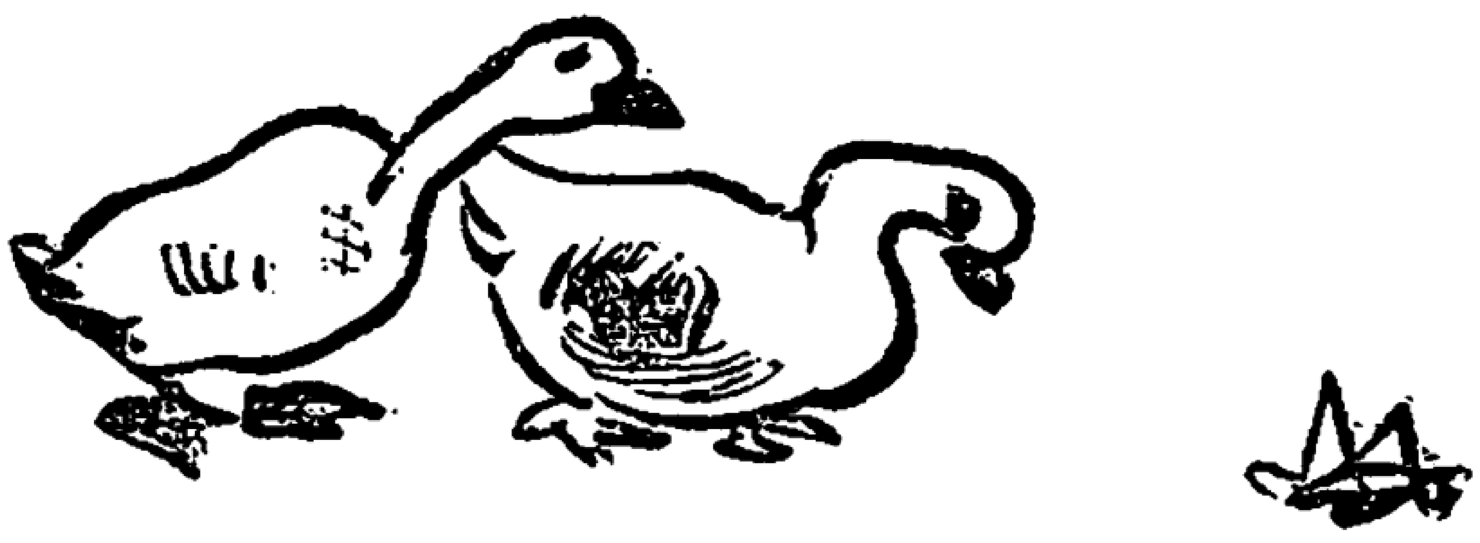
△木の花落ちて草の花咲く
△都會の人は花の色を愛し、田舍の人は花の形を愛す
△溫室に咲ける蘭の花は貴族式なり
△月見草は市に賣らず
△沈丁花を早く知るものは女なり
△夏の花は復瓣なるべし
△秋の花は單瓣なるべし
△花に邪念なし

女の中へ

生田春月

綺麗な腰元が七八人ならんで居る。
そのなかに戀しい女も居るのにねえ。
聲が掛けたい一語でも……
『お前達……お八重、お須磨、お梅、
お千賀、お初、お露、お妻、お豐。』
そしてしまひにちひさな聲で
『お千代！』

綺麗な腰元が七八人ならんで居る。
そのなかに戀しい女も居るのにねえ。
花がやりたいね、あの女に……
あの花苑からわざわざ摘んで來たのだもの。
『お前達、花をやらう、そら……お八重、
お須磨、お梅……』そしてそつと
戀しい女の白い手に……



夜の色

金子薫園

春の日は椿のかげに陰りたり、ものはかなくもなれる夕かな

聲遠く鳥のうたへるあたりなり梢に白く花の見ゆるは

夜の色のしづかに來るさびしみをこの歸るさの路におぼえぬ

沈丁花、雨しめやかにいたる夜の重き空氣の中に匂へり

椿の葉、月をうかべてしづかなる春の夕べの夜となりにけり

人遠くしたしみ來る如くにもこの夕ぐれの靄のひゞける

あかつきをおぼえぬ春の眠りよりものに愕きさめむとぞおもふ

朝ごとに椿の青に目ざめぬるならひの前に花の見え來る

白壁にむかひてあればわが胸に不安の影のひろごりにけり

頸寒うさむれば頭なやましくわびしき夜半の風の音かな

斷片

若山牧水

地震ゆるあはれ地震搖る電燈の眞白きひかり室にふるへる

もてあそぶ下心ならむ親しげにわれの寂しき顏見る少女

親も見じ姉もいとはじふるさとにただ檳榔樹を見にかへりたや

久に見ず都井の岬の尖端にしげれる蘇鐵さびしかるべし

ふるさとの日向へいぬるみちすぢの瀬戸の海邊をおもふさびしさ

木の蔭のとなりの屋根に雀の子來ればなつかし窓よりのぞく

日は暗く薄むらさきに淀みたる松林吹く五月の嵐

沈丁花の香に浸りゐてうら寂し木犀の花をおもひいてけり

睡しと見けむわれの枕に這ひあがる小鼠のひげ顏になつかし

沈丁花にほひわたりて重き夜の闇のなかより雨こぼれ來ぬ

眼は飽かず四月のそらのひたひたと匂ひ搖がぬ闇にむかへり

寂しさは夜半のねざめにかいちぢみよこたはりたるこの手この足

一葉と晶子

相馬御風

○

一葉女史と晶子女史とは、明治時代――過渡期の日本の女としての、二個の代表的典型であるやうに思ふ。過渡時代の人の悲しい、傷ましい運命は、著しく二人の生活に着き纏うて居る。錆びた鎖の如く二人を卷くものは、舊き因習の束縛であつた。牢獄の窓から青い空の一片を望むやうに、新らしく自由なる何物かに對する憧憬の念は、二人の胸に燃えて居た。新らしき思に充ちた胸を、古い錆びた鎖で固く縛められるいたましさは、この二人の女詩人の運命であつた。

○

一葉も晶子も共に舊式な、嚴格な家庭的空氣の中に育てられた。白粉をつけたり、赤い色の入つた物を着る事などは、晶子の幼時には決してさせて貰へなかつたと云ふし、一葉は又純然たる儒教的敎育によつて人となつた。兎に角形式は違つて居たであらうけれど、矢張二人を育てたものは舊い道德であつた。舊い習慣であつた。つまり一葉も晶子も共に舊い日本に育てられた女であつた。併しながら此の二人の若い女詩人が舊い日本の敎育を受けつゝある間に、日本そのものゝ有樣は急激な速度を以て新らしくなりつゝあつた。二人の若き女の胸には又若い女としてのさま〴〵な欲求が燃え上つた。

さていよ〳〵家庭に於ける一通りの敎育も濟み、いざこれから自己の生活を初めやう、自己そのものを享樂しやうと云ふ年頃になり、古い煤色をした家庭の空氣から首を出して、かの二人の若き女が見た世界はどうであつたか。そして彼等の夢みた世界はどうであつたか。

若き女の胸に燃ゆる切なる情思と、そしてそれを縛めやう〳〵とする錆びた習慣の鎖と、その間の矛盾、苦しい矛盾は、先づ以て二人の若い女詩人をして悶え

しめた所のものであつたに違ひない。
一葉も晶子も共に此の苦悶から出發した。

○

私は嘗て一葉を評して The Last Woman of Old Japan （舊き日本の最後の女）であると云つた。幾百年となく虐げられて來た舊き日本の女の心は、明治に至つて一葉と云ふ一個の天才を得て、こゝに初めてその悲哀その苦痛の聲を揚げ得たのだとも云つた。

然り一葉は古き日本の女であつた。頭は古い日本の道德に囚へられて、胸は新らしい――否寧ろ女そのものゝ思に充ちた女であつた。一葉の頭と胸とは常に戰つて居た。或時は胸の思のまに／＼、どこまでも狂ひ行かうとも思つたであらう。眞の自己の欲するまに／＼人生を享樂しやうとも思つたであらう。



併しながら胸の思の導くまゝに行くべく、又眞の自己の欲するまゝに生活すべく、一葉の頭はあまりの固く古き鎖に縛られて居た。彼にはその固い縛めを斷ち切つてまでも進む勇氣と意志とがなかつた。一葉は終に自己を犧牲にした、淋しい苦しい空氣の中に一生を送つた。彼の人としての一生は傷ましい犧牲の生涯であつた。

○

一葉の犧牲的一生に比べて見ると、晶子――若き女としての晶子の生活は驚くべく大膽であつた。一葉が舊き頭の爲めに自己を犧牲としたに對して、晶子は自己の爲めに舊き頭を犧牲に

供した。『やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を說く君』と叫ぶ程、若き晶子の生活は勇ましかつた。彼は戀の爲めに家をも親をも世間をも捨てゝ顧みなかつた。若き女としての晶子の生活は、正にこれ勝利者の生活であつた。

○

若き女としての晶子と一葉とを比べて見ると、日向と影の對照がある。一葉は日向を慕ひつゝ影の世界に囚へられた。晶子は日向を慕うて日向へ走り出た。そして身につき纏う影を思ふさま拂ひ去つた。

○

一葉と晶子との相表裏した生活の相違の因て來る所は、一つは二人の境遇の相異等さま〴〵の外的な事情にあらうけれども、その根本は二人の女の性格の相違にあると思ふ。

一葉は「普通よりも物優しい憫つぽい、謹み深い恥しがりの苦勞性」と云ふ方だ、「萬に一つも生意氣と思はれはすまいか、どうしたらば女らしく見えるかと、夫れのみに心を碎いて居るやうな女であつた。つまり一葉は神經質な、どちらかと云へば知的な、意志の弱い女であつた。彼がひたすら自己の爲めに、何物をも捨てゝ顧みないと云ふやうな積極的の態度に出る事の出來なかつたのは、ツルゲーネフの小說に書かれたロシヤの青年のやうに、頭が熱して胸の冷えた性格であつたからだ。一葉は進んで自己の生活を切り開くと云ふよりも、退いて獨り思ひ惱む方であつた。

之れに反して晶子は情の子であつた。胸の人であつた。退いて思ひ惱むよりは、進んで自己の生活を切り開いて行くと云ふ方であつた。胸の炎に全身を燒きつくすと云ふ方であつた。積極的であつた。實行的であつた。

○

一葉と晶子との性格の相違は、二人をして一を小說家たらしめ、一を詩人たらしめた。一葉は自ら進んで自らの生活を切り開く事が出來なかつた代りに、退いて女としての苦しみ、悲しみ――つまり日本の女とし

ての傷ましさをしみ〲味うた。日本の女の運命は一葉によつて、深刻に痛切に描き出された。一葉の作に現はれて來る女は、凡て虐げられた女の運命であつた。

晶子は進んで叫び、進んで花やかな世界を享樂する態度を以て、あらゆる若き女の誇と夢と歡樂とを歌つた。晶子の歌には暗い影はなかつた。悲しい女の運命はなかつた。たゞこれ歡樂の世界であつた。

一葉は影の世界を味ひ、晶子は日向の世界を讃美した。

○

一葉は觀照の人てあつた。晶子は實行の人てあつた。

○

一葉は弱き女であつた。晶子は強い女であつた。

○

一葉も晶子も共に反抗の人であつた。併しながら一葉の反抗は消極的の反抗であつた。晶子の反抗は積極的の反抗であつた。

○

一葉の生涯は灰色であつた。若き女としての晶子の生活は紫であつた。紅であつた。深刻なる人生の味は一葉の作に求むべく、奔放自由なる女の世界は晶子、就中初期の晶子の作に求むべきてある。

○

あゝ併しながら若き勝利者であつた晶子の最近は如何であらう。放たれたる彼の生活は、妻となり母となつて、再び囚へられつゝある。當年の意氣今日なほ彼の胸中に存するや否や。今日の晶子は果して若き晶子と同じく勇ましい勝利者であるかどうか。それはこゝて私の云ふ限りではない。

たゞかの舊き日本の最後の女としての一葉と、新らしき日本の最初の女であつた晶子と、この二個の代表的典型の比較に深い興味を覺ゆる所から、この短い感想錄を草した。なほ機を見て此の二作家の對照をしみ〲述べて見たいと思つて居る。

女子容貌論

一色醒川

神秘なる哉婦人の貌――容貌を輕視したる語――容貌は内心の表示――女子の容貌は天稟的なり――男子の髯女子の皺――草花と常磐木――修飾の美――日本美人の欠點――ノッペリ美――藝妓美――一種の修養――敎養そのもの人をして美ならしむ――舊るき美人の型を破れ――

▲自分は時々婦人の容貌を熟視して心中私かに神秘なる哉と感嘆するを禁じ得ないことがある、又瞑目して女人の運命の深さ暗さの遂に測りがたきを思ふこともある、て何か是等の事に關した考へを書いて見たいと豫て思つて居るが今猶ほ迷路にある形である、先づ何よりも如何に無關心なる態度を以て出來る丈け公平なる論議を爲やうと努めても、猶ほ到底男子より見たる女子なる思索てあることを悲まねばならぬ。

▲よく世間ては『人は見かけに依らぬもの』とか、『人の賢愚は容貌の如何に關はらぬ』とか云ふことがある、即ち容貌に重きを置かないことを云つた語で男女に共通する、更に女子については『外面菩薩内心夜叉』とか、『美人薄命』とか云ふ事もある、これは寧ろ美貌を貶しめたのである、共に一面の眞理を道破した語であるが、しかし餘り大ざつぱで何となく〆括つた繩が外れた感じもする、それもさる事ながら何となくわざとらしい、中て氣味な點が無いでも無いと云ひたいのである。

▲神色自若など〻感情を包むを以て最善とした時代にあつては其れでも宜かつたかも知らぬが、斯う世が露骨になり、人が短氣になり、ある意味から云はゞ昔の樣に人が惡るくない樣になつた今日に有ては、内心の表示はどうしても容貌に出て來なければ嘘だと云ひたいのである、又善い事か惡るい事かは知らぬが容貌の好い人がつまり好運にある樣だ、容貌決して輕んずる事は出來ぬ。

▲自分は思ふ、男子の容貌は品性的である、女子の容貌は天稟的である、男子は髯を得て見違へるまで風丰を昴げる者多く、女子は皺を加ふるに從つて顔容を損じる、即ち年一年男性的威嚴を發揮して老熟する男子に反し、女子に在ては其艶美の榮は三春を出てず、年一年と凋落するのである、是れを例ふれば男子は常磐木の如く、女子は草花に似て居る。女子が容貌に重きお

へと決して謂れなき事では無い。

▲トルストイは若い時に『神樣どうかもつと自分を好い男にして下さい』と云つて祈つたとか云ふ程低い鼻で顏が拙かつたさうだ、しかし杜翁の肖像を見ると可成り立派である、成程西洋人として鼻は隆くないかも知れないが決して累とするに足らぬ程である。『即興詩人』中の花である女優アヌンチヤタの晩年の衰殘は、一度び友と決鬪するまで愛著したるバアナードの眼にさへ其の別人なるかを疑はしめたと云ふ、是れは小說中の事だが、實際にも幾らもある事である。

▲爰に於いてか修飾と云ふとが生じて來る、女子が化粧に憂き身を窶し、衣裳を以て生命とするも亦尤もなる次第と云はねばならぬ、然るに往々道學者流の之を難ずる者がある、難ぜられると又遠慮する婦人もある、凡そおめかしとか何とか云ふものが品性と關係するは裝飾其事ではない、例へば同じく香水を用ひるとしても、床しい人が用ふると好き嗜みとして猶ほ更ら床しく、氣障な人がプン〳〵させるのは何處までも氣障である、即ち香水の科では無く人間その人にある、白粉亦然り、リボン亦然り其の他一切の修飾亦然り。

▲しかしながら修飾は到底修飾である、美を助けはするが根本的に本體を如何ともするとは出來ぬ、所詮草花の榮を三春以上に延ばすとは出來ないのである。女人到底この短き間の愛玩のみにして了るものならば兎も角斯の如きは慘酷なるが如くにも思はれる。又女子は此運命を到底脫するとが出來ないと決まつて居るかは更らに疑問である、自分は此處を考へる、て、これは少くとも有り得べきものを持たず、養ふべきものを享けざるが爲めでは無いかと思ふ。

▲從來吾邦にて美人と稱したる標準は如何、其の形容として或は艷麗或は婀娜、曰く窈窕曰く可憐、曰く嬋娟曰く嬌婉等隨分語も多いが其の語と實際と當て嵌まる、而も遂に高尙と稱する形容に充つべきものを見るに乏しい、かの貴婦人と云ふ階級は明治に於いて初まつたのであるが、猶ほ上品とか淑雅とか云ふべきも、西洋婦人の如きノーブルを見る事が出來ない。一言すれば餘まりに甘美、餘りに「ノッペリ」に過ぎた、此の「ノッペリ」たる元祿の頃に在ては男子にまで及んで居たやうだ、今日と雖も若いうちの美は男女共その甘つたるい處、色白の「ノッペリ」としたところにあるかも知れぬ、其れ可なり但だ「ノッペリ」の生命や短く甘美の夢は覺め易い、人間夢を生命としない以上別に生

くるところを見出さねばならぬ、男子はハッペリの花が散つても實を結ぶ、否其樹自身に趣を加へて行く、哀しいかな草花くづるれば其れまでに了るのだ、ハッペリと出來て居た人は短いながらにもまだしも甘い夢はあつた、否らざる人は抑も〳〵生れたことが禍ひと云はねばならぬよになる。

▲時の推移は爾かく同事を繰り返さしめない、男子がハッペリを生命としない如く、女子も亦然らざるを得ない樣にならねばならぬ、語を替へて言へば、或る意味に於いて男子の領分までも入つて行かなければならぬ。ハッペリの型は要するに藝妓美である、白拍子美である、若し女性の悉くが美の標準を其處に置いて一意そのもとに拜趨するならば止を得ないけれ共、ワイニンゲンの所謂娼婦の類型を離れて母婦たる誇りを以て居らば、かゝる舊るき型は滅茶々々に毀じて、新らしき美を表示すべく自ら別の樣式があるべき筈と思ふ。

▲近代人の喜ぶところは輪廓の美に非ずして色彩の美である、表情の美である、輪廓の美は天稟である遺傳の賜である、色彩表情亦或る程度まで然うではあらうが、多くは其の人の性格氣分に於いて定まるのである、感情低劣ならば表情も亦低劣、思想高尚ならば其の表示自ら高尚ならざるを得ない。

▲自分は是れを教育修養の力に歸する、又信仰道念の力に待つものである、田舍から出て來た人が一年なり二年なり都會の生活をすると別人の樣になることが多い、必然の約束なるかの如く口開けて繪看板など見て居た人が暫らくすると、恐ろしいものゝ樣に口を〆くる、是れ亦一種の修養の効である、或る人が學問すると低い鼻が隆くなつて來ると云つた、是れは必ずしも天狗になる事を云つたものでは無い、て是等の點から云と或は女子の天稟の美を破壞するかも知れない、理性の苦さを加へた時、甘美は去るに違ひない、理知の加はるところ、ハッペリの灣曲が無くなるかも知れない、しかしながら思想の養ふ感情の表示は長く春溫を保ちて凋落するに到らなからうと思ふ。

▲女子が家庭に入つてから、よく世帶じみたと云はるゝことが多い、是一種の趣味の墮落である、又よくヒステリーと云ふものをやる、而も此者の來襲に會ふや、嵐のあとの花園の如く如何なる美貌も忽ちにして衰へ魂なき塑像の如くなつて了ふ、其の原因たる多々あらうが、女子と云ふものが如何に哀しい境遇にあるか

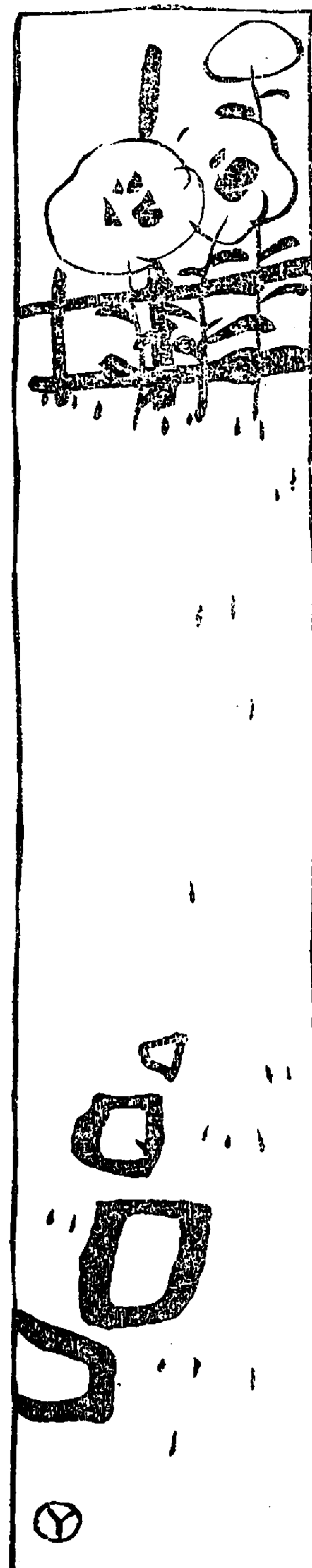
が分る、家の爲め子の爲の犧牲となつて自己の品性の修錬を缺いて了ふ、それでも宜いと云ふ人もあらうが健全なる態度とは云ひ得られない。

▲心を平かにするは美を保つ唯一の道である、感情の昂りし時には一種の美があるがしかし一瞬の後には形容し難き醜が來る、一圓もする石鹼を――一圓の石鹼はそんなに高貴なのでは無いかも知れぬが――三日位に使つて顏を洗ひ白粉をなすりつけても、一度皮下の血行が貧しくならば眞蒼にならねばならぬ。

自分は婦人の最も美なる時は平和の光輝の添ふ時だと思ふ、殆んど是れは天與の惠みであらう、而も能く考へると此の光輝に充つる時は最も思想の高調に達した時、樂天の情味の溢るゝ時、善意の微笑を以て見る時だと思つて居る。



▲今より後世はます〳〵容貌に重きを置く傾向に遷るであらう、しかしながら其の美貌の標準はいつまでも昔しの樣では無い、少くともノッペリとした美は低級なる社會の遺物として止まるに違ひない、而して天禀的の美よりも品性的の美でなければならぬやうにならうと思ふ。孟子曰く形色は天性也。惟聖人にして然る後以て形を踐むべしと、聖人ばかりではない、人各々定まつた運命の中にも自ら努力を要するのである。鏡を以て魂とする女子諸君、卿の鏡を以て單に化粧道具とするに止めず、常に心の隈々まで映して、虚榮や嫉妬の弱點を忘れ、深く沈潜して情操の和平を圖つて貰ひたい。



女子文壇誌友會の記

幹事

山王台の木立の蔭に奥まりたる星ヶ丘茶寮の大廣間は、刻一刻と派手やかな色彩と、美くしい笑ひ聲とに賑はしくなつて來る、時は四月の十日、豫め發表された女子文壇の誌友會は今しも眼前に實現されつゝある。

午後正一時、幹事の一人、平塚白百合さんは、しとやかに起つて開會の辭を述べた、すら〳〵と快い口調、簡にして要を得た開會の辭であつた、次に主筆河井先生、文學を愛する者の集會は豫想するほど面白くないものだと云ふこと、婦人の立場より文學と云ふものを見て、興味中心の事に說き及ぼされたが、ほんの題意の說明に止め、他日雜誌の上で發表すると言はれた。次に『少女』主筆溝口白羊先生、婦人の集會も澤山あるが、文學を中心とした女子の集會は、此會を以て嚆矢とする旨を述べられた。

偖て出席者の續々と詰かけたのは、兩先生のお話の前後であつて、當日受附掛を承つた佐藤萬壽子さん、八代八重子さんのお二人は、神妙に名簿記入と、會費受取に働いてゐられる。來賓も野口社長を先頭に、追々と見えるので、接待掛の細谷さん、加藤さんは案内

に忙しい。樂屋の方では元來平塚さんが福引掛であつたのを、餘興掛へ引張り込まうとするやら、口上掛りに頼むやら、大騷ぎしてゐる。

其間々に蓄音器がマーチを始める、頓て池田紅鳳さん及び池田紅松さんの薩摩琵琶が始まる、曲は川中島、歌ひ振も宜しかつたが、彈奏の手並は更に素人とも思はれぬほどの上出來、一同感に入つて聽く。

與謝野夫人のお話がある筈で、一同はそれを熱望した、幹事も大いにお勸めしたのであるが、此日令夫人はお心持が不良と仰つて、とう／＼お話はなさらなかつた、幹事は少からず落膽したが、出席者も定めて同感であらうと思ふ。

森博士の令夫人、令夫人の妹御、御親戚になると仰つた葉山茂子樣、皆同じやうな御服裝で着席してゐられる、少し後れて岡田八千代樣、長谷川時雨樣御同道で會場に入らつしやる、一同の瞳は此等の來賓の方々に注がれた。

頓て皆さんの寫眞をお撮り申ますと幹事の發言に、再三促されて會場一ぱいになつてゐた出席者は、履物を穿いてお庭の方に廻る、空からは薄い光線が射す、折から春雨は降りやんで、木々の葉も、花も濡色がつやく／＼しい。顏が重なると云ふので、前へ出る方やら、わざと後ろへ隱れる方やら、暫く動搖してゐたが、愈よ靜になつて、皆の瞳がレンズの方へ向くと、もう宜しい。何んな風に映つたでせうかと皆の面は不安らしかつたが、直ぐ又席に戻る。

來賓として見えて居た水野葉舟氏の趣味に就いてのお話があつた、唐澤秀子さんの新躰詩朗讀があつた、秀子さんはまだ肩上のある髮をお下げにした小さい方だけれど、聲は透徹るやうに美しい。

餘興の中で最も期待された對話『クラスメート』が始まる、第一場は女學校々庭の場で卒業式の日、五人の級友が將來の理想を語るといふ筋、第二場は郊外の場で一年後のこと、共に五人の級友がゆくりなく廻り合ひ、餘りに境遇の變化したのに驚くと云ふ筋であつた。五人の内の一人が俄に差支あつた爲め、少々まごついたけれど、第二場の池田君子さんの救世軍女士官、白石さだ子さんの草刈娘、江森美子さんの令夫人、唐澤秀子さんの牛乳屋のお内儀さんが嬰兒を背負して出た姿など、何れも大喝采、流石に來賓席も笑い聲が溢れた。

福引が始まると、朝井千とせさん、江森さん、加藤

さんなど、其掛になつて、題の説明は朝井さん、なかなかお上手なので一同笑いこける。玉手函を貰つて悦ぶお孃樣もあれば、薩摩芋に當つて冷かされてゐる閨秀作家もあり、炮緑を持餘してゐる方もあれば、櫻の花の美しいのを提てゐる方もある。

福引と同時にお鮓が配られる、雜誌が配られる、名乘合が初まる、席場はます／＼賑やかになつて來る其前三宅花圃樣は遲く參りましたが、子供が餘興を拜見したいと申ますのでと仰つて、お孃樣達をお連れになつて入らつしやる。

五時を過ぐること正に十五分、豫定の閉會時間に十五分しか餘さない、其間を見て今一曲、琵琶を彈じた、題は櫻狩、それが濟むと直ぐ平塚さんの閉會の辭があつて、此處に樂しき誌友會の第一回は閉ぢられた。

閉會の辭があつても、まだ日は暮れさうもなし、皆さんは名殘惜しげに、ゆる／＼と支度して、二人三人靜に會場を出て行かれた。

初めより柱に凭れたり、縁側に出たりしてゐられた横瀬夜雨先生は、はる／＼御不自由な身を常陸から此會の爲に見へたといふので、立かはり入かはり挨拶をしてゐる方が多かつた、先生の友人鮫島さんは始終傍に附いて何かと面倒を見てゐられた。

誌友會第一回は右のやうな順序で事無く濟んだ、何分此種の集會には不熟練なものですから幹事も氣を焦るばかりで、一向出席者の皆樣方には滿足を與え得なかつたのは、深くお詫いたします。

なほ來賓の方々が、此會の爲に枉て御出席遊ばされたことは、幹事一同の大いに光榮とするところでございます。

終に臨んで此記事は、ほんの大體を叙するに止め、細かしい點は他の幹事を初め皆樣方の別記の方に讓りました、其方が却つて興味があらうと思ひますから次次に御覽あれ（幹事の一人）

別記

長曾我部　菊子

○河井先生と横瀬先生は、俥でもう御出掛なさつた。降るかと思ふたのが、嬉しく立直つて心がはればれする、可愛い稻子樣とおうた樣と私、青山六丁目から、電車にのつて赤坂見附で降りた。それから花を賣る店へはいつて「サイ子リヤ」といふ紅い花一鉢買つた。福

引に出すのてある。

閑院宮、學習院女學部の前を通つて、櫻並木の花影をふんで、たらたらと坂を降りて行つた。その時うしろから、優しい聲で、「山王さんへまゐりますのは‥‥‥」と道を問ふ方がある。ふりかへるとまア佐藤滿壽子樣！であつた。私はうれしかつた。滿壽子樣のお聲、お姿、ひたすらに私はこの方お懷しくつてたまらない。幹事會の時からさうであつた。

つれだつて山王樣にゆく道を、花下の巡査にたづねると「星が丘茶寮へゆくのでせう、それは」とゆびざして敎へてくれた。星が丘茶寮をたづねた人がたぶん澤山あつたのであらう‥‥。櫻は、咲きもきらぬ樹、咲ききつた樹、枝をまじへて花曇りの空の色、浮かれ足なる櫻狩の一むれ二むれそれも春の興なれや、この日は實に恰好なる、詩の日、歌の日、若き婦人のあつまつて文學を語るべき日であつた。友情をあたゝめる日であつた。

‥‥蓄音器をときどきしかけた。うつとりと耳をそれにまかして無言つて疊を見てゐる方や、「かねがね誌上で御芳名拜見いたしましてお慕ひ申してをりました」と美しい聲と美しい眉とを、見合つて、名乘り合つてゐる人や、來賓席にゐらつしやる森文學博士夫人のおかほを見守つてゐる方や、思ひ思ひに樂しげであつた、手にはかゞやく指環、胸にはきらめく金鎖とやうに華麗をきはめてゐらした方は、さすがに、かゝる會合のことゝて少なかつたけれども、紫色の多かつた事！。紫の羽織、紫の着物、濃紫のリボン、薄紫の裾、いひかへれば今日の會は、紫の女の會であつた。



‥‥與謝野晶子樣のお通りあそばした時、私の胸は浪うつた。短歌界の女王とうたはれる御方、私はお顏を見、お作を思ひうかべて、しばらくの間、强い花の香に醉ふごとく感じた、お首をかしげて、よく微笑なさる、おものごし、聊も氣取つたところのない御樣子のうれしさに、私は心中に叫んだ。「詩よ歌よ、不朽なれ、吾女歌人よ、光榮あれ」と、

さうして晶子樣のお眼が好きでならなかつた。きらきらと上にのみ光る才ばしつた眼は、私嫌ひ。才が底

にわだつみの眞珠のごとく沈んでおもてにおだやかなる眼、それが私ののぞましき眼であつた。

此日會の終るまで、私は、與謝野樣にのみ、注目して滿足した。會場のかたはらに、せまい一室があつた。そこからは、櫻が見える、樹立がみえる。市街が見下せる。晶子樣がその室のはづれにゐらしつて談話なさる事について、お考へなすつてゐらした時、私は、平塚白百合樣とならんで、ぢつと晶子樣のお後姿を見守つてゐた。不動の姿勢をとつて、考へてゐられる。いつまでも、いつまでもゝゝゝゝゝ。

私の心持は、蒼くすんだ夜の空に燦として光る一つのほまれある星を見あげて、しつとりと沈みながらも、あこがれあこがれてゐるやうであつた。

あゝ。永久！　永久！　この會の私に與へた恩惠を忘れる事は出來ない。只この一事によつてでも。

竹久夢二樣……黑く艶なる長髮あくまでも畫家の俤床しく、お頰のあたり、お眉のあたり、また「美」を「畫もてあらはすべき詩趣」を觀察たまはんとするおん眼。私の胸にしみじみとうつゝた。丁度くじびきをよみあげてゐる時。さやさやと衣づれして、美しい人がそれは、櫻の花の幹事徽章をえりに挿してゐた女であつた。――すらりと立つて、よみあげる後姿？横姿？夢二樣がスケツチ帖をもつてさらさらと、寫生の筆を走らせはじめた。――橫から。椽側から。美しい女と、長髮の畫家と、私は見守つて恍惚とした。この日竹久夢二樣のスケツチ帖はいかに賑かであつたらうか。

美しい女が讀み上げて笑ふと、夢二樣も畫きながら、につこりとなさる。私は其、詩の如き事件を、私の心のスケツチ帖に寫生したのである。

臼井花子樣は私の恩友である。この日美雪さんもいつしよでゐらしつた、並んですはつてゐた時、私は若杉樣にあつた。はじめ、「どなた樣でゐらつしやいますか」とお問ひすると、「私は若杉でございます」とおつしやつた。若杉樣!!「破りし柵」をお書きなすつた若杉樣。あの文をとほして私の想像してゐた若杉樣は、いかに凄みある。特色強き美人でゐらつしやるか。また、年もいて、恐ろしみある方と思つてゐた。お目にかかつた若杉樣は纖な肩の、ことばつきやはらかな、おとなしい。一種のチャームをもつてゐらして、以前の私の考は、そつくり、はづれてしまつた。この日若杉さんほど、人に、見られた方はなかつたらう「若

杉さんはどこに！どこに―と誰も問ふた。そうして誰もお作とお人との對照に意外な感じをもつてゐらしたやうである。

若杉樣を見て、ひしと思つたのは、この頃の、いはゆる、現代的の女、は、異性に交はるのが非常に巧妙て、女の群からはづれて、異性の群にもてはやさるる事を得意とするやうである事。

中央の柱のところにいらしつた横瀨先生が、手をあげておよびなすつた、緣からまはつてうかがふと、正面にゐらしつた方を、――お下髮に白いリボンをかけてゐらつしやる十七ほどの若い女――「河野まき子さんてす。河野さん、長曾我部菊子です」と御紹介して下さつた。二人は微笑みながら挨拶をした。

槇子さんに會ひたがつてゐらした方も多かつた。

水野仙子樣と岡田美知代樣と山田邦子樣と細谷鏡子さんと四人、正面にならんで寫眞にうつりなさつたのは好い!!と思つた。私は、佐藤萬壽子樣とならんだ。紀念の爲……散會してのちに、紀念のためてございますからと、名前と所書とを書いていたゞいて、自分も書くやら、「私字がまづうございます」と逃げながら笑ふ方や、「どうか、どうか」とたのんでゐる方など、面白かつた。實に盛會であつた。會をへて、跡の仕末もしてしまつて私どもが、星が丘茶寮を出たとき、黄昏方の花の木の下、おぼろおぼろの薄暗に、電氣燈美しくかゞやいて、人は、醉ふた樣にあとから／＼あるいてゆく。



此夜、春の夜の灯影華やかなる河井先生のお宅には、樂しいものがたりがつゞいて、皆酒に醉ひ、詩に醉ふた。私は河井先生の御心中の悅びがよつく解つた。先生が、女子文壇の爲に御盡力あそばされたこしかた五年の月日に育てられてのびた櫻はけふ花と咲たのであるのですもの。

河井先生は、詩をおうたひなされた。お聲につれて、ゆるい調子でおからだをお搖りあそばす……何といふ良夜ぞ……紅の花は緣側に火にてらされて色は燃える樣である。同座の若き詩人も「お才」をうたつた。

湖畔の女は、美しい眼をふりあふいて、聞き惚れてゐ

る。夜はやうやく更けた。春風は偏く心をふく。それから夜雨先生も二十八宿をおおちあそばして、お歌ひなすつた。愁ひのお眉このときのみ晴れて、「一人は去れり」と、お聲は一座の人々の心を沈痛なる詩に醉はしめる。私には夜雨先生のお心のいかにけふあたゝかなりしかも解る。

あゝ。樂しかりし誌友會よ!! また祈る、誌友會ふたゝび開かれよと。

○　山の人

△誌友會會員名簿の表紙は長曾我部菊子が認めたと聞く。それを持歩いてどうぞお名前をと言ふけれど、逃げて誰も書かない。名も書きとめず會費も取れなんだら一生の大事だとあつて八代さん、硯筥を片手に襖のあちこち逃げあるく跡を一人つゝ追うてどうかからか書かせてゐた、中にはあなた見てちやいやと仰有てわざ〳〵別座敷へ帳面を持つて行て書く方もあるし。

△幹事は始終起つたり座つたり、中にはずるをきめて動かぬのもあるが、あゝしては据がたまるまいと頼まれもせぬ心配をしてると、五六人固まつた前に一枚座布團がおいてある、朝井さんおしきなさいな、あらあなたこそと押しやつたり突き戻したり、ずゐ分虐對する。こん度は着物の切れるのを心配するのはよして、茶寮の親爺さんのためにざぶとんのだいなしになるのを悲しんだ。私は詩人であるから。

△婦人用八字髭の發賣元、岐阜の質屋の孃さん篠田とみ子、名刺にうらみ葛の葉と摺つたのを持て、朝井三宅加藤細谷の君達の夜雨の前にかしこまつてゐる所へやつて來て、いきなり『東京の方は皆別嬪ですね』といふ。『私の姓がしのだなんで葛の葉と名けて下すたのね、恒子さんあんまりでせう』と訴へてゐた。

△事實花やかなる人のあつまりであつた。紫の目もさめるような羽織をめした白百合、裾さばき優なる千歳子、水色のリボンをかざして曲眉ゑがける如かりしたへ子……と數へ立てると美人を賣るようだからよしませう。

△鮫島、溝口、水野といふ連中が椽側に起つてゐる、私の右には會津の遠藤さん左には下總の若杉さんが居らるるので、身は花の中なるしほれぐさ光が眩いから、足が痛いけれど椽がはへ出る、と桃いろの縮緬を襲ねた寂しい人が來てまた去つた。

△來賓の中に髮を肩まで垂らして手はズボンへ突込んだなり歩いてる人がある、君あれはきつと眼の人だ

ぜと夜雨が大浪の膝を突く、さうかも知れんねと、さめ島さんもいふ。ところへ洋服の痩せた髯の無いにこにこしてる人が來て、『夜雨君、水野です』と名のる、それと見て眼の人が近づいてしばらくといふ、夜雨は水野さんの膝へよりかゝつたなり、失禮てすけれどあなたは竹久さんでせうといふ、さうですといふ。夢二さんだつた。自分は名を宣つたところて知つてはゐまいと卑下して默つてゐた。けれど夢二さんは手帳を出して髮を長く垂れて胸をあらはにした女のたくましい子を抱いてゐる圖を描いて、山うばのうばといふ字はどう書きますかといふから金時の繪だとすぐ解つた。夢二さんは『かうしたきつい顏の兒は彩色を施すと鬼のように見えますけれど山姥の端麗な容貌とすべすべした胸と乳との白い色に調和されて行く感じがするから畫は面白いものてすと敎へてくれた。何にも書かぬ葉書を持つてゐたのに、つい忘れて書いてもらはずざんねんな事をした。

△夢二さんはしまひまで居るときつと包圍攻擊を喰つたらうと思ふ。水野君も早く逃げた、ので災難をのがれたといふものだ。尤も殘つたのは幹部ばかりだが、各葉書をならべて河井、溝口、鮫島等のまはりをぐるりとり卷いて『鉛筆ぢやいけないことよ、墨で墨て!』



○　たへ子

寫眞て見たのとお目にかゝつて見たのとは大ちがひをするものでございます、わたし山田邦枝さんのお顏が一番印象ふかくうつりました、雜誌へ出たのとはあまり違ふのですもの。

寫眞を撮る時ばた〳〵と表玄關の方へ逃げて植込の木がくれにかくれた方が二人、ひとりは桃色の着物にお下げの可愛い方、もひとりはと見定める間もなく溝口先生がおりてらして入らつしやいとおすゝめしたけれど、くすくすと笑うて、蔭の方へ蔭の方へと逃げなすつた。三輪田さんの學校の方よとさゝやく方もございました。

岡田八千代さんと、長谷川時雨さんを、どうぞ此方へと案内して見えたのは黄色い衣裳を召して手を觸れ

たら切れさうなピカ〳〵光る帯をしめた幹事の方で、たしか朝井さんでした、岡田さんと時雨さんは縁側の外にお座りになつて其れなりになりさうなのを、それでは困りますどうぞ〳〵としきりにおすゝめになる、イエ是れが勝手でとなか〳〵折衝が難かしい、朝井さん遂に術つきたと見え遂には「お入り下さいませんなら私此處を動きません！」

會が終へてから殘つたのが、醉茗さん白羊さん大浪さん等でした、夜雨さんは一足先きに車屋に負ぶさつて坂下に下りて行かれました、あと始末の時に氣がつくと鼠色の中折帽が所有主不明となつて淋しく殘りました、ハテ誰方のだらう云ふと河井さんが、あゝそれは夜雨君のだと仰しやる、では先生頭を失くして困つてるだらうと云ふので親切な大浪さんが帽子片手に一大事のやう駈出してオーイ〳〵と呼ばはつて今や挽き出さうとするのに渡されましたが、花は咲いて居たし、一寸芝居がゝりで宜ろしうご座いました。

X　Y　Z

○

山王下の巡査X氏は、落花を浴びて立つて居た。

日光こそは照らさめれ、雲間を漏るゝ白光に春の香は高しと著く、春興坐ろに浮いてんげり。

と。忽ち見ゆる女の影、この深夜に不審しゝと中音に『戻橋』を氣取つた壺口で歌ひ乍ら、二人で前を通つたのは女の子。

颯と花が一搖れ搖れて、霞が空に棚曳くと、紫、鴇色、小豆色、鳩羽鼠の色々が。通るわ、通るわ。灰色に曇つた空氣の中を。高く低く女の影が列なつて、櫻の下を潜つては、フワ〳〵と雲に乘るやうに、坂を上つて行く美しい姿が、大凡物の二時間も續いて見えた。

青年巡査X氏は、固く劍欛を握つて、思はず空をキッと睨んだ。

て、固より職務なり、急いで足を空樣に二三歩坂を上りかけると、黑い袢纏姿に、綽名を鉈豆形と云ふ平べつたい煙管を啣へて、ニユッと立塞がつたのが、茶寮の喜介。

『旦那、上は大變でがすぞ』

『今通つた女か』

『ハイ、美しい雲が高野のお山から流れて來たかと思ひました。人間ぢやござりましねえ、止させえ、旦那、魔物でがすぞ』

『さうか……』

と昵と思に沈むと見えたが、劍をカッシと櫻の根に、

一當あて丶ズッとのぼると、事こそあれ、五色の雲が眼に靡びいた。

ハッと第一に眼を射られて、X氏は弱々しく立ち竦んだ。

眼の前の霞の中には美しい人が立つて居た。清い透明な水が赤い瑪瑙岩の中から湧いて出るやうに、其人の燃えるやうな唇から、美しい言葉がスラ〳〵と流て出た。これは屹度白百合の精に違ひないと、さう思ひ乍らX氏は尚見て居た。

暫くすると、琵琶の響が淡い霧の中から聞こえ出した。遠い〳〵巖窟の中から聞こえるのではないかと思はれる位幽かに美しい響であつた。

朝井千とせと云つた人のスラリとした嫋び肩、江森美子と云ふ童形の人の活潑な姿が、色々の美しい色彩の中に、浮繪のやうに浮いて見えた。そして、それが何となしに懐しかつた。

左の廊下を眞直に、暗い『奈落』のやう所を通るとキシキシと板が軋む。颯とX氏は身を開いて白い閉め切つた襖の裏を見た。

と。壁にピッタリと守宮、蜥蜴の類が吸着いたやうに、黒い蝙蝠の羽のやうな女の帯がピタリと、襖に着いて、美しい色を竊んで居た。

『ちよいとステキだわね、あのスタイルが』

『どの人、あれ、あれがさう』

『まア本當にステキだわね』

喝、今は猶豫ならじ、と劍を案じて寄り進むと、パッと黒い蝶が襖を離れて、黄色の雲が掻消すやうに空へ散つた。

『女性達安んぜよ、鞘中來國俊あり』

とX氏は微笑を浮べ乍ら、しづ〳〵と山を下りた。



○

白百合

春は今酣に、雨もよひの灰色の空にほの白く櫻が山王の山をつゝんで、しつとりうるほひ持つた空に花の香がやはらかにとけてゐる。

ひる下りとなつて雲のきれ間から薄ら日は微笑した

程ぬれた花に照り出した。

雨よそほひの誌友の人々はチラ〳〵と集つた、皆血のみなぎるやうな若い方計、私の小さい胸は好奇心にをどつて瞳がかゞやく。此處に集まつた方は熱心な創作家とか愛讀者の方々、二室打通した廣い座敷にズラリと並ばれた。

一時過ぎかよわい私は何の考へすらもたず開會の辭を先生方のお目、誌友の瞳、一身にあびて言ふべく立つた。平日より背の低く覺ゆる事五寸。

つゞいて河井先生の談話があつた。

夜雨先生は早くゐらしつた。お寫眞で拜見した通り詩人らしい少し陰氣な、空にたとへたら丁度今日のやうな灰色の空、底には溫か味もうるほひもこもつてゐる。與謝野先生のお目にはたしかに詩のひらめきとでもいふものがひそんでゐられるやうで冐しがたかつた。森樣は如何にも花やかな令夫人、二三ケ月前のスバルに出てゐた「旅がへり」？ご自作の新夫人の心の動き方、かき現はされた美しい面影、あのゴールドチエーンゆるく胸にさばいてゐらつしやる方がそつくり其の儘出てゐる。私はきつと森しげ子樣ご自身をお筆にあそばしたのではないかと思はれた。尙作中のお妹樣もご同道だつたので殊更に……。

時雨樣と岡田樣、さすがに劇評や脚本に筆をおそめ遊ばす方だけ意氣作りな方、森樣を山の手式としたなら御二方は下町式。

目についたのは水野先生の高い〳〵白いカラー。福引の時五十一番、四十女の顏を引かれて縮緬紙を幹事がさゝげた時……あの餘興はあまり見た人がなかつたらう。

鮫島先生の若々しい短かいお髭。

夢二樣の佛國の美術家風の長いそしてコテでもあてたやうな髮、私は一目見た時きつと夢二樣だと思つてゐたがやはりそうであつた。

幹事中でのうわさには宗敎家だといふ評判が非常であつた。あの長い髮の間から藝術的？のお眼がひかろ處、何國かの書にありさうだ。

終りに立ばなしを。

「與謝野先生は奥樣風でない學者らしい方ねー」

「エーあれでお子樣がゐらつしやるのでございますつて……。

「こんな會が年に二度位あつてほしうございますわねー誌友の皆樣や先生方とこうして一日樂しくねー」

皆々希望してさゝやき合つてゐた。

○　蘭

襖の影からお顔が現はれる。視線が觸れる。ともうその方の御心、――文學趣味の沸々したお心に觸れたやうな歡喜がついて起つたのでした。

ふだん拜見して居る作風と、名簿に付けて頂いた書風と比べて、さのみの相違を見ませんが、作物に現れた性格と容貌に表はれた性格とは、きつちり一致しない方が多いやうに思惟せられました。

開會時刻前には河井先生横瀬先生、幹事、それ以外にお一人も被入らなかつたのは、個性を重んずる故に、團結或は集會を輕んじなさつたのでせうか。

かたみに語り乍ら、暗い同じ路を歩いて居たのが、明るい光に一時に照されて、皆顔を見合せ、驚いた刹那に急に口をつぐむ。其麽感じがなさつた樣に、お見受けしました。

それは溶けて流れさうな友情を互に抱いて居乍らも、中間の障壁を破らないために個々の姿に保つて被居たのでせう。けれどたゞ漠然と並んで、講話を聽き餘興を觀たのみの感許てなく、より以上に無形の、無聲の意味――藝術の上に基する獨特の趣味を味はひなさつたろうと察しました。

あの方にも、この方にも、と最も多く來會者に觸れた誇りを私は持ち乍ら、又一度結ばれた心持ちが、ほぐれて失なはれて行く憂が先の誇りより稍ひくゝ致しました。

その誇りから憂ひを減じた殘りは印象の强かつた方々です。意外だつたのは水野仙子さんに岡田美千代さん、明日の思想を持つた昨日の方に今日お目にかかつたとても申しませうか。若杉鳥子さんの獨默的（其麽言葉は無いかも知れませんが）の態度には現代の若き婦人の權威を感じました。微笑を含んだ河野槙子さんは淡い色のお召が鋭い感識をなさる瞳と能く調和して見えました。

文壇名の通つた方が戶籍名を名のられて、ふだん思ふお懷しさを現しかねた方が、お在りでしたろう。私はそれを殘念に存じました。

○　湖畔の女

今日の會合はやはり淋しう御座いました。

熱いまじめな涙を持ち血のやうな文字を書いた人でさへも、今日の樣な場合には普通の人とそう變りはないですもの、

眞の自己の裏情をさながら人に對して形に現はし言葉にする事の出來ない事を私は口惜思くひます　……

何等深刻な叫びで御座いませう、あの會合の模樣は他の幹事の方々の御筆によつてきつときつと全國の皆樣に傳へられる事で御座いませう。

私は白いリボンかけて、寫眞うつす時、玄關の植込に逃げこんだ、可愛らしい臆病の少女が某氏に書いて寄せた此手紙に、胸のすべてを破られてしまひました。御ゆるし下さい、私にはとてももう書けませぬ、之を書くのさへ苦痛です、身はいたましい恥ぢにおほへども／＼おほふすべなく現はされて居ります。筆を置いて考へるべき「時」は私に向つてきました…………。

○　紫苑女

春四月、花と開かるゝ誌友大會に、風吹き前髪の頭出したさに、リボンもさして、十幾時間を汽車にゆられし私の先づ都の筆初めに、星ヶ岡と俥夫にどなられてまあ方角も解らんのだから堪りませぬ、離れ小島へでも放り出されたやうな氣がしました、既にして日枝樣の方へ行きかゝると……おゝと見出した櫻樹にはつてある「女子文壇誌友會々場」、まあ嬉しかつた、ほんとに助け船に逢つたやうな心地、此札は實によかつた、と思ふ、少し早かつたかして皆樣のお顏があまりみへないので、一寸心配しましたけど案內せられて場に通り最初お目に懸つた男の方、私はお寫眞を見てよく知つてる、言はないでよしませうか、だつて……では申しませう、醉茗先生、私のやうな荒い女にはお氣の毒な位おやさしい方、文壇誌上でのみ御名こそ暗誦し、大體の想像はついて居れど、誌友の諸孃樣方お寫眞とは別人の樣、夜雨先生にも申しました事、これでは雜誌に寫眞を出す時、但本人はもつと美人なり、と、書かねばなりせんわ、そうは申ますものゝどの方も／＼よく知つてる方の樣で、お寫眞といひ、お作といひ、それに文壇を愛讀なさる方、と何かも一致してるのですから、どことどうといふ事なしにおなつかしいのです、筆子樣などお寫眞そつくり、お名前承はらない先からそうとわかりました、山田邦枝樣ですお寫眞よりはずつとお若くていらつしやるのは、私の事ですからぶしつけに、私あなたはもつと癇癪持の樣に思つて居ましたがつて申ましたらあゝ私癇癪持よ、つて仰有いますの本人樣の仰有る事ですからほんとでせうよ、長曾我部菊子樣はゆつくりお口利きなさる方、平塚白百合樣つたら、縱板に水を何とか忘れましたが、

日枝神社の太閤様も一寸待つて呉れと仰有る位、お次へ續くのが千とせ様、ほんとに／＼しほらしいお姿が小川せん子様のせゝらぎ様、活潑なのが江森美子様、まだお歳もお若いやうです。三宅様萬壽子様日暮里の鏡子様早川様東京の方どなたもお寫眞にそつくりです、幹部の方で八代様と池田様をこれこうと見定めなかつたのは私の不覺ですけど、餘興の時、お袴ばきで、世に私程あはれな者がありませうか、とか何とかその哀れな奴を救ふて呉れるのは一人イエスキリストより外には、なんて仰有つた方だろうと思ひます、お婦人の來賓方の中にもお寫眞伺つて知つてる方が澤山ありました、私の好な岡田八千代様、深雪さまのお好な時雨先生、明治の歌の神様と崇められていらつしやる晶子先生、西の方にしげ子様て方だろういらしたが、お煙草をめして、小説の中にありそうな御風彩。男の方て私ども田舍では見た事ありませんが、髮を五寸もぼう／＼にしてちらしてらした、何だ變な人だぞ、今來た林の横手からのつそり現れて來たのではあるまいか、とまで思つて居ましたら福引第一、第一、いつかな出ていらつしやらない處へ恥かし乍ら……とお顏出しなすつた、お名承はつてびつくりを通りこす位、夢二様だとさ。白羊様大浪様如何にもお名前の如くでいらつしやいました、それから、にこ／＼し乍ら御婦人向の愛嬌家は水野葉舟様、だいぶんご叮嚀に文學に親む我々は決して藝術を弄ばないと舶來語を交ぜてのお話、醉茗先生の仰せも合點が行つて私は嬉しいのです、溝口先生のお話、これもきゝえて益々親うなります、與謝野晶子先生のお話は一寸御氣分が勝れぬ様で止めになりました、如何にも殘念です、



私が想像した都のお婦人は如何なるお席でもおめず憶せず、いらつしやいと、いへばいらつしやり、お上りなさいといへば召し食る、知らぬ人とでもお話をして退屈を感じない方ばかりかと思ひましたら、いえ、そうではなくて中には兩手を膝につくねんとして、呑みたいお茶にも手をかけず、ぢつと伏眼して居らした方もありました噫、今迄は夢の人のお說を承はり夢の人に私は手紙など出したが、現在お眼にかゝり親しくお詞をいたゞき、まあどんなに嬉しかつたでせう。

出席者姓名

平塚白百合　白石さだ子　朝井千歳
唐澤秀子　寺田よし子　池田喜美子
谷鏡子　早川花子　早川つる子
江森美子　加藤ふで子　三宅恒子
相樂喜美　山田邦枝　村上榮子
大内とめ子　篠田とみ子　新村もと子
小川せん子　遠藤竹乃　石川しげ子
臼井みち子　佐藤萬壽子　鈴木きみ子
長曾我部菊子　石井うた子　藤村眞
古屋嘉代子　木村あやの　串田なを
豊泉たま　金子歌ゑ　新居つれ子
河野槇　櫻木君子　葉山しげ子
臼井花子　臼井みゆき　大塚まつみ
淺井ゆき　服部貞子　岡田美千代
鈴木春　花岡初　若杉とり子
廣田まき　豊田乙羽　上代たの
岩井とし　池田紅松　入代やゑ

來賓姓名

横瀬夜雨　野口竹次郎　野口照子
溝口白羊　森しげ女　仝令妹
野口安治　野口きよ子　鮫島大浪
與謝野晶子　竹久夢二　水野葉舟
岡田八千代　長谷川時雨　三宅やす子
三宅花圃　仝令孃　河井醉茗

誌友會寫眞の說明（口繪參照）

先づ寫眞に向つて前列の腰を掛けてゐる右の端から說明しやう、入代入重子、加藤筆子、服部貞子、永代美千代、山田邦枝子、細谷鏡子と云ふ順で、其次に男の子が立つてゐる、其後列に立つてゐる人だが、此れはなか／＼明確に分らない、向つて右の端（白石さんのお婆さんの次）が小川せん子、並んで池田君子、其から覗いてゐる二つの顏の次に被布姿が江森美子、少し前へ出て胸に櫻花の徽章を挿してゐるのが早川花子、同じく徽章を挿して並んで起つてゐるのが平塚白百合、早川と平塚の間に横向になつて僅に見えてゐる顏が若杉とり子、それに並んだ顏が三宅つれ子、平塚の直ぐ左が池田紅松、つゞいて遠藤竹の、其隣りの髪と髪との間に僅に顏の見えてゐるのが木村あやの、斜に一人おいて前に現れてゐる少女は唐澤秀子、其後は不明確だから略して置く、別に椽側に腰を掛けてゐる方は、最も前が佐藤萬壽子、次が長曾我部菊子、一人おいて大きい人が篠田とみ子、椽側の柱に凭れてゐるのは與謝野夫人、それに並んで本社員寺田よし子、此邊に來賓の方が居られるけれど、光線が明瞭でないから說明しても分りにくからうと思ふ、左の端に白羊がゐる次に鮫島大浪、次に醉茗がゐる、大浪は別の寫眞の方で葉舟と並んでゐるのがそれだ、白羊は同じく葉舟の後ろに肩だけ見えてゐる。偖て以上寫眞に就いて其姓名を說明し得たものは殆んど三分の一に過ぎない。撮影を急いだ爲め、女性なるが故に遠慮もあつた爲め、遂に一々擧げることは出來なくなつたけれど、誌友會に集つた人の一般は此れを見ても會得することが出來るであらう。（一記者）



短篇小説

水野葉舟選

○反抗（天賞）

名古屋　月霊子

信次は一人で膳拵へをして、淋しさうに一人で食べた紫色の風呂敷に包んであつた辨當箱を出して、流元まで持ていつたが、洗ふのは止めて水をザッと其れへかけた儘、座敷へ戻つてきた。釘にぶら下げてあつた、皺くちやの袴をはくと、帽子を被つて下駄をはいたが亦すぐ止めて座敷へあがつた。其れから長火鉢の前で暫くふさぎ込んで、考へるやうにして居たが、思ひ切たやうに起つて次の座敷へ行つた。其所はおゆふが未だ髪を亂して床の中に潜つてゐた。信次は枕元へ立つた儘、まじ〳〵と落ち散つた簪や櫛を見つめて居たが

『おゆふ』と呼んで見た。返辭がない。

『おゆふ、ぢや僕今から行くがね、機嫌をなほして好い加減にはお起きよ』

『……………』

『な、おゆふや、眞個にいゝかい。僕が惡かつた、惡かつたで……』、信次はつッと口を噤んだ。急に淋しくなつて、泣きだしたいやうな氣がした。

おゆふは其れでも身動ぎもしない。

信次は其れなり默つて、閾際まで引かへしたが、ふとたちどまつて、

『詰らん事でもして見ろ、承知しやしないから』、這う聲を荒らげて云つて、今度はさつさと表へ出て行つた。

おゆふは靜かな室の中でいろ〳〵考へた。出る。どうしても出る。併出て何處へ行く？。其處まで考へたけれども、おゆふは少しも困つた顔をしなかつた。兎に

角出さへすれば誰かしら拾つてくれるに違ひない。さうしてもつと〳〵幸福な境遇が、自分を待てゝくれるかもしれない。とさう思つた。

おゆふは起きて鏡臺の前へすはつて、手探りに氣をつけて髮をこはし始めた。だん〳〵元結をきつていくうちに赤いてがらや髷の型が、疊へこぼれ落ちた。おゆふは髷型を手にとると、びり〳〵つと二つに裂いて中から綿と燈心とを摑み出して、暫くそれを珍らしさうに眺めて居た。てがらは丸めて椽端へ投げすてた。髮を無造作に引つめてぐる〳〵卷きにすると、おゆふは火にあたりながら、是から爲やうと思ふ、仕事の順序を考へた。這うして一つ〳〵破壞に近づけて、事を爲了はせて行く間が、おゆふにとつて一番心持のいゝ復讐であつた。

『おゆふさん、昨夜の結果はどうなりましたね』と言ひながら、ふと昨夜居合せた信次の友達の田代が這入つてきた。おゆふは狼狽して、何と云ふまでもなく、

『え？』といつて空惚けたやうに笑つて見せた。

『えゝだなんて、こりゃ驚いた、ぢやおゆふさんは芝居をやつたんだね』、田代は怒つた聲で這う云つて火鉢の前に胡座をかいた。

『あら‥‥』

『ぢや死ぬだの生きるだの別れるだのつて、皆嘘ぢやなかつたの？』

『當然だわ、だから私‥‥』

『え？』、田代は首をのばして、思はず膝を進めた。おゆふは何だか急に田代を笑つてやりたくなつた。其れなり默つて居た。

『だからどうしたんです、え？、‥‥　‥‥實に日本の女の自覺のないのには驚くねえ、貴女なんぞも其那事で、何時までも愚圖〳〵と男の道具になつて終るんだね、さうでせう？』

おゆふは赫となつた。

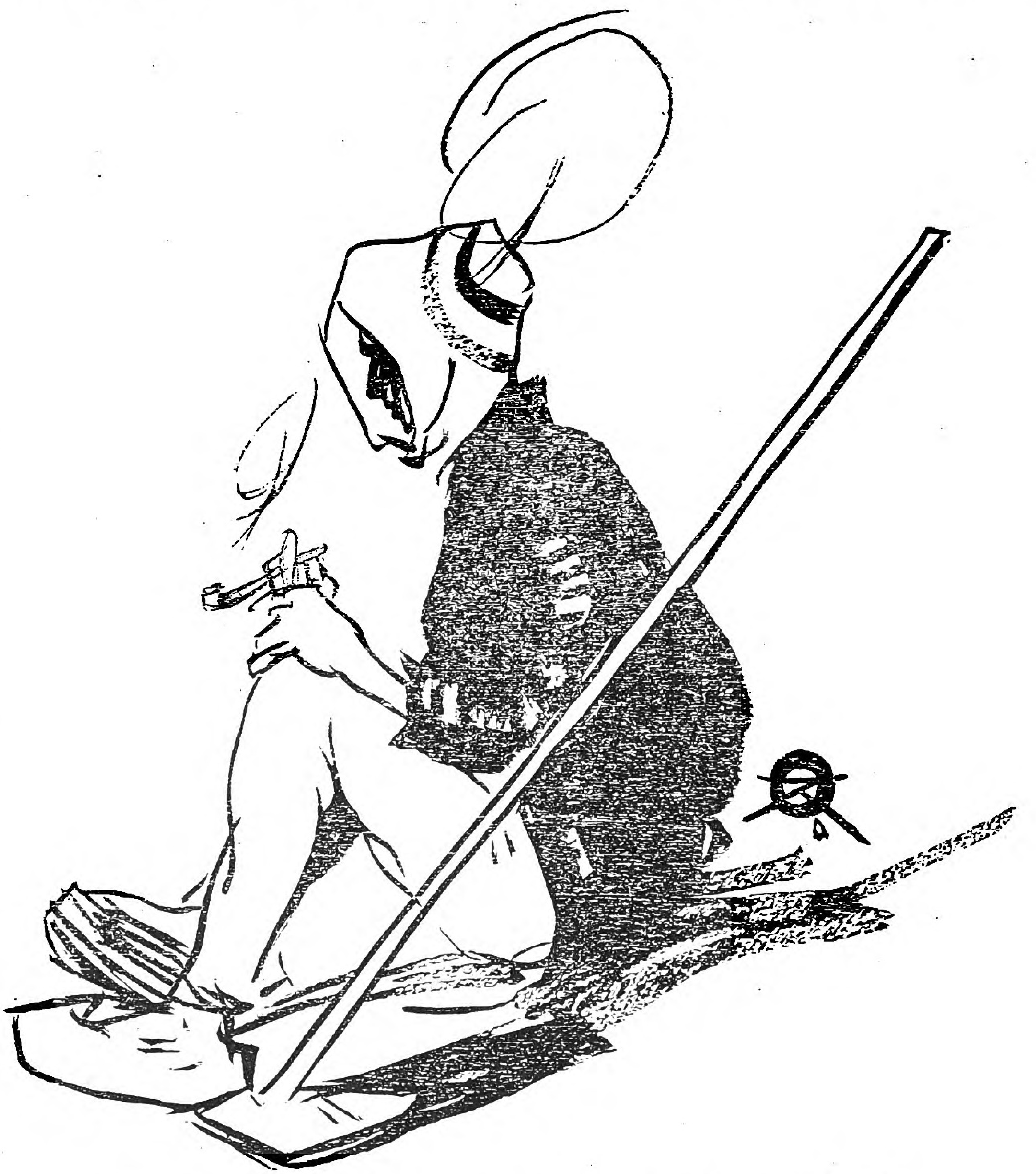
『いゝぢやありませんか、どうだつて他人の事を』、

『ふん』と、田代は横を向いて嘲笑つた。嘲笑つたすぐ其下から、欺かれた！、と破れた自分を呪ひたくなつた。

『別れやうと別れまいと、私は私の勝手だわ、田代さんなんぞ笑つて見て居て下さりアいゝんだわ』、おゆふは這う言つて冷たく笑つた。田代は默つて唇を嚙んだ

おゆふは田代がかへつてから、馬鹿〳〵と連りに口の中でくりかへした。其れが自分でも自分を罵しつて居

るのか、田代を罵しつて居るのか、わからなかつた。たゞ這うしてだん／＼自分の周圍が冷てくなつて行くんだといふ事は充分に意識せられた。おゆふは『どうでもいゝ／＼』と、口では云つてもどうしても心の淋しみは消す事がてきなかつた。
信次の歸つてくる頃にはおゆふは心よく夕餉の支度を調のへて待つてゐた。



（地賞）　いこへる人　水戸　玉川すま子

まだ徹しないが面白い境が書いてある。いゝ作だとは思はれぬけれど、今月の中では一番目を引いた。

○足の指

（地賞）

大伴露子

寒い朝だ未だ出掛けるのには少し間があるので新聞を見た、三面の標題をずうと見て行くと『娼妓自由廢業を企てゝ袋叩きに逢ふ』と言ふのがふと私の眼に入つた。そして何氣なしにそ

の記事を讀むと其娼妓の本名の長尾糸と言ふのがどうも覺へのあるやうに思はれた。で私の記憶して居る限りの種々の人の顏を思ひ出しては名を言つて見るけれどどうしても思ひ出せない、其内に時間も來たので外套を引掛けて靴を穿いて外へ出た、吉祥寺の横手を眞直ぐに富士前の方へ霜柱をざく／＼と踏しだいて、寒いけれど心持の好い朝風に打たれ乍ら歩いて行つた、蓊欝とした寺内の木立の赤味を帶びた葉の色も何となく冬の寒さを思はせるやうだ、長尾糸、誰れだつけなあと私は又も考へ初めたやがて遠くの霧の中から何物か來る樣に段々に其の形が見へて來て其の女の顏は間もなく明瞭と私の眼に浮んだ。

お絲は色は稍々黒い方の、富士額の大形な顏で、眉の濃い口元のきつと締つた、眼の非常に好い女だつた、殊に睫毛が長いので一層引立つて見へた。

恰度私が十六の時だつた。空は晴れて綿入では少し暖か過ぎるので風を引くといけないと母の言ふのにも構はず袷に着かへて玄關に鋸や板を並べて細工物をして居た――私は小さい時から折箱や板切を見ると何か造らへて見度くなるのが癖であつた――一心に遣つて居るとその時四十位の女が十四ばかりの娘を連れて門を這入つて來た。そして。

『まあ重さんですか、何んて大きくお成んなすつたのでせう』と馴々しく聲をかけたが私は誰れだか知らないので『誰方ですか』と寧ろ咎める樣に尋ねた。『ああ貴方は御存じないんでしたね、あの私はねえ信州から參りましたんですよ、信州のまちで御座いますよ。』と言ので私は奥へ行つて、『母さん信州のまちつて言ふ人が女の子を連れて來ましたよ。と傳へると、『おやさうかい。』と母は急いで出て來た、そして『まあ、まつちやんよく早く來られましたね』と言つて嬉しさうにこの母子を奥へ連れて行つた、私は其時あんなお婆さんを『まつちやん』なんて可笑いと思つたがやがて後で聞くと此のお町といふのは元柳橋で半玉に出て居たのを私の父が引かして外妾に仕て置いたのだが、父も私と言ふ者が生れたりしたので考へ直して母にも打明けて相當な處へ緣付け樣と相談した、當人も承知の上で信州の或る寺へ片付いた間もなく女の子が出來たと言つて來たので父も母も悦んで居た、足掛け十五年は經つた後其の夫の住持がふとした病で死んだので他に便る身内もないからと私の家へ來たのであつた、お町は娘のお糸と二人で母の仕事の手傳ひなどを仕て居たが

日を經るまゝにお糸は、重さん重さんと言つて私の小細工をする側に來ては『重さん私も手傳ふかなどと、なまりの取れない言葉で言ふ樣になつた私もいゝ相手が出來た氣になつて種々な無理を言つては手傳ひをさせたが。或る日の事であつた椽側で何時もの樣に遣つて居るとはまと言ふ下女が雜巾を持つて來て椽側を拭き始めたがお糸と私の足の先を見競べて『おや〳〵お家の坊ちやんは親御さんより出世をするけれど糸ちやんは親より出世をしない』と無遠慮に言ふので、又はまの御かぶだぜとは思ひ乍らまだ年の行かない私は思はず好奇心を動かされて、

『なぜだい、はま』と言つて聞いて見た。お糸も、

『おはまどんどうして私は出世しないの』驚く樣な眼をして問ひかけた。はまは正直な田舍出の女で誰れにても可愛がられる何日も莞爾々々した大黑樣の樣に耳たぶの大きい女だ、人が一寸冗談に言つた事でも眞面目にきいて居る位だから、昔からの言習しなどを聞くともう一生懸命に信じて些の疑も入れないので、お前の正直は上に馬鹿がつくなどゝ私の父などはよく笑つた物だ、一度嫁に入つたが亭主が邪險でとても居られないと言つて出て來てから元勤めたのを緣に私の家に働いて居たのであつた。

『私も人に聞いたのですけれどねえ、坊ちやんの足の指を御覽なさい母指より其の次の指の方が長いでせうこうなつて居る人は親より出世をするのですとさ、糸ちやんのは短いでせう、ねそら、さうだと親より出世しないのですとさ』とはまは平氣で說明して笑ひ乍ら二人の顏を見た。

『さうかいお前のは、どう御見せ』と言つて私ははまのを見た。そして、

『お前のも長いぢやないか、ぢやお前も親より出世するんだね』と言つたがお糸の方は心細そうな風をして

『私どう仕樣、親より出世しなくつちや困るわねえ』と言つて泣きたそうな顏をしたはまはお糸が悄氣たので。

『何、貴女屹度さうなると決まつた物ぢやありません私なんか一生坊ちやんの御家に御厄介になるんですもの親より出世する筈はありませんよ、其れてもかうなつて居るんですから何、當てになりや仕ませんやね』と少し言ひ過ぎたと思ひ乍ら氣の毒らしく慰めた、私は元よりそれを眞實とも思はなかつたから、

『糸ちやんそんな事氣にするもんぢやないよ、昔の人

なんか何を言ふか分りやしない』と弱い者をかばふやうに言つた。お糸もいくらか其れて氣が濟んだらしく其話も其れきりになつた。

其後私の父母の心配の甲斐があつて向島に居た、長尾無墨と言ふ日本畫家の家へお糸を連れてお町は後妻に嫁つた、先方にもお糸より三ツ四ツ年上の男の子があつたので後々には二人を夫婦に仕樣と言ふ話であつたさうだ、二年目の時にお町はお糸も十六にもなつたから來年あたりは健と夫婦に仕樣と思ふが其の前に御奉公をさせ度いから相當の處へ世話をして呉れと母へ賴んで來たので母も心配して或る官吏の處へ世話をした。が、それから壹月ばかり經つとお糸が逃げ出したと言ふ知らせがあつた。そして諸處を探した揚句向島の家に居る事が漸く分つて私の母が詫び乍ら連れて行つた、がやつぱり一月とは居なかつた。二度三度は母も氣を揉んで、連れて行つた其終いには呆れて、甲斐がないからと言つて棄て置いたそして母は、多分家の方に何か事情があるのだらう、とかう思つて居た其んな事から氣の毒にでも思つたのかお糸は餘り來なくなつた。其の內に無黑と言ふ人が死んだと言ふ知らせが來た私の父も其時はもう亡い後なのだし其れに丁度母も風氣て外に出られなかつたので使を遣つたきりでその後はとんと音信も絶へて仕舞つた。花見時分に近處へ行つた時には態々家の前を通つて見た事もあつたが其の時はもう表札の名も變つて居た。で當座こそ母も時々噂もしたが今ては全て忘れ果てゝしまつた。

お糸に對する私の記憶はこれだけだが先刻の新聞で見れば吉原の中米樓で曙と名乘つてお職を張つて居たのだとか、どう言ふ譯て娼妓にまでなつたのか分らないが自由廢業を仕樣とした其後には健と言ふのが居たのてはないかとも思はれる、はまが椽側て言つた親より出世せぬと言ふ言葉は偶然ながらお絲の運命を占つた下女のはまは今から五年前私の父母に種々と勸められて田舍へ再緣した、年々に出來る子と共に財產も段々と增へて先妻の壹番總領娘を嫁に遣る處を心配して居る外には別に苦勞もない、と此間來た時は滿足らしく話した。彼れの中指も母指より長かつたつけがなど、私は思ひ出して妙な感に打たれ乍ら。何時しか本鄉の通りへ來た。

學校の時計臺は白みがかつた冬の青空の中に聳立つて角帽を被つた同窓の連中の姿も其處此處に見受けられる。

お糸の足の指はよく彼女の運命を豫言したが、自分の身も又はまの言つた如く親よりも出世するだろうか、などゝ私は再び考を續けたがやがてわれ乍らあまりの馬鹿らしさに氣注き自分を嘲り乍ら、すたゝゝと校門を入つた。

自分はこの作がたゞ仲々と書いてあるのをとる。

○冷い女（人賞）

土佐　寂靜子

暖い潮を含んだ南の風に櫻も蕾んだ、桃も笑み初めた南の國の三月の中旬は春の初である。女學校の卒業日にも、もう間もない、『何あに何樣でも早ふ卒業さへしたら……』だの『もう學校なんか……』等と云つてた連中もさすが之等の言葉を過去のページに納めるかと思ふと今更名殘の惜しまれて青く長く芽をふき初めた柳の枝をいじりながら『永久もね』を繰り返してゐる、熱せる手を握り合ひ鼓動の高い胸を抱



（人賞）境内　青森　松尾千代子

き合つてる狂氣の樣な友等の樣を客觀て『馬鹿らしいわ、あんな永久迄もなんて言に何日迄醉つてる心意だらう』と佐代子は嘲笑つた。『ね、佐代樣！私いつそもう一年學校へ來たくなつたわ』D子樣が云つた。溫順い優しいD子樣なので佐代子は『さうね』と答へたが『馬鹿な、誰が此檻見たいな束縛しきつた冷い物の中に一日も生きられる物か若い日は一日でも尊い、此若い日の何日迄自由に活動できないで何樣する心意だらう』と心では思つた。佐代子が少し皆と話の打解た場合には『卒業後何誰が一番活動なさるんでせう⁉』此樣云ふのが癖である。『自分は皆が平凡な教師だの結婚だのと夢中になつてる間に十分天才を發揮して自分を平凡だと思つてる皆の耳目を驚かしてやらう』と何日も思つて居る。それで『妾佐代樣が一番立派にお成りと思ふわ第一誰にも持つてない天才がおありだもの。』と皆の口から此樣いふ言葉を聞くのをひそかに望んで居た。けれど皆『左樣ねX樣が第一よ流調な佛語で東西交際社會の花と歌はれて――』此樣事ばかり云合つて居た。佐代子は『此樣幼稚な單純な者とは語るに足らん少くも自分の唯一つの腕を研き上げなくちやあ、人に依て交際社界に雄飛しやうが其れは成巧とは云はれん』と始終思つて居る、然して冷やかな瞳に皆を視た

『貴女近頃ヴァイオリン何樣遊ばして⁉』S子樣が云つた。『詰まりませんわヴァイオリニストなんか』佐代子は冷やかに云つた。『彼樣に夢中になつてたのに――』とS子樣は可笑かつた。佐代子は今度の演奏會の時、きつと自分は撰拔されてN先生とヴァイオリンの合奏を演る心意で居た、がそれがもう他の一人に先生の內意が下つたのを探知して佐代子はそれとなくピアノもヴァイオリンも捨て丶終つた。離れ小島を補習のM樣と合奏つてくれ』と先生に云はれた時もニッコリともせず謝絕つた。心では殘念だ！口惜しい‼と思つても唯冷然として居る。

『佐代樣‼何樣しても僕は貴女の御心が解らない』宮田樣は首を傾けてジッと佐代子を見た。『何故⁉何樣してでせう何處が解らないの⁉』佐代子は黑い大きな瞳を初心らしう見張つた。『何樣して私の胸が貴方なんかに解つて耐りますものか』心では此樣叫んだ。『解らない』と悲しそうに云つた男の聲は佐代子の自尊心を少なからず高めた。『妾は男に捕はれて居ない強い、男より強い‼と思つた。けれど今『佐樣ですとも解りますものが』と眞の聲を出したら宮田樣はきつと憎き女‼と叫

ぶであらう、自分は宮田樣の愛は受けたくない、不純な男の愛に生きる樣な弱い女ではない、けれど彼男の胸には『愛する女よ!!と深く刻み村けて置きたい少くも彼男の愛を他の少女に與へさせたくない』と佐代子は思つた。冷やかな嘲笑は自然頰に表はれ樣とするそれを滴れる樣な艶なうるみ――悲しみをもふくむだ樣な――て包むだ。口を眞自目らしく結んで、男の心をチヤームしやうと樣にジツと見詰めた。男は心？身體？の何處かに强烈な刺激を與へられた樣に、耐らなくなつたと云ふ樣に『佐代樣!! 聲は自然でに衝き出た。佐代子は其樣を冷然と見澄した。自分は勝つた、今彼男の心の中には私と云ふ者より他にない、今の妾は確に彼男の愛を仍つて心を捕へて居る!!』と思つた。佐代子はまだ悲し想な愛憐を乞ふ樣な瞳に男を見て居た。佐代樣!!何故其樣悲しい顏するの!?!宮田樣は可愛くて耐らない樣に云つた。『だつて悲しいですもの：』佐代子は細い聲で伏目になつて言つた。自分の瞳に冷やかな影の廻つたのを覺えたので。心では『僞の聲だ!!』と思つた。『解つた〱佐代樣はね、僕の愛する佐代樣だ、ね、佐代樣!』。男女は顏見合してニツコリした。

『僕ね、此度の日曜に遊びに行かうと思つてるの、かまわないの?!』『そう、ほんと? 行らしつて頂戴な、どうぞきつとね』嬉しそうにニツコリした。とふと、思出した。

一週間程前である、英語學校のM樣が訪問時、面倒だから歸して頂戴な』と母に留守を告げさして二階の窓から振り返り歸つて行く男の後姿を冷然と見送つて嘲笑つた事を思ひ出した。

然して自分は强い!!と心で微笑むだ、一種の誇を感じた。

無理に冷たい女にしてしまつてある。

【秀逸】

○十五分間

府下　鈴木春子

『あなたほんとにい〱はねえ。』

『：嫌な人：：貴女こそ：：』。

少女は、强いて絞り出したやうな笑顏を見せた。心の内では、いろ〱に謙遜の辭をつらねて、他人の樣に旨く圓滑に話題を替へたいと思つたが、無口な少女には、どうしても其が出來なかつた。

かた〱と頭の上の階段から、靴や草履の下りてくる

音がした。少女は、衆の視線が自分に許り集注してゐるやうな氣がして眞赤になつた。そして自分の一擧一動が、いかにもぎく〳〵と角張つて、田舍めいてゐるやうな齒痒さを痛切に感じた。

『えらいわねえ。』『天才!。』『僞よ、、えこだわ。』さういふ言葉が、あちこちでした。ごちや〳〵した囁きに過ぎぬ其等の聲が、少女の胸には鋭く響いた。色々の美しい色彩をもつた波の樣な群は、嬉しいやうな、悲しい樣な心持を少女に起させた。少女は、皆のなかに居る事が。いかにも苦痛であつた。而し、思切つて拔けるといふ事も、何だか幸福を取逃がすやうな詰らぬやうな氣がして、唯、俯向いたまゝ皆の後について、運動場の方に歩いて行つた。

きらつと鋭い光線が少女の瞳を射た。ぎら〳〵した白い光の泡が、ぐる〳〵と眼の前に廻轉する。がちや〳〵と砂利の音がする。運動家のＭ子さんやＡ子さんは、いつの間にかラツケットを持つてきて、グラウンドに立つて居た。少女は、傍の作法室の前の青々とした植込に入つて、つまらなさうに茫然と皆のするとを眺めて居た。暗い不安の波は隙を見付けて少女の胸にひしひしと押寄せてきた。少女は深い溜息をついた。

ふと眼の前に、黒ぽい縞の着物をきて、ぴたりと髮を分けた前掛姿の從兄がみえた。あんな詰らぬ人のお嫁になるのかと、少女は自分の袴と靴の新らしいのを見て不思議な感じがした。

『貴女の成功を待つてゐます。…あゝ、早くあなたの洋行姿が見たい。』

梅澤といふ小學校の女教師の聲である。褪せた紫の袴と拔上つた淋しい生際とが、力强い聲に籠つてはつきりと思ひ出された。と、心臟の邊が、びく〳〵と引つれる樣に顫へて、ぼろ〳〵と熱淚が頰を滑つた。まだしかとした約束がしてあるのぢやあるまいし、早く斷つて貰はう、斷はつて了まはうあんな人なんぞ…。何故、此間はあんなに恥しかつたのだらう、何故俯向いて許り居たらう、何故、疊の目があんなに粗く見えたのだらう、お給仕の赤いお盆をもつた自分の手が、何故、いつもより大きく黒く見えたのであらう。『威張れ!。』胸の底で微かな彈力のある聲がした。

白い西洋館が、高く兩側に建續いて、其奥に青々とした海が見える。洋裝した美しい自分が、海の方に吸込まれるやうに歩いてゆく。――白いハンケチがひら〳〵と閃めく。…

『ワンノール！』ばさりと、頭の上の赤松の枝がなつた、と、すーつとボールが風を切つて、勢よく向ふのグラウンドにはづんだ『素敵！』氣取つた聲が後の方でした。數多の白いボールと、オリーブや紫紺の袴が目まぐるほしく動いてゐる。少女はまだ少さな癖に、何故お前は結婚などいふ老成た事を考へるのかと誰やらに訊かれる樣な氣がして、心持、顏を赤くした



石工　青森市　松尾千代子

襟からも顏からも、だん〳〵引きりなしに汗が流れてくる。

ふと見ると、動運場の向ふの、半分黒くかげつた室内體操場のガラスがきら〳〵と日光を反射してゐる。直き後の音樂堂から、追かけつこをするやうな高調のピアノの音が漂うてくる。

『屹度い〻人になつて見せる。』少女は強く唇をかんだ

許嫁なんて失禮な事をいふ。今度逢つたら、思ひ入

高い權威ある態度を示してやらねばならぬ。此處迄思ふと、急に鼻腔に辛子の汁でも吸込んだ樣な感じを覺えて、ぽろ〳〵と涙がこぼれた。

バタ〳〵と前を人がかけてゆく、ぢやん〳〵と濁つた始業の鐘の銅音が烈しく少女の胸を打つた。少女は急いで教室に走つた。白いカーテンを後にして、人々はもう整列してゐた。そして各々に心配さうにリーダーに眼を食込ませてゐた。少女は自分がこの學校に入るやうになつてから、毎日不滿らしい樣子をする母親の顏や、引つく樣な弟妹達の泣聲や、我が子のやうに、ぞんざいに呼捨てにする伯父の顏やを思ひ浮べて、堪え切れぬ不快の感じに胸を壓せられてゐたが、やがて先生のお姿が見えると、少女は、級長なる自分の責任に幾分か心を引立てられて、會話の二つ三つを口の内で繰返し乍ら、教室に入つた。

ボールドの下の水差に挿した夏菊の花が、ぐたりとしほれてゐた。

大した處が覗つてあるといふのでは無いが、この小さい、何でも無い處をつかまうとしたのがよかつた。

○別後

横濱　梅子

七月下旬の午後二時と云ふ日盛りに、私は先生を停車場迄見送た。其日先生は大變沈てゐたが、それを無理に浮き立て樣と勉める樣にも見える。

『家へは内密？』先生は低い聲できいた。

『え……でも叱られた處が其時少しうるさい丈けで何でもないわ、時間があると今少し何處か歩きたいわね、暑いけれど……』私はこれ丈けで別れるのは餘りに慊らなかつた。

『だが同じ事だからね、それより手紙で談さう』『さうね』何故こう今日は談がはづまないのだらうと私はいら〳〵して來た。其中に時間がきたので、私も先生と一緒にブラットホームへ出て、先生の乘てる箱の窓の前へ立てゐる。其時初めて此先何時迄も先生と別れてゐなければならないのだ、と云ふ事に氣が付いた樣に何となくしめりぽい泪が出さうな氣持ちになつて來た而して私がもつと自由の氣のあふれた女なら、先生と一緒に瀛車へ乘て何處迄もつれて行て下さいと泣くかもしれない。でなく共こうした場合何とか先生の胸に泌みる樣な、刺戟する樣な言が云て見たかつたが、私は自分の思ふ樣な事が自由に口へ登て來ない。而して先生だつて、何とか云てくれてもよさゝうなものだと、

焦れつたくなつて來た。
『ね先生、もう永く出ていらつしやらないの？』
『さあ、何うなるか判らないけど、ね、おみほさん、おみほさん……』
『え？』と促す樣に先生を見ると、先生は默て了て、只私の顔をみつめてゐる。其眼が何だか光て見えた。私は悲しくなつた。其中淋しい樣な氣笛がきこえると先生もあわてた樣に、身體を乘り出した。
『さよなら、忘れつこなしだよ！』と握た手を強く振て離した。
あゝ逐う〳〵別れて了た。私はもう當のなくなつた樣な寂しい氣持ちで、黄ろい花の中を歩いて歸た。家へ歸ても何をする氣にもなれなかつた。先生に出す手紙の文句計り考へてゐた。だが私はいつの間にか、先生とこんな間になつて了たんだ——と今更ら氣が付いた樣に考へて見ると、怖ろしい事を平氣でやつてゐた樣で、此先、先生との間が何うなつてゆくのだらうと、考へずにはゐれらなくなつた。併し其事を考へるのは今初めての事ではない。時々其問題を纏めて見樣とする事もあるが、何時も、相手が先生だ何處迄行たつてしれたものだ……と思ふ、だが、何故先生なら知れたものなのだか、知れたものゝ方が自分にとつて、好都合なのだが何だか那麼事迄考へた事はなかつた。何となく莫然と構ふものかと思て、平氣で親しくしてゐた。が一體那麼事を考る必要はないのだ何故と云て私は今迄先生が、何んなに私を思てくれたつて、戀らしひ囁き等先生からきいた事はなかつた。私の方でも默て戀してゐた。而して先生は平氣で自分が外の女と結婚する咄し等した。私はさう云ふ時、先生だつて心の中では、苦痛で堪らないのだろうと思ふ私も不快さに堪えぬが、何でもなささうに、笑ひ乍らきいてゐた。
併し實際先生此度歸國したのは、結婚のためらしい、而して其事も今日此頃定た談しはない樣だ。だから、それだから先生はあんなに要心深い戀のし方をしてゐたのかしら、私は今迄其事に氣がつかなかつた。只學校の教師と生徒との間に那麼事があると云ふ事が、校長の耳へでも入たら大變だから、で先生はビク〳〵してゐたのだと思てゐた。だから此度辭職すると云ふ事をきいて、もう何うにでもなる樣な氣がしてゐた。さう思ふと、自分一人が眞面目になつてた樣でむしやくしやして來る。もう何うも永く逢う筈がないんだ先生

が驚ろく樣な、熱烈な手紙でも書いてやれ……而して先生が讀んでみて悶えずにゐられない樣な……。

（三月十一日）

まだ如何も、作者が心を沈めてものを見ての上に書いて居ると日はれない。一種その人の情を語らうとした處に、力はあるけれども。

○俥の上

山形縣　稻葉秀子

金森さだ子はその日の夕方、赤湯停車場から自分の赴任してゐる宮内町へと俥を急がした。絹絲のやうな細い雨は、絕間なしに降つてゐて、濕ふた水々しい四邊の山々には、白い靄が流れてゐた。冷い初秋の風は幌の中の彼女の頰を嬲つて、淩るやうな哀感を覺えさせた。彼女は弛んだ肉、疲れた心を俥の動搖に任してゐた。

ふとまた、今日家を出るときのことが胸に浮んで來る先刻程には氣が苛々しない。そして心の奧には、微かに、『折角女學校まで卒業さして貰つて、それでまだ親に金を强請るといふのは、自分が惡いのではないかしら？』などゝいふ考へも起る。けれども彼女は勉めてそれを打ち消した。しかし怎うしても、張り詰めた心が弛んだやうで、情なくなつて止め度もなく淚が流れた。彼女は無理にも『自分は惡くはない、自分はまだ十八歲だもの、親から着物の錢位貰ふは無理ではあるまい。』と落付かない心を、さう決めた。

急に俥はガタガタンと左右に搖れた。ふと顏を上げると、車夫は大きい石のある泥濘の道を紆行つて、喘ぎ喘ぎ引いてゐた。

それから彼女は、二十日ばかり前に、暑中休暇で歸省したときのことを思ひ出した。

彼女が自分の村へ這入つたのは、夜の九時頃であつた空は星一つ表はさず闇に曇つて、照り續けのところへ雨に降られ、道からは蒸し暑い息が立ち登つてゐた。何處の家でも夏蠶を飼ふので、家々から煤ばんだ葦の簾を通して、燈が洩れてゐた。どこからとなく蠶沙の醱酵れた臭、汗の臭、厩の臭、下水の臭などが、混雜になつて漂ふて來る。彼女はムット癪に觸つた。そして『これだから田舍は非道いわ。』と呟いた。

彼女が家の入口を開けると、一間に三尺ばかりのところは土間になつてゐて、其所には大きい下駄、小さい下駄、足駄、草履などが、雜然に轉げ合つてゐた。それが第一彼女の氣に食はなかつた。家へ這入ると、洋燈の笠は黑く煤けて、橫ちよに掛つてゐた。臺所の

薪置所の邊から爐の邊までは、白い芥塵が布き詰めてあつて、壁際の竹竿には、汗の染んだ働き着物や、平常着の袷などが、取り混ぜて掛けてあつた。それ等はなんとなく彼女の心を、クサ〳〵さした。

彼女は何んとも言はずに、ツカ〳〵這入つて行くと瘠せ削けた土黑い母は、血の氣のない唇から、御齒黑の剝げた、白ぱぐれた齒を見せて『今歸つたことか?!』といつた。その聲はまた若々しいところのないドンヨリと濕んだ聲であつた。何時でもあの聲で、御客樣が來ると、虛榮を張つた話をペチヤ〳〵辯舌るのかと思ふと、女ながらも反抗したく思つた。堪らなく嫌惡の念が湧いて來た。横座にゴロリとなつてゐた父は、勞働に疲れ切つたといつたやうな淋しい眼光で、彼女を見遣つたのみで、默つてゐた。祖父は早く寢てゐなかつたし、祖母は常時のヒステリー性の疳高い聲で、妹を叱りつけ叱りつけ一緒に風呂へ這入つてゐた。彼女は爐邊に座りながら、あの聲で明日から叱られるのかと思ふと、理由もなく家が厭に思はれた。此麼家庭に生長する妹は、まだどんなになることかと思ふと、言ひ知れぬ佗びしい感にうたれて、憫れまずにはをられなかつた。何故此麼家庭に歸つて來たかと思ふと、自分で自分の心が知れなかつた。

俥は轣轆〳〵と勢よく軋つて來た、宮內町歸りの乘合馬車と擦れ違つた。彼女は再び顏を上げた。何時か四邊は灰色の夜の帳に、覆はれて、一町程向ふの桑原の樹冠のみが、微かに浮いて見えた。彼女は俥に搖られながら色々なことを思ひ出した。

ふと井戸へ這入つて自殺した姉のことを思ひ出して彼女は愕然とした。姉は既に婚約が濟んでゐてあつた。若しやあの柔順しい、內氣な姉があのやうな怒つぽい慳貪な人ばかりの家庭に、ゐることが出來なくて、自殺したのではあるまいかと思つた。けれども彼女は姉の自殺だけはこの樣に解決したくなかつた。

尙續けて彼女は此麼ことを考へてゐる中に、何時か明るい宮內町へ掛つてゐた。小雨は相變らず咽ぶやうに降つてゐて、家々から洩る〻燈火は、泥濘の道に煌々映つてゐて。丁度舊盆の十六日といつても余り賑かでもなかつたが、流石に遊蛇の目の往來だけは繁しかつた。彼女は俥に搖られて、煌しい通を縫ふて二三度角を曲つた。驟て俥は軒下に提灯をズラリと下げた家の澤山ある通りに出た。何處からとなく香水の香、石鹼の香等の混雜になつたやうな淡い香が漂ふて來る。ふ

と頭をまげて幌の内から左手を見ると、唐蔦の這つてゐる高い家には、明々と障子に燈火が射して、世間の不景氣、悲辛とは、何等の關係もないといつたやうな三絃の音と唄の聲とが、亂調子に洩れてゐた。

彼女の胸は疼くやうにヅク〳〵した。そして自分もあゝして家のことも、我身もわすれて、強烈な歡樂に醉ふてゐたいと思つた。寧ろ女學校へなど這入つた自分の身の上を沁々とはかなんだ。

この作者はもつと短篇を書く上の**まとめ方**を考へる必要がある。書かればならぬ事が書いてなく、餘計な處がある爲めに、作が不明瞭に成るのだ。

○Kさん

信濃　優梨子

私の級にKさんと云ふ人が、あつた。Kさんは級での注意人物だつた。什麽いふ性格の人だか、誰にもわからなかつた。隨分皆が、竊に觀察したものだが、誰にもわからなかつたらしい。

Kさんには親しい友が無かつた樣だ。毎朝彼の湯福の上の坂道を、それこそ一寸の傍見もしないで登つて、又同じ道を只一人、すた〳〵歸る姿は、誰も見るけれども、燃える樣な虞美人草の咲いた花壇の邊りで、友と親しさうに語つて居る處など見たものがない。

北の窓際の席に居るKさんは、何の時間でも質問などした事がない。又自分から進んで答へる樣な事もなかつた。

よく當番の人が放課後日記を附ける時、

『烏渡、今日松井樣は欠席でせう』と聞いては、

『否、出席よ、嫌なお當番ネ』と云はれても、未だ不審さうな顏をして、

『さう？左樣か知ら、餘り溫順しくてわからないわ』

などゝ云つたものだ。

けれど毎週一度づゝKさん、專有の時間があつた。それは、金曜の四時間目の代數だ。

『實際不思議ネ、代數の時許りは香代さんの頭が什麽働くのかわからないわ』

『眞實にネ、確に松井樣の腦は好いに違ひ無いのよ』

『ぢや何故もつと、はき〳〵やらないんでせう』と云ふ言葉は、何時も級友の中に取り換はされて居た。

二次方程式の泣きたい樣なのを出題されて、皆靑くなつて考へて居るのに、Kさんはもう何の苦も無い樣な顏をして、羽織の紐を弄つて居るのだもの。實際代數の時間になると、Kさんが羨しかつた。

『さあもう少し考へて御覧なさい』と皆の怪しげな解き方を覗いて見ては、小さい聲で斯う云ひながら、A先生はKさんの處へ行くと、何時も。

『もう出來ましたか』

と、先づ感歎詞を發して、それから靜かに解き方を見た。

『好う御座います』と底に力のある低い聲が教室内に響くと、皆の視線は一時にKさんに集まる。それでもKさんの顏には、誇りの色など露程も無かつた。別に顏を赤くするでもなく、相變らず褪めた羽織の紐を弄つて居る

A先生は、決してすぐKさんに式を解かせた事がない。屹度誰かに覺つかない解方を、麗々と黑板でさせて、散ざ批評をした其後で、始めてKさんに正しい解方を書かせた。

自分の出來ないのは棚へ上げて、A先生の仕打ちが餘りだ、と故意とKさんに聞えよがしに、聲高に云つた人もあつた。そんな事を云はれてもKさんは、他人事



登校前　麻布　津川ふみ子

の樣に普通の顔をして居た。

金曜日にKさんが欠席すると、A先生の顔は寂しかつた。皆も困つた。休みの鐘が鳴ると皆ほつと息をつく曇つたA先生の顔が扉の外に消えると、皆顔を見合せた。そして

『あゝ私鐘の鳴るのを三年と待つて居たわ』

『あら私もよ、實際代數の時間はKさんのお蔭で、息をついて居るのネ』と、泌々云つたものだ。

Kさんは、確かに頭の几帳面に働いて居る、眞面目な人に違ひなかつた。舞踏でもして上調子に騒いで居る處など、見た事がない。

一昨年だつた。地久節の式後に、私達の級が、幹事になつて園遊會を開いた。其前の日だ。

明日の準備だなんて、もう皆がはしやぎきつて、役割を定めた。艶の無い顔をして居るKさんは、默つて籤を引いた。皆は言ひ合せた樣に、それを覗いて見た。

『あらお團子やよ』と山下さんの頓驚な聲がすると、皆どつと囃した。

『振つてゝよ、松井樣のお團子屋は、鳥渡上手くやつて頂戴な』と誰かがKさんの肩を叩いた。Kさんは何時もの樣に曇つた瞳を眤と運かさないて、只苦笑ひした許りだつた。次の日遂々Kさんの姿が見えなかつた皆は大周章に周章てゝ、もう〳〵Kさんには懲々して終つた。

又Kさんは、涙の顔を友に見せた事がなかつた。

去年の春、懷しい母校を卒業やうとした日、私達は離別の悲しみに、涙の盡きる程泣いた。其時も、只忙然窓に寄つて居たKさんの眼には、悲しみの色など少しも見えなかつた。

春の日も暮れ樣とする薄暗い舞踏室で、握る手も堅く最後の舞踏をして、懷かしい〳〵母校の門を見返りがちに出た時、もうKさんの姿は見えなかつた。

それからもう一年になる。Kさんの消息は其後ぷつりとも聞かない。

無理に或る性格を書かうとして居る。しかも、たゞその概念が並べてあるにすぎぬ、作の後に生命の影が見えぬ。

海の鳴る南やおぼろ〳〵月　太祇

春雨に濡れつゝ屋根の手鞠かな　蕪村

しら〳〵と霞はなるゝ出城かな　沿蓬

繪草紙に鎭置く店や春の風　几董

行春を鏡にうらむひとり哉　成美

兩方に髯があるなり猫の戀　來山



詩

河井醉茗選

○氷の上（地賞）

神戸市　田中落葉子

溫い溫い胸を抱いて
冷たい鹽の樣な霜をふむ心地
私のふむ處はみなとけて
黑い跡が殘る
あゝ朝日の光よりも
溫い私の心でとかして見たい
この冷たい霜を——皆
呼吸する
冷却した空氣の中に——
溫い私の呼吸があり〳〵と見える
私はいつまでも〳〵
太陽のない此の野で誇つて見たい
ふと我にかへつたとき
傍の池には一面氷が張りつめて居
た
透明だ、美しい
ふまふか——躊躇つた
一度こゝろみに
地に凍りついた小石を拾つて投げる
氣のない音をたてゝ向ふ岸まで走り
去る
ふまふか——あやうい
また一つ
スル——スル——と辷つて行く
踏んで見やうかと思つた
まだ、あやうい

斯う散文詩にして了ふと、情調が表はれにくいけれども、心持は確に動いてゐる、文語にした方が宜かつたかも知れぬ、兎に角あなたは今文語の方を捨てゝはいかぬ、兩方ともお作なりさい（評）

○二つの詩（人賞）

和泉　金田代志子

夜の海

寂寥に濡れし夜の月
疲れたる光は白く、
波の上、遠く輝き、
沈默の白き帆一つ
『悔』を積み沖に浮べり。
疲れたる我が魂は、
さみしき風のおとないに

小さき彼方の帆を尋めて、
悲しみ匂ふ波の上を、
吹かれ吹かれて嘆きゆく。

黄昏

あゝ……………
又幾度か色かふる黄昏は來た。
空を染めた深紅が
しだいに消えて暗となる――。

慕はしい君よ、
樂しく手を取りかはしたのも
黄昏の重なるにつれて
昔となるのだ――。

そして其のあとには
死と、沈默とが待て居る。

今日の日が返らぬ故に
君を愛し
今日が昔となるが故に
君を抱いた――。

今日の我の心は
毛茛色の草生よりも美しく
今日の君の心が
五月の空よりも懷かしい。
嗚呼！美しき二人の心は
黄昏の空の如し
我は一人君を愛する――。

黄昏の方が歌らしい思ひだ。二つとも未熟だ、けれども、うまくなりさうだから、しつかりおやりなさい（評）

【秀逸】

○ユーカリ

播摩　笹舟

地は絶えず呼吸をしてゐる
冷めたい空氣の中に靜かに〳〵
呼吸をつゞけてゐる。小さい石ころ
の間にも地の震動が見える
地の震ふ心よ、冷めたい呼吸よ
私も絶えず〳〵呼吸してゐる、
溫い〳〵息が冷めたい空氣を溶かしてゐる、
地の冷めたい呼吸と私の溫い呼吸と或一部に接吻してゐる。
私はたゞ〳〵寂寞の中を沈默して歩いて居る
沈默――
バサッと音がした。初めて沈默から脱して眼を上げた。
大きな〳〵ユーカリの木が半ば切られて
地に落ちたのだ
褐色の皮の間から黄な粉がバラ〳〵と落ちてゐる。
其厭な香があたりの空氣に泌み渡つて
だん〳〵私の周圍を取りまいてくる
色の黒い男が又次の木を引きかけてゐる

ヂリ〳〵といふ音がするかと思ふと
又
黄な粉が落ちる、半ばかたむいた
と見るまに褐色の薄い皮のみが殘つ
てしまつた。
危い、危い
今にも切れそうだ
けれど私は離れようともしない
離れたくない、此ユーカリの香に醉
つて見たい。

「氷の上」から見ると遙に散文詩的の題材て、此れは殆んど完全してゐる（評）

○三月の天地にたちて

XYZ

三月の天地にたちて
なつかしき過去の思出に
ねむるともなくうなだれて
何をかの聲を聞かんとす吾小さき魂

新しき雰圍氣
あれし皮膚にも、すさみける胸にも
心ゆく限りすひよせて、
醉たふれんとする心地よさよ
光失ひし髪もかゞやきて、つよき
彈力にうるほひぬ

きけ！川沿、
水なき水車のめぐらぬ物たらなさは
とうたひしは夢なりしか
（あゝ春の大天地）
さゝやかに唱ふ聲にも、情と血の、
雫にうるほひて、なべての若さと、
安けさにあり

眼とづれば、花の甘汁したゝかに
含める紅綿のやはらかに、又
ぬくぬくと取まきて、
今若き疲れのよせてきぬ――。

深く考へて作つてゐると云ふ事は分るが、まだ眞の正しい道を歩く處へは行きかれる、獨創力のあるのは賴母しいと思ふ（評）

○暗室

伊豫 パンジー

心……せまい暗室の内に、
恐怖、不安がうづくまつて居る、
嵐に會ふと、室の闇を渦になつて
馳け廻る、
疲れて〳〵夜も晝もあへぎながら、
かと思ふと、忽ち互ひに入れ違ふて
亂れて
喧嘩をする、
暗室の鍵は何時の間にか、なくした
のだ、
出ようにも出られない、外からは入
る者は
室のぐるりをグル〳〵まはつて鍵を
尋ねて居る内に、
倦んで死んでしまふのだ、
こんな暗室でも、大切に保つて置か
ねば
ならないだらうか？

ぐるりの壁が腐れて穴の開く日は
何時だらう！

此位のことを言ふのは何でもないやうだけれど、偖て實際は此れだけ澱まずに語り得るものは一寸少いのです（評）

○しばられた軀

石川霞子

いつのまに遠ざかつて行つたのだらう少女てふ垣根は、
あれあんなに小さくなつて今にも見えなくなりそうだ、何程瞳を見張つても〱、
私は無意識に垣根を追はふと走つた、
と突然横合から大勢に抱き止められた、
ハッと思ふと軀はもうしばられて居る、
何程もがいても〱自由がきかない、
そつと兩手を胸にあてゝ靜かにして居ると
かすかに〱すゝり泣の聲がする、
自由を奪はれた魂の哭きの聲ではあるまいか・・？
あゝ此まゝ〱朽ちて行く私をうらむ人がある咒ふ人があると耳元で何物かゞ囁いて居るけれどしばられた軀はどうする事も出來ない、あゝ咒われてもうらまれても
弱い女の悲しさに終にしばられた軀だ物・・・・。

烈しいやうでおとなしい（評）

○草履と下駄と

名古屋　岸次子

青ざめた鼻緒の草履と
巖重な山桐の下駄と
歩いてゐる——
ずう〱と一方は泣くやうて、
がた〱と一方は叱るやうて、
ふと草履が地べたにすゐついた、
『嫌だ』といつて亦地べたをこすつた、
枯れた草と
青い草と
いれまじつた野の道で、
けれどすぐ
『こらつ』と大きな反響をのこして
下駄が飛びあがつた、
草履は驚いて慄へながら歩き出したが——
あゝ泣いてる、泣いてる——
見なさい
冬と春のさかいの道を
容赦なく引づられて行く
その慘めなこと！——

歌はうと思ふところを何物にも捉えられずに、まつすぐに言つてあるから宜い（評）

○闇

向じま　鈴木春子

幽かなる水色の音の、
籠れるよ、闇の海ふかく。
暗き波、ただれたる香と、鈍濁める
群聲あげて
迫る――あゝ迫る――
ふと唇に何物の、
呼息こそ燻ゆれ、ひたひたと――
――いと暖かき――また赤き……
怖ぢ易き魂は顫ひぬ。
（わなゝきぬ、「眞白の命」）

――かすかに
赤き熱もつ、
輝きに、火酒
の燻りに、
……生心――
わが唇は醉
を欲りしぬ。

……
幽かにも樂のしらべは、
水色の細き尾ひきつ――
――魂は逐ふ――逐ふ――光のあと
を――

才氣が勝ちすぎた、併し恐れずに行け（評）



幼き日　水戸市　玉川すま子

○月

下谷區　宇津木子

白く沈んだ
靜やかな波
の上に
寂しさに疲
れた二月の
月が
うす青く照
つてゐる。
低い松のか
げに
防風草にま
じつてゐる
待宵草
薄い影を曳
く沙地を
歩んで行く
二人。

林を透して海が光つて居る
一しきり風が吹きすぎたあとに
樹と樹が歔欷て居る。
風は靜かに浪の穗を搖つて
わが生命の末を示して居る樣だ
今に此の世がたとへ消えてしまうと
も
この寂寥の活くる道はない。
たゞとり殘された私の心に
淋しい月が輝いて居る。

技巧が新しい（評）

○寂　默　　麻布　花子

寂默の夜のおもひ
灯火暗き一室の内
見れど——見れど
影さへあらぬ人のために
わが胸はしも囚はれて
ふし伏む、やるせなき夜
逐ひやれど
離れかねたる執着の
女心に胸ぞ凝る
花の香、衣ずれの音にも
心そゝらるゝ少女なりし
はや若き日は消えにけん
淋しき胸をくつがへすは
恐れ、驚き、嘆きのみ
寂默ぞ迫る夜の室に
憂愁の潮はみなぎりぬ

原作から見るとまるきり面變がして居るから作者は驚くでせう、併しあなたは悶々の情を抱いて居ながら、それを詩に現す時まで、もだ〳〵してゐると詩は作れません、も少しあたまをおちつけて、まつすぐにお作りなさい（評）

○まぼろし　　麻布　夕ほし

野には一面に紫の花が咲いてゐた。首だれて行く女の一歩に、一滴のしづくが、ボタリと落ちる。花瓣は、紫のしづくの結晶であつた。今まで何里歩いたのが、女の白い足袋は紫に、にじんで、矢絣の紫は一層濃かつた。

「あゝ自烈たい、何所にあるのだらう？

紫の果實つてのは……。

女は自暴に身悶えした。花瓣はハラ〳〵恐れるやうに散る、血走つた眼で女はあたりを見廻した。

行つても行つても野の果ては、灰色の空につゞいてゐる。

「たつた一つの果實を……。」

女は少しためらふ。

「そうしちや居られない！。」

と、女はまた、神經的に足を動かした。

突然行手が暗くなつた、魔物と驚い

たのは
見知らぬ他の女であつた。紫の果實
は一つである。
二人の女は無言て、前と後にすれち
がつた。

興はあるが情は足らぬ（評）

○力の拔けたひと時

下關市　山田くに子

草むれには鈍い日が這ひ
花は悲しく頽れた。
裸木には寂しい風がおとづれ
行く所もない冬の夢の啜り泣き……
……

あゝ冷たく醒めはてた味もない
わたしの官能よ――
その底を這ふ樣に
何者かが
こまかな歌をうたふ
そして
幼い心が疲れ切つて
柔かなものに抱かれようとする
あゝ青ざめた痛ましい歌のながれ
よ
次第にかげり行く日の光り
言はれなく物足らぬ心が悲しむ
あゝ何と云ふ力の拔けた
ひとときだろう……

女は此んなことを歌はない、男性の歌だ（評）

○沙漠の夜

金澤　むらさき女

音もなく地平の上に浮びくる
ほの白きうれへる月よ
晝間の強き日光に
燒たゞれし砂の上を
光りの波はふるへつゝ
くづるゝ岸に走り寄る。
丈低き揶子樹の影の
しどけなく亂るゝ姿
雜草は疲れはて
赤き熱の息を
冷たき砂の上に吐く
木の葉の吐息はげしう
沙漠の中に生物は
うごめきぬ
と、靜けさを破る猛獸の叫び、
……身慄ひの音は、
星ふれる天に消えゆく。

沙漠の夜と云ふやうな大膽な題材は好んで捉えない方が宜い、智識で描くと却つてをかしい、此作も其嫌ひはあるが、先づ面倒な詮索は止めて、單に是だけのものとして見ると、第一聯などは甚だ巧みだ（評）

○三人の女

越後　曉花

三人の女は別々の想を抱いて同じ道を歩いて居た、沈默つて、疑ひに輝いた眸を冷かな地に落して居る、ふと道端に慘酷たらしい死ざまの蛙の死體が一疋あつた、女は言ひ合したやうに顏を見合せた、一人が何かさゝやいた、三人は强いて同じ表情をしやうとしたが眸はべつくに輝いて居た、――女はとほり過ぎて終つた。

新詩句

○夕暮のいそがしい町を通りながらに女は髮をかきあぐる　　麻布　花子

餘り句が長い、もつと短く引しめて言はねばならぬ、只長いばかりでなく、散文的である詩句とは云ひにくひ、着眼は好い。

○私は知つた泣くよりも悲しい事が多いのを　　西多摩　葭子

此れも詩句とは云ひかねる、引しまつてあるか重みのあるべき筈の事を、かう輕卒に言つてしまうとそつけない。

○君に呼ばれたやうに見廻した唇が顫えた　　丹後　香蓮子

原作「四方を見廻した」とあつた、四方はよけいなことだ。

○椿の花に手がふれたらほろりと落ちた　　霞子

これでは餘り平凡だ

○澤山の冷笑が室の中に浮いてゐる　　福井　片山千里

原作「空中」とあつた、室の中の方がよい、併し此れで此詩句はだいぶ考へたものだ、併し此んな句は今の自然派の作物の中に礫のやうにころがつてゐるのだけれど、多くを見ない人がこれだけ言ひ得たのはまだしも取り得がある。

○枯れた芒の路が都に續いてゐる　　伊豆　幽喜

俳句の說明のやうだ

○草笛の音の溶け入るやうな小雨の日　　備中　馬越昌子

漠として所據がない、然う新しいこととてもない、つまり一句の態度が完くない。

○あの空へ星が一つ生れてきた　　川越　長澤せつ子

これも平凡には相違ないが、生れてきたと云ふ處に多少時間の觀念があつて、今まで思はなかつた多少の味ひもある。

○月の夜私は白い壁に凭つて泣いた　　横濱　新緑

月の夜と云ひ、白い壁と云ひ、語調をゆるめた處に一寸技巧が窺はれる。

○泣きはらし泣きはらした眼の痙攣　　下之關　芳子

官能を主とした流行の詩の一句には、いくらでもあるやうな句だ、之も中心がない、新しいところもない、新詩句は爾く斷片的になつて了つても困る、やはり一句は一句の中に何かしら中心もあり、形も整つてゐなければ意義の無い勞作に近い、俳句にはちやんとおちつきがある、形式も內容も全然變つて居る新詩句にせよ一句として獨立させやうとするには、何うしても獨立した態度がなくつてはならぬ、槪して集つて來る新詩句の內では斷片的のものが多い、併し此の斷片的のもの丶方にまだしも新しい藝術の匂ひはある。

○あゝ月が出た、電線の雪が落ちた　　群馬　志美津

月が出たのと、雪が落ちたのとは、餘りに隔絕してゐて其印象がはつきりと映らない、月が出たと云はずに月をあらはし、而して電線の雪が落ちたとすれば何うか、短い句の內に二つの動いたものがあつて、それが別々に感じられるやうでは、上手とは云へない、最も電線の雪の落ちたのを言つた處は新らしくて好い。

○いやな夢、毒虫に胸の血を吸はれた　　栃木　しのぶ子

摸倣にしても、もう少し考へやうがありさうなものだ。

○何かしら神秘を探らうと森に入つた　　遠江　鈴木若草

原作「社の森！神秘の幕の中を行く心地」は少しまづい、社だの、森だのはよけいなことだ。

○通る人が皆鈍い顏をしてゐる町だ　　小樽　清田芳枝

原作「靑い顏」とあつた、「町だ」と云ふ語はなかつた、本月の新詩句中では先づ最も好い方だ。

○眠るやうな海、起きよ覺めよ　　京都　町田てる

原作「覺めよと颶風」とあつた、颶風は何と云ふ事か一向分らぬ。

○くわつと赤い火にかざされた白い手よ　　渡島　千葉幸子

印象的で好い。

○ゆく春の夢に女が泣いてゐる　　羽後　三浦ふみ

調子は好い。

○夕の空が苦悶の後のやうに疲れてゐる　　備中　篠原しげ子

詩の一句には相違ないが、既にある詩の一句としか思へない。

○水の上に櫻の花が積つた　　兵庫　紅雀女

積つたと云ふだけのことだ。

○春の日、白い石から蝶が舞い上つた　　茨城　黑澤とよ子

感じは快い。

○若草の上を靜に羊が歩いてゐる　　福島　春子

これだけでは詩句になりかねる。



○電車まで（天賞）

本郷　筆子

ぽか〳〵する日だ、縮まつたり長くなつたりする、自分の影法師に、興をよせて歩いてる内、ふと何となく飽足らぬ感じを覺えた、一高の寮の棟でカア〳〵と鳴いてる烏も、お寺に隣つたお團子やのお神さんが、頻りに餡をつけて居るのも、無論無意味だ、道端の櫻もそろ〳〵蕾を持つてる樣だ、咲いたら美しいだろらうと思つて見たが、それつきり別に感興も起らなかつた、詰らないなあと茫然、電柱に掛つた「鳥料理小花」といふ廣告燈を見てゐる内、猶更吾が日常の行爲さへ、さつぱり意味をなして居ないのを知つた、私は果して無意味なのか平凡なのか、何か……何かしら其意味といふ事について、發見せねばならぬと、急にあせり始めた。高崎やの前に來たら、チリン〳〵萬世橋行のガタ馬車が危なく私の前を突切つた、胸がドツキリとしたはづみに、意味の發見が何處かへ引込んで了つた、好いお天氣だ、一年中、灰色の雲に押されて居るやうな私でも、流石に氣が引立つて來る、春はこれだから好い。もし世の中が、蒼い空、綠の地面、而してそれを調和すべき花の色彩にのみ、造られてあつたなら、どんなに新らしい、輝きある生を得るであろう。あゝ春が好い、春がなつかしい、雪さんお文さん、誰でもいゝ、心ゆくばかり共にこの心地を語りあひたい。

森川町に來たら、市區改正で取退けられた、片側に一本古い柳の糸だれて昔を忍ぶ風情である。赤門前のバラタイスへ角帽が二人景氣よく這入つた。三滿津商店の前では相も變らず「エー實際の滑稽達摩……」とゴ

ム風船をふくらましては賣つて居る、兼康から夢二式の奥様が出て來た、プンと香水の匂ひが染みる様に鼻をつく、私は慌てゝ電車に乘つた、又物足らなくなつた。

何かしら心をそゝのかすやうな作です。(評)

○雪霽れの記 (地賞)

羽前　あらゝぎ

軒端の竿にかけた洗濯物の襦袢の袖が、ほの赤く映えた窓に、じた、じた、じた、と屋根の雪から、とけて落ちる雫の影が絶間なく映つてゐる。

外は冬にしても、ほか／＼する位暖かで、この頃の霽れた日には空の美しさが泌々感じられる。綿をほかしたやうな薄い雲が消えてゆく中空にだけ深い綠をよせて萌黄色に淺い、ぐるりの天末には何かの淡い哀しみが流れてゐるやうに思はれる。この空と、日に輝く白い雪とちら／＼まぶしくて眼が疲れる。

庭の老松の弓なりに曲つた太い幹の片側が黒く濡れて下にふつくらと、積つた雪は、枝から散る雫に、虫にでも蝕まれたやうになつてゐる。

家に入つてゆくと、柱のまはりをぐる／＼廻つた後のやうに、人の顔も淡暗くちらついて、爐に燃えてゐる火まで、何だか地の下にゐるやうな氣がした。

白い山脈

暮に近づいた色が室の内にも兆しきて表の方には豆腐屋の鈴の音がチリン／＼と鳴りひびく頃私は屋根の上にのぼつてみた、積つた雪を深靴に踏みしめて、勾配に立つて眺めると、下てはわづかに雑木林を透して見えるばかりな東に連る山々や、吾妻一帶の群峯やみな雪を戴いて四方をとりまいてゐる。麓の杜は拔け出でたやうになつて、向き對ふた。老松のこんもりとした中に、雪の白い社の屋根が見えるのは神さびた風である。

直きに日はつかうとしてゐる西に迫つた山の線とつたやうに松が黒くたちならんだ頂き、松がとび／＼に恰好を見せてゐる、白い中腹のあたり……を眺めると、なにとはなしに、なつかしいやうな、寂しさが、せまつて、胸が顫へるやうに思ふ。

樹は雪の上に淡蒼く影を曳いてゐる。あの日が落ちてしまつたら、透き通りさうに、薄い金色に映りはへてゐる東の山脈も紫がかつた吾妻も、白い冷めたい色となつてしまふのである。

凡ての文藝が人間本位となつた時、此忠實なる自然の感化を享受し得らるる人は又一個の幸福です。(評)

○巷の人（入賞）

はぎの花

「家に居て淋しき人はやちまたの人の中ゆき涙わすれぬ」昨日結んだ許りなのをばら〱にといて赤いてから、大きな形などを散らばしたまゝ思ひきり大きな束髪に桃色の五インチをさした。八丈に紫矢絣の袷布を重ねて：：こゝ迄追想した頃は、もうどこをどうまはつたか急な坂をあえぎ〱のぼつて歸途についてた。巷の人は皆約束した様に左々と首をまげてゆく、ふと私も誘はれて。茶褐色の所々黒いシミのついた獄衣の四人。七八人。血の枯れた様な監守人の目をちら〱と窺ひ乍ら、日光に浴しない死人の肌——。云ひつくす事の出來ぬ光りをもつた瞳——。彼等は今家屋の修繕をさせられてるのだ。中に殆ど惡事など知らぬ様な平凡な顔の者も居る。ふと目と目とあつた。彼は憎さげに私の頭から足の先迄ぢろりと一ぺつして背いた。巷の人はどや〱と四人をみた目をかんじては必ず私の姿をふりかへつてそして私をおいてし〱潮の様に行て了ふ。何とみる？死人の肌と櫻色の肌のいまはしい茶褐



なやみ　麻布　津川ふみ子

色の獄衣の色と、ゆかりの紫のなつかしき色…。生の香のみなぎつた若い少女と半ば死の扉に足ぶみしてる彼等…。驚いたか…。されど目をみよ、目をみよ、彼の異樣の輝きと、どこか似た光が此すんだ黑目の中の底の底に潜んで居るのをみえないか。私はお前達衆人の想像してる樣な處女ぢやないのだ。矢張彼等と同じ囚人だ。其目にも唇にも腕にも丁度彼等の傍に立てる冷酷な監督人が——更に强制的な監督人がついて居て一擧一動に黑い扉を閉さんとしてる。それで今一寸其監督人の目をぬすんでお前達の目と自分の心を欺く爲にこうしたなりで置てきたのだ。彼等の胸と私の此胸の底には細い〳〵ある響がつたつてるのにお前達は兩方に幾萬里の垣を作つて彼等を見、私を見、眉をひそめ、そして羨望の瞳を輝かしてゆく。可笑しい薄つぺらな人生を觀てゆく巷の人よ、私に笑ふ事を許せ…。

激越（評）

【秀　逸】

○巷の花

府下　鈴木春子

派出やかな浴衣に粋な洗髮さらりと、絹うちわ翳して欄によつた美しい人、朝顔は、何となく古町らしい面影をふくんだ淡泊な花である。

何處やらに秋の香を漂はせた八月末の光線は、園內に一ぱいに漲つて、種々の色彩をした薄い花の一つ一つを、透通るやうに照らしてゐる。花を綴つた靑葉は、心地よげに明るい光を飽和して、奔放な生氣を吐いてゐる。最前迄は薄すらと其處此處の葉裏に殘つてゐた夜の色は、すつかり黑土の內に吸込まれて了つたかの樣に、淡い白い光澤を帶びた都の息は、濁つた塵埃の淀んでゐる樣な大氣の內に、沈靜な純潔な氣分を滿たしてゐる。

園の色で其處をかぎつた二階家の裏手は、薄暗く日の陰になつて、据丈白く露の光る靑い蔦が垣をなしてゐる。ゆるく傾斜になつた黑い瓦屋根の上に、灰色の埃が溜つて、壓迫された生の吐息の籠つてるやうな、靑白い無名草やら、無意味を標示してるやうな黃いろい小さな花などが、汚點のやうに生へてゐる。ガチヤリとバケツの音がした。拭掃除でもしてゐるらしい。

ふと、斷々の會話が耳に入る。パナマ、丸髷、水色の帶などが、茶屋の氷の旗と共に浮出して瞳に入つた。微かな香水の香と、汗の臭氣とが空氣の內に流れてゐる。

入口の富士山には、一ぱいに日光が射して、白、赤、

藍、小豆色などの露が、きら／＼と光つて、幼な子の着物のやうな、一種の美觀を呈してゐる。

人々の波は、凡て、好奇と華麗とに醉つてゐるやうに見えた。少しも、不快らしい意味を湛えた瞳は、み出すことを得なかつた。

傍の簪屋の前に、藝妓らしい女が、赤つぽい襟の飛出した少女と、キャッ／＼と品格のない笑ひ聲を響かせてゐる。粋な根下りの銀杏返しに結つた、高慢しやくれた十五六が、まぶしさうな眼をして、隙間なく此等の樣を觀察してゐる。

簪屋の向ひは五郎十郎の生人形、その後は盆栽陳列所の垣根。

日の光は、段々強度を増し、物象皆の影は、益々濃厚になりつゝゆく。

ごう……　ごう……と、あの大いなる動物が、地の底で呻吟してゐるかのやうな電車の響が微かに……

新しい作品に眼を通してゐるせいと、生れつき感受力の強いせいとて、此れだけのものが出來るのでせう、不思議はないけれど、世に才人の絶えないのは欣ばしい。（評）

○草の葉

敗れた少女

麻布　花子

何者かに暗示された樣に驚て立ち止まつた少女はまぶしさうに、影を影をと、追ふても、往來はすきま無く白晝の鋭い光線に、逃れ樣はなかつた、ふとさきの男、ふりかへる二度！三度！、をびえた樣に、心は逃げた、たまらなさうに歩み出した、そうしていそいて、細いぬけられそうも無い小路に入つた。あゝ敗れた。強者の瞳に、瞳を恐れた、——暗き道なき小道を——小さき心よ、永久に安かれと、知らぬ少女の上なれども同性と思ふと云ひ知らぬ、淋しさと哀れが胸に迫る。

雪のあした

昨日降て降てふりぬいた雪は僅に名殘の影を殘す樣に醜き態を道端にさらされてゐる、緣日商人は冷たきをか、汚なきを嫌ふてか、鼠色の雪を板切れでせつせつとかき上てる。午後の四時半と云ふのに太陽は柔い溫い光りを、雪上りの青々とした空から殘るくまなく照してゐる——。冷たき風に、溫い日光、日向にゐれば申分なき春日和——。

夕のころ

火鉢に寄てうつとりと往來を、空を眺めると憂きも嬉びも悲しさも消えたかの樣に、うつろの胸となるのが一番嬉しい。どんよりと曇た空色、引込めらるゝ樣な空の色、現に、平かに、静に、この世から遠ざかる

樣な去た樣な、――誰かの聲もきこえる、思ひ出せない、呼てる樣でもある、――それは〳〵遠い〳〵處から、海をへだてゝ山をこえて、先きの先きから、濕ッぽい樣な淡いよふな微に微かに、さゝやきの樣に響きます、――思ひ出せ無のか矢張り夕の聲なんでせう。

「敗れた少女」は散文詩と謂つても宜しい、「夕の聲」もです、文章には少しばかり癖があります、例へば言葉を上下に顚倒させるやうな時です、必ずしも惡いと云ふのではありませんが、無意味に文格を破るのは考へものです、些と氣をつければ直ります。(評)

○思出の森

霞子

「おゝ思出多き森よ」目前に聳え立つ黑い森を見上げて私は叫んだ、彼の遠く聞える怪げな啼聲は何故か私の過去をよび起そうとするかの樣だ、希望ある華やかな胸を抱いて幾度か此森を逍遙したのは去年の夏、月冴えた秋の一夜此森に影なき君を慕ふて薄き衣の袖をぬらした泪はあゝ如何に華やかな泪であつたらう…?辿てはつきぬ思出の數々にひしとばかり胸を抱いた、足にまつわる枯草のひくき呻き、嘲笑した樣な夕陽を浴びて頰に流るゝ泪をぬぐわんともせず悄然と佇んでる私に、森は靜かに呷いた「汝よ汚がれし其泪をぬぐふて再び美しき昔の泪を流せよ」とおゝ我が泪のさても汚れし少女てふ誇をもつた去年の泪のあゝ如何に美しかつたらう、彼の燃ゆる樣な青春の血潮は何處に去つて終つたのかおゝ何者にか奪われて何處を迷つて居るのだらうか、今此處に夕陽を浴びて佇ずんだ私の胸には、愛もなし戀もなし血潮は冷えて氷と化して居る、落つる泪は華かな二人の夢を破た者を咒はんとする汚がれた泪だ、胸を覆わんとする黑雲を焦りに焦つて幾度か拂わんとしたけれど、終に力はたらなかつた、今私の胸は一すじの明もなく黑雲にとざされて居る外何物もない空洞の胸だ、否洞ではない希望も愛も戀も無慘にふみにぢられて其殘骸はうづ高く積れてあるのだ、あゝ此石の樣な冷たい少女をしいて求め樣とするなら、私はもう何もいなまない、いさぎよく此殘骸を投出して彼にあたへやう、一度凍つた血潮は再び溫る日は來ないのだ、一度胸をとざした黑雲は再び拂ふ事は出來ないのだ、それでも〳〵滿足するならばとしいて淋しい笑を片頰にもらして森を仰いだ「おゝ森よとがめざれ我が此泪を汝の姿も去年の夏とは變りしものを」森は再び答へなかつた、日は何時しか沈んで灰色のもやは次第〳〵に四方に迫り我が思出の森は靜かに〳〵眠らんとして居る。

純抒情式のところは當年の菊池りう子を忍ばせる。(評)

○蛙の聲

德島縣　吉田紫花

村の名さへも芝生村といふ様な草深い里に生れて育つた妾、二十二年の此の胸は蛙や虫の啼く音で淋しい凋落の味に煮〆められてゐるのである、晩秋の夕に聞く蟋蟀の音にも胸は刺されるけれど、秋は周圍がすべて寂しいだけにどこにか慰藉が含まれて居るが、山紫に野は綠、花に胡蝶の舞ひ狂ふ陽春の夕、若草匂ふ花野の中から聞えて來る、蛙の聲には、もう〳〵廣い宇宙に何一つも頼みにするものがない樣な寂莫の情が襲つて來るのである、然し憂ある者は却つて憂を好むとか寂しいけれど妾は蛙の聲が言知らず懷かしくて、じつと聞いてゐると自分も蛙と一所になつて思ふ樣啼いて見たい程に懷かしい、けれど氣候や水の調子によつて多少啼き方が違ふそうで讃岐のは阿波のより激烈だと死んだ兄がよく云つてゐたが冴え渡つた月の光でさへ見る人の心々で感じが違う樣に、聞き樣にもよるのであろう、妾はいつ聞いても、低い調子の寂れた中に懷しい〳〵慕ふ樣な惜しむ樣な訴る樣に、花が散る!!花が散る!!、と啼いてゐる樣に聞えるのである、隣のお爺さんが云ふのでは、最初に一疋の蛙が、ちよつと來い〳〵と啼くと、他のがいつ頃〳〵つて尋ねる、すると皆が一所になつて、中頃々々々つて啼くのだなんて皆を笑わした、聞き樣でその通りにも聞えるけれど、妾は矢張り花が散る花が散るがいゝ、アレ今夜も無數の蛙が聲を揃えて啼いてゐる、外は靜かな櫻月夜、綿帽子を被せた樣に眞盛りの牡丹櫻も造花の樣に花瓣一つも散らぬ、此の間にとても云つた樣に、蛙は益々啼きたてる、オオ、花が散る!!、花が散る!!、明日にも情ない嵐が吹いたら、どうても花は散つて仕舞うのだ、嬉しい今宵の中に啼けるだけ啼くがいゝ桃も櫻も野の花も皆靜かに聞いて心の中で喜んでゐるのだ、あゝ、斯うして啼けども〳〵花は散つて、散れども〳〵蛙は矢張り啼くのであろう!!。

材を選むことが他より考へて選んでゐます、ゆきあたりばつたり筆を取つて書くと云ふのではない、それだけ此作者には藝術的良心があるから、何の作を見てもそれ〳〵價値があるのです(評)

○誇と不安

誇

根室　ゆみ

誰でもお嫁にゆけばあんなにお腹が大きくなるものでせうかとて笑はれたのはつい去年の春、それがまた何も知らぬうちに、否應なしに人の妻となつたのはその時鳥なきそむる頃でした、人の妻となつてもなほ子供氣の失せぬ自分は、年はとつてもあのねんねんさんにまたまた子供はできますまいといはれた、その私が、あゝ思ふとむねがおどる、やがては子の母となる人の親となる、おそらくこの夏には、あゝどうしてこれが嬉しくない事があらう、何してよろこばずに居られや

う。

處女時代の誇！その樣な事をおもふ間もなく子供から一足とびに大人になつた自分は、今人の親となるに及んでいたく女としての一種の誇をおぼえる、子をなす、あゝこれ女の一種の誇ではあるまいか？、また人の目にもつかぬ人、われから吹ちようしたいやうな、子をなす、自分はたしかに一人前の女になり得た！

不安

二月にまれな好天氣、硝子越しにさす太陽がまぶしい位、湯上りのつかれた身を炬燵にもたせて、お冷をぐいと一口のどに通すとむねの動悸が自然に靜まる、と又してもちく／＼と右の足が痛み出す、お湯に入つても左の方はすぐ暖まるけど右の方は骨の心から氷水でもしみ出す樣な、だからその周圍はまるで水の樣、それでもみなとして少しは快くなつて上つてくれば又してもちく／＼と、あゝねても起きてもゐられない夜となくひるとなく痛み通してはや二月はすぎた、暖かくなればと人は皆いふ然しまた二月も三月も痛み通されてどうし樣、もしこのまゝびつこにでもなるのではあるまいか、あゝびつこ！人並に生をうけて今更の不具、あゝいや自分の不具者となるはまだしもながら萬一お腹の子が、あゝ初めてこの世の光に接するその時、この私のこの病をうけてもし不具だつたら、あゝ生涯不具者として：：：：：不具者の一生…それはまあどんなにみじめなものであろう、その樣な事なら一そ／＼この世に生をうけない方がよくはあるまいか、その子の爲に現に若手の作家某氏の妹さんもそれではないか、あゝ痛い痛い、いつそこの足一つ切つてしまつたら！。

誇の方は若き夫人の僞らぬ聲だらうと思ひます、不安の方は少し誇張がわざとらしいやうにも思はれます。（評）

○嵐の朝

XYZ

きれぎれに吹く嵐の朝である。

海に面した二階の欄干に暖かい日光をうけた。こうした晴れた嵐の日は、いつも波は靜かである。

靜かな一すぢ町の、互に秘密を抱いてゐる樣な家と家とは、沈默の底におちいつてゐる。

細い路次の通つて居る部分だけ日光が流れて、それも折々、ぼうとくらくなる。

けれど朝の太陽はどこか強い力が充實してゐる。

海に突出た山。松のみどりは長い過去の、古い彩もないじみな夢にあきて居る樣！處々に油菜であらう、みづ／＼しい靑の一かたまりは、おゝ自然のもたらしたる春の随一の若者よ！と私は低く叫んだ。

それらの種々を有してゐる山は、こうやつて見ると

丁度異な色彩にとんだ、「かび」を取集めて、大土塊にとりつけた様でてもある。いつやらの山火事で尾上に疎に殘つた松だけは、木としれる。

山のてさきを一心に見てゐると、のこし忘れた魂の樣に山向から白雲が、のりだしてきた、あゝ―あの雲！何處へ行つて止まる可き處があるのでせう？否えいゝえあれは、あゝやつて絶えず私の魂の樣にうごいてるもの！一心にみつめてゐると、夢にあこがれて居る子の驚きの一瞬の叫の樣に波が時々意味深い音をたてる。



小さき秘密　新潟　村田きん子

ここから只一つの藁屋根で海が二つに分たれてある如くみえる。一方はどこまでも海らしく青い。

青い夢にふるえてゐる。

西に近い方はキラ〳〵と朝の日光にかゞやいて、すべて銀色である。「にかわ」を日に照してみる樣な眼を細くしてみると、銀のつららを以て編上げた、ものゝ樣。海よりもむしろ湖と云つた方が近い樣なおだやかさである。

ゴーと一つ嵐がきた。のがれ出る樣に、細々と、屋根の隙まより出て居た煙が、めざましくちる。細い路次で出合がしらになつた塵が渦をまく。

軒々にいぎたなく、垂下つてゐたくされなわが、苦悶する。人は通らぬ。日曜の街路には小供が折々まよひ出るばかりである。けれどいつもの樣な唱歌もうたはぬ。すべてが秘密である。

風は去つた。突然私の頭には、下界の喪である！といふ意識がひらめいた。（三月六日）

あなたの作はいつも詩人らしい香に充たされてゐます、隨分海のことを書きましたれ、集めて「海の卷」が出來るでせう。（評）

○椽の柱によつて

牛込　平塚白百

あゝもう日がくれるのだ。こう思ふと何となくたよりないやうな心地になつて、ヂーと丸髷の束髮を椽の柱につけたまんま、もう泣いて泣いてなきはらした瞳のやうな星を見ながら何處ともなく眼をやつた。もし誰れか見たなら、血潮もゆる青春の少女ですもの、キット心の底にかくれた物をこうてあろうなどゝ想像されるでしやう。けれど私のひとみは決してあこがれを語つては居りますまい。何と云ふ事はなしに淋しいあるものを語つてゐるのでせう。私も充分考へて見ました。けれどどうしても自分の思ひが解らないのです。父も母も兄も妹もあります。何が淋しいのでせう。ほしいものは皆求められます、けれど物足りない何ものかゞ私の心をしじう針の先でつくやうにをびやかしてゐます。何でしやう。

こうして星をヂーを見てゐると、あの星は隣の星と何かさゝやき合つてゐます。何をでしやう。私はそれがきゝたいやうな、もし聞く事が出來たら或は私のもの足りなく思ふあるものが解るかもしれません。誰れかあれを聞いてくれる人はないでしやうか。

私はこうして毎日〳〵椽に立つて、あのなぞても云つてゐるやうな星を見つめてゐます。何日かなぞがとける時があるのでしやうか。

もうすつかり闇くなつてしまひました。梅の香がほんのりと、私の心をとかすやうに匂つて來ます。

さても物足らぬ女の多きことよ。（評）

○海の朝夕

國府津　嫩ぐさ

海がうるんだやうな淺黃色をして居る。大島や箱根の峯は、まだ眠さうに霞んで居る。黑い松の葉が、かすかに震へて居る。日がさした、まだ赤い光りが弱ひ。すぐ帶雲の中には入てしまつた。沖の水平線だけ少し明るい。妨げる雲を押しのけて、光りも強く、金色の日が現はれると山も晴れて、海には金色の波がたゞよふ、目の前の、重さうな夏蜜柑も、露をふくんだ、牡丹の若芽も樂しさうに、醒めてくる。あの黑い物はな

んだらう、あら小鳥の群だ、河原ひわだつた、一番高い松へ來た、まあ澤山、鈴なりのやうだ、さも嬉しさうにさわいて居る。まあなんと云ふかぐわしい空氣だらう。

夕

桂の木の背後の西の御空は、パッとした橙色に染められた。黒ずんだ藍の海にも空の色が流れて居る。東の遠山は紫色、箱根の山はくつきり黒く、其頂きに金色の雲がとゞまつて居る。松も蜜柑も、ほころび初めた櫻の枝も、そよりともしない。一日の終の最も聖なる荘嚴を守て居るのであらう。

此の筆つきは一寸注意を惹いた。(評)

○馬車

信濃　優梨子

豊野行の馬車は今、春のさゝやきも聞えない凍へた、千曲川の船場を渡つて、又雪の道を走つて居る。窶れた叔母の寂しさうな顔に見送られて、平穏の或る温泉を出てから、もう三時間になる。車の中の人は、餘り話さない。皆ショールや外套の襟に顔を埋めて居る。向ふ側の御者台の傍に腰掛けて居る、油氣の無い髪をぐる〱と無雑作に卷いた、目のきつい三十許りの女の人が、先刻から私と母親の處許り見て居る。——先刻、中野の茶屋で休んだ時、新しく乗つた人だ——。心の底まで見拔かうとする樣な、鋭い眼ざしだ。私は不快で堪らない。もし一寸二人の視線が合つても、決して向ふて避け樣としない。私がすぐ俯向いて終ふのだ。

私の前に居る、優しい顔の齒の無い爺さんは、連れらしい黒い丈夫さうな顔の、青い綿帽子を頸へ卷きつけた男と、蠶の話を始めた。

私はそれを聞くとも無く、二人の肩の間から、息で白く曇つたガラス窓を通して、雪の野を眺めた。夜間瀬橋の邊りより、雪は少ない樣だ。それでも一尺二三寸は積つて居る。

かすれた樣な勢のない御者のラッパの音が、たま〱其雪の上を、寂しく響き渡る。道が、凍つて居るので、そう車が、ガタピシしない。

「もう三月ですのに寒い事ですなア」と爺さんが、右側の外套の襟を深く立てた、官吏風の人に話掛けた。沈默に倦いて居た外套の人は、快くそれに答へた。そして猶話を續けた。左側の綿帽子を卷きつけた連れの人は、默つて終つた。

「寒かないかえ……」と母樣は、車の音で聞えない程小さい聲で云はれた。「いゝえ」と云つた私の聲も小さかつた。御者台の傍に居る女の、強い視線は矢張此方へ

そゝがれ居てる。
雪の中に汽車のレールが見えた。私はほつと安心した。もうすぐ豊野だ——。皆の顔も何處となく晴々して來た。

狭い豊野の町へ這入ると、御者は頻りにラッパを吹き出した。車は勢よく走つて、停車場前の或る茶屋に止つた。皆はほつと息をついた。

出口から順に下りると、「被入い」と女中が黄色い聲で迎へた。皆默つて這入る。私達は一番奥の座敷へ通つた。「關山邊りの大吹雪で、汽車が一時間許り遲れますそうですから、何ぞ御緩り遊ばして」と先刻の女中が茶を入れながら斯う云つた。私はがつかりした。それでも、母樣と二人きりで樂に休めるのだと思つて安心した。目のきつい女はどうしたか知らない。

あなたは小説が書けるやうになるでせう、なるべく然うした方にお進みなさい、散文を書く時も、其心持て書けば宜いと思ひます（評）

○雪の夜に

麻布　江森美子

ちゝ色に、うす墨をぼかした樣な雲が空一面に覆うて、地には雪が四五寸ほど積つたまゝ降りやんだ。家も地も草も木も總て一色に包んだ淸らかな銀の世界を、月が美しい光りにてらして居る。私は暫く、我を忘れて其の優大絶美なる自然の眺めに、何んと、賞讃の言葉も知らなかつた。空は金色に地は銀色に、まばゆき、黄金白銀のてり合せば、何といふいゝ景色だろうと、私は何時か、膝頭までもある父樣の長靴をはいて、ほしいまゝに其の淸らかな氣にふれながら庭の内をあるいて居た。母樣が、秘藏に遊ばす甲州の深山より産した、眞柏に雪がつもつて、さゝへかねてる、そつと、倚つて、はらつて、やつたら、嬉しさうにひよいとあたまを上げた、緑りは深い。桃の枝をふと見上げた、八重だもの、つぼみはまだ幹の奥にでもひそんで居るよう、「雪よ、雪よ、此の桃の咲き初める頃にも、又、降つとくれ」、と、私は思はず言つた、去年、やよひの末頃でもあつたらうか。其のほころび初めの眞紅の花が、白雪にうつすりと化粧した姿は、實に、美くしかつた、此桃の花は酒屋の小ぞうさんも、油屋の小ぞうさんも、きれいだと言つて褒める、隣りのお叔母樣などは、わざ〳〵お出かけになつてさんざお賞めになつたあげく一と枝をと望まれた、實さい目ざむる樣なあざやかな、色を持つて居る、去年の秋、うるさいと言ふので、植木屋に、いじめさせたから今年は花が小くなかあないか、と、今になつて氣になる。冷めたい風は靜かに、時々思ひ出した樣に、梢の雪をはらつて行く、耳も鼻も冷めたくつて自分の、もので

ない様、月はいよ〳〵さえて、雪の色は益々美しい。

美文作法や、作文寶典的のものを參考として作つた文章でないと云ふことは分る、然う云ふものを見たい頃の作には相違ないが、何處までも作物の上には自分を發揮して、他の眞似をしないやうに勉强されたら宜いやうに思ひます、と云ふのも其發揮すべき作者の個性に一の望を囑してゐるからです。（評）

○此頃の心

近江　磨志緒

緋や紅や紫の色々を室一面にとりちらして、おい〳〵に膝にのせ一針〳〵樂と幸福をつゞる糸とによつて、次々に私の身を被ふ衣を作つて居ります。

二十年間愛し育てゝ下すつた父母樣や見なれた室も、愛犬ペスものこして、やがて此家を出ねばなりません、是迄は外に出てゐても歸ればお歸りなさいましと言はれた私、之からはお出なさいましと他人樣の樣に言はれて、私も只今歸りましたではない、お母樣今日はと御挨拶もせねばなりますまい、お父樣や母樣はどんな御心で被居るでせう、あゝ寂しい悲しい思が致します。

位置や名譽や財產に目をくれるなとは常々父上のお誡め、お前はほんたうに仕合な、見ず知らずの人ではなし夏冬のお休みには屹度お目に掛つて居る方、お互に氣も心も分つてゐるから、とは母樣のお言葉で御ざいます。



美佐ちやん　靜岡　野の百合

戀しい父母、なつかしい我家を捨てゝ行くので御ざいますもの、之だけの愛を一人の君から受けずに何としませう、氣心知らぬ人を夫と呼んで互に其人を解すまでの苦心、私はそれを思ふと何んなに幸福かと今更に其人の性行を思ひ浮べて微笑て居ります。

學校に居ります頃、先生がよく、妻となれば直ちに母となるもの、母となるは安く母たるは難しと仰いました、私も大分縣の原田澪子孃が仰つた樣に、お腹の中の兒に窮屈だらうが今暫く辛棒してお出よと言ふ樣になるのでせうか、實際は母と呼ばれるのがつらう御ざいます。

こまかくすれば人から惡しく言はれ、人に交際家の何のと譽められやうとすれば經濟がもてぬ、よく世間で世帶持といふが持てぬ物見へぬ物を持つのだからむづかしい、と時々仰つたお父樣のお話を思ひ出しては、私が一家の主婦になつて親族との交際、近隣との交りを立派にして、そして不經濟な事をせぬ樣にして行けるかどうかと不安でなりませねど、どこか心の底で立派にやつて見せると誇の聲も聞えます。

一家を持てば萬事忙がしくなつて、なか／＼新聞見る間も盜む樣にせねば、とは母樣のお口癖せ、では私も毎月かゝさず出した女子文壇の原稿も作る事が出來ないだらうかと思へば殘念で御ざいますけれど、何此筆ばかりは決して捨てずに置かうと思つて居ります。

誠實なる文章、幸福なる人、わけなく反抗してゐる人より何んなにしほらしいでせう。(評)

○思ひ出

大分　原田澪子

私は不圖思ひ出して、袵にはまち針をしたまゝ、身頃の上前を擴げて見た。白地に派手な呉竹を模樣の浴衣は、一度水を通したけれど、猶且薄く泥水の浸んだあとが見える。私は微笑んで其の夜の事を心に繰り返して見た。

　夏の一日を遊び疲れて、燈火の無い瀨戸坂の石ころ道を通る時、十日余りの月は影暗く、歩む足許さへ心もとなく思はれた。「危いですよ、こゝにおつかまりなさい」と云はれてメリンスの兵兒帶に縋つて居た手は、無意識の裡に彼の人の手とくみ合つて、私がハッと思つた時は固く握りしめられて居た。

　未だ十五の私には、熱心に語りきかされる言葉の意味や、彼の人の心がよく解せなかつた。只何となく心が浮々して樂しかつたので、「えゝ」「さう」と相づちをうつて、歸途についてる事も忘れて話した。

　ピチャリと音がしたので、急に飛び離れると、彼の人は「いえ、何少してす眞暗だものだから」と云つて「貴女にかゝりやしませんでしたか」とまた寄り添つて來た。足袋のない私の右の足には、心地の惡い迄に溜り水が飛んで、膝から脛へかけて着物の薄い裾は歩む度にヒヤ／＼した。けれども「いえ、私には少しも」と言つた。

　やがて明るい町に出ると、彼の人は手を離して一足先に歩き出した。別れぎわに「明日またいらつしやいよ、待つてるから」と云つた。そしてから、三日目に送つた手紙に「六尺の大軀は照さんの心一つで如何とも動きます」と云ふ樣な事が書いてあつた。

　それからもう三年たつた。私は人妻となり、彼の人も新家庭を形つた。此の頃の噂も聞かぬ。

大抵は斯う云ふことでおしまいです。(評)

○大吹雪の日

直江津　磯巾着

昨夜からの吹雪で今朝は起きるに辛かつた痛い樣な寒さだもの外の戶を開けたら大變家の前へ皆吹き付けて山をなして居る、向ひの家はひくいから屋根丈見える許り、一回りして往來迄道を付け樣とダルマ被りに手袋二重にして、深靴はいて大支度、箒で戶の雪を拂つてコイスキ（都ては何と申しますか雪をすくう木で造つたもの）で軒下の雪を殘らず出して、漸やく道にかゝる、往來迄つてば大變八間も引込んで居るから中々骨折りだ、一すくひグッと雪を傍へ投げるトタン、ピユーと吹き來る風に雪は四方へ散らばる、オ、冷めた、襟の中迄這入つちまう、是じややり切れんから、カンジキ掛けて踏む事にした、雪はフハリして居るから深靴が半分もうまる、向ひの方でも「馬鹿な荒れにして仕舞つてなア」「へエどうも偉い雪ですねえなんて道割けして居る、三分の一も來た頃ゴーッとすさび來る濱風に忽ち天地は白い渦の中に漂ふた、私は渦の中心に立ちて危うコイスキを杖に踏み止つた、暫くは目も口も開けられぬ有樣、やがてうねり〳〵した荒風は何處へか流れた、雪は綿を千切る如く落ちて來る――此間にと踏み出す調子に右のカンジキで左のを踏むで見事前に倒れた、猥狽して起き上ると、マア兩手と顏のあとが雪の上にカッキリ分つて居る、丸でお多福のめんの樣…………寒むくつて辛かつたけれどお可笑くつて苦笑ひもしたくなる、勇氣を振るつて踏み終つたのは一時後だつた、家の六尺の桓が隱れて居るのに道の眞中は一尺五寸位しかない、「御苦勞〳〵サアおあたり」母樣に云はれて家へ這入つたけれど、眞くらで何も見えない、爐の火と電燈許りが妙に私の目を射て居た。

實景が描いてあるからこんなに面白いのでせう。（評）

○盲目の女

伊豫　よしゑ

「巡査にしかられたんだ！」机の前に座つて居た健がこう云ふのと一所に障子を荒々しく開けて、兎のやうに表の間の窓へとんで行つた。

今まで外から聞えていた怪しい歌がはたと止んで、低い聲で何かブツ〳〵しきりに囁いて居る、自分も「アーン、これ貴樣は…………」だの云ふ巡査の顏と、道のぐるりの有樣とを想像して居間からとんで出て窓を開けた。見ると巡査の影も居ない、歌の主らしい貧しい女が此方にションボン立つて、向ふ側に田舍まる出しの娘が五六人一かたまりになつて居る、垢拔けのしない

新蝶々に髮を結つて、同じ牡丹色の肩かけ、白い紙に書いたものを手にしてジッと見つめて居る、その傍に五十程の小男、ほこりにまみれた頭の髮を一寸程も汚く延ばして、ヨロ／＼になつた紺の伴纏を着た、あまり見て心地のよく無い風體、人差指で紙をついては何か說明して居る。如何したのだらうと芝居を見てゐるやうな氣で覗いて居ると、その男は草色になつた節くれた兩手をつと延ばして娘等を向ふへ追ひやらふとして居る、言葉はわからなかつたが何でもなだめてゐるらしい、娘等は顏を見合して一寸不平らしい色をあらはしたが、それでもおとなしく、紙をふところへ疊んで入れて、無言のまゝ追ひやられたまゝ南へゾロ／＼と去つた、この爺奴！道行く人の袖にすがる乞食風情てあり乍ら女だと見て馬鹿にして居る、猶見て居ると、「五錢が一枚と三錢が三枚じや……」つぶやくやうに女の方を向いて進み乍ら云つた、凹んだ眼がギヨロッとして顏の色までほこりにすゝけて居る、まるで二百年も三百年も以前の古物を見るやうだ。

此方に空を向いてポカンとして居る女は眼が見えぬ、兩方から閉ぢ合したまぶたが變な薄赤い色にはれ上つて、櫛卷の頭がたまらなく赤茶けて居る、黑繻子の衿の破れた伴纏を着て、そのふところに三つ程の男の子が足を突込んで抱かれて、だまつて居る、後ろから見たら青いそり立てらしい頭に、黑いおできが北アメリカと南アメリカの地圖を見るやうに陣取つてゐるのでおかしかつた。

男が少し離れた所でしやべり始めた、何でもまゝ子いぢめの話しらしい、全く立板に水的で、口早にしやべりつゞけて居る。

妙な事だ、此の間見た時の連れの男と今日のとは全く別人だ、少しの間に異つた人と夜が明けてから日が暮れるまであるかねばならぬ、この盲目の女の運命を思ふて異樣な感がせずにはおられない、女がかぞへ歌を歌つてあるき出すと男も後ろへついて行つた。

窓を閉ぢて居間へ歸る、もうズッと向ふへ行つた筈の女の聲がハッキリときこえる、數へ歌だのに不品な厭らしい感はせず、むしろふうわりとした聞いて恍惚させるやうな聲だ、だん／＼聲が薄れて行く「音樂的だ……」とつひ獨り言して、誰も部屋に居なかつたので、宜かつた。

苦なしには書いてありますが、是れだけのものとしてはあつけないやうです。（評）

○恐ろしい女

福井縣　片山千里

眠むい程、暖かい春の日の午後であつた。

自分は、まだ打たぬ、水田の間の、細い畔道を通つて、廣い街道へ出て、それから或る町へ行かうとするのだ、道の左右には、色々の草が生へて居る。

二毛作の菜種もしんがたち、麥も黒みを持つた、山は大分青う見へるが、谷底にはまだ雪があるらしい、川の水が、濁つて居る、そして鶯はいかにも春らしい聲で啼いて居て、見るもの聞くものが快い。

やがて、その峠道の盡きやうとする所に、小さな地藏様の堂がある、その堂の前に何やら黒く見へるので、何だらう、と思つて、だん／＼近よつて見ると、若い男と女が尻下げをして、ひそ／＼話して居るのだ。自分は其傍を通らねばならぬのだが、どうしても、さういふそばを通る事が出來ないので、わざと向ふの者の氣が付くやうに、下駄の音をさして歩行いた。

すると、男はむつくと立つて、何やら荒々しふ云つて、急いで街道へ出て、ちよつと女の方をふりむいて行つてしまつた、女は泣いて居たやうであつたが、クソッ人を……と云ふて、懐から何やら出して、引きさいて地面に叩き付けて、下駄をつまんで、洗足で男の行つた方へ追ひかけて行つた、髪は亂れて居た、帶もとけたまゝ着物もからげずに、目も血走つて居たであらう、大蛇のやうだ、と思つた。

自分は思はず、其女の後姿を、見えなくなるまで、立ちすくんで、見送つて居たが、ハッと自分に返えつて、地藏堂の前へ來て見ると、若い男の寫眞と手紙とが、細かくひきさかれて、散らばつてあつた。

それからといふものは、この恐ろしい女の姿が目についてゐるやうな氣がして、自分にまで怨みをいふかのやうに思はれて、時々夢にまで見る、オー恐ろしい女!!。

ほんとうの芝居を見たわけですね。（評）

○褪せゆく血

M　H

「何ですか私がつかりしたようですわ、はりつめた氣がとけて了つたようで」と、憐れなる妹が燈火の蔭に、淋しき笑を浮べて私を見た「眞實に久ひぶりなのだもの、二三日位ゆつくりしたつていゝでせう」と、なほ不安なところからその顔を凝と見ると、「だつてね……、私はもう、いつまでも姉様の所に居たいのですけど……、けど、お母様のねえ？」と、あとは云ひ得ずうるんだ眼をあげる「矢張りむづかしいの？」「えゝ……けれどれ、昨朝の御飯は近頃になくよくてきたつて褒めて下さつたのよ、實際嬉しかつたわ」と、今にも消えさうな笑をやつれた頰に見せてうつむいた、嗟、憐れな子よ、三才の幼よりとげ多い繼母の手に扱はれて……、それでも昨年の春までは唯。私をのみ賴んで居たのに、私の此家に嫁いてからはまあ、誰が手に寄りすがつたでせう、父あれどとかく母の意には從ひ勝ち……、おゝ嘸、此一年は愛に渴して居たでせうものを、「然し私が居た時よりは幾分かいゝでせう？、」と問ふと、「それがねえさうぢやないのですもの、噫、私には…私には…」と、過去の苦痛を思ひ出でゝかほろ／＼と涙落として、「どうしませう、どうも私には…あのお母様の御機嫌がとれないで…矢張り私が至らぬからでせうねえ、私のこの…涙がまあ、よく、かれません事ねえ」と、涙をぐつと呑んで下くちびるを嚙む、嗚呼、十八歳の處女、花ならば咲きもすべき今、華やかな戀に憧がるゝ身ではなくて、只情無い母の機嫌をとり惡きに悶へ苦しむ。

あはれ、溫い愛も知らず、うましき戀も知らず、かくて朝な夕なの涙の

中に褪せゆくかれの血汐、おちゆくかれの胸、あゝ私は……、私は、まことの姉としてそれを見るにしのびませうか、

此文、全體の調子に女らしい處が能く表はれてゐます、何處と云つて圏點を打つやうな處もありませんけれど。（評）

○朝鮮人の家に行た記

釜山　富永清子

妹と父様に連れられて、韓國の紳士金振仲と云ふ人の家に行た。父様は。金さんと何か話して居らつしやる。私共は、夫人の部屋に導かれた。朝鮮では、中流以上の家庭の婦人は、めつたに外出しない、從て日本人に逢ふ機會が少ない。私共の服裝が、餘程珍らしく映じたか、私の被布の裾を捲くつたり、袂を一枚々々外したり、リボンに觸たりしては、さも嬉しさうな顏をして居た。夫人はと見ると、下はヅボンと袴を穿いてゐるが、上は、只襦袢の樣な小さな物一枚　吃驚した　此如月の寒空に……韓語で、「一枚で寒くは有ませんか」と尋ねると、「朝鮮は、オンドロが有るので、一枚で宜敷い」と答へた。韓家は上下を通じて、何處でも、オンドロと稱して床の下から、火を焚くやうに成てゐる。それで、外は甚麼に大雪が降ても、室内では、四月頃の樣な氣持で雪を眺める事が出來る、私共の這入た室も暖で慣れない身には何となく氣持が惡くて、頭痛が催しさうなので、窃と扉を開けた位。部屋を見廻すと、簞笥が（朝鮮の）六つ重ねて置いてある。其上に、青、赤、黃、白などの夜着が積て有る。室の隅に眞鍮製の壺が据えてある。是は尿壺で、如何な家でも、此忌むべき物を室内に置いて平然としてゐるので有る。折角進められるので、御馳走はと見ると、蜜柑や干柿に梨などはよいが、栗の生の儘を、剝いて出してあるには閉口した。妹は、「自分達が生を食べるので、私達にまで栗の生を出してゐる」と小聲で言つては笑ふ。歸へる道すがら、父様に、「朝鮮人の家は、何處でも、壺が有るので厭やですれ」つて言つたら、「昔はよく虎が出たので、夜は外出しない樣にして、尿壺を傍において寢たのが習慣に成て、今は一つの禮の樣になつて了つたのだ」と話して下すつた。

韓國の風俗は屢聞いてゐるので、大抵は分つて居ますが、斯う明確に書いてあると、今更のやうに其婦人生活の有樣が物珍しく想像されます。（評）

○通り道

下谷　花一輪

ポストへ葉書を入れて、もと來た道えとかへす時、曲り角の交番には、巡査が、疲れた、樣な、活氣のない顏で箱の中に居る、くぼんだ目、こけたほゝは、大きな徽章のついた帽子で、僅に威嚴を保つて居るにすぎない……、名のみなる、音無川は、半ばごみて埋もれて成程音もしない、靜だ、そのかはり流れもしないらしい……、川のそばを通ると、ガスで日暮里村の四字がはつきり見える、少し先から、床しい琴の音がもれて來るのに、思はず足が進む、それも道理琴曲指南の札がさげてある、しなやかな門、そまつな桓根には、少し日暮里らしい所が殘つて居る、その先きには、また目新しい店がかど並に出來た、あゝ日暮里も、こんなに俗めいてしまつたのかしら、……情ない……人が出てきた、くもつた顏の……何となくきたない、あゝいやだ、妙な事考えながら、無意味にあゆめば、右側の「よしの」とある、しやれた木札の家からお線香の香がして、忌中の二字は、紙に黒々と書かれてある、それを見ると、むやみに氣味が惡い樣な氣がして、後も見ずに石橋を渡つて、家に歸つた。

査公も辟易せざるを得ない。（評）

○ブランデー

靜岡縣　さくら

毎日六時といふと會社ではぽーをならす、重い苦しいさながら死に臨んだ惡魔の悲しいうめきの樣な聲て、すると男も女も老人も若者も文明の分子なるものは皆思ひ／＼の胸を抱いて門から吐き出される、其綿ほこりにまみれた青い顏、油に光る紺の織工服、見る度に私は悲慘な境遇を、代表するもの丶樣に思はれて何とも知れぬさびしい音律が胸にしみ込む、試みに彼等の顏をいちいち見ると皆目鼻口にはもう生につかれ切つてやつと何ものにか引摺られながらあへぎ／＼働いて居ると云ふ樣な色がほのめいて居る、彼等は息ある機械、生ある人形だ、彼等は何の希望もなく、何の空想もなく、パンに起きパンに働いてるのだ、唯彼等の間にある低い戀はわづかに彼等をはげまし彼等を興奮さすブランデーの樣なものである。

奇抜（評）



公園にて　茨城縣　小堀とし子

〇雪窓の思ひ

北見ひぐらし子

二月二十八日、數多度叫び狂ふ雪風に宵からの夢破られて、いや／＼ながら床を出た、噫吹雪か、折角解けたのに雪は又これで二三尺も積つたであろう、風烈しく雪が飛んで目も開けて居られない程だ。今日も、又、机とおなじみか。學校時代の日誌を見る、去年の今日は晴れだつた、けれども、去年は都に居て、苦もなく、憂もなく、騷いだ。同級の喜代子樣と「一色は匂へと散りぬるを我が世を誰ぞ常ならん有爲の奥山今日越えて、淺き夢見し醉ひもせず」つて歌つたのも、今日だつた。それから後、私は古郷の

人となつた私、れてからも早や一年は過ぎた。あゝ喜代子様は、縫子様は、また、私のうはさして居るだろうか、姉妹とまで誓つた、美子様は、月に二三回は葉書なりと交換れ、と被仰つたに正月以來音便はなくなつた、私もしないが幸ひに御健全か。又一しきり强き風、幾何ばかり降る雪ぞ。遠く内地は春であろうに、梅が笑ひ鶯が歌ふであろう。此の間淡路の友からも書いて來た「小波さゝめく南海の、小島にも、梅、ほころびて、小鳥もないた」と書いてある、御地は寒いでせう、白皚々たる、雪中に御暮らし遊ばすかと察つしては、未だ見ぬ君の、只管、お痛はしい」と書いてある、見なくとも、會はなくとも誠にもせよ、僞にもせよ、一人なりとも、哀れと思つてくれゝば嬉しい、涙も出る。尋常の頃、同じ學校へ通つて、又去年の秋共に、裁縫へ通つて居た、たアちやんが、人妻と名かついてからもう三日になつた。私はまだブラ〳〵して居る、人が嫁つたと聞いても羨やましいとも感じない、悲しいとも思はない、まあそうなのと一向平氣で居る、むしろ、幸福か知ら、つまらない。誰か歌ても、うなつて通ればいゝ、まさか、此の吹雪に。お豆腐屋の聲もお休みか。晦日と、云ふに、懸取りの一人も通らない、晦日には、何日も吹雪ならいゝと思つた。チン〳〵お三時、どうれ、夕飯の仕度でも、しませうか。

○感慨

澪子

よくそんなに書く事が有るね—と母様や兄さんに笑われても〳〵やめられない。ちよつとでも暇さへあれば、何かしら書いて見度て仕様がない其のくせ一度だつて、出來た事はないのに、私にはとても斷念しても、二三日たつと又ふつと何か浮かんでくる、今度こそと筆を取つて書き出して見るが矢張り……もう〳〵二度とは思ふまい、それよりは皆様のお作を拜見しようと、大好きの女子文壇出して見る、何れを見ても御立派なのばかり、まあ、どうして、こうすら〳〵と樂に書けるかしら、最も學力も充分おありなさるからでもあろうが、ほんの眞似事でも宜い作れたら、どんなに嬉しい事でしょう、私は〳〵とても皆様の御仲間入りは出來ないかと思ふと、急にかなしくなつた、じつと見つめて居る目がうるんで、今迄はつきりしてゐた文字が、ぼうつと遠い〳〵處にあるやう、はつと氣がつくとぼつたり——一滴思はず紙を汚しました。

○雪の日

赤坂よ乙ふゑ

冷たい風は遂に、霙をさそつてきた。さそはれてきた、霙は暫らく、地をたたいたが、いつのまにか、雪と變つた。地に落ちた多くの雪はとけた。而し次第〳〵にとけるよりは、とけない方が多くなつてきて垣の結ひめや椿の葉などは、そろ〳〵白くなつてきた。すきまをもれる風が身をきるやうな窓にもたれて、絶えまなくふる雪を見つめた。いつもはよく見える向ふの家の看板も、今日は、はつきりと見えない、知つてゐればこそ眞中の大きい字は「豆乳」と讀めるけれとも……。暖かい部屋の中にはパチ〳〵と炭のはねる音、寒い〳〵窓のそとには積んだ雪を拂つては、立ちなほる、竹の音がザラザラと時々聞えるばかり、その靜けさを破つて、時計は今ゆるく四時を打つた。私は、又窓を開いた。茂つた松の木の下を少し殘して他は眞白、池の邊に立つてゐる古い杭の頭も、また、犬がくはへ出したのであろう。瓶石の向ふに投げ出されてある庭下駄の面も白くなつてゐる、三たび私が窓を開いた時は夜の十時。いつのまにか雪は止んでゐる。積るなら軒までもと思つた、私の願は空しかつた。あゝ而し、この時私はフト窓下の南よりいた〳〵しい樣子を見た。かよわい身に重い衣をきせられてナヨ〳〵と風にもたえながらも尙ほゝゑんでゐるのか時々見える紅の實、あゝもし私の願が聞かれて南天の衣をなほ重くしたらば、あはれ南天は倒れてしまつたであろう。今は却つて私の願のきかれなかつたのが嬉しい。苦しい中でも靜かに笑つて居る南天の心に習へと云ふ樣に香も暖みもない衣でおほはれた、老楠の梢て星が私語いてゐる。



和歌

与謝野晶子選

○(天賞) 伊賀 岡 花子

われ今年この春君を見ることは彼の相人も云はざりしかど

○(地賞) 丹波 壺内文子

毒ふくむ蟲をあるときこらしつとおもへり外に何事もなし

○(人賞) 伊勢 葉山文子

灰色のみちに人影いとうすくおぼろ月こそ死に似たりけれ

【秀逸】

○ 牛込 平塚白百合

みなし子はかの野のはての一本の葉なき木などのおもひするかな

○ 新潟 吉田ふみ子

君とわれ人通ひこぬ小島にもあらましものを戀さめぬうち

○ 福岡 健部良久子

百人の男の子はあまき言葉もて二十のわれを欲りすと云ひぬ

○ 府下 西ヶ島よし子

べに椿花まひおつる色に似る美くしき帯おひたまふかな

○ 徳島 吉田紫花

糸さくら風にもつるゝ風情して少女の群のわらひ興ずる

○ 信濃 吉川多美子

相尅の宿執ならむあひ見ては君をわれなききみ我をなく

◎　下關　山本芳子

くれなゐの椅子にわれゐて春日さす長門の國に入る船を見し

◎　長野　櫛原たづ子

青蜥蜴、蛙、蚯蚓をとりいだすこのうたがひのみにくき袋

◎　熊本　金子きぬ子

大空はふたつにわれぬいなあらず雲のひまより白光のさす

◎　福井　片山千里

いつはりをまことゝせよと弱きわが胸の中には今しさゝやく

◎　福島　木下春子

大波のごとくにわれをうるほしぬたゞ一滴のみなみだながら

◎　麴町　牧野嵐水

たよらかに横笛とりて吹きたまふ夕の人はさくらに似たり

◎　四谷　味方こう子

おもひ穗に出づるを懼れなつかしき母にも心おくが苦しき

◎　四谷　味方てい子

きざはしを登りつくしそ煤煙にくもれる町を見るが悲しき

◎　茨城　古島花子

わが姉はうら風かよふ松原の白きやかたにとつぎたまひぬ

◎　德島　中村加津子

春雨はおとなく降れり泣くきみの涙はましていと冷たけれ

◎　飛彈　眞砂子

こゝろさへはた髮をさへ夜をさへ身づくろひつゝ君を待つかな

◎　土佐　寂靜子

文がらの狼藉たるをまへにして物おもふなりゆく春の人

◎　秋田　大越のぶ子

けふしらぬ未來てふ日によろこびをもとめんとこそ思ひたちけれ

◎　伊賀　山村龍子

歌よみてひとり住みする身ぞよけれまれには少しさびしといへど

石川縣　杉本淑子

○人と居て三年の前のことなどを泣きみ笑ひみ語る春の夜　東京　静子

○その人の面影忍びなく夜半はうけれど心あたたかくして　栃木　丸山房子

○美くしきわが戀人の肩に春にあはくつもりぬ二月の雪　磐城　繁子

○ふと覺めて小暗きれやのともし火を目に見ながらに夢のあと追ふ　羽前　なみえ

○偉いなる力かしらず神ありて二人の人をまた近づけず　相摸　氷の花

○人多く笑ひさゞめく中に居てひとり琴ひく美くしき君　麻布　常世草

○わが心君戀しさのみち〳〵て白き花にも涙するかな　讃岐　安藤たか子

○青柳のしづれし枝に白玉を結びていにし雨の少女子　山口　椰良美那子

○まち中の五階の窓にわれありて雲を見るなり春の夕ぐれ　下谷區　蕉雨子

○たへがたき優しきつかれ青草を見るとしもなく瞳うつしぬ　山口　酒向登志子

○少女てふ美くしきものみな老よかくとしおもふおとろへしわれ　伊豆　加藤ため子

○ぬかるみの底にしあれば紅椿病みたる人の唇と見ゆ　備前　板崎好枝

○胡蝶舞ふ野路を二人さまよいし昔の春の見ゆる日記かな　京都　益子

○眼をとざし物待つ如き我心日のくれしをば嬉しく思ふ　沼津　鳴田若綠

○暖き春の花野に蝶となりれし夢さめぬみどりの陰に　沼津　渡邊とよを

○うの花や我古里によく似たる垣のさまなりなつかしきかな　高知縣　長尾峰子

○桂濱黑雲わきて雨近き風吹く時の雄々しさをめづ　霞子

○夕月夜山の尼寺霧こめてほのかに香る水仙の花　周防　美女子

○五年の昔に見つる君ながら雨降る夜などいともこひしき　備前　佐久間榮子

○わが身にはきのふの如く覺ゆるに君は神代のことゝしたまふ　伊賀　わか子

○何ものかわれに云ふらく彼の星も女をうばゝ見よはうき星　宮城　沼倉馥子

○ひと日だに忍ばぬ事はなかりけり一重ざくらの木の下の歌　陸前　浮草子

○壁やれてみ佛見ゆる山影の古寺のごとなりぬる心　埼玉　せつ子

○夢に似る昔のことの思はれて忘れぬ友を書きつられけり　長野　津金壽枝子

○わが胸の幾重につゝむ秘め事を奪ふこゝちす牡丹ちる時　東京　高木鶴子

○いかでかく少女の名のみこひしきやあゝあはれなる我が十八よ　横濱　新綠

○人故にわきける胸のわかき血も日に〳〵氷はりつめてゆく　能登　近江加能惠

○さならずは死なむと願ひひたに泣く愚なる子とおぼし給へな　熊本　波の花

○わかいまだ知らぬ日記をばふとも見ぬその折まきぬ頬へのたれは　丹後　高田香葉

○菜の花の中の小道に君を見てもの云ひし日のなつかしきかな　京城　中尾艶子

○我が胸を枯野のやうにのたまへど奥の奥には花あるものを

長野縣　平林琴江

○云ひ知らぬ恐をおぼゆ春の日にうしろの山の雪なだれおつ
信濃　古畑よしみ

○相ふ毎にはしたなき事かにかくと云ふあさましきわれともなりぬ
信濃　浅田いと子

○この村に歸れと如に夕鐘は山の寺より響き來にける
遠江　富永雪子

○常はたゞ白き頰をする我ながら君と見る度火のごとくもゆ
靜岡　櫻子

○われも彼の群にまじりて茶摘まばや歌は知られど歌を聞つゝ
三島　遠山雪子

○黑き胸石に碎かい死ねかしと悲しきことをわれきくものか
備前　中道輪子

○天地は果てなき底のくらがりに落ち行く如し五月雨のころ
備前　岸本正子

○かつらぎは二本松のかすむなる後に高く雲雀囀づる
加賀　田中白百合

○彼の君の美しと云ふくろ髪もまこと五尺にたらぬ悲しさ
三春　橋本ふさ子

○歌の集くる手やすめて菜の花を離れし蝶の行衛をぞ見る
京都　香野

○櫻花ひら〳〵ちりて人もなき山にしのびぬふるごとゞもを
飛騨　千代子

○あなくるしあへぎて追へどひたはしる時の小車いかになすべき
麻布　花子

○喜びの一つをうればそのひとつ水に流るるこれや世の中
青森縣　掛端杉女

○この君は我れの苦しさうれしさの半ばをしむるいな皆をしむ
豐後　吉良靜子

○けだものゝ性によく似る男子らはみゑよかるとも近くよりそれ
下關市　松山瀧子

○大いなる海を見て泣く幼子の心にか似る文よむ心
下關市　關きみ子

○春の山白樺の皮小刀にはぎて君の名しるしけるかな
群馬　志美津

○まつき山その青草に靜々と春の日照れる心なりしを
長崎　妙香

○水にくれ水にあけゆく大海の波の上にもわすられぬ君
近江　志賀小なみ

○のちの日は悲しきことのめぐり來む日とも思はずわれまちしかな
大阪　花たちばな

○春の日は長閑にさせど病みし身は庭の落花をふみもかねつも
門司　鈴木靜枝

○去年の春二人いませしむすめ君尼になりぬと人づてに聞く
甲府　眞佐子

○二十五の姉の話をきゝをればわかき悲しみわき出づるかな
武州　丸山榮枝子

○ふぢの花山吹の花惜しむ子の歌聲ふるへ春暮れてゆく
遠江　鈴木若草女

○夕まぐれ淡き光の漂えるしら壁を見て涙こぼしぬ
伏見　田舍娘

○歸りゆく車の音にわが門のひともとすみれうちをのゝきぬ
伊豆　西川みさを

○のがれ行く君追ふ心ふと我を追ひにける日の君を思ひぬ
豐橋　高畑淸子

○うるはしく花咲きみてる中を行く少女の袖に春の風吹く
名古屋　松村千代子

○夜晝なくうつら病む身を嘲けるか怪しき聲に深山鳥啼く
金澤　むらさき女

○木々の芽のほのかにくゆる如月の庭に向ひて淡き日を浴ぶ
肥前　山田ヤヱ

○もの思ふ心たとへば春雨にしとゞにぬれてあるがやうなる

○　府下　大久保撫子

春ふかし風あたゝかに吹く夕身内の疲かれいちじるきかな

○　肥前　高木静江

妹と柿の木かげに野風呂たき父母待ちぬかゝる夕を

○　肥前　原田くま

大空にきらめく星の影失せてたちまち荒ぶ天地のさま

○　肥前　瀬戸とむ

妹よたとへいく國隔つとも月見る時は相思ひてむ

○　福岡　小林ぜん子

美しき朝日の光帆に浴びていかりぬく船祝ふと云へど

○　奈良　中富よしみ

落梅の我が黒髪にとまりしととりて示せる玉の御手よ

○　肥前　中島松枝

行く末はいとたのみあるいでたちになどて別れのかく悲しきや

○　越後　吉田紫雫

幾度かかへり見すなる葬り場の黒き煙は風になびきぬ

○　姫路市　菅原静野

いつはりのごとくに君がうたがひしそのごとなりぬある日のちかひ

○　大阪市　田中いれ

ゆるく鳴る鐘の響にはら／＼と散りぬ御寺の山櫻花

○　伊豫　山口たけ子

法といふ固きくさりにつながれし少女なくない寺の石はし

○　横須賀　鈴木辰子

漁船あまたならびて春の日の岸にひた／＼小波のよる

○　佐賀縣　立石ムメ

何となく只寂しみのつきまとふこの一とせのこの人のむれ

○　信州　むらさき

春來ぬと告ぐるは花かいなあらず戀しき人の消息の文

○　秋田縣　高橋醉星

我れ一人春の旅して夜もすがら海の音などきく幸よ

○　芳野柳

山吹の散り殘りたる井のはたに紅の衣洗ふ君かな

○　長崎　永井主子

夢となすことを日記にも見出でつる四月の七日春の雨ふる

○　京都　町田てる

菜の花のほろぼろ霞む朱雀野を子等こそすぐれ壬生の御寺へ

○　佐世保　つゆ子

ともすればあかつき近き灯にもにるま心となりぬこのごろ

○　三重縣　吉川澄江

唯一つ立つ黄蠟の灯を見ても吾涙しぬうら悲しさに

○　大阪　向井しら露

さみだれの雨夜あまりに重なれば歌語るべき人もこぬかな

○　小石川　田村波津子

ひろごりてやがて消え行く水の輪の如きならじかこの頃の戀

○　兵庫　杉山春翠

かくまでに胸なやませど君が知る術をみ神の教へ給はぬ

○　伊豫　しらはぎ

道行けば逢ふ人は皆よろこびぬ花ならねども少女子のわれ

○　小樽　清田芳枝

樹に倚りて立つ陽炎を眺むれば夢や見るかと肩とりし君

○　茨城縣　土井なをい

同胞と手を取りかはし春の野に菫の花をつみし日の夢

○　新潟縣　岩本芳子

深くふかくむれに秘めたる戀の歌そとも牡丹にささやく夕

○　山形縣　稲葉秀子

うるはしき黒き瞳はわれを見る用なきときは文を讀むべく

○　飛驒　千代子

二十にて魂もすでに消ゑ失せぬみにくきわれは戀のなきがら

○　岐阜　安江咲枝

我れの泣く故郷すてゝ出でたまふ君の姿を守りてありぬ

○　越後　井上貞子

たゞ一日物をおもはぬ安らけき明日をたまへな大つ御神

○　富山縣　山本紫菫
春の山いとおもしろし人の目に見ゆる限りは櫻と少女

○　下谷　村上春枝
やるせなき思ひを人のうつしゑに語れどかげはほゝゑみもせず

○　大坂　植村文子
船なやり海を行かずば師の君に逢ふよしもなし悲しけれども

○　廣島縣　後藤すみゑ
千丈の絶崖にある姫百合をわれ船に居てとらまほりする

○　北見　ひぐらし子
涙して語れる人を美くしと見ていだくをば罪とし言ふや

○　宮城　武田芳江
天地になにがかなしき初戀に世のゆるしなき人戀ふること

○　石川　葉末女
はらはらと二片三片散る花を見てはわが世のはかなさに泣く

○　大坂　小百合
春といふいみじきひかり京になげ比叡の御山に居たまへる神

○　大坂　福井まさご
世をすれてさすらへる身もある時は花のやうなる灯影をおもふ

○　天津　美津子
若菜摘むや女子見れば其昔赤裳ひきけむおのれしのばや

○　渡島　千葉幸子
戀するはわかき日ときけ二十五の今日のくろ髪五尺にたらず

○　筑前　矢野靜子
川の邊のなの花黄なる其中にたはむれ遊ぶ蝶の如き子

○　近江　細野その
温かき君が御手に抱かれて春の夜つかん永久の眠に

○　下關　花子
わび住居はや三年の春すぎてわがたけ近く桃の花咲く

○　京都　三宅壽賀子
白菊になき人偲ぶ宵月夜北にすぎゆくかりがねのむれ

○　日本橋　松岡千代子
春風吹けば君住む門の青柳も淺みどりしてなつかしきかな

○　徳島縣　杉山雪惠
曙の小草にれぶるむらさきの蝶を起せり花を吹く風

○　大阪市　堀ひさ子
朧夜に地に滿つ梅の影ふみて友と歌へばもの思ひなし

○　横濱市　辻芳子
あはただし明日をも待たず何事が來るとしおぼえ胸のどよめく

○　相摸　内藤千代子
われ二十こひしき人の歌誦して春雨の日をくらしぬるかな

○　小石川　滕又和子
魔の術を行ふ人の來し夜よりあやし我が胸ものをじぞする

○　伊豫　渡邊文子
ましろなる桃は咲けどもそれに似し去年の一人を見ぬがかなしき

○　本郷　みしま
あさましや机によりてまどろめばゆめに見えくる人のおもかげ

○　信濃　杉田いち子
紫のかすみ棚引千曲野を白くぬりたる馬車の行く哉

○　蛭川　田中あさ子
海の面の青きを見れば人はかく少さき望みに泣くやと思ふ

○　千葉縣　石井よし子
春の日の夕ばえうすれ行く處わが亡き人の花つむらむか

○　千葉縣　中村八重子
あすは誰か旅疲の夢をてらすらん一夜の宿のともし火のかげ

○　佐渡　鶴間白波
母上の歸りぞをそきさびしくも火桶の炭は白くなりゆく

○　京都市　赤松楢子
あでやかに緋桃ふくみむ柴の門を車してとぶ君なりしかな

○　本郷　服部秋子
花咲ける一木の梨をながむれば月影青く我が顔に照る

○　越後　水野やすゑ
夢さめてなほ夢辿る夢心地夜明にちかきおぼろ夜をゆく

淡路　加藤菊子

○美しき夢の中にもおそろしき夢の中にも君を見るわれ　愛知縣　筒井みち子

○山の端の曲れる松の根本にて紫の花すみれをぞつむ　麹町　牧野みどり

○牧の馬南に走りて水をのむその夕ぐれに横笛をきく　羽後　三浦ふみえ

○戀ひ死なむわれの棺をおくる日は雲紅ゐに花の雨ふれ　千葉縣　岩澤周子

○此三年泣き明したる我胸に光りみとめぬエスの御神　千葉縣　藤田菫子

○野の路に菫つむなる小女子の髪をおもげに春かぜぞ吹く　千葉縣　藤田芳枝子

○うれしくも吾家に神の福音をもたらし來たり此子幼子　備中　篠原しげ子

○御手とりひれもす君とさまよひぬうす紫の藤棚の下　伊豆　村瀬常月

○木犀の強き薫にその昔香たきこめし髪を偲びぬ　伊豆　鈴木矢壽子

○疲れたる目を強く射ぬ五月野の青きが中の毒草の花　大阪　木田千代子

○すくうべきてだてもあらぬ谷そこにわれはおちたりすくへと云はむ　大阪　高山米子

○春風に和毛吹かせて熟睡する野の羊子よ幸多きさま　墻生　醉花

○何となく淡き悲み吾が胸の前にひろめき事をさまたぐ　長崎　天津乙女

○知らずくあひもよりけりまたもなくつめたき人と熱き女と　越後　文枝

○少女子は華やかに笑みめでらるゝしばしの後に物思ふとか　富山　高田美島

○ちらくと粉雪はふれりきさらぎの日にはあれども君と爐によろ　加賀　勝崎菊子

○女てふ假すらなきけがれたるわれを戀する君故かなし　兵庫　紅雀女

○このごろの春の雨ふる眞夜中に獨り目覺めてわがおもふ君　越後　波奈子

○草の花それもうとみて昨日今日かたらまほしく君を待つかな　根室　富美子

○かすむなる野邊の芝生に紫の菫摘つゝ人をこそおもへ　德島　中村玉野

○ま白なる君が涙のやはらかう流るゝ夜なり春の雨ふる　島根縣　時雨女

○いと暗き海過り來し船人の曉の日を見るごとくする　京都　靜月

○梅咲きぬ桃は蕾みぬ京の町糸のような雨のふりつゝ　大阪市　植村靜子

○少女てふ花ある冠いただけど幸ごとか我はうたがふ　福岡　自然娘

○昨日まで長き夢見しこの吾の心は今朝の寒風にさむ　神戸　宮本ごと子

○大空になびく戀しき白雲よ君がみたまのさまよふごとく　岩代　笠間松江

○この儘に月の光りのくもれかし君に添ひ行くうらはづかしさ　福井　北利子

○おろかにも世に二つなき我が身さへ信じえられぬ日ともなりぬる　飛驒　知代子

○かの器この器にも盛りたまふ春の女神のおものの花よ　常陸　鈴木花香

○白銀の世界の宮のうきばりのやうに人見ゆ月のおばしま　大阪　石橋梅子

○かひもなくわが身朽葉のおもひして若芽ふく野に泣きぬ春の日

上毛　もと子

○

この二人はなれ小島の椰子の實に生るゝ世をばおもかげに見き
佐渡　靜香

○

何やらん我は知られど人こふる暗き心に光のさしぬ
伯耆　足立春子

○

夕雲は唯赤々とひとゝきの炎吐くなりとがりし山に
近江　石川大子

誰にしもみ　るとなしに春の野の花を手折りてかへりこしかな
福岡　荒川たか子

春風に散りが　櫻はらひつゝ君想ふわれおとろへにけり
向島　鈴木春子

○

何となう我涙しぬ咲みてる櫻の大樹たゞしづかなる
群馬　高橋ふみ

○

心だによろしき道にかなひなば神もあはれとおぼし給はむ
遠江　橋本美代子

○

春の灯は木の間をもれておばしまによりたる人の艶なるに照る
大阪市　小泉政子

○

桃の花彼岸まうでの人々の傘にちりつつ日は暮れにけり
大阪　日野歌子

○

春雨や御寺の垣の紅椿下行く舟の荷の上に散る
和歌山　木澤てる子

○

白き蝶あまたむつれて草の上わたりゆくごと雲ゝぶゆふべ
和泉　金田代志子

○

夜となれば心かすかにうちうめく人の文をば得たる時より
信濃　丸山美根子

○

白馬山朝霧はれて日はさしぬ駒に鞭うつそのうしろ影
鳥取　安木　子

○

地震ひて荒海に似るたまゆらも君としあれば心やすかり
札幌　安達けい

○

湖ちかくならぶ柳の若き芽に春雨ふりてさびしきこゝろ
大阪市　山内花雪

京の河清水流れてむらさきの霧のひくなる橋を來し君
大阪市　山内深子

○

何となく心しづむとあとむきて風船玉をわり給ふ君
信濃　紅ゆい子

○

藻の花の美くしふ透く玉床に舞ふは神かや諏訪少女ども
大阪　安達政子

○

雛祭雛見る度に老ひ行くと二十の姉ののたまひにける
常陸　木村桂月子

○

女てふ我名おぼへし其日より君を見じとてかくれけるかな
茨城　百合姫

○

葬むりの鐘の音のきこえて夕ぐれの野にひろごりぬ灰いろのもや
德島　中村玉野

○

べに椿二ひらをもてつくりたる君が唇われの唇
島根　すみれ

○

戀ごころ八におとらず神に似る心もさらに神にゆづらず
秋田　野宮みさほ

○

卯の花の香ゆかしむ朧夜に寂しき鳥の一聲を聞く
熱海　結縷草

○

時々しろくしき雛てふ性知りてふとおのれにはなきをおもひぬ
和泉　弧舟

○

男にて女の如きをなぐさみに致さむ心あさましきかな
伊豫　よしゑ

○

別れては大あめつちにはらからの愛も斷てよと寬は怒叫する
下關　山田くに子

○

春雨や京に名高き鴨川を赤き光りの走り行くかな
杉山とし子

○

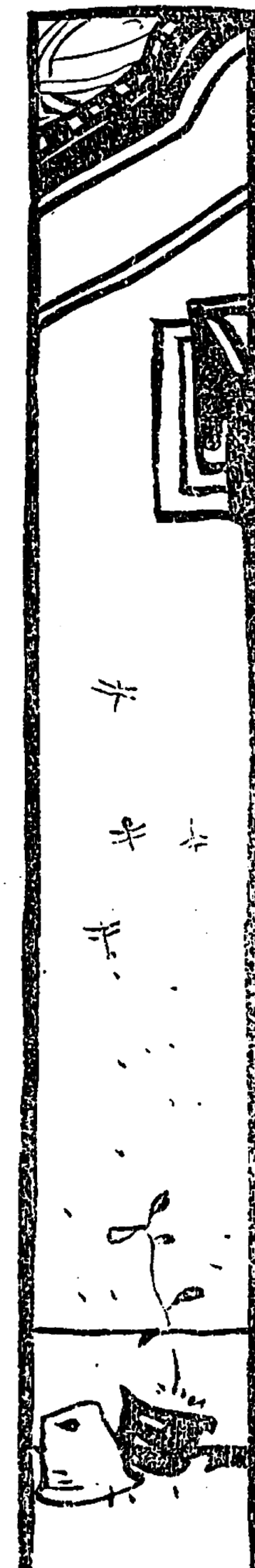
君が事又も思ひて哀愁に閉されし胸いだきてぞ泣く
山城　木の花

○

病てふものは來りて頰もやし去りけるを見ず彼は今日死ぬ
牛込　平塚白百合

○

泣きて後いさゝかやすき心かな外も靜かに白き雨ふる



日記

横瀬夜雨選

○日記のうち（天賞）

くがぬま　内藤千代子

先生からたのまれた急ぎの裁縫が、昨日すつかり出來上つたので、今朝起きたのは九時半。金だらひ下げて井戸端へ出て行く間のわるさ、おゝまア椿の花が澤山落ちて。

茶の間にはお香の煙がしづかに棚曳いて居る、さう、父樣の御命日だつけ、また叱られぬうちに急いでお線香の數をそへた。おそいから朝飯はぬきにして新聞持つて椽側へ出る、丁度干してあつた坐ぶとんがふくぶくして暖かさうなので、一番ふくらんで居るのに座つてぢつとして、何のことはないどら猫ぐらゐなものだと可笑しくなつた。

中田のお道さんが草餅を持つて來て下すつた、枝折戸を開けて庭の方へまはつていらつしやる、結立の高島田、薄すりとお化粧して、光るやうに美しい。藤色がゝつた紋羽二重のお羽織、撫肩すらりと…。あゝやつぱり…同齢だもの、そつと自分の肩に手を加へて思はず苦笑した。

午後窓に腰かけて『春爛漫の花の色』を歌つて居ると郵便屋が門をはいつて來た、此方〳〵と手をたゝいて受取る、萩花樣からのお葉書、夢中で四五度讀み返したが、矢庭に机によつて洋紙をのべた。

『兄さま、あんまりでせう。私、いつまでもいつまでも、小島のやうな十六の女では居られませんでした、時の力は凄じい、お別れしてからもう二年になりますいまさらに我世更けぬとひそかに泣かれます、此頃年下の人を見ると妬けて〳〵たまりません。花輪さんからは折々お便りがございます……』

こゝまで書いたがペンを投げた。このインキは薬局くさくて仕方がない。あゝあれから松のみどりが二度萌えた、今年は私の肩あげもおりた、そして二人は互に遠ざかつて了つた。淡い悲しみと何だかすまないやう

な氣もする、……がら〳〵がらつと勇しく細谷の奥樣が御訪問。お宅からこゝまでをお俥とは驚いた、お召の半コートか何かで、大きな〳〵お頭一ぱい程の丸髷に結つてゐらつしやる、私はクリーム色のハイカラな半襟を頂いた。お歸り後、何故あんなにつん〳〵して居たと叱られた。

暮れ行く春の夕空美くし。おとなりの姉樣が二階の欄に凭つて、こつちを見下してゐらつしやる。顔見合せて莞爾した

『心の日記』に『心の秘密』に『マダム振』に、一再ならず中原の鹿を獲たる君なり、今來りてわがともがらと伍せんとす、珍客歡迎せざるべからず。

○三月（地賞）

赤坂　静江

三月五日　晴　今朝初めて鶯をきく。二聲きりで姿は見えなかつた。家にゐたよく啼く目白は田舍の祖父樣が呉れ〳〵と持つて行かれたが、此麼暇な時には小鳥も飼ひたい。裁縫も琴も休んで用がないから隱れて雜誌よんでゐたら、眼の惡るい人がと母樣に叱られた。

午前中三回ホーサン水で洗ふ。

お午過ぎ頭が重いから髪洗いたいとお話したら、眼に入らぬ樣ねておいでなさい洗つて上げると母樣が仰有る、椽に出てして戴く内に赤坊みたいに眠くなつた。乾しながら逗子の澪樣にお手紙かく心算だつたが。知らぬ間に筆の穂なめて唇眞黑にして仕舞ふたので止める、惡い僻と思ひながら中々直せない、筆でも何でもいつか竹を噛んで仕舞つて硯箱に滿足なのは一本もない。夕方クベックの叔父樣からミルトンの短詩集と美しい繪端書が届く。

六日　晴　久しぶりに敎會に行く。牧師も皆樣も復活日（イースター）迄には屹度直ると仰有つたが心元ない。歸りに病院にまはる。二號室のお婆さんの眼球が出たと看護婦が話してゐた、顔しがめたら入院患者係の鈴木先生が、貴方のが出たら私のを上げませふと仰有る、其麼恐い光る目と云ふて大笑ひ、常の事だがヨードホルムの匂が厭で堪らない、今日は暗室に入らなかつたが點眼水が變つた、家に歸つたら十二時過ぎてゐた。

曇つた爲か日の暮れが早い樣思ふ。所在なさに昨夕の本をよむ。廿三になつた日と盲目となつた時のが一番好き、自分も此儘光から隱されたらと思ふ。不斗横向くと柱鏡に右眼を四角い白い切で繃帯して紐を耳にかけた顔が映る。譯もなく涙がこぼれた。涼しき瞳の曇りなく映る其日私の頬にも美しい輝きが上らふ。

心重き日よ、冷たい風が窓の下の小笹をゆるがして柿の枝で鴉が低く啞々と鳴く。當も無く机上の本を繰ると即興詩人の小尼公の章が開いて中から細長い葉がおちた。レモンの葉だつた。香がよいので寄宿舍の椽にあるのをソットよく摘んだ其れ、學校出てやがて一年近く今迄本は開かれなかつた。前世同じ枝に飛んだ小

鳥の友の誰彼も皆別れ〳〵散つて行つた。こうして一日一日遠かり行く舊き日が懷しい。忘れてゐた本に大好きな人がゐるラヽ。あの寺院の圓柱にもたれて紫の花をかざして居たラヽの髮は長く美しかつた盲し少女の心を慰めんとて即興詩人の歌ふた詩は優しかつたが、ラヽは遂に光の世界を想うて止まなかつた。幸薄かりしラヽを思ひ鏡に映る淋しい俤に背いて又新しい涙が湧いた。誰からともなく待つた便もなくて今日も暮れた

可憐なるラヽの名も薄倖なるアヌンチヤタの名もその涙を誘ふに足らざりき、危いかな路遠きに。

されど眼を病みてベニスに還らぬ前のラヽが想ふはよし、『終に光の世界を戀ふて止まざりし』とは如何、作者に問ふ。

女子文壇、才媛雲の如しと稱せらる、水野仙子の飛躍は知らず一時仙子と雁行して進み來りし山田邦子すらいまだ『即興詩人』を知らず、



おとなしい子　千葉　叶谷春子

○休みの一日（人賞）

羽前　浪江

袴帶を縫はうと思ふて出したけれど、右の食指が痛むので、炬燵の中で草枕を讀んで居ると、以前四年許宅で使つた鶴代といふのが、此間娘の初祝衣を仕立てゝやつた御禮とて柴五把、蕎麥粉一升許、おし餅五つ蕪漬などを八月といふお腹を抱へて、雪を冒して持つて來て呉れた、昔のやうならぬ境遇を知りぬいての心

づくし、好意はどこまでも嬉しい、けれどそんな心遣ひは無用にすればよいのに、返禮にやる格好の物も丁度ない、城下には一里餘早速の間に合はない、仕方なく痛い指をこらへて、緋縮緬のつゝぽの袖口を二人の娘に縫つてやつた、婆やは妾の古羽織のといたのを出すから、そんな物馬鹿らしいといふと、鶴代は、千代樣は良い物でなければやられないものと思て被居ると笑ふ、何處やら欲しそうな、汚いてもよければ持つておいてといふと喜んで持つて行く、指が痛くなくなつたら人形さんの着物を縫うてやるよと約束する。

夜、婆やは早く休む、例の一人、針は持てないし讀書にも厭いた、痛い指を使はぬやうにして仙臺に手紙をかく、韓國守備に被入るやうならば、このまゝ此處に居らして頂だいと認めた、後、家庭日記を繰り返した上を見ても限りない榮華、下を見ても限りない淪落のある世の中、住みにくい世を、妾は成るたけ住みよくして住まう。

十時就眠、夢も見るな、

勝氣の奥さんと見える、夢も見るなとなぐりつけたように書いてあるのが恃もしい。『家庭日記』の榮華の人とは誰を指し、淪落の人とは誰をいふか、きかまほしきは。

【秀　逸】

○彌生のまひる

淺草　はつかぐさ

姉樣の嫁ぐ日もいよ／＼あと廿日あまりの日數と迫つてきた。何だかこのせつはわけもなくそわ／＼して仕事が手につかない姉樣は母樣と二人で毎日のやうにけふは三越へ行くのけふは白牡丹へゆくのあすは叔父樣のところへお禮に上らなくてはなぞと一日家に居ることはめつたにない。それがけふはめづらしく朝から家にゐるのでいつになく二人並んでしごとを始めた。

姉樣は普だん着にと銘仙のあらい縞のをぬつていらつしやる。振の燃えるやうな紅絹が暖い春の日光をうけて又なく美しい。春とは云へまだ月も彌生に改まつて雛壇もやうやうきのふ片付けたばかり庭には八重の水仙が今を我が世と咲き誇つてゐる。南向のこの六疊は隅から隅まで日が通して心地がよい緋縮緬や友禪のとり亂した中に姉樣の高髷に結んだたけながが目立つて白く挿した銀の平打がまぶしいほど光る。

あそう／＼御祝ひに何か上げやうかしらどうせ部屋住の身のたいした事も出來ないけれ共心ばかりの品上たいが買つた物よりも自分の手で仕上げた物の方が見ばは惡くとも誠心が籠つてゐていゝからふだん使ひのに紙入でもこしらへて上げやう。ついこの間までは一ツ違ひの姉樣とよく云ひ合ひなどして父樣からお前たちはまるで犬と猿みたいだつて云はれたのがやつぱりこういふ塲合こんな考へも出る處から見るともともと仲が惡いといふわけでもなかつたのかしらきようだいで目上と云へば姉樣ばかりだつたのが兄さまと呼ぶ人も出來たが何だか兄さまと呼ぶのはきまりがわるいこん

な事思ひながら夢中に針を動かしてゐる内に夕日はもう西へ沈みかけてあたりは次第に夕暮の色になつてしまふ。姉様は樂しかるべき新婚の日など聯想していらつしやるのであらう。重さうな高島田を心持かたげてニッコリねぐらにかへる群雀のあと見いつてゐるどう見ても島田は品がいゝ廿日すぎのはもうこはされて丸髷に赤いてがらがうつるやうになるのかと思ふと何だか惜しい樣な氣がした。

紅葉の『二人女房』をおもひ出す。そんなに默つてゝいやだお姉さんはと甘へたり、に嬉しいでせうとからかつたり。姉の結婚を目の前にしての妹の情は果してどんなものか。「寂しさ知りて麥笛を、霞の丘に鳴らせども、美し姉は靑麥の、靑きをわけてあらはれず」

○ひな祭り記

名古屋　胡蝶

三月二日、明日は上巳の節句ゆへお雛様をお祭りするお祖母様のお鼻のかけたお内裏様をお上座に母様のはようら／＼が大分破れて居る。それから私ので十二疊一ぱい、三吉がお餅をつきかけたので勝手へ出てお手傳ひをする、米の粉に赤や青や黄の粉を入れてねつていろ／＼の形に入れて押す、從姉の光様が青の鯛をこしらへるやらお手傳ひのお花様が眞黄の、おかめさんを押すやら羽織も着物も眞白にしてもう／＼大變な騷ぎお店から昌次兄様がいらしてやア始まつたナ僕も手傳ふてやろう、と皆んなして厭がるのを無理に眞中には入つて、僕が犬をこさへてやる、と赤や青で妙なものが出來た、光様が、戯談ぢやありませんよ北海道の火事をつけてきた馬ぢやあるまいし背中の赤い耳の青いこんな犬があるものか、何んてからかうので兄様やつきになつて、何んだいこんな黄のおかめや青の鯛があるかいちやんちやらお可笑しいやお前は何んだ福助かこいつはよささうだ一寸お借し、て私の押してるのを無理に取つて、鯛の目に入れる黑豆を目にして押しなすつたら大目玉の福助が出來たので皆んなふき出した、私が、金魚にお飯をたべさすとこういふ目になつてよ、といふたら、ヘンお前の押したのは何んだい飢饉年のやうだ僕の押したのは豐年だよ今度は何んだおかめか鳥渡お借し、いやよ折角人の押してるのを、ヘン置いてくれ折角自分のお面を作れば澤山だ、何んて兄様はいつも喧嘩ごしだ、おかめさんが私で金魚の目玉が兄様なら世話のない事よ、何んだと、其意氣組みが大根芝居の判官のやうよ、なんてお花様がひやかしなさる、いつもの事とてお祖母様も母様も笑つて被在る、末の弟が學校からかへつたので又一騷ぎ、大兄様が、騷々しいナ、と被仰るとボッと靜まる、だれでも大兄様には遠慮する、晩には宵節句ゆへ、ぼんぼりに火を入れてお店の者も糸もお春も三吉も家中一緒に白酒など頂て、今宵はお祖母様が須磨をお彈らへになる齒がぬけてるので歌がもれるけどほんとにお上手で、大兄様お得意の謠曲が始まるやら三吉が、いたこぶしとかいふものをうたふやら大賑ひ、今年で丁度父様が

なくなつてから三度目の節句だなど思ふと一人てに悲しくなる。

青い鋼黄いろなおかめは誰かがたべるのですか。あなたは勿論召し上るのでせうが、見たいのは頭から喰ひ欠くか、それとも尻から嚙じるか、その一つだ。

○やよひ一日

山口　酒向登志子

世は一様に彌生と成つた、私の躰もやはり三月といふ空氣にふれた梅は今が滿開、あの威高け〳〵しい香を毎日私は呼吸して居る、霜？あゝやはり冷たい、けれど佛様のお茶とうをかへるに寒の様につまむやうにして持つやうな事は自然なものでない、いつもなら一あたりしなくちやあ髪の結へないのが御飯がすむや直ぐにたすきをとつてまつさか様にすき上げた、これが寒なら頬つぺたは紫色ともなりかねまいものを春のめぐみかさかさの顔を上げても白は白強ひて鏡にぐちもはかないのが我乍らおかしい、否心が何とかいつてあざけつたやうに感じられた、けれど恰好よく早々と結はれたのでつい機嫌がいゝ、手を洗ふ折でも我知らず閉塞隊なんか唱つたのが今思ふと何だか馬鹿らしくて我心がはぐいい、そうそお姉様がマアきれいに結へた事と仰有つた時もほく〳〵顔で髪をいらつたてはないか髪がいゝの色が白いのヘンそれが何になるものか、こんな氣になるとまたお仕事がいやに成つてついすきな事がして見たくなる、といつて何こそこれといつて、力をいれて仕様とも思はないのに、彼の本この本をついはねて見る、と正午、午後はいかになんでも氣がとがめるので足袋のおせんだくと出した、さすが冷いけど眞白に成るのが嬉しい、それからお琴の糸を〆かへなどして居たらつい夕暮と成つた、光さんがお叔母さんと云つて私にくれた者がある、何？は文壇、よもや今日來ようとは夢思はなかつたので嬉しさに動悸は全身に起つて初對面の人にでも逢ふやうに打震えた、一には心臓病の故かしら、處が思ひがけもなく日記が賞には入つて居た、いよ〳〵私はかたく成つて開いた口が閉がらない、一寸坊ぢやあないわ、力がこもる度に子が産めなくて三年働いてためたお金を、私はゑんぎでもない、水桶がやつとさげられるなど何だかその女を見るやうで自分の作乍ら二度と讀み度なかつた、勿論高い脊ではないけどどちらかと云へば低い方へ數へられる位なのだもの、何立派な事だわ、いつてみてもけたいがわるいけどまあかりに私があの女のやうだつたらもう、とうの〳〵昔に土となつて仕舞つてるわ、厭な事！、でも人がどんなに思召だろう？つまらないとり越し苦勞の爲に他を讀む暇がなかつた。

夜はわざとお琴とつて好きな雪月花をさらつた、少し風邪氣なので聲はよく出なかつたけどさのゝ渡りの雪の夕暮がいかにも〳〵氣に入つて先づ〳〵氣が晴れた然し『呪はれたる人の子の運命よ、泣けばとて終にかわく涙かは』！どういふものかくり返されて大風の後

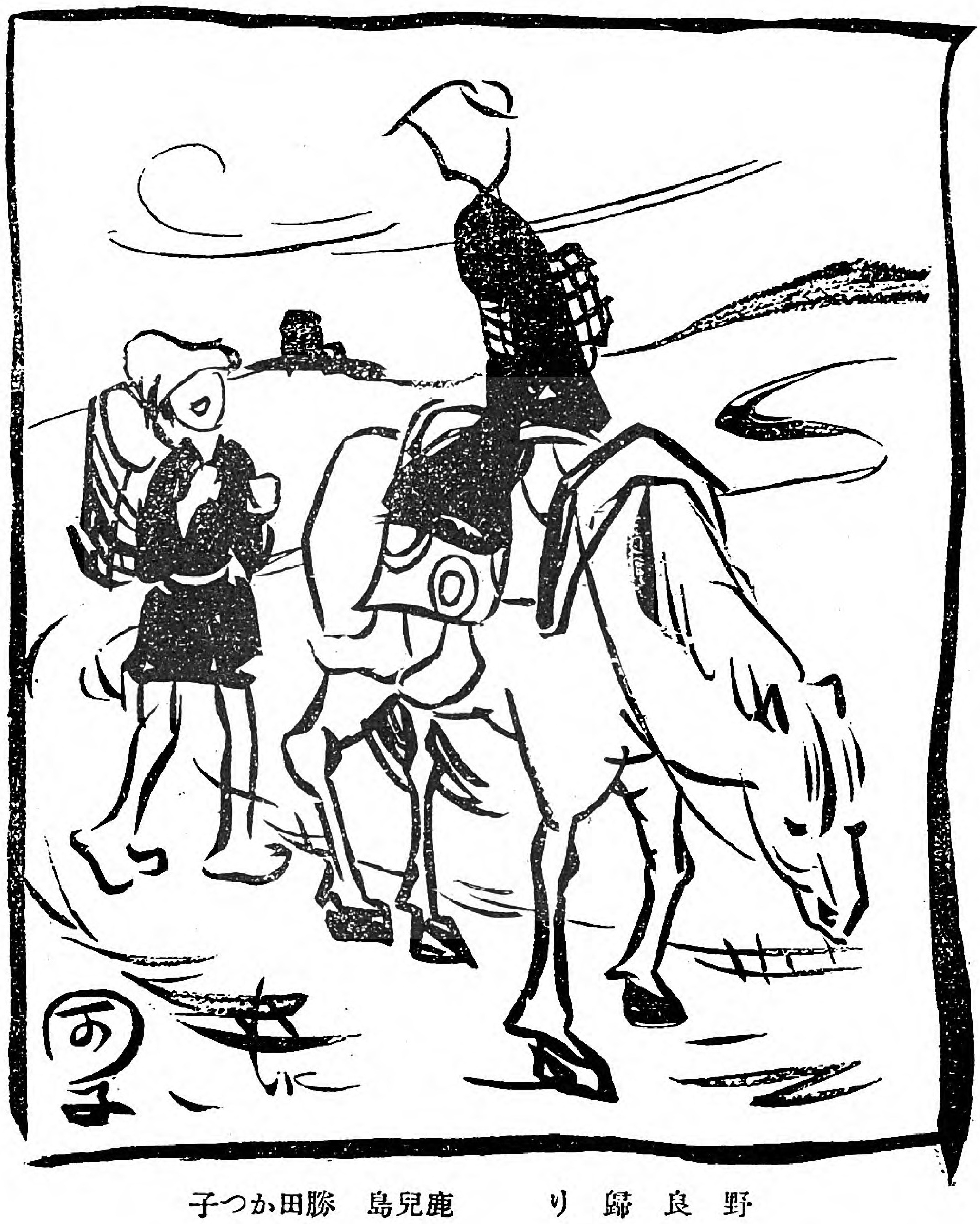
とも云ひつべく容易に寢つかれなかつた。

『子が產めない……程なら疾の昔死んでゐる』と仰しやつたが、もし自殺するとお言つたのだとすると、あなたも矢張淚は眼から出すんである。到底心から泣くをはまれ位しかし得ない。

○白髮の記

金澤　むらさき女

もう彼岸も四五日といふのに何といふ酷い天氣なんだろう家のまはりは雪でかこまれてしまつた。朝の飯がすんで茶の間で新聞や雜誌を見てゐると、髮結ひがきて姉樣のお髮をあげる。三疊の化粧室で鏡に向つてゐる姉樣の傍へ私も座つて、髮結ひの手許を見つめてゐる。『奧樣はおぐしが濃くていらしやいますから何におあげ遊ばしてもよくお似合ひ遊ばすし私も結ひ甲斐が御座いますよ』といつも形にはまつたお世辭をいふ姉樣は『何ね私はそんなでもないけれど妹は濃いのですよ。』といはれると私の髮にさはつて見て『ほんとに癖のないよいお髮で御座いますこと、是非一度高髷にお上げ遊ばしませよ。ね』と云ふので私は笑つて『濃いとはこんなにくづれる樣ですけれど……まこれを見て下さいな。』と髮の鬢をわけて見せると『まこの白髮はまあどうしたと云ふので御座いませうまあ』と呆れてゐるので『こんな髮して高髷に結つたら髷の上に縞が出來ますわホヽヽ』と泣くやうな笑ふやうな笑をする。『おいとしう御座いますね。どうかしてな



野良歸り　鹿兒島　勝田かつ子

ほる工風はありますまいかねエ』としみ〴〵といふ。私は妙に勝ほこつた色を示して『一生束髮で終るのよ。』と元氣なく云つた。姉樣は默つていらしたが鏡の面の目は濕つてゐた。それからは靜かで髮をとく音ばかりしてゐた。私はガラス窓を透して盛に降る雪を見た、ガラス戸の緣にだん〳〵雪がつもる。私の白髮もあんなにして年々ふえてゆくのかしら……。

自分は長いとこの人を男だと睨んで沒書に通したと同じにまた疑ひの目を以てこの白髮の記を虛僞の文ならずやと言ふを憚らぬ。金澤の髮結が純粹の東京辯しかも遊ばせ言葉を使つてるのからして冷笑に値する。妹の白髮を知れる姉が妹の毛はいゝよと間違つても自慢をする筈も無い。女にとつて無上の苦痛なるべきしらがを、昂然として一生束髮よと言ふ位で慰めらるゝ涙なら知れたものだ。

○かくさぬ心

愛知　華影

三月一日　沼津へ避寒に行つて被居る伯母樣へ手紙出す、女子文壇がくる本屋の神さんが何かと話して居るが唯いゝ加減にハイ〳〵と云つて口繪を眺めて居る。本欄もよい、小說には月靈子さんと云ふ人が出て居る懷かしい。私は名古屋とか愛知の人が出て居ると何處の町か知らと文によつて想像するどこまでも。美濃葛の葉と云ふ方の日記文はじめ一二行讀んで。姉が岐阜へ行つて歸つて來て私に話した事を思ひ出して一句〳〵と讀んだ、私は嬉しかつた、胸がさわいで居た、何か紛失物が出て來た樣に急ひて姉に見せた、そして說明した屹度さうに違ひない、可愛らしい淸ちやんもあるもの、お正月の六日にはしう子樣が東京からお出でなすつたもの、とみ子さんに違ひない、今度手紙出す時にきかう、廣告の八字髯には吹出して了つた『母樣八十八錢あれば髯をはやして紙のピアノをならかしますよ』と笑つた。

三月二日晴天、向ひの酒屋で客がくだを卷いて居るのを聞くともなしに金錢出入帳を引出して算盤の稽古をし樣と、雄二學費……電車回數……瓦斯代……田租……とずん〳〵にやる內遲くなつて間違がつて失舞つたから五本の指でガチヤ〳〵として居るとがち〳〵と戶口があいたひよいと顏を上げるとぷんと酒の匂其顏其目今まで向ひにくだまいて居たのが家へ來たのだ私は恐ろしさに無茶苦茶戶を開けて佛間へ飛び込みぴたりと閉ぢて持つて穴から覗ひたどん〳〵と奧へは入つてほつと息して恐ろしい物見たさで座敷へ出て椽がわつたひに裏へくると母と男に何か話して居る下女も鍋をさげたなり見て居る後をむいた目がギヨロリ、私はかくれた、後で聞いたら私の逃た樣を眞似たと、あゝ驚いた、夜仰いて指で輪を出來して目へ當てゝ其中から見えるだけの星を數へた、が途中に解らなくなつて仕舞ふからやめた。

葛の葉は篠田とみ子さんだが、あなたと御親類なのですか、一人合點てうれしがつてゐてははたが困る、宵卷の客にはちつとは困つてもいゝけれど。

○お留守居日記

雪

白山薄

二月十六日、今朝八時四十分上野發の急行で仙臺へお立ちになつた。私は電車で廣小路に下りて買物をしてステーションへ行つた時はもう發車前僅かに五分、お姿が見えないのでどうしやうとマゴ〳〵したが驛夫が頻りに騷ぐ。大急ぎて入場券を買つてあてもなくプラツトホームへ馳けて行つた、その時フト顏をお出しになつたのでホツト一息、窓からお渡して二枚の電報をいひつかつた。暫らくそこに立つて行く汽車を見送つた。再び窓にその人のお顏は見えなかつた、それを悟らない前ならば恨んだかもしれない、十日あまりもお留守になるといふのだもの…。お早くお歸り遊ばせ!!!それも昨日までに二三度も云つた、けれども氣がついたから、今朝は、行つていらつしやいまし!!!といつてお辭儀をしたばかり。

十七日、晩に旅なる君にとお手紙を認めた、淋しい心懷しひ想ひ、それらの數々は少しも書かないで、氣味よしと笑ひて往き給ひし人を尙かつ…といや味をいつてあげた。風が吹いて寒い夜を雪の國の旅寢はどんなかとさすがに案じられて。

十八日、昨夜は恐ろしい風の音によくも眠られなかつた今朝、お手紙が仙臺から屆いた、嬉しかつた、車中の感想や何や細々と、寧ろ意外であつた、早く歸つてなどゝ決していふまいと思つたのに、つひ書かずには居られなくなつた。

十九日、松島の日の出の景色の美しい繪端書が來た。秋山樣ごらんになつて、新妻に初めて別れて見たのだものとお笑ひになつた。夕方これから、千代子樣と女中を連れて久し振り淺草へ出かけますと書いて出した

二十日、今日はお便りがなかつた。鹽釜から船にお乘りになつた筈だ、海が荒れたのでは無いかしらと胸が騷ぐ、お手紙でもと外へ出て見た。門の杜に倚つて寒い月をヂツと眺めた、冷い風が身に泌みる。

ああ新人……。

○一日二日

福島葉留子

一日、とう〳〵風をひいてしまつた、昨夜うたゝねをしたばちだ、髮の毛が一すじ〳〵後にひかれるやうに思はれる、おまけに胸がしく〳〵いたむ、病院に行たいけれどもあの人が居るうちはいやだ、死んでも行きやしない、午後のあかるい障子にはた〳〵と鳩の飛ぶかげがうつる、柴賣りの大きなかげが寫ると、すうと暗くなつたそれも暫し、又もとのあかるさにかへつたふと裏の川端で鳩に豆をやつて遊んだ時代が思ひ出だされてならない、其時分の友達のなあちやんはもう二人の母樣になつて、

大きな方がもう『鳩ぽつぽ…豆くわしよ』と遊んでゐる、早いものだ、

夕方雨が降る、ぬれた前倉の壁に添ふてハモニカを吹きながら通る人を見る。新らしい藍蛇の目の傘、くつ

きりと白く浮いた顔、茶がかつた御召の半コートの姿ほんとにいゝと思つた。

二日、風をひいたのをかづけに十時頃やう／＼裁板の前に座つた、毎日黒いものぢゃ全く、はり合ひがなくなる、籠のカナリヤがむやみに鳴き出した。黒い猫が其まへにかしこまつて居る『とりたけりやとつてごらん』、とぽんとほうつたものさしが正しく猫に命中したニャンとするどくないて立ち去つた、母様の縫つていらつしやるもみうらの衣がまぶしい程、日に光る。

夕方、久し振りでつゆさんにあつた、結婚なすつてから始めてあつたのでなにを話していゝか分らない。洗ひ髪の亂れた丸髷、緋鹿の子の手柄も私には痛ましく思はれる、良妻賢母主義が破壞されずに家庭の人となつた露さんは幸福な人である、娘が妻になつて而して女は老いてゆくのだと思ひ出し泣き出したくなつた。

猫に尺を投げつけてニャアンと鳴かせたお孃さんは、夕ぐれ倉の壁にもたれてハモニカを吹くお孃さんである。お母さんのしつけがさぞ骨だらう。これは失禮。

○三月二日

越後　うつろ木

今日は母様に代つて私が行なければならぬ、着物を少し華なのに、ゑりは赤色の勝つたのをと、いち、いち世話やかせて、やつとそろへた、出歩のは厭だし妹がいゝに、お天氣でもう外に遊びに行つたし、惜い、圓窓にもたれて、庭と云ふもほんの猫の額ほど、寂しい櫻も咲ない雨だれの下の南天はよろよろして幾尺と積つてゐる雪にしつかりかゝへられて、實は眞赤に雪の上にこぼれてゐる、それがちやうど、血を吐た樣だ、あゝ！若いしかも十八やそこらで、逝なつた、兄様、久様、百合様皆なこの様な血を吐いて、しんに花やかな死様、つうせつに、胸を刺れたお方は幾人入らしやいませう、成るなら私もとねがつたが、遂に赦されなかつた、生ある内は、人なみに女らしくして行ねばならぬのだろうか、上べばかし、優しくしをらしくよそほうたとて破れた心だもの、うしなつた心を金にいやそうと、こつ、こつ、働いたつてきつと、お金がたまれば今よりもつと寂しい便り無い思ひは、朝に夕に迫つて來よう、かう思ふと堪られ無い、お湯がわいたからそれから髪結さんを待つてると、母に呼れて驚いた、をや、綺麗に出來ました、さあ、びんをかいてそんな手つきではいけない、上びんにして、そら前髪がゆがむもつと櫛をねかして、とおつしやる通り、やつとしまつた、いちよう返しは厭だ、若々して何日か他家様へ上つた時、後で十八九だそうなと評をされたから、ぶくぶくふとつた者は、やつぱりいちよう返しが人の目につかないと母様はおつしやる、みつとも無いと承知してゐても、みにくいと、まと面に言はれると、なさけ無うて悲しくなる、けど、どうせ私は獨りなんだものやつぱり油氣無しの束髪が一番いゝ。

われ三月十六日、信濃より越後に出て雪を踏んで蒲原におオをたつれ

轉じて早蕨を柄目木に訪ひ、のち雲井の雁を飯柳におとづれしに、君はすでに遠く阿賀川の上流に去りてかへらず、春花秋月二十四年のうらみを開くによしなかりし。うつろ木は雲井の雁の變名なり。

○島田の一日

韓國　富永清子

今まで庇てやつとおでこの難をのがれて居たのに、恁うして素破抜かれては、あつたら美人も臺なしになつて了つた。苦情ばかり言つて、鬢も前髪も思ひ切り出して貰つたので、稍不平もなかつたが、すぐ本町まで使に行けつて仰有る、『あら！厭や！』と思はず出たら『何が厭や、お前の島田を誰も氣付けて見る人はないよ』と言はれたので、不精々々に銘仙の上から、矢絣の縞縮緬の被布を着た。『母樣これてよくつて』と聞くと、髮結さんが『あゝほんまに、えゝ孃はんが出來ました、まるて見違へる程だつせ、ハイカラところつと品から違ひますよつてな。はあ！』と矢鱈に嬉しがらせを云ふ。家を出るとすぐ横町の共同組から、仲士が澤山出て『お嬶出て見い島田が通る』などと大聲で歌つた。島田に結ふと此麽に馬鹿にされるかと口惜しかつた。逢ふ人毎に珍らしさうに頭を見て行くので、耻かしくて、用事を濟ませて急いで歸つた。

夜風呂に行く。私の髷が衆目の焦點となつてゐる。『あゝ良い格好ね、』『根掛の良い事あれなら大分したてせう本當に綺麗なこと』『私も此度島田に結はふか知ら』『いやあなたの樣な脊の低い人は駄目』『さうね奈何しても高い人てないとね』などゝ四面の人の話題が皆島田に歸してゐるので、私の鼻もいさゝか高からざるを得なかつた。さて薄化粧さへほどこしたはいゝが、鬢を如何な風に梳つてよいやら、折角櫛や筋立までも袂に入れて來たのに、何の功をも奏せなかつた。床に就くと髷が下に引くので、中根がつつて痛くて痛くて、奈何しやうかと思つた。母樣丸髷は痛くはないのですかと伺つたら。最初は痛いが慣れると何ともないと仰有る。私迚此麽に痛いのを辛抱して、習慣をつける勇氣はないが丸髷ても結ふ樣になつたら、どうするだらうかと先の事が不安になつた。

肩上をおろした記、島田にいつた記、千篇一律、評するのがもういやになる、それよりかヨボ相手の朝鮮は朝鮮らしいとこを書いて見せて下さい。

○家事の練習

安藝ひだ子

三月七日、晴れ、

お座敷の方へ出す、お總菜を、嫂樣から言ひつかつてせつ〳〵と煮てゐると、勝手口から、四十位の男が入つて來た、聲が聞えてか、福波さんが出て入らして、『やあ！、まあお上り』といつて置いて、今度は私の方に向いて『孃さん、あれは品立寺からの使てすからお飯を食べさしてやつて下さい』とおつしやつたので日雇ひか、下男か、だらうと思つて、其方はたけに言ひつけて、私は又、外の事をしてゐた。

『やあ、これは失禮、私が奥に居たものだから、内の者は何も知らず、失禮しました、まあ上つて下さい』突然兄樣のお聲に、振りむくと、使の男は、臺所の上り端に腰かけて、自分のお辨當を食べてゐる、お膳にはお飯ももつてなけりやあお茶もついてない。はつと思ふたけれど、今更行て、改めるのも變だし、モヂ〳〵としてこつそり嫂樣に聞いて見ると、壇家の人で有つたとやら、極り惡い、遂々嫂樣に出て頂いてすんだ、使の人が歸つてから、さん〴〵兄樣から、お小言をもらふ、たけも惡いけれど、之は私がうけ合ひ乍ら、あの薄馬鹿に任して置いたのが、惡かつたので。あれや、これやで、ついお鍋の下しやうが後れて、煮物が焦げついた、今日は余程日が惡いと見えて、朝から失敗ばかり、『だから言はぬこつちやあない、何ぞいふと、學校てはといふけれど、實地に當つて見なければわからないだろう』母樣からもお小言を頂いた、嫂樣は、何ともおつしやらないけれど、むやみと悲しかつた。あ何日になつたら。

なるほど運の惡い日だ佛滅てもあつたのでせう。

〰〰〰〰〰〰〰〰

○古き日記帳より

横濱市　小田切錦子

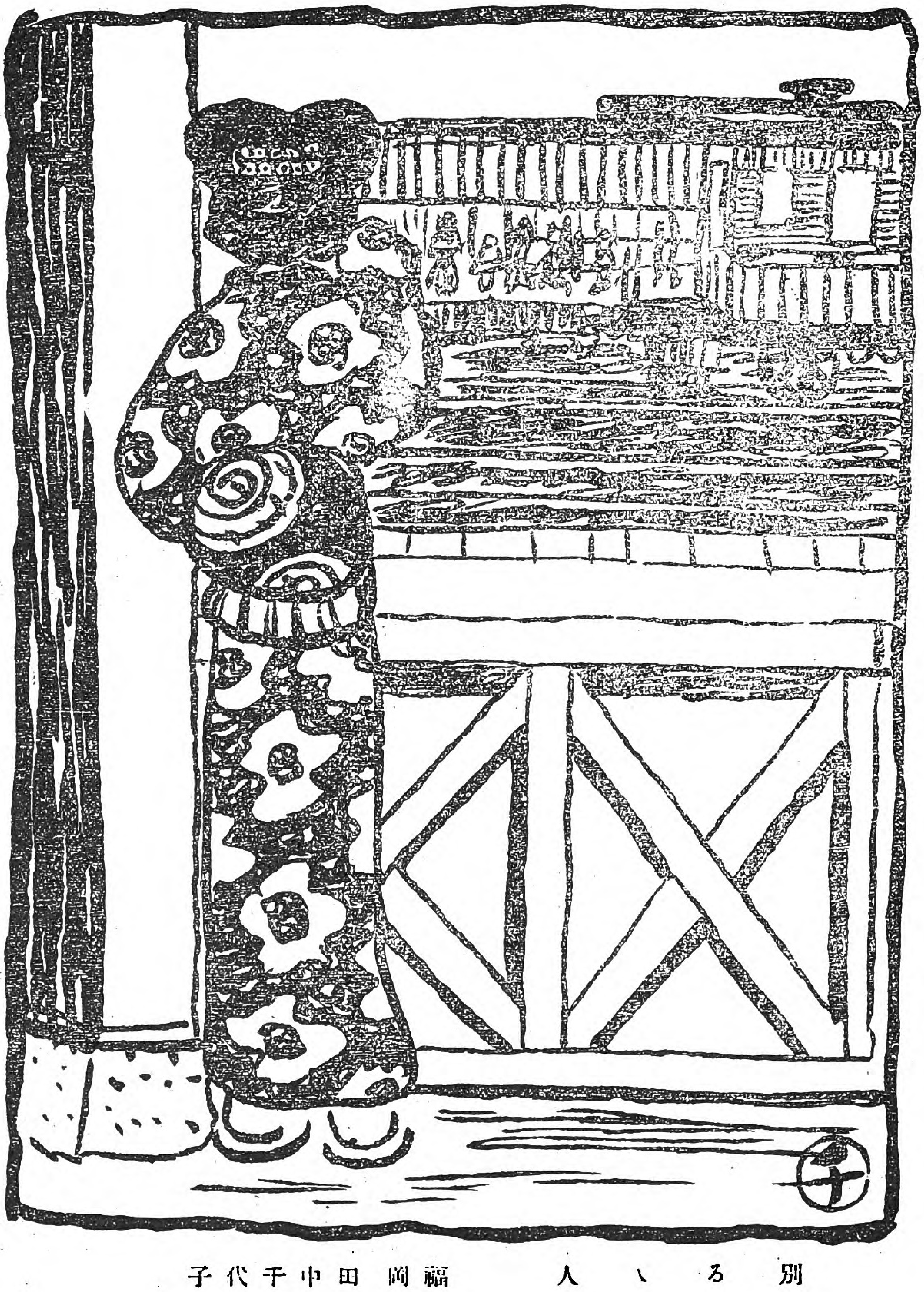
（錦々やお隣りの方が遊びにいらしたよこれ〳〵）とお祖母樣に揺られて漸く目が覺た、雨戸は何時の間にか明けられて眩しい程日の光がさしこみ、裏の竹藪から樂しそうに雀の聲が聞へる。（オヤ私斯樣に寢坊して）と重い夜着を跳除け、急ひで洗面場へかけつける、お勝手の時計が七時五分過ぎ、流石の私も少々極り惡いので、もぢ〳〵してると牧やが呼びに來た、思ひ切つてお座敷へ行く。文さんが綺麗にお髪上げして、母樣にいろ〳〵と學校の事を聞かしていらした、お話しが餘り面白いので、午前は此室で終り。お晝飯は文さんと、大好なアヘピて戴く。』午後二人で學校へ遊びに行く、日曜だからと思つて來たのに運動場の騷々しい事、そつと覗くと先生と生徒が入混つてテニスの眞最中、遂々文さんは引張出された。皆が珍らしそうにぢろ〳〵見るので、私はずつと離れて櫻の根元に腰を下して倦かず眺めて居ると、後から輕い靴音がした、オヤと振返つた時一人の先生が、白いシヤツ一枚になつて、ラケツを肩にしながら、何か小聲に歌つていらした。私はスツと立つて丁寧に挨拶した――夜お父樣は宴會にお出てゝ留守、文さん庭口からいらつしやる、算術だけ彼地より進んでるので教へてもらふ、お八つは餅菓子に果實母樣皮剝いて下さる、明日のお仕度をして母樣と三人でお湯に入る、文さんが（私も此家の子だといゝわね）と、おつしやつたので、（ぢや今夜からお泊りなさいな）つて皆で笑つた、上るとお父樣お歸りて渡邊さんに錦の事頼て置いたとおつしやつた。お宅から迎へが來たので、文さん明日は誘ひに寄るからと固くお約定して、お歸りなさる、暫らく遊んで私も床に入つた、何故か？永い間眠られなかつた。先刻の先生は前田廣海とおつしやつて明日から私の教へを請ふ御方――
一字を加へず一字を削らず。

○お守りしながら

大分　原田澪子

洋服の儘澪を抱き取つて、室内を往來し乍ら、『そうれご覽、此の樣。一日家に居る者が何も仕ないで遊んで居るから。ねえ澪。』と獨り言し　被入る。夕飯の仕度して居た私は情なく思つたが、明日から見て居て下さいと口の中で言つた。
夫を送り出すと乳を澤山飲ませて、夫の兵兒帶とチンチ蒲團と一緒に抱いてお隣の小母さんに負はして頂いた。始めて負はれたけれど澪は音

しくスゥス可愛い息をしてゐる。縛られた様て首から胸へかけて窮屈て〳〵と云ふ。そつと背を叩いてやるとまた乳房に吸ひついて、ヂロ〳〵堪らないけれど、意地になつてさつさと洗物やら片つけ物をする。一通りすむと袷付け許りになつてゐた羽織を出して縫ひ始めた。突然背でヒヒイ〳〵と二聲したので、兩手を後にまわして、おゝ〳〵と云つてゆさぶつてやる。半分許り袷がつくと余り音無しいので『淳ほれんねしてるのかい』と首をねぢむけて窺たけれど見えないので、立ちあがつて鏡の前て躰を斜めに淳の顔を寫して見たら美しく眼をつむつてゐた。そつと足に障つて見たら冷へ切つて居るので驚いて、兩手でしつかと握り乍ら暖めてやる。けれども中々一寸溫まらぬので負ひ乍ら火鉢の上に兩足を少し許り出して、立ち乍ら傍にあつた雜誌を拾ひ上げて讀む。やつとの事で仕事がすむと、淳がシッ〳〵云ひ出したのでもうお乳が欲しい頃だらうと思つて時計を眺めたら、やがて三時間許になつて居る。急いでお小用をさして見たら泣きもしないで素直にした。おゝお淳さんはいゝ子と賞めて直に乳を欲ませる。余り出るのでコヒョン　と私の顔を見る。



別るゝ人　福岡　田中千代子

明日は私等の爲に記念日でもあるし、渟は生後五十日に當るので何か心許の祝をせうと思つて、馳走の獻立を書いて見た。
うらなひは中つた。が赤ん坊の足をうしろ向きになつたまま火鉢であぶるとは新智識の奥さんだけあつて賢い。

○ねくたれ髪

岩代　阿部松香

下女が、氣づかひながら開ける、雨戸の音さへ、百雷の響のやうに、ガンガンする。此四五日、あまり寒かつたので、私の病氣も、にはかに重つたが、家中の大心配した程でもなく、昨日の午後から、よほど快くなつた。潔僻の私を察してか、清が『今日は、およろしいやうで御座いますから、お掃除致しませう』と、赤い襷がけのまゝ、手をつく。『あゝそう』と、身を起して、床をはなるゝ途端、鏡にうつつた我やつれた姿、まあ毎日、氣にしてゐた丸髷も何もありやしない、このねくたれ髪はと、思はず涙がこぼれた。清潔りした室に、また、仰になつてやすむ。あまり溫かいので障子を開けたまゝにしておく。流石、春をあざむかぬのどかな光りは、碧い空に、みなぎつてゐる。見つめてゐる目が、ボーとなつて、碧りがうすくなつたり、濃くなつたりすると共に、氣持までスーツとぬき去られるやうになる。

ぬぐふたやうな空だのに、ふと、一塊の白雲がゆるやかに、東をさして來たと見る間に、だん／＼擴がつて消えてしまつた、何だか持ち去られた、私の魂じやないかと、途方もないことを考へた。

小鳥が一羽、南をさしてとんで行つた。

外はどんなに溫かだろう。コチヤ／＼と洗ひすゝぐのと、トン／＼と張板をたゝく音とが、せはしく聞える。

『我妹子がねくたれ髪をさるさはの池の玉藻と見るぞ悲しき』それは青き水の中、これは白き床の上、一は死し、一は生く……。

○赤坊の生れた記

膠澤　わかみどり

三月六日、夕べからお腹が痛み出したつて姉樣。男だつたら、お祝ひに帶を一筋買つて貰ふ約束、はてどつちかしら。男の子なら私許りでなく家の爲にも大喜びだけど、オホ・『お前何してるの大變いぶる樣だよ』をや／＼これはうつかり赤坊の事許り考へたものだからついいぶしてしまつた。湯の沸いた頃產婆も來た、次の產室で姉樣のうなり聲が聞へる未だ生れないかしらと思つて耳をすます時計を見る、オギヤアとたつた一聲聞えればいゝ男は一聲だと云ふから、『みどりさんたらひにお湯をぬるくして持つてお出』『もう生れて』『あゝ直き生れるよ』靜かに又彼方へ被居る、そこで私はなみ／＼とぬるい湯をたらひに入れて持つて來たとたんに、オギヤアとたつた一聲であつた、あゝと思つて何とは知らずはつとする、ばあやへ渡して座敷へ行く母樣が被居つたお顏は笑がくつれて輝やいて居た。「男？」「あゝそうだよ此んなお目出たい事はないね」、「お母さん帶……」とつい口をすべらして終つた。「何だね其れ所ぢやないよ」と叱られちやつた。と「お孃樣赤ちやんへ行つて御覽遊せ」とばあやが云ふのでそつと行つて見る、姉樣はすや／＼とおよつて被居つた、赤坊も綺麗なふとんに包まつて赤い顏をして眠つて居る、まあこの鼻のひくい事一寸つまんで見樣かしら義兄樣や姉樣のは可なり高いのにオホゝ、何だが見たくない顏だ事。

自分の弟に孝といふのがある母に抱かれてゐるのをのぞき込んでは「こいつ鼻低いね」よくいひ／＼したが、あなたも御多分にもれずに「見たくない顏だよ」とは御挨拶なり。

○病氣日記の內

播須賀　君枝

今日の暖かいこと、すつかり春めいて來た、お庭では初鶯おぼつかなさそうに囀つて居る、めづらしく好い日曜なので今を盛りの、梅見に行く人が、ゾロ／＼うらやましくて／＼、雨がザア／＼降ればよいと、母樣に云ふと、大變叱られ悲しくなつて、夜着を、かぶつて眠つてしまつた、目をさますとマアもう四時、よくれた事、夜島樣が枕元に藤村集を持つて來て下さつたいつも／＼御親切に、けれど、御親切にして下されば下さる程私は悲しくて其を抱きしめて涙の乾く迄泣いた、もう一層の事病氣が重くなつて今の十七といふはなやかな年に此本抱いて此儘死に

たい。

二日

妹達がおひな樣飾ると大騷ぎして居る今年は私が寢て居て見える處に飾つて頂く、まるでおひな樣の番人の樣小島樣のおば樣が、お見舞にきて蜜柑下さつた、枕元の蜜柑が三つへつて居た、私の眠て居る間に弟が持つていつたのでしよう、あんないたづら坊はない、あれて僕は海軍士官になるんだといばつて居る、末の弟は未だやつと七ッになつた計りでまけぬ氣で僕商船に乘つてロンドンにいつて姉樣に人形買つて來て上げ樣だなんて、皆口の樣にうまく立派になつて、呉れゝばよいが、聲聞あまりれたので少しも、ねられず勝手の方でガタ〳〵と音がするのでもしやと思つて耳すまして聞くと何の、ねずみのいたづらに安心してット〳〵すると又弟の寢言明日起きたらさん〴〵叱つてやりましよう。

親切にされゝばされるほど悲しくなつて死にたくなるのはどうしいふわけでせう、嬉しくなつてよくなりさうなものだ。ね言をいふ弟さんを起きたら小言を言うてやらうと待つてるはく情な姉さんだからそれも尤か。

○嬉しい日記

直江津　磯巾着

三月五日　雪　餘り氣がもめるので八時に先生の宅へ出掛けた誰もお見えにならぬ私一人てチク始めた夫れても出來るか知らと案じてたけれどおかげ樣て物になり相だもう下着の袖口にしれば終るのだものけれど三枚人形竹にかけたら重なるか知らそこらがピッコしたら——こんな事考へると胸が早鐘をつく樣七人も並んで被居る年下の方に對して面目ないと思ひみだれて居る中に袖口は出來て了つた「先生出來ました」自分が云つたのかと思ふ程小さな聲で云ふ「どれ竿に掛てごらん緋は華かな物されえ」と被仰つて褄に目を下しなさる私はギヨッとした、手早く竹に掛るアア映り良い事え」「裾模樣のいゝ事ね」「お見事に出來たわ」なんて話し合つて被居る皆樣のお聲なんか耳にもせず生先の調べて下さるのを冷々して見て居る良く重りますよと先生が私を振り返りなすつた‥時其時始て自分の心にかへりました胸のどうきもどこへやら嬉しさがこみ上げて涙さへ浮んで來たそ〳〵して始めて褄や袖口にさはつて見た納戸色紋羽二重に緋ちりめんが二枚何てうつりいゝ事暫く無言て座して見上げ見下しゝて居たあの姿のいゝはあちやんがお召しになつたらどんなにお合ひだらう九日間辛苦した甲斐あつて先づ〳〵良かつたばずすのが惜しかつたけれどどきと子樣にお手借りてたゝんだ九十七點頂いて逃げる樣に家へ歸つた。

くすだま

△牛の糞といふ束ね髮の頭をコバルト色の手拭て包んて白い手甲はめた柴賣が來た、眉と目の間の長い、そして鼻はつぼみ松茸を縱に切つて附けたよう、こい人屹度お嫁さんを可愛がるやらう。（鈴子）　評曰奇拔なる觀察といふべし。

△兄さんが、おすましさんてれてれさんこんにや、さんと劍舞を坐敷でやつてる、『まだ五十點にも足りないわ、エヘン』と言うてやる。（はま子）　評曰何だ男のくせに。

△『そも〳〵熊谷禿あたま、頼朝公のはげ頭、板東一のはげあたま』と唄ひながら垣根の外を通る兵隊さんがある。（八重子）　評曰熊谷の强いをはまつたく板東一だつたけれど、頼朝公はながあたまの間違てせう。

△水つばながほたりと絹の菜の上へ落こちた嘗めて見た、お味が無い、嗅いて見たが匂はない、はなは全く無味無臭よ、（てん子）　評曰博士論文の價値あり、貴ぶべし。

○よき日

澪子

今朝洗つた髮が思ふ樣に落ちたので心持ちが良いさら〳〵と肩にかゝるのを其まゝ南受けの日あたりのよい窓の下て新聞を讀んで居ると次の間て御仕事をして居らつしやる姉樣が突然澪ちやん靜に〳〵早くいらつしやいとちいさいこゑ私は不思議で堪らないがそつと襖んあけては入ると前のお庭の泉水の中程に有る石の上に奇麗な鶺鴒が尾をぴん〳〵動かしてはそろ〳〵あるいて居たが又元の處へきて水を呑んて居る、其ののんどりした樣子に、あたりの靜さが又、町中とは思へぬ位。私は思ふた氷

古とはこんなもので有らうかと、じつと見て居る私等もいつかこう古い〳〵昔の人にかえつた樣で何共しれぬ床しい〳〵感がした。

○ポカーン日記

筑前　笹　つ　ゆ

（一）

「御姉樣居て、」「ゑゝ御はいんなさい」見ると髮は御かつぱさんにして立田の紅葉を染出したメリンス友禪の被布を着て居る。色の白いのに胸の緋房がはえて常より一しを可愛らしい。毛糸をいじつて居たたかちやんは「御姉さん」「ゑゝ」「ポカーン」「あら外では茂村の笑ふ聲がする、「たかちやんなぜ髮結はないの」とつかぬ事を問ふ。思た事がうまくいて目を細くして居たたかちやんは「あのれー昨夜から風引いて。

（二）

お頭が痛いので髮結ふといけないつて御母さんが結つてくれないの」「おやあんばいが惡いのそんなら姉さんがいゝものをあげようか、」「ゑゝ頂戴」私は立つて美しい蜜柑を手に持すると「御姉さん有難う」と美しい髮がほゝにかゝる。「御姉さん」「ゑゝ」「ポカーン」又ゝ、、、敵打と「たかちやん」と「ポカーン」と返り打。窓に寄りて雜誌を見ていらしつた兄樣は本を伏せて「ゑらい賑かだれーポカーンの大安賣でも始めたのか」「あら御兄樣ポカーンの大安賣なんか出來ない事よ」

（三）

たか姫少しふくれると、兄樣は笑ひながら「そんなら兄さんがあやまる仲なをりに今夜たかちやんと姉さんと散步に連れて行つてやろう」と被仰ると現金なたか姫、もう目を細くして一連れて行つて頂戴御姉樣いゝでしよーあのれ御兄樣」「なーに」「ポカーン」

○日曜の大仕事

京都市　要　司　村　福　子

朝起きるとすぐ、北野のか代樣から梅がほころむで來たから、寒いけれど見に居被しやいと、お手紙を戴たいたけれど、今日は日曜をあてに、大仕事を授かつてゐるから、敎會へも行けるかどうかと思つてゐる位。お祈りして御飯を食べてから、髮を丁寧に梳いて、お返事を書き、ついてに昨日の日記の殘りも書いて終ふ。さて、大仕事、兄樣の大島の綿入一枚だけれど、今日はこれが中々大儀で：：：お友達も居被しやるだろう、それに下手だもの、一寸前途が危ぶまれる。ちやんと裁つてあるから、表の袖からーとやりかけたら時計が十時を打つた、をやもー誰も誘つて下さらないだらう、實際今日は誘つて下さつたら行かうと思つて居つたのに：：：：：仕方がないから聖書を出して、路加傳六章から、四十一節の「汝兄弟の目にある物屑を見て己の目にある梁木を知らざるは何ぞや」迄讀み出してゐたら、弟が姉樣お手紙つて持つて來た。誰からだろうと思つて見たら、まあおなづかしい、三千子樣から、嬉しくつて、急ぎ封切つて拜見した。いつも乍らお優しいお言葉、遠くに離れて居つても、向ひ合つて話してゐるような心地がする。それにお手跡の美くしい事、お家流にさらさらと認めてある、しばらくは恍惚して、お返事も浮ばない、本當に私がこれだけ書けたらと、今更乍らお羨しい、お返事は仕上てから書こうと、急ぎ縫ひ出した。

○寒地日記

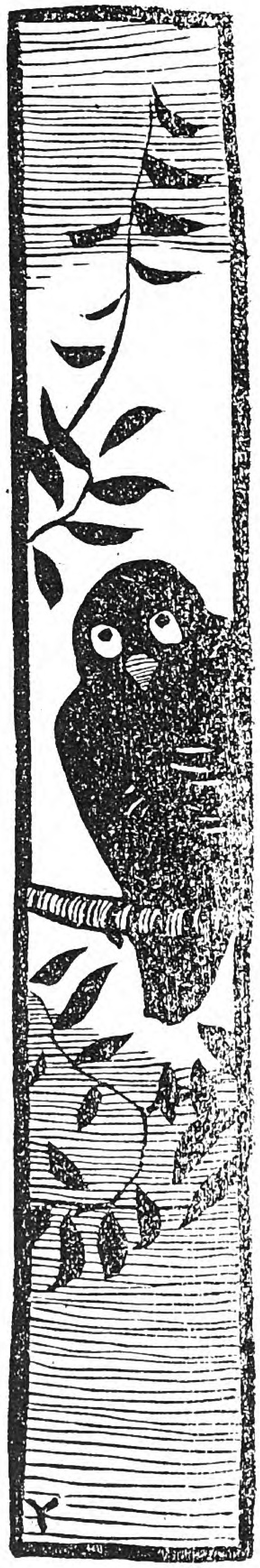
宮城　沼　倉　馥　子

二月八日。

コウ〳〵〳〵と長く短く鷄の聲に譯のわからぬ夢を破られた、昨日卵を休んだので、今日は早く産むのだつたなと、わかつて、離れ難い床を離れ戸を開けて先づ餌を與へる、寄り集まつて拾ふ樣はほんとうに愛らしい。フゥちやんの死んだ當時は、稍もすれば石を投げつけたかつた。空には古綿の樣な雲が、彼方此方に浮いて居る、風はないけれども雪の上は寒い、二足々袋をはいても雨戸を繰るに足は冷や〳〵する。御飯後、雪が降つて來たけれど、何時も汲まればならぬものだから、フランの頭巾キリリとかぶつて、水汲をする、棹が凍つていたい、手が赤く、蟹の甲の樣になつた、よくなんかに女子の指の事を白魚の樣ゝ書いてあるが、私の指も白魚と云ふかしら?、いやこうした時はまるて、成長損れの人參の樣だ。手桶に波々と汲んでさげる、と身を縮められる樣な、太くされる樣な感がする、だから私は肥えて居るのだろう。

論文

編輯局選



○子の恩（地賞）

大分　原田澪子

子をもつて知る親の恩と云ふ諺がありますが、私は子を持つて親の恩を知ると共に子の恩を知ると云ひたいのであります。

私は現に生後四十一日餘の子供に大なる慰藉と敎訓とを與へられて居ります。そのかわりに、勉强も出來ず、粗末な容姿をして、嫌な仕事を致しますけれど、少しの苦にもなりません。

世間にはよく、子の恩返しを期待してる親があります。そしてその子が意の如く成りませんと、親不孝者とか、今迄馬鹿を見たとか申します。勿論不孝には相違ありませんけれども、養育する間に報ひられた子の恩を閑却した言ひごとだと思ひます。

私は此の子供から老後、安樂にさせて貰ふなんてそんな慾望は少しも持ちません、即ち報酬を得やうとは思ひません。何とはなしに淋しかつた家に笑聲が起り少許の不滿は子供に依つて忘れられ、充實した生活を送つて行かれるのに感謝して居ります。愛しやうと思つて愛するのではなくて、愛せずには居られないから愛するのですもの、それに何の不足がありませう。

日々の苦みは、日々の慰めで報はれて居ますので、子供の成長後にでも餘り干渉がましい事や、權利義務と云ふ樣な事は口にすまいと思つて居ます。

私の友人に、母親の爲めに全く自己を沒却してる人がありますが、誠に同情に堪へません。いくら親だからつて子を犧牲にする事は出來まいと思ひます。

斯う云ふと親の立脚地が無くなる樣ですけれども、私は親の恩と云ふものがないとは決して申ません。只

人々が親の恩と云ふ事を口にする如く、子の恩と云ふ事も考へて頂きたいと思ひます。

子の恩と云ふ語はいさゝか異様に聞えますが、論旨はよく了せられます、げに恩は上より壓して迫るべきものではなく自然に發露すべきものです、子が産れた事はやがて親が生れた事、子を教育するはやがて親が子に依つて教育さるゝ事にもなります、此文其間の消息を語り讀過のうち高き感興を喚びます、貴き自覺なる哉。（評）

○手紙に就て（人賞）

大阪市　渡瀬淳子

今の女は理窟ばかり上手になつて手紙一本滿足にかけないと云ふ歎聲をよく承りますが、誠に殘念な事であります。昔し項羽が「書は以て姓名を書すれば足る」と豪語した等のためか似而非豪傑や生物知りは手紙をぞんざいにかき又は無音勝ちに打すぎて却て豪しとする傾が見えます。男子も勿論であるが殊に女子には甚だ不心得な事であります。

文章筆跡はよく其人の氣質を表はすものであります。且つ手紙は後々まで殘るべきものであるから之に對しては愼重なる態度を採らなければなりませぬ。第一には文體を整へねばなりませぬ。長上に向てぞんざいな口語文を用ゐ、出入商人への注文狀に七六ヶしい凝古文體を使つたなどの實例を耳にしました。されぱとて仝輩間に「先は要用迄」の切口上も如何がと思はれます。受取人と手紙の性質とによつて、適當な形を備える事が肝心であります。

次には筆跡であります。勿論優にやさしい筆振りに越す事はありませぬが、達者に任せてかきなぐつた手紙は、拙いながらも心をこめて丁寧にかいたものに劣る事數等であつて、往々相手の感情を害する事がありますから、上手下手に拘はらず眞面目に認めなければなりませぬ。さりながらこゝに最も大切なのは眞情の流露であります。冷かな手紙義理一片の信りは佛作つて魂を入れないものでありませう。

尚ほ中には少し地位が出來れば大抵の手紙を代筆で濟ます人があります。出す本人は得意な積りでせう、又之でも用事は十分達せませう、が、然しまだ手紙の眞意を解した人とは云はれません。年賀狀の如きも相なるべくは親しく認め且つ單に謹賀新年「新玉の……」と丈けに留めず、受取人との關係によつて共に遊んだ時代の樂しかつた事、自分の近況、遠地に居るならば土地の有樣、風俗、方言等の說明、舊同窓の消息の知れる限りなど自筆の繪葉書にでも書き添えたならば、溫い情が溢れて見えるだらうと思ひます。女名前の活

版刷りなど清少納言のすさまじきものゝ一つで御座いませう。まして顔を見ざれば言ひ易しとて、口にすべからざるを筆にする如き忘れてもなすべき限りでありません。要之手紙は一に人格の反映でありますから、立派な手紙を書かうとするには、是非とも堅く身を持して行を正しくせなければなりませぬ、斯く考ふれば手紙を重んずる事も、亦徳に入るの一門に外ないのであります。



新緑　濱松市　曾田ふよう

穏健なる常識を以て遺漏なく論及したるを多しとします、思想に亘らざるはかゝる論題の常として致し方もありません。(評)

【秀逸】

○家庭の花

伊豫　パンジー

妙齢のお嬢様のあ

る家庭はきつと暖かくつて、春風が通ふて居るやうだらうと、常に思ふて居ります、そのわけは私自身が私一家の花だと信じて居るからです、私の一顰一笑はぐるりに忽ち影響を與へます、くだらぬ事に煩悶して浮き立たず、目を伏せて沈默して居ます時、母や妹弟はきつと沈んだつまらなそうな顏をして居ますもの、私が面白く談る時皆の心を浪立たす事はわけの無いことです、と云ふて決して私の思ふまゝ一家が私を中心として動いて居ると云ふわけではありません、私共が敬愛してよりすがつて居る者は父母、そして無邪氣に振るまふて、皆をよろこばしめ、樂ましめ、笑はしめて冬の來るのを知らさないのは父でも母でもありません、私です。

時々ムシヤクシヤしたり又心配にむすぼれてゐる父母の心も、私の笑顏と一寸口を洩れる一言葉にはかなはないと見えて、きつと元の優しい慈愛に滿ち〳〵た、父母に歸られます、その時はどんなにうれしいでせう私はこの使命を天から授けられたものと思ふて居ります、皆樣も自分は家庭の花だと自覺なすつていらつしやいますでせう、お互ひに注意して、いろんな世の中の事のために煩悶の渦中に落ち込まないやうにして、いつも心を平和に愉快に保ち益々清い家庭の花を咲き出たいと願つております。

光榮ある使命です、かくして又新らしき第二のホームのクインとなつてかゞやく花と咲くのでしやう。（評）

○裁縫の必要品に就いて

沼津　篦水

論文などゝ申程の大した事柄では御座いません、極範圍の狹い極めて些細な事で、只裁縫する時の細々した必要品の整へ方で御座い升、糸巻だとか鋏だとか又は篦だとか云ふ物をチヤンと一定の處に置くと云ふ事を心掛けたらと存じ升ので御座い升、兎角小さな品物ですので一寸使つては後を無意識に其處らに置くと袖にふれたり縫物にさはつたりしてはあちこちと動くのでサ今度使ふ時に見當らないで、「今使つたばかりの糸巻が」とか鋏がとかつてはアチコチさがし、縫物をふるつたり又は座ぶとん迄も取つて見ると云ふ事はよく有る事で誠に吾ながら自烈つたい樣な氣持の惡いもので御座い升し、他からのお體裁も餘りよくないやうで御座い升、それに就いては私は、以前は矢張りそんな事を往々致しましたが或日不圖した事で、「やりつぱなしだからだ」と云ふ樣に氣が付きましてそれから私は此樣な工合にきめて見ましたので御座い升、まづ、よく見えなくなるは糸巻で御座い升ネ、それは使つたら一寸懷中へはさんでおくやうに、そして針箱の抽出しは一つを引きぬいて都合のよい處に置き、鋏や篦は使つたら必

ず其中におく事、又一尺ざしは一寸座ぶとんの下にはさんでおくやう、とこう心掛けたので御座いました。初めは矢張り使つた後は等ざりになりそうでしたが、是非共〳〵此習慣を實行し終らせ様と注意してつとめましたらとう〳〵、昨今ではモー必ず手がそうゆくので御座います、前の様にさがす手間は一向缺けましたし又氣持よく針を運ばせる事が出來るので御座い升、勿論これは只私勝手の事でしてこれの善惡しは自分さへ認められませんし、すてにより以上立派な御秩序は皆様にお有りて御座いませうが、兎に角、前に申した様な自身が氣持が惡いとか自烈つたいとかばかりならまだしも、若し人様と御同席などした場合で御座い升自分は一針をも大切にと思ふ様な一生懸命の時にもお隣りで前の様な事されて御らんなさい、アヽうるさいな、とは心中思ひながらも義理で形式的になりと立つとか見てあげるとか云ふ様な事は、一般に有り勝の事柄で、どちらの方にも大概御經驗が有りませうと存じ升から可成、是等の小さな事にもお互にきれいな習慣を付けるといふ事も女としては望ましい事だらうと思ひつきましたので皆様に一寸御相談迄に……。

若い娘達は兎角そゝつかしい、宜ろしく此好方法に傚ふて宜いと思ひます。（評）

○强者に同情

麻布 花子

私も確に男子に對して反感を抱いてた一人なのです、少なくとも新時代の空氣に觸れてる女子は此の思ひを抱ない人はないでせう。父ても兄ても歸宅後の不機嫌、口惜しくて〳〵て成りませんは日頃からたゝんである反感の叫びが一時に胸にみなぎつて口きくのも嫌です。

母様になぜお父様でも兄様でも御歸りに成たら、不機嫌だといつて默てるとお小言を仰有る、馬鹿々しい勝手に遊て勝手に怒るならこちらも勝手だ、こと更にもの云ふことは有りません……いゝえそれは、外面の善い人は内面が惡い、内で善ても他人と交際がうまく行なければ女だいつても一家の主婦じあ安閑としてはをられませんから、少し位の不快なことは忍ふものです、――と先の夜母様からいはれました、それでも私には不解ない、歡心を得る樣なことはいやです、兄に對してそれ程にすべき理由がない、男子だといつて其の權威に服從は嫌です新時代の女子の體面にかゝはる、歡心を買ふは神聖なる處女のものでは無いと自からの誇りを考へてをりました。母様は哀れなもの、意志に違つてまでも强者の言に服從、哀れむべき强者中

の弱者だと一人心にくりかへした。

それを二月の文壇に「新代女性の立脚地」と云ふ見出しに迷ひの夢の醒たる心地、：悲しい淋しい感じが、泌み〳〵と迫ります、あゝ呪ふべき社會にあることを今知りました、——ああ、私共は世を呪ふよりまづ、家庭を呪ふてとのみ思ひまして、徒に男子に反抗、強者に反抗、強者自から家庭を生命とせる哀れなる小天地の弱者と自から命名して私共を阻害する、呪ふべき強者、呪ふべき男子よ！、とひたすらむくべき刃を磨ひてをりましたのに、　あ　あ、強者に同情、！強者に同情す、迷ひの夢は今醒めました、

弱者決して弱者にあらず、強者必ずしも強者にあらず、！青春の男子、女子共に立つべき社會は呪はれたる社會、呪はれたる社會に立つ哀れむべき犠牲者の我等が生れたるを悲しむと共に、優しきはわれら女子の天職よ！、悟りて笑まば何の悔あらむ、涙多き子の一途の光明、之を與へられたことを深く深く感謝します。

迷ひし思ひに惱みし處女心も厚い氷も迷ひの煙も、迷ひて醒めし高き自覺、新舊理想もなにあらむ、主張自覺は遠き未來に秘め、誠心込めて未來の戰士の內助者となり呪ふべき社會にも誠心にむく矛ありや厚き氷も解きても見せむ、平和を慕ひし、理想、空想は今暫し、——望を得て自から進む足元に猶鞭うちて、僅に一途の光明を辿りつゝ後者の爲めに僅ながらも開きをかむ。

強者に同情と云ふ文字だけでは語足らずして或は誤解を惹く虞れがあるかも知れぬが、兎に角其れによつて何かの暗示を得、一道のフートライトともならば幸です、たゞ其人の自覺を失はず彈力をゆるめざる者が勝つのです。（評）

○平凡な女

府下　大久保撫子

『理想と現實は相一致するものにあらずとの自覺を得ば宜しく平凡な女となるに努力するが現社會の勝利者たるの捷徑なり』

これ私が胸に深く銘する箴言です。陳腐な言よ、浮世に棄てられたる自暴兒の囈言よと、痛罵し冷笑する人は未だ心の自覺し得ぬ乳臭兒であります。只徒らに天才家振り、非凡々々と絶叫して根底のない果敢なき虛榮に憬るゝ女性は、平凡てふ文字の如何に偉大にして美なる其眞理を解せざる哀れむべき不幸兒でありまず。平凡な女、實に立派な文字です。

某雜誌に『中等の收入ある人の妻となつて料理裁縫洗濯火熨斗を自らし、多勢の子女を養育して社會に有用の人となし、又己の智を研き德を進むるの餘暇を見出す女こそ、有史以來の最大の女なれ。』と書いてありました。この女を稱して非凡な天才肌の女と言ひます

か、華やかな理想の現實者でせうか、至つて地味な生活にある平凡な女の謂ではないですか。けれども仲々若い青春時代には、理想の空想のと、お芝居式の詩に文に憧憬して、少し計り學校で先生に文才家などゝ持上られ、友人から貴女は田舍の內儀さんにして了ふは惜しい、鋭意好きな道にお進みなさいなんて言はれて見ると、弱い女の性としてつい其氣になり色々甘い空想に耽りたいものです。けれども生存競爭の激烈な現社會は刻一刻と、空想に耽つて喜んでるやうな悠長な時代を遠去かつて行くのです、決して根底のない自惚などを賞揚してくれる時代ではありません。



花見容　本所　安藤エイ子

平凡な女、私の耳には偉大な響を與へます。薄命を泣き笑ふ狂者に等しき詩人を理想とせし私を額に汗して働く實務家とならんの覺悟を抱かせたも此の響です。

理想と云ひ現實と云ふことが談容易でない、若し單に思ふやうにはならぬものと云ふとならばあまり淺薄なやうにも聞える、又此文何だか多く反語めきて當て氣味あり、わざとらしき處もある、平凡の偉大を論ずる人とも思はれぬ。（評）

○小倉百人一首

備後　井上年子

小倉百人一首は必ず

しも名歌ばつかりではないとは、現今の歌學者間に於ける一般の定評です。成程百首が百首盡く優秀な作ばつかりではないと言ふことは、私等のやうな薄學な者でも認め得ることが出來ます。が而し、是れは發達した現今の歌學、と言ふよりも甚だしく推移し來つた現代の歌學眼から下した評ですが、其現代の歌學其者が果して、和歌としての本領を充分發揮し得て居るか何うかと言ふことは、少しく疑問ではありますまいか。元來和歌なる者は、我國固有の、優美なる國文の眞隨を發揮したものですから、此邊から考へて見ると、或は現代の和歌は其優美と言ふ點に於て彼の古歌に劣つては居ないかとも思はれます。

世の中が追々セチ辛くなつ來た故でせうか、總ての人に精神の餘裕と言ふ者がなく、優美な思想が段々荒びて行くやうです。和歌でも昔のやうにかけ語が多かつたり、茫とした所などはなく、もう讀むと同時に、深い印象を與へるとか、極度に感情を刺激するとか、と言ふやうな者が一般に歡迎せられるやうです。ツイ横道へそれましたが、古歌と現代の歌とを比較して見ると、現代の歌は、口へ入れると同時に激しい酸味や甘味を感じるやうに出來て居りますが、古歌の方はしばらくかみゝて居る内に、次第々々に言ひ知れぬ旨味を感じるやうに出來て居ります。何れが果して、和歌の本領に適當して居るか何うかと言ふ事に就ては、是非共本誌論説家諸孃の御意見を伺ひたいです。

新を好むは人情で、時代の推移に伴ふ現象ですから、小倉百人一首なども餘程推移し來つた、今日の歌學界でそれ程歡迎せられよう筈はございません。が然し私は飽くまで、忠實な歌學者方に申上げて置きたいのは此幽妙にして匂ひある古歌の趣きを、永遠にお忘れにならないやうにして頂きたいことです。

刺戟分多し、即ち近代的の味、噛みしめて旨し、即ち古典的の味、「櫻かざして今日もくらしつ」の優美な調のなきは所謂セチ辛くしてかゝる生活を見る能はざるにもよらん。（評）

○豫定に付いて

伯耆　新田文野

妾は、何事をなすにも、豫定といふ事が、極く大切であらうと固く信じます、豫定といふ事が、仕事に、なかつたら、成功は、おぼつかないと思ひます。例へば一週間といふ日數に付き、其の日數と、仕事とを、よく前もつて、配當して、置くことが、必要です。即ち、月曜日には、何々の事、火曜日には、……と、前もつて、定めて、おくのです。然すると、自然、事がまとまつて、着々とあがり、又、怠惰の心をも、抑制することも、出來るのです。それに、豫定も、何もしないで、新らしい週を迎へる時は、何もかも、統一を失ひ、うやむやの中に、過して終ふ樣になります。

書簡文

編輯局選



○雪の國より（天賞）

羽前　浪江

今年は暖かい〳〵と喜んでましたところが、三日許前から大吹雪になりました、雪は一尺位そんなに多くはありませんけれど、吹き出すともう四顧漠々一町先の學校がすつかり見えなくなつて了います、裏の杉の木立に風が逆らつてゴーッゴーッとうめくやうな音は、丁度大海の荒れるのと同じでございます、夜晝閉めきりの雨戸の紙が一枚そつくり持つて行かれまして、ぶーッと來る毎に障子にサーッと雪が、炬燵に足を入れて、倚り懸つてる私の脇からすーつと冷たいのがもぐり込みます、一寸風のやんだ間に障子を開けますと椽はもう眞白、物置代用にして簞笥やら行李やらを置くのでございますもの、すつかり毛布を被ふておかねばなりませぬ、それにひどい冷えて、隣から通し水の管が氷つてポンプがちつともききません、仕方なく〳〵藁靴はいて手桶さげて、筋向ひの家から貰ひ水、それも晴を見て出懸けますけれど、折惡く吹かれると、お高祖から合羽からもう綺麗に白くなりますの、つるべ繩を握つた手袋は歸るとシャキ〳〵となつてしまつて人跡もないほどはらをこいだ裾はぐつさり濡れて、足袋をのがれた脛が痛たうございます、我ながら可哀想な姿と思ふとつく〳〵長い冬が厭になります、けれど祖母も私も風一つひきませぬ御安心下さいませ、暖いお國へゐらしてからもう小十年におなりですもの雪滑りの興はお忘れなさいましたでせうか、お地は梅が咲きましたでせう、また一片六花に埋もるゝ國へお惠み下さいませ、なつかしい香に靜に春を待ちたうございますから、何卒、　さらば

力ある筆にて風雪怒號の狀を記るしたる氣持よきまてなり、優婉の匂ひはないが鏘鏗のひゞきがある、自ら雪國よりの通信として動かないところ。（評）

○嫁がんとして都の弟に　（地　賞）

伯耆　蔦　枝

此の度の私の事に御同情下さいました、御情け厚い御手紙、只今拜見、同胞なればこそ、御身なればこそと如何ばかり嬉しかつたでせう、仰の通りいよいよ今宵一夜で私の運命も定まる事と相なりました、實に私、斯樣な運命になりませうとは、夢さら思ひも寄らぬ事で御座いました、然し是も神の命なれば致し方もなく、私はたゞ一人の母の爲にみちみちて居た希望も捨て、心にもない結婚も致しますのです、私母上に別れます際に、私は決して進んで嫁くのではありません、と只一こと言ひ殘して行きたいと、前から胸に秘めて居たので御座います、それは母上にそれ丈の事を話して、夫れ丈同情を以て頂けば宜いと思つてです、それで、今日は明日はと思ひながら、母の顏を見ますと、――母も進むといふわけでもありませんけれど、それでも何かと働いて居りますのに、また斯麼こと聞かせて、御心配をかけるのかと思ひますと、どうも言ひ出すにしのびませんので、到頭是も私の不運とあきらめて、斷然話さない事に決心致しました。

私の樣な者でも、何かにつけて母が力に致して居るのかと思ふと、勿體なくて我がまゝも言はれないと思ひまして、實にいやでつまらないのですが私一人浮かない顏してるのも、母の苦痛の種だと思ひまして、進まぬながら世間話をしたり笑つたりして居りました、ですから今迄一度も何がほしいとかあれが買つて頂きたいとか、言つた事はありませぬ、着物など不用の樣にも思ひましたけれど、また余りそんな風に致して居りましても、母が心配するだろうと思ひまして、押して樂しさうに暮してまゐりました、私は何もかも母の爲に犧牲となりました考へで居りますから、永久に母の心を配めぬ樣、良妻賢母は到底及ばぬ事ながら、世間の物笑とならぬ樣つとめたいと存じて居ります、ですが世の中には私一人ではありません、丁度私と同じ境遇に居る人があります、桑本の梅さん、あの方も、頭到義理にせまられて兄嫁の實家に嫁がれますのです、ですから私ひとりと思はず、氣を廣く持ちたいと思ひますが、どうも悲觀して困ります、實に御父樣は血も淚もない方と思ひまして、一しほお母樣が慕しく存じます、實に私は母のために生き、また此の度は母の爲に死にます、ほんとに母さへ居ませんでしたら、東京から歸るのではありませんでしたけれど、母の居

るばかりに歸つて來てこんな運命を作りましたのです、思はず愚痴を申しました、こんな事御話するのはお前樣一人なのですもの、どうぞあはれな姉が最後の愚痴と思召しておきゝ下さい、今度は面白いお談いたしませう、是が葉村蔦枝として差上げる最後の手紙と思召し下さい、終りに御前樣の健全と幸福とを、神かけて祈り申します。

しんみりとした情調、取材が取材なる故でもあるが讀み去つて覺えず身が引しめられるやうです。（評）

○諏訪より（人賞）

牛込　平塚白百合

あれから汽車はズン／＼山にのぼりました。韮崎であなたは降りておしまいでせう、廣い車内は善光寺詣りのあの一群。いくら退屈しのぎに景色でもと窓ガラスに顏を押しあてても吹雪が丁度白い布でも下げたやうにモウ／＼と降つてゐるので駄目、只せせつこましい汽罐の音が息ぐるしいやうに聞える計。隅の方では新聞にもあいたらしい人が欠伸の連發、私もついつり込まれましたわ。富士見驛を出るとだん／＼雪が少なくなりましてねえ、諏訪についた時は好天氣。エーそりやお寒さは日本一（私の知つてゐる處では）。つくと早速從妹と出かけましたの。假小屋でスケート靴はいていよ／＼初陣となりました。私、見ないうちは磨きぬいた鏡のやうだろうと思つて居りました處が、息でも吐き掛けた鏡のやう、手取早く云へば朧銀でも一面にあの〇〇里の大湖の面にぬつたと云ふのでしやうねえ。從妹はもう身がるく一寸前屈みに氣取つてスーつとすべつてゐるのでしやう。私も一ぱしすべれるつもりでスーとすべりましたの、處が／＼……と無理でしたわ、いえまけをしみぢやありませんの實際、一週間位はお尻餅のつきどうしですつて、私もそうと聞いて稽古をしてゐますとなる程、我黨の士とでも云へそうな連中がをかしな腰付ですべつて居ります。子供でも巧みにスー／＼鬼事なんかしてゐるのでしやう。自分ながら歯がゆくつて。殊に外國夫婦の二組が身がるそうなすべり振りはうらやましうございました。聞けば女子大學生が大變來てゐるそうですが何分廣いので見えませんでした。もう一時間もしてゐると汗ビッショりになつたので岸に立つて方々見て居りました。湖をとりまいて横たはつてゐる山々は白蠟のやうです、其處へ何神社か朱塗の社がチョンボリ浮き出て、奇麗にすんだ空氣の中を太陽がキラ／＼氷の面に光つてゐました。四五日中に自轉車競爭があるそうですが、見ないうちからもう汗が出ますわ。まさか自分

のにこりたからではありませんけれど。あなたがゐらづしやる頃には一ぱし先生になつて手を取つて上げますよ。こんな處を見ると阿都さんの十六貫の大關樣が思ひ出されて一人でクス〱笑つてしまひました。ではねえおまちして居りますよあんまり長くなりましたこれでさよなら。

材も新らしく趣味もゆたかである、叙景の筆も明瞭なる印象を與へました。(評)

【秀逸】

○嫁ぐ人の許へ

淡路菊子

君子樣お目出たう、昨日叔母樣お越し下さいましての御話で承りますれば、兼ての御緣談愈々まとまりまして迎々御輿入り遊ばす御樣子、わけて先樣は御希望通り實業家ですつて、嘸御滿足でせう、もう猛樣や日出男樣と喧嘩も出來ませんねえ其代りあなた新ホームと云ふ樂しいうちに一年や二年は夢の間に暮てしまひませうよ、初結の丸髷耻しい内が花、其花の盛り鬼も十八とさへ申し升にわけてお美しいあなたを今日限りと飾るのですから、どんなにお奇麗でせう、當日は病押してゞも上りますよ、是はぜひ御人川の品私からはなむけ致し升どうぞ溫かい懷にお持ち遊ばして、そしてこんな柄お氣に召さぬか知れませんけれど父が帶地の方がと申ましたのを、お嫁に行くと着物は何ぼう有ても〱足ないものと聞いて居升から私が選りに選つたのでどうぞ襟數の中にお入れ下さいませ、何彼とお忙はしうございませうからお仕立物がございますれば私宅は女手が澤山ですから五枚や十枚すぐ出來ますて何卒御遠慮なく使の者へ御渡し下さいませ、お母樣お在り遊ばすあなた樣故萬事よく御心得遊ばしてゞせうが決してあの里自慢斗りは遊ばしますな、私は聞辛い經驗から御注意申上升お氣に障りましたら御免下さいませ、何か相談事が有るとやら、私の樣な者でもたよりにして下さるのは嬉しう存じ升が、此間から嫂樣お里へ被在つて未お歸りになりませんので、私はお伺ひ申兼ね升からお急ぎの事なら一筆御わづらわし下さいましたらお答へ申上ませう、では是で失禮致し升、どうぞ折角の御體大切に……

通り一遍の挨拶と異り、實質を以て勝る好書簡。(評)

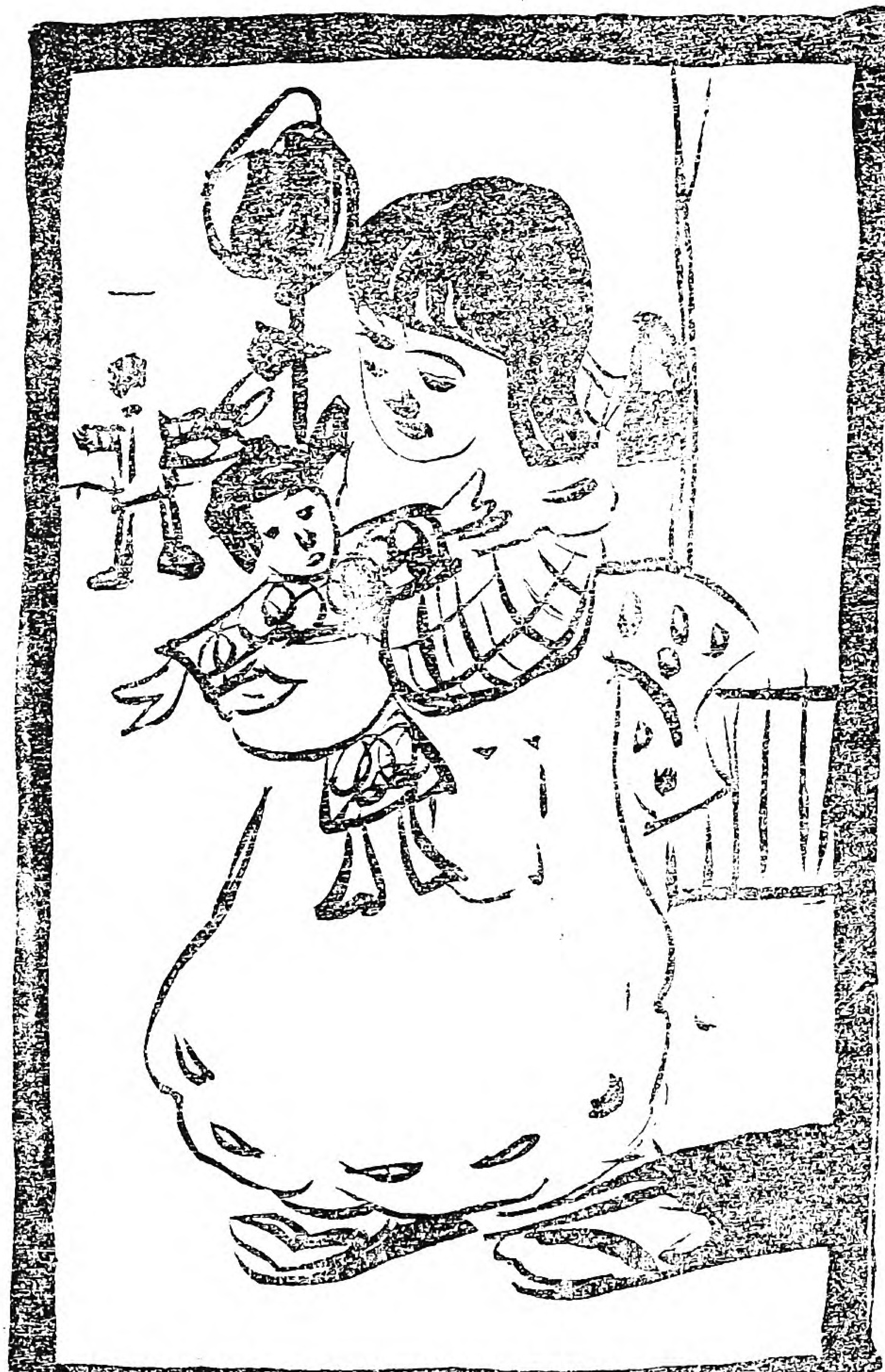
○舊主家の奥樣に

府下よね子

先日は又しても御懇な御返事下され、却て恐れ入りまする次第でございます、しかし皆樣の御樣子を伺ふともう去年のことが思ひ出されて、朝戸を明けるたびに御隱居樣が早くお目覺めになつてはいつの間にかお庭

をお掃き遊ばしていらつしやる御様子が忘られません。夕がたになると坊様は今頃お踊りになるのだなどと思つて、山と山との間から都の空を眺めるのでございます。こんなにお寒くつても皆様にはお變もなくもうぢき幼稚園へ御いで遊ばすとのお嬢様はこの一年にどんなにか御成人なされましたでせう。

よねの家では一昨年の火事で雛もみんな焼いてしひましたので、この節句も何の風情もなく過してしまひましたが、ああもうお納戸へおしまい遊ばしたてせうか、あのお美しいお内裏やら官女やら、いつまでもかうして置きたいと申しましたつた御紋のあげ羽の蝶の眞白なのが染め出してあるあの紫のお幕、緋色の雛壇にうつりのよかつた室咲の白桃など、よねはもう一度伺ふなら三月あがつて拝見したいのですが、今年はとう〳〵だめになつてしまいました。



人形　　新潟　　村田きん子

今日は大そう日がよいからと申しまして御いとまいたゞく時御心づけ下された反物をやうやう着物に仕立てあげましたから着初めをしたのでございます。奥様の形見として大切に着るつもりでございます。ほんとによくなりましたので嬉しさにとんだお邪魔いたしました。御主人様によろしく御申し上げ下さいませさよなら。

巧、妙、但しこの手紙は主家のお嬢様へとしても流用が出來る强ゐて非難すれば其邊でしよう。(評)

○詩姉なんて生意氣

土佐　寂　靜子

明日までと受合つた羽織がまだ出來上らないけど大急ぎで用事ばかり申上げますよ。あのね秀樣!!「姉樣より一ッ年上の優しい詩姉を得た!つて秀樣!!私はこゝまで讀て嬉しかつた試驗の報告も忘れた樣にハッとして終ひましたよ、詩の姉、性格も似てる、そりやねさつぱりした秀樣は誰よりも私がよく知つてるし其秀樣に似てる性格の方なら矢張さつぱりした好い方とは思ふけれど、けれど考へても御覽なさい秀樣はまだ中學の一年前途有望の少年、野暮と冷笑されるか知らないけど女の人なんかと詩だの歌だのつて醉てる時では無いと思ひますよ女の友達、いゝえそりやたとへ姉樣と思つても、それに若し秀樣が兄姉も無い孤兒ならばいくらか恕すべきですけど私だつて誰よりも秀樣を愛してるし秀樣は現代のちやき／＼だから何も思つてないでせうけど、制服で若い女の人なんかと話してると神經過敏の社會は何と見るてせう、否妾だつて。どうか世間には誤解されない樣にして下さい、それに私の實は經驗からだけど少し詩や文章を書く人と見ると先生や上級生なんかゞ非常に注意してますからね、其筈でせう?若い人はすぐ世間なんかつていふけどそれはやけの聲です、世間に捨てられて何の役に立ちませう、まだ兄樣も父樣も御存じない中に早く……ねどうか秀樣自分でもよくお云ひの感情の奴にならないやうにして下さい。一人の眞の姉は眞面目に勉强せられんことを祈ります。　さよなら

委曲懇切をつくし、又反感をひかぬ丈け情理兼到と云ふところもある。(評)

○出産の報

山口　酒向登志子

靜枝樣、しばらく、頓でもない御無沙汰を致しましたのね、何卒お許しを

實はね貴女、姉が産氣づいたてしやう、えゝ一昨々日、まあ私ね、こわくて／＼まるで震ひがやまないのですもの、お醫者樣にお茶を出すのも何だかおそろしいのて遂に丸一日下女とお勝手に立ちづくて居ましたの、それても産婆がソレジャ／＼ッて姉に勢をつける聲が心臟にキリでももまれるやうにこたえては―から／＼耳をおほうのでしやう、それかつて奥座敷へ三ッとしとつては猶の事姉の聲は無論、醫者や産婆の懸命なはげまし聲がしみ／＼と聞へて一々心臟をゑぐられますものね、同じきく聲なら近くて聞いた方が大分安心ですからトットと燃えるお釜の前へ棒立てクラ／＼湯玉

とるお湯の音を務めてきいて居りましたの、處がまた姉の力む聲がするてしやう、――靜さん此お話は夜の十二時過ぎの事てすよ――もう／＼堪えられ無なつたのでえゝ脊戸にでも出やうと思つて、雪のちらつく寒い暗い夜も今日ばかりはなんともなく折角裏門を明け樣としたら彼の炭ごやからヒョッリ車夫が孃樣寒うがんなーつて平氣の平座、實に、二度ビックリ、私は靜さんが心臟がさけるかと思ふ程動悸が打ちましたの、とう／＼猫もどり又お釜の前へ棒立ちで仕方なく幾度かこわい聲をきゝました、三時四時と打つても一向オワーッて聲はしないてしやう、下女らは笑つてゝも私はいゝ考はしないてすものね、あれでもしやと……する内に思ひがけなく五時半、コロッと娘が產れましたのホ、、、……餘り早うにみやすく出ましたので何だか拍子ぬけした樣でした、飛んでお湯のつかわされるのを見に始めてお座敷に上りましたの、そりやあ／＼大きな子です、之て五人目の姪ですけどあれでも產れて見れば珍らしいわネホ、、もう／＼これからはこんなにおそれもしないでせうけどなにしろ此度のは時間の長くかゝつた事とも一ッは私が年とつて有神經に成つたとの二ッが大におそれをいたさしめた事と思つて居りますわ、おかげ樣て二人ともおり合ひは大丈夫、何か御安心下されませ、名はね貞子とつけましたの、まあ／＼何は置いてもお知らせだけはと亂れ書き乍ら右まで　左樣なら。

精密な記事、文に一種の調子のあるのも面白い、しかし「コロッと娘が產れましたのホ、、、」に至ては選者も一緒に笑ひたくなりました。（評）

○其の夜の置手紙

青森　露草

此の一月來、あなた樣の旦那樣に對する御擧動荒々しう陰ながら、はららと致し居候處、今日端なくも御使の歸り御返事申上げんと、お座敷近く伺へば、常に無き聲高のお爭かひ、ああそは此の身より出でたる事と承知致候時の驚ろき、誠面目無さに、消えも入りたき思ひして、どよめく胸を僅かに抑へ申候、此方樣に參りてより早や一年父母なく兄妹なく賴る人なき無學の私は只管御無理願ひても御主人樣のお情にすがりて世に立ち得る女になりたきものと、夜每／＼御敎へを戴きああ救ひのみ神と感謝致し御恩の程深く心に銘し居り候ひしにかゝる立場と相成泣くに淚さへ出でず誠に殘念の至りに御座候、さはれ已むなき次第いつかは眞心より御返禮申上ぐる時期も來るべくと存じ申候へば心のこして只此のまゝ明日は我からおいとま願ひ行途も定めず引きとり申候へども更々後暗き行ひは御座なく候何卒御心をお直し下され以前の如くお暮し遊ばさ

る様祈り上げ候、なほ末筆ながら是迄の御恩幾重にも御禮申上げ候

弱き女心を現はしてゐる、さもありなんとは思はれる、しかし類型におつるを免がれない。(評)

○都の妹に

静岡　さくら

竹ちやん此間は御手紙有難う、御いそがしくつて御いでだつてねえ、いそがしいのも御藥だけど體を大切にして頂戴、試驗は未だ？、今年も去年にまけない様にね、姉様は今から御ほうびを考へときますからしつかりね、四月からは分家の春ちやんも行きますからね今から御行儀や何んか氣を付けといて眞似をされても好い様になつときなさいよ、川越の叔母さんとこからお甘藷を送つて下すつたつてねえ、私の方へもよ、其れに付いて面白い話があるの、此間皆して食べたら母様の若い時の話が始まつてね、彼様にやせて被居つてもお甘藷にかけては豪傑で五百〆位だつたら叔母さんと二人で樂に平げたつて大笑ひ、すると御祖母様が若い者は無茶をする竹も其様事せねばよいが、胃病にでもならなきやよいがともう心配して被居るの、すると兄様がそばから、何も心配はありませんよ今の若い者は太るのがつらさに要心しますつて、其れて私にまでたんと食つちやいけないつて、なぜと聞いたら川越のおさつは嚊天下にちなみがあるから女はひかへろ、だつて、相變らず人の惡い事ばつかり云つて被居るの、御祖母様が勝か兄様が勝かしらないがどつちにしても氣を御付けなさいよ、姉様は今竹ちやんが御休みになつてから着る。袷を縫つてるの其れは好い柄なの、早く着せて喜ぶ顔が見たいわ、しつこい様だけど何程いそがしくつても夜ふかしはいけませんよ、間にあはずば朝早く起きなさい朝の一時と夜の三時間といふ事がありますからねではあんまり長くなつたから又此次に試驗がすんだらゆつくりね　皆様によろしく

お芋のところが尤も振るつてる、多少の異彩。(評)

○火事を知らす

横濱市　千鶴子

雪さん昨夜お宅の近所に火事が有りましたのよ、丁度三時頃でした、私などは高鼾の最中でして火事だよ／＼と母様に起されて驚ろいて飛起き裏の窓戸開けて見ましたら異人墓から一丁目の方は眞赤火の子はぱら／＼と屋根に降りかゝつて來る様子に齒の根も合はずがた／＼と震えてまご／＼して居りましたら、淺間山の裸木は火に映えてあか／＼としキネオラマを見てる様思はずも「あゝ奇麗」と云つて仕舞て父様からお目

玉頂戴、通りは修羅の街と化してポンプの行く音焼け落ちる館の音私も彌次馬の一人となつて肩掛にうづまつて門口に立つてましたらお兄樣がね雪さんが先に掛ていらしつた、茶色の大きな肩掛を被て望遠鏡片手でせう、「千鶴さん大丈夫〳〵火事見物に行きませう」とお誘ひ下すつたので私も何も研究と連れてつて戴きましたの、ほらよく二人で藥師樣に行くと云つて出て暗い增德院の魔の樣に立つた森を横にして谷戸橋を渡つて向海岸で立話したあすこなの、まだ蒸氣ポンプの音がしてゝよ然し御安心遊ばせ御母樣も兄樣もお變りありませんから一寸御報知まで。

何も研究は暢氣？。（評）



見送る姉　遠江　原田久子

○寒い日に

播摩　谷本下枝

毎日毎日、雪がチラチラして春らしい日は、少しも來ないよ。あなたの方は、こちらに比べると南ではあるし、新聞で見ると後樂園の梅も咲いたそうだから、暖かい日が續いてゐるでせう。あなたは、度々姉さんは悲しいだらうとか、つらいだらうとかいつてよこして呉れるけれど、妾の方は自分の宅だし、死んだお母さんが働き手で何事もキチンときまりよくしてあるので、始だとはいつても世帯もさう六つかしくはないけれど、あなたは、他人の宅で暮してゐるのだから、欲しい物も十分では

なからうし、時々は機嫌の惡い人の顏も見ねばなるまいしほんとうに、妾は毎夜、あなたの夢ばかり見てゐます。今日の樣な寒い日に、生れ付寒がりのあなたが水仕事でもしてはゐまいかと思ふ度に姉甲斐もないことだとホロリとすることもあります。どうぞ、仕損じのない樣にお勤め大事にして、再び元の家に取直す樣に心懸けてお呉れ。ゆめ〳〵浮れた氣にならない樣に十七といふ年は、もう子供ではないのだから、ね。風をひかぬ樣になさいよ。

情動き形整ふ、好書簡。（評）

○弟へ

信濃　紅ゆり子

健さん、御寫眞と御手紙どうも有難う、眞實に嬉しかつてよ。今日ね、例の月曜會で遲く夕暮方歸つたの、風に鳴る雜木林の中の細道を語る友も無く一人歩るいてると堪らなく賑やかな家が戀しくなつてね、知らずに熱い涙が頰を傳ふの。小母さんに御挨拶して室へ來て袴取り乍ふと机の上を見たら、ま、どうしませう、マリアの像のさして有つたカードさしにちやんと貴方の寫眞が……（驚かせ樣と思つて小母さんがさしときなすつたんてすつて）あれつて云つた儘、袴なんかそつちのけ抱きしめた儘暫くは放せなかつたの。大きくなつてね、是がまあ私の弟と思ふ程よ、それも其はづもう四月からは中學四年生てす物ね、こんな可愛い逞ましい弟が有ると思ふと嬉しくて淋しい想ひなんかもう跡方も無くなつちやつたの。學年末て多忙しいてせう、確かり勉强して三月の休には立派な通知簿見せて下さい、「今度も又副さ」なんて云わん樣にね、副なんて余計な字の無い級長に成て喜して下さい。兄樣を失つた父樣母樣には貴方の立派に成人するのが何よりの孝行てすよ、身體を大切にしてね。ほんとうに明後日は兄樣の御命日、海山遠く離れて居る身は、御命日が來ても御墓參りさへ出來ぬ悲しさ、どうぞ私の分迄御參りして下さい。あゝ昨年の明後日、涙に噎びつゝ承つた御言葉を、健さん覺へてませうね、早く立派な人になつて御遺言に背かぬ樣に仕ませう。御約束の增鏡御送り仕ます、大切に見て下さい、是はあの磯村の京樣ね、あの方の上京紀念に頂いた大切なのですから此前の紅葉全集見たいに「姉上より賜る」なんて書いちや舞つちや厭ですよ、末乍父樣母樣にね、小夜は丈夫で樂しく暮して居りますから御安心下さいましてよろしく申し上げて頂戴。くれ〳〵も身體を大切に、御手紙待つてます。さよなら。

此種の手紙の常ながら生動あり感興にみちたり。（評）

○病床より

四谷　櫻子

只今は御手紙ありがとう、いゝえ何、たいした事じやありませんの。けれどもね何しろ食物がいたゞけないのですもの、さすがの私も大弱りなのよ。いたゞくとすぐお腹が痛くなつて始末におへないので、しかたがないから御醫者樣のいひつけ通り、昨日から流動物ばかり、もうへと〳〵よ。明日にでもなつたら御かゆ位いただけるかもしれないわ。貴女なんか丈夫でほんとに御羨ましい事よ。寢て居ると夫は〳〵たいくつでね、本よむでゐてもじきに手がくたぶれてしまふし、障子のガラスごしに庭を眺めると、椎の木や南天のあたまばつかりしか見えなくつておまけに今日はこんな御天氣でしよう、空は曇つて泣き出しさうだしもう何みてもしやくにさわつて仕樣がないのよ、ホヽ恐ろしい病人でしよう。學校へも二三日はとても行かれさうもないわ、明日いらつしやつたら先生方や皆樣によろしくね。あなたでもも少し家が近いと遊びにきていたゞくと好いんですけれど、何しろ麻布と四谷ではねえ、力及ばずだわ、では一生懸命になつて早くなほして、一週間の後には又元氣のよい顏を運動場て御目にかけます。先は御返事までさよなら。

かう云ふ元氣なら大丈夫、いら〳〵した病床の感がよく出てゐる。(評)

○妹に

水之口

大變心配な事が起つた、どうせう……とあるからびつくりして、讀みましたよ。でも先づ〳〵御無事で、御勉强何よりの事です、御兩親樣始め皆々無事で暮して居ますから、御安心なさい、希一も入學の日を指折かぞへて喜んで居ます。さて其心配について、そりや最もです、どんなに小さい胸を痛められたでせう。私にもそんな經驗がありますま、けれどもこちらでさへ淸い心を持つて居れば、何もそんなに案じる程の事はありません。殊に○○さんは立派な學校の學生ですもの、只仝じ小學校出といふところで弟の入學祝辭を端書て下さつた位の事、先生が變に仰つたからつて構ふことはありません。しかし又封書て匿名で送られたと云ふのは少々變ですけれども、それ位の事が書いてあつたのなら、あなたが騷ぐ程の大事てもありません、あたらぬ蜂はさゝぬとやら、打投つておけば自然先生も止めてしまひませう。それでもまだ送る樣だつたら、姉さんから其人に手紙を出して斷つて上げますから、あなたからは決して、何も出してはいけませんよ。

私の經驗によつて見ても一躰に男學生なんてものは、面白半分にいろ〳〵の事云ふのですから、構つてやらねば自然弱つてしまひますよ。心配せずと身躰を大切にしてしつかり勉强なさい。

異彩あり、生氣あり。（評）

○おん恨みは此方より

相州　内藤千代子

芳夫さま、昨日は久々にてのおん文、母が、本田さんて何誰だつたかな、と申しました。

消息絶えしおん恨みは此方よりこそ。アヽ何う遊ばしたのであらう、學校やめてお故郷へお歸りになつたのか、それとももしや御病氣では、と思ひみだれぬ日はございませんてしたものを……あんまりですわ。

變つたつて?、それや變りませう、三年過つたのではございませんか、和さんはもう可愛い丸髷姿になられたと有仰つたぢやございませんか、私だつていつまで昔のまゝで居られませう、肩あげも早去年をかぎりにエプンかけて襷して、毎日お洗濯や御飯たきのこの有樣を御覽になつたら、屹度びつくり遊ばすわ。

芳夫さま、春期のお休暇にてもなりまして、ふとお心の向く折もございましたなら、桃咲く漁村にお靴の痕をお印し下さいませ。盡未來かくてよせまた返すべき藤戸の濱の白波と、小松が原の松のみどりは、いつも變らぬ色を湛へて、訪ひ來る人を迎へて居ます、思へば人間ははかないのねえ…………。

お序がありましたら和さんによろしく。

折角おん身お大切に、御成業あそばせよ。

全體の調子が氣が利きたり。（評）

○おわびまでに

山城　木の花

お寒むございますのね、お正月にお會ひ申してから、早や、二月も半てございます、芳子樣お健やかで被居ますか、皆々樣は御機嫌好くお出でございませうね、それからあの、お父樣はお怒りぢやなくて「猪を送つて上るなんて」嘘ばかしと、仰らなくつて、私が惡うございますのね、取れもせないくせに、お送り申しますなんて、前にお悦せ申しましたのが、惡うございました、お詫びして下さいませ。

それは〳〵、山奥てすけれど、取れるといふ譯ぢやありませんの、雪がたんと降らないと、取れません、雪跡を慕つて、追ひ廻すのですもの、朝早くから、腰辨當でね、喧ましくいつたら、逃げてしまひますから、窃に行かなければならんさうてすからね又その内にほんとにとれましたらこんどこそ眞實にお送りいたしますからどうぞそのおつもりて。



短文

編輯局選

○最後の音（地賞）

信濃　淺田千代子

墓地へ着いた時はもうめそ〳〵時でした藪へ立掛られた紙の旗が、風にびら〳〵する。『ソリヤよしかな』と、ほんの近所衆ばかりで、棺は穴へ運び込まれた。續いて、石と土との落つる音がゴト〳〵と、胸の底の底迄響き入るやう。これが、四人の小兒を殘して、貧しい中を逝つた、おさよさんの、最後の音でした。

評『雨ふらば降れ、風吹かば吹け』

○春宵（人賞）

名古屋　胡てふ

水晶の樣に澄んで居る湯にトップリと襟元までつかつて、島田をこはさぬ樣に後を緣へつけてジーッと堪へて居ると熱い湯が毛の穴へ浸み込む、段々體と湯との堺が分らなくなつて、湯の中へ體が溶け込んだやうで何ん共言へぬよい心持ちになる、藝者家町に近いので艶つぽい三味線の音が流れる樣に聞える、毛の樣な春雨がシト〳〵降り出した。

評　あらゆるものが皆なつかしい

【秀逸】

○傘にそへて

和泉　金田代志子

濡れた儘お返申しますよ、櫻並木の下通つて、花瓣に降つた春雨が花の精をふくんでこぼれたのかシミ込んでありますから、ムザ〳〵干すに忍びませんで。貴女が今夜宵寐して下さい、きつと美しい花の神が貴女の夢に入るでしよう。

評　おかしき人の言ひざまや、など〻双びが丘の法師なら言ふところ

○まくらもと

伊豫　よしゑ

前櫛が輕い響を立て〻疊に落ちると後櫛も落ちた、クル〳〵束ねた髮があぶなくなつて、ピンがからんだ儘、スラ〳〵と拔けて落ちる、未だ兩櫛が根元に殘つて居る、十疊の中

央、外は虫が鳴いて靜に更けて行く夜である。

評　鬼にならうか蛇にならうか、由來深秘なるは女の髪。

○破れし風船　大坂市　山内　渓子

或る天氣のよい日でした、私は何とはなしに心が重苦しうて、戸外へ出様とも思はぬ、只四疊の間の机の前に座つて氣を沈めてゐた、がふと先前妹がふくらしてゐたゴム風船が眼についた、私は何の氣なしに其風船を手に取上た、がどうしたはづみか其風船がわれた、私は其時の音が何とも云ひ知れぬ、おそろしい樣な亦嬉しい樣な感じがした。

評　機微を道破せり

○河畔に立ちて　茨城　宮久保秋水子

小波をぢつと見つめて居ると、何だか自分の身が、奥の奥の方へはこばれて行く樣な水面を見て居ると水渦が流れて行く、私は思つた、人生觀、運命、水はたえず流れて居る、

評　晝夜不舍

○春の晩　大阪　本井　春子

車の輪響が眠むさうに、聞えて來ます。私は絢爛しい感がしましたと、——お嫁になられた、繁子樣の事を語り出したのは、九時頃でした。例の叔母樣の、肩を叩き出しました。「お前でもあの頃に、……嫁かれたのに……」「でも……」私の顏は火照つて來ました。

評　うつ手も亂れて

○嫉妬　加賀　田中白百合

從兄の健さんが、菊さんのクラスの藤井は美人だね」と云ふと、私は此人をしてクラスの花として誇つて居るにも似ず、躍氣と成つて、美人でも駄目よ、浪さんの血統だ者つて云ふと健さんは、平氣であゝ武夫に成りたい？……それと心付くと私は矢張り女だ……

評　輕き戰慄を覺ゆ

○郭公　東京　はつかぐさ

郭公、なんて好い名だらう私はこの時鳥の名をきくと共に深い緣でもあるやうに思はれて仕方がない第一私の生れたのが時鳥なくてふ初夏の頃だしまだ小學校にいつてゐる時分から好きだつた加賀の千代女が初めて俳諧の師について學ばれた時の題もこの時鳥であつた後私が十六の時、初めて和歌を學んだ時の題もあゝやつぱりなつかしい時鳥であつた、塲末とは云へ都にすむ身の影は愚か聲さへもきいた事はないが月淸き夕など書院の窓開いてもしやと見いつたことも幾度であつたらうか。

評　浪子たらずんば幸なり

○山家雪　呉市　碓井　呉竹

向ふの山の、あの見にくひ藁ぶきの

家も、今朝の、白粉こて／＼の濃化粧に、見違へる樣に、美しくなつた、他の家よりは、たしかに見よくなつた。それに紅梅が匂ふてをるので、ことさら風情をましてをる。丁度雜誌の口繪に有りそふな。

評　展覽會の出品とまでは行かない景色

○木瓜の花　　熊本　波の花

ぼけの花といふと直種痘を思ひ出すぼけの花と種痘、それはまだ私の小さい時分、燃ゆるやうなぼけの花の開く頃は、いつも種痘をして居るのですると御祖母樣が、種痘にぼけは毒ですよといつてとらして下さらないそれが毎年だつたので…

評　俳趣味あり好聯想

○かげ　　小石川　つゆ草

湧き出した樣にサッと障子に影が射した――樫の。葉は黒く、日光が透く處は白くまだらな其影は微に柔に動搖する――と我心も伴はれてゆれて行く。緑葉の表は銀色に輝いてるだらう雨後の日光に閃いて――と思つた時、吸ひ込まれる樣に影は消えて仕舞た。灰色雲にひし／＼と蔽はれたらしい空の氣合を想像して何がなし夫を仰ぐのが恐しくつて障子を開け得なかつた。どうしても…

評　瞑目の庭に飴賣りの笛



側面　　日暮里　茂木安子

○あゝ友の一人　　府下　霞子

「ちよいとそこへ居被るの川村さんぢあなくて」と後からあびせ掛られた艶な聲に、ふいと打たれてドッキりとしながら振り向くと、つぶし島田に御召の袷鐵納戸の袷羽織が肩からすべり落ちそうな粋姿、これが同じクラスに倫理の講義を聞いた森さんとは、あゝ矢張り私の友の一人。

評　これも一個の惑星？

○蝶　徳島縣　吉田　紫花

去年迄、いつも色々な草花を澤山植ゑてゐた大きな家の屋敷跡へ、今年は黄な菜種が一ぱいに咲いた、可愛い〻蝶はその上て舞ひ狂つてゐる、昔の草花を尋ねてゐるのであらうか、それとも其の事はもうすつかり忘れて仕舞つて今は菜種計りが戀しいのであろうか、只終日舞ひ暮してゐる。

評　夢より外のことを知らず

○漂浪　佐賀縣　ふじ子

唐人町を眞直に走して居ると或呉服屋の店先に客を相手に見向もせぬ番頭を恨めし氣に見立つてる小娘が居る。フト見て驚た、去年三角て父の破三絃につれて唱ふのに逢つて以來牛津て逢ひ小城て逢ひ適偶歸國すれば又も古郷に逢ひ今又佐賀に巡り逢う。あ〻漂浪の身はやはり漂浪の人と何處にか逢ふ。何とも知れぬ悲さがヒシ〳〵と胸に迫る。

評　春亦逝く

○初島田　島根縣　時雨女

物心覺えてからお下げと束髮ばかりにしてゐたのを十七の今日初めて島田に結ひ紫お納戸の振袖に帶を大きくやの字にむすんで姿見の前に立たせられた、母様が肩上が無くてもよいとお仰ると蕉園の畫の樣よと姉様はまた、面はゆく下うつむいた時しんみりと髷の重さを感じました。

評　褒め上手なる姉さんなる哉

○逢魔が時　麻布　江森　美子

闇はしだいに、こめて來た。燈火をと思ひながら、動くのも立つのもいやだ、火鉢と、にらめつ〻こして居る中、闇い家には魔が這入とお祖母樣が仰被つた事を、思ひ出て、恐ろしく、夢中に立つてマチを、すつた刹那、ガラ〳〵と門が開いて靴音高く父樣が、あゆみ優しく母樣も、家の中は甦へつた。

評　ヤレ〳〵よかつた。

○俊寛　麻布　蘆久子

「あだ守筑紫の果の薩摩潟鬼界が島の荒磯に」と姉は好いお聲で始られたゆるやかに響く四絃の音はいと心地よく聞る私はこの曲を聞く毎に何となく心細くなり今に妾も俊寛の樣に淋しい所に獨殘されるのではないかと思ふといと〻悲しくなるので。

評　世の落伍者皆俊寛

○變窟人　周防　重原白百合

或日は矢鱈に嬉れしくて心がそは、そはして、少しの事にも能く笑らひます。或日は嫌やに悲しくて〳〵、此んな事なら早く死に度いなあと思つては、無暗に涙が溢れます。はて、私は何時の間に此んな變窟人になつたのでございませう？

評　一名ヒステリーと云ふ

○早縫ひ競爭　廣島市　小出　百代

二尺五寸の糸を幾條となく作つて針に糸を通して待つて居ると先生が「お始めなさい」と云はれる、一同は一生懸命に縫ひ出す、隣りの人は早二本目を。敗けてはと思ひつゝ漸く一本縫ひ終り糸を通さんとすれば嗚呼どうしやう糸がもつれてしまつた。

評　あゝぢれつたい

妾の髪　大阪　康子

お祖母様は桃割が可愛と仰しやるしお母様は島田が娘らしつていゝと仰しやるけれど妾はどちらにも結ひたくないいつ迄も〳〵此束髪で居たい自分の身體で自分の自由にならない妾せめて髪だけなりと妾の思ふ通りにしたうございます。

○夜明　大阪　植村艶子

ふと眼が覺めた四邊は寂として二つの時計の刻む音が静かに聞える計り氣が付くと丸窓がうつすり明い月か夜明かしらと考へて居ると突然牛乳配達の車が横町から出て東へ走つたおや起きよう少し早いけれど起されぬ先にと枕押しやる途端疳高い伯母様のお聲で「艶さん」

○雪の朝　京都　益子

雪ふりは困りますのね。ほんとにねー。と云つてるものゝ、内心嬉しくて仕様がない。まさか、雪投げもう出きないけど。美い處をそつと、おはちに取つてこつそり、お砂糖かけた、處をかくしそこれて。ヤアー―姉さんだつて食べてるよ、お母さん大聲張り上げられて。ほんとに、とり返しのつかない事を、し出かしてしまつた。

○嫌な雪　信濃　優梨子

あゝ又雪が降出した。何故斯う何時までも降るんだろう。

暖かい國からの春の便りを聞く度に、私は何時も、酔ふ様な花の香の漂よふて來る、春の朧夜を、美しく胸に描いて居るのに、あゝ又此雪で消されて終つた。

嫌な雪だ雪は北信の花だと人は云ふ。けれど私は、矢張り華やかな春の花が好だ。あゝぢれつたい。何故雪はやまないのだろう。

○私の願ひ　東京　月草

「廣い野原へ行きたい」私は終始此言葉を操返して居る、青い若芽が見たい、新らしい木の香が嗅ぎたい、血の燃ゆるうら若い少女の身をうす暗い室の中に閉籠つて居られやしないもの、あゝ何所か廣々とした青い野へ行つて思ふさま清い空氣を吸つて見たい。

○悲哀　渡島　千葉　幸子

顴骨がとび出て、目も頬も、げつそり穴に成つた、父様の衰へ切つたお顔、血の氣が少しもない、花が參ゐりましたと申上ると、微かに首肯かれたが、後は又昏睡の狀態。

之ては　とてもとほろり雫、屋根の上でカアー〳〵〳〵と、嫌な鳴き聲、私の胸裡の一つの小さい望のみ絆を、引き切つた？とばかり……。

○夫の姓　府下　大久保撫子

女子文壇を讀んでる姉の傍で友に手紙を認めた妹は高橋房子様と宛名して裏書にはつと躊躇つて頬は薄紅ぼかし、折も折切りまで讀んだ姉の眸に射られて眞紅な面に莞爾、どうしたの靜ちやん、妹は里返りの二日目であつた。

○金魚　鈴木矢壽子

玻璃盤の春の水に身籠りの金魚は水草の影に隱れて居る。最う臨月に近いてしよう、腹は大きかつた。私が餌を入れてやると愛らしい口を開いて食べた。同性の魚！私は其の安產を祈つて薄絹の覆ひを掛けて日向へ出した。

○罪な子　山口　酒向登志子

縁談、復ことわつた、嫁こうかとゝ思はんではなかつたけど嫁つたら最後身は亡びて仕舞ふもの、然しそう〳〵否を云つてはさすが氣の毒にも感じるが……ても何だか否と云つたのが誇り度いやうでともすれば胸が踊る――あゝ私はどうしてこんな罪な子に成つたのであろふ。

○春の夜　牛込　平塚白百合

朧月の醉つたやうな夜である。松源の火かげサーと水に流れて、堤の上はほの白く櫻の並木が浮んでゐる。渡舟船は小さな火をともしてろの音も靜かに、鷗の夢をさまさじとこぐ。堤の方からも一艘ともづなをといた。暫らくの間に舟と舟とはすれ違つた。向ふの舟には春の夜にふさはしい白い顔の艷な女が目についた。見る間に舟は遠ざかる。淺草寺の鐘が餘音長く水を渡

つて響いた。

○探海燈

淡路　加藤みぎわ

パッと電の様な光り、春の夜にまさかと思つてお二階の窓から海岸の方に瞳をやる、今度は私の全身を眩き迄照してすぐお隣の屋根に移つた、丁度今、霞の暈を冠つて雲の掛橋渡りかゝつた月姫様驚いて何れへか身を隠しておしまひなさつた。

○烏の聲

常陸　古島花子

カアカアと、裏の古墓地の方で、氣味の惡い聲て烏が鳴いてゐる。姉様は病んで大きくなつた目をジッとすゑて、聞て被入る。今まで編物をして居た、五十ちやんは、急に、「姉様あの鳴聲聞えて」「はあ手にとるように聞えるは」ぢやまあよかつた死ぬ氣遣ひないは」

○その前日

澤　むらさき女

垣によりかゝつて春の夜を歌ひ出した、自分ながら其聲にうつとりして明日澤山の聽衆の前てミス、マリーのピアノで哥ふ時の皆の顔を思ふと微かなときめきを覺える。とイタリアの町を美くしい聲て哥つて歩く辻音曲を思ひ出して西の空を見やつた。

○蝸牛

千葉縣　小川英子

聲があつたら淋しい聲だらうと誰かが云つた。僅に角を伸ばすとて、胡蝶の羽風にさへ怖ぢつゝ、何が求め得られうぞや。蜂の針もなく、とんぼの腸もなく、あゝ蝸牛、汝は弱い虫てある。けれどもお前は穀を持つてゐる――と私は哀し。

○妾の一週間

伯耆　新田文野

月曜は、何となく、日曜の、影響で、横着心の、はびこつて、居る日。火曜は、漸く、さめた様な日。水曜は、仕事に、熱心な日。木曜は安息日に遠ざかつた、氣のする、ちよーど、大海に、漕ぎ出た様な日。金曜は、稍々光明を、覺える日。土曜は、やうに疲れきつた日。然し多大の、希望ある日。妾は、此の日が、大好き。

○なみだの元日を讀む

孫子

とし子様とやらは御脊が低いと云つて泣いて居らしやる私は又反對に高過ぎるので道を歩くのも恥かしく目立つのが厭やさにいつも歳よりふけたなりをして居ますあゝ分けられる物ならねー。

○お隣のお婆さん

七戸　露草

キラキラと輝く太陽の光線を正面に、受けて立つたお隣りの御隠居さん、今撫で付けたばかりの白髪は一糸亂れずさて威儀を正しパチパチと拍手打つて目をとぢ暫らく合掌して恭しく朝の禮拜を遂げた、あゝそのお顔はとても平常のお姑さんとは思はれません。

○髪結

水戸　重子

ほんとうに何日迄來ないだろう、來たかなければ來なくつてもい、髪結なんかいくらでもあるからと、ぷりぷりして居ても、今日はつて、這入つてくると、莞爾せずにはいられなくなる、其れでも結び終る迄口一ッきかないて。

○春の野

福井縣　片山千里

「もうし、これから本保へまいりますのは……」と、若い男が、赤い顔をして、麥の草を取つて居る、おちかさんに尋ねた。「あのれー」と腰を伸して、おちかさんは、指先に土がついて居るので、手の甲てほつれ毛をなであげ、「これからまつすぐに南の方へ……」と丁寧に敎へた。それから五六日たつて、おちかさんに結納が來た。

○幼い心持

西多摩　三ヶ島葭子

千代子様から美しい編物を送つて下さつた嬉しさに、お晝食もそこそこにすまして、御禮の手紙を書かうと思つて机に向つた。外から歸つて來たをばさんが机をすべつてゐる巻紙と私の顔とを見較べて「その紅い顔！まあどうしたのどこへ出すの、」私は筆持つたまま自分の頬へ手をあてて見て驚いた、私は好きな物を見たからであらう幼い時と同じ心持を味つたのである。

○火の側

神奈川縣　鈴木辰子

初春の淡き太陽はうす黒い雲に隠れた。冷い風が針を持つ手を震はした空はいゝいゝどんより曇つた。私は火の側へ寄つて文考へた、二月前から煩悶して居た「今のお母さんは實のお母さんてあるか無いか」の解釋をつけた。矢張り今のお母さんは繼母だつた。火は悲げに灯つて居る。

○少女

下關市　山田くに子

春雨の音が淋しく響きます。柳の間からもう夕

暮の灯が見えます。向ふの方から六才の少女が傘もさゝず雨にぬれて隣の酒屋に這入り「お父さんの酒を下さい」と云ひ首垂ました。私は可愛そうにと思ひました。

○何故？　麻布　常世草

嫁いて三月は夢の様に去つた。咲かぬと云つて居た梅花も開いて散つた、鶯も來て啼いた。日頃行つて見たいと思つてゐた日光も見物して來た。欲しかつたヴァヰオリンも買つて指にはリングが三つ四つも輝いてゐる…けれど、私の心は依然として寂しい。

○ひゝさめ　芝　みよ子

雨はやんだ、おばあ様の御部屋の前の小さな松の木の葉が、雨にぬれて其先に出來た玉が、ダイヤの様にいくつも輝いて居る。裏の方では風呂に引いてある筧の水の音が手にとるやう…こんもり茂つて居る葉の間から淡い月影が出り消たり。

○池畔　下谷　蕉雨子

柳の陰に膝迄浸つてゐた栗毛が、小坊主に引かれると、其邊に遊んで居た鶺鴒が二三羽、長い首を伸し、應揚に四邊を見廻し乍ら向に泳て行くすぐ近の岸の水を撫ん許りに咲き零れてゐる山吹の下陰では小さな魚がはねて後は美くしい漣が輪になつて行く。

○人の妻　北海道　安達けい子

精ちやんもお嫁に行かれたそうな。ラケットを持つて駈け出すことも出來まい、あまり滑稽も云はれまいし好きな林檎もかぢられまい、あゝ氣の毒なものだ、即ちこれが人の妻といふもの。今の中ですよ、と昨日もいふた。花も蕾の時。

○無慈悲な伯母　淺草　島田ちか子

家内一同集まつた處であつた四人それに伯父様はおるすそれをお母様は一寸一時間ほどと御破て出て行きなさる殘た妹と二人きり其れを又妹はれむいと云ふてふとんの中へ入るたつた一人になつてしまつた私のこわがりをよく御存じのくせにほんとに無じひな方。

○もしや　常陸　鈴木花香

門の枝垂櫻の木によりかゝつて、うつとりと暮れゆく町を眺めておるとカラ〳〵と人力車の音！ハット見上れば薄れずの色の中折帽を格構よく頭に頂いた、お口元のキリ〵としまつた、若人…まあ眼なら口なら夜雨先生そつくりな、と思ふ中もう後影は角道へそれて見へなくなつた。たしか御病氣が未だすつかりならないとか聞きましたが、もしや先生ぢやないかしら、

○春雨の夜　三島　幽喜

其晩、空には朧の月は懸つてゐなつた。兩親に同窓の靜枝様が明日お嫁に行くと聞き、私は譯もなく悲しいやうな氣がして、其儘二階へ驅上り机に俯伏した。屋外には春雨が降りだしたらしい、恰然若い女がしく〳〵と泣くやうな音がし始めた。

○さびしい花　靜岡　櫻子

八年前に二葉であつたのをお玉ちやんに頂た櫻が、今年初めて花を開た。淡紅色の麗しいのだろーと樂しんで居たのに、さびしい白いのが梢の方にだけ五六輪咲いた。あゝお玉ちやんは今どこに居られるやら。

○千羽のつる　茨城　とよ子

七日のまゐりそめの時、としちやんと、五百羽つゝ折つて、夜雨先生の、御全快をお祈りして捧げた千羽の折鶴が、今日來て見ると一羽もない、何處へ飛んで行つたろう、あゝきつと筑波の麓に、にくらしい、あの病魔を追ひに行つたんだらう。

○或夕べ　伏見　田舎娘

「ごめんなさいて濟むと思ふかい」。暫して此するどい御一言。包み切れずしてまつ毛にからむ熱きしづく。凍つた椽板へ形附く許りにはふり落た。「寒いよ」。荒々敷閉されて。又しても、にじみ出る涙を拂ひつゝ苦しい胸を抱きメて、梅ヶ枝近き朧月を仰いて、じつと立すくんだ。あゝ。

○憎い英様　信濃　紅ゆり子

かるた會のあと、從兄の英様が音色によつて東西南北何れの方向を打くるか必當てゝ見せると被仰るので、づるて負かされた腹立ちまぎれ、當る物ですかと云ひ返し乍室の外で御茶碗の東の方をチンチン〳〵「出ないよ」と英様の聲、ワツと起る喝采！口惜しい、私は乞食のまれさせられたのだ。



俳句

内藤鳴雪選

◎（天賞）

凩にたま〲雨をきく夜かな　千葉縣　中村八重子

◎（地賞）

小提灯たゝめば花の散る夜かな　麹町　牧野みどり

◎（人賞）

すゝしろに雨暖き彼岸かな　神田　栗田花子

【秀逸】

野風呂より花盗人を叱りけり　奈良　中富よしみ

白梅に海の音せまる餘寒かな　出雲　山代夏代

何事のその御顔ぞ櫻ちる　美濃　葛の葉

裏山に雨見る朝の夏近し　神戸　森本豐子

思出や時雨にぬらす旅衣　津山　松子

落首する闕の扉や山櫻　名古屋　柳生幸子

衣洗ふ川の濫みや諸子浮く　大阪　平井紫衣子

風蘭に燭して煎茶抹茶かな　靜岡縣　大塚金子

ちらと見えし雜木の中の櫻かな　枯尾花

埴輪造る土の匂ひやあたゝかき　信濃　吉川多美子

山村に病院開く櫻哉　伊賀　わか子

菜の花や辻の地藏は夢を見る　沼津　渡邊とよを

被衣して琵琶きく門や春の雨　下關　金重とら

雁なくや襟もと寒き旅まくら　茨城　宮久保秋水子

苗代や小田開きたる城下口　岡山縣　野菊生

蒲公英や此なつかしき古里に　陸奥　南部八千代子

春の雨鷄のぬれ羽を振ひけり　北海道　金子竹枝

荒るゝ日の中くだかけ高う鳴く　宮城　沼倉馥子

花の下かんばせ淸き法師かな　埼玉　せつ子

故郷へ歸れば花の江戸戀し　南千住　堀　桃舟子

塵積みし机上の本や春暮るる　讃岐　安藤たか子

この海に平家亡びし霞哉　三島　遠山雪子

氷わる病家の人や春の月　群馬　志美津

春雨に夢よりさめし蛙かな　栃木縣　しのぶ子

いも畑に大入道や月おぼろ　門司市　鈴木靜枝

おぼろ月人と別るゝ橋の上　遠州　高畑小菊子

名馬病む廐の外や玉椿　長野縣　櫛原田鶴子

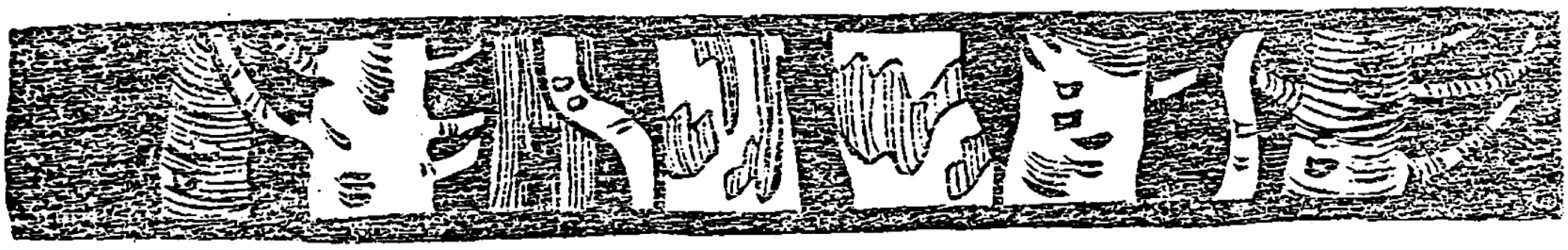
逝く春や雛の脊に散る櫻　澁谷　昌子

桃咲いて鍬の光りも夕日哉　武州　丸山榮枝子

巖頭に濤うちつける夜寒かな　靜岡縣　鈴木若草女

春のくれ何を告げ合ふ小鳥かな　三河　高畑清子
菜の花に蝶も飛ぶなり屋敷跡　小石川　高野喜美子
高麗狗の春に吹き付く櫻かな　名古屋　松村千代子
月ぞ來よと唯さりげなく文一通　肥後　江上キト
すし店と女の文字や山の茶屋　新潟縣　岩本芳子
水馬する栞ともなる柳哉　小石川　田村波津子
順禮の笠吹き破る吹雪かな　和歌山縣　松山みきゑ
洗濯のしつく冷たし袖の口　大和　靜子
八重櫻君の土産に折り行かん　茨城縣　土井なをい
朧夜に誰が風流の琴の音ぞ　小樽　濤田芳枝
出代りの馬が迎ひに來たりけり　兵庫　杉山春翠
戀猫の聲うらめしき炬燵かな　京都市　本郷はるの
山畑や雲に耕す春の夕　秋田縣　豊口せつ
水仙の白きを折て別れかな　四谷　桝崎佐喜子
鯨見ゆと騒ぐ小村や菜種散る　兵庫縣　谷本みれよ
春行きて机に餘る日記哉　福岡　小林せん子
うつゝなの馬上の人や散るさくら　四谷　味方こう子
炭やきの煙見えけり山櫻　信濃　山西まさ子
春の月今宵を嫁ぐ人に照る　千葉縣　小川英子
凧や京の紅屋の片戸ざし　仝　仝人
凧やからび付きたる串の魚　仝　仝人
紅梅や嵯峨に年ふる女鍛冶　千葉縣　石井よし子
もそろかゆき種痘のあとや春の雨　千葉縣　齋藤きよ子
乙女子の桃折り行くや川づたひ　岐阜　吹枝
草の月に小簑かけたる桃の花　仝　仝人
おくつきに苔の青みも三年忌　富山縣　山本紫菫
吹雪して雀も宿をほしげなり　北見　鯛子
梅散りて水にも春の眺め哉　石川　葉末女
上り來て見かへる山の霞かな　大阪　福井まさご
葉がくれの花火美し雨の中　渡島　千葉幸子
春の草皆一草と思ひけり　廣島　谷川松枝

水道の水の音して雪の中　下關　花子
見上ぐれば顔に旭のさすひばりかな　靜岡縣　好古
ものいへば口より湯氣のたつや霜　兵庫縣　正子
春さむし峠の茶屋の梅の花　岡山縣　黒瀨春農
伐り倒す杉百本や冬の山　横濱　辻芳子
夕日や竹やぶ越の杵の音　美穂子
斧とりて正月餅を割りにけり　備中　篠原しげ子
春の野や櫻かざした女づれ　東京　芳野柳
親と子の樣に並びぬつくづくし　大阪　高山米子
曲終はれば雲間を出でぬ春の月　尾道　山路熊子
雲低う冷たき風やみぞれふる　越後　みしま女
凧や棧道十里旅衣　千葉縣　飯高まさ子
瀧落つる其岩陰や躑躅咲く　兵庫　紅雀女
薫風や衣紋つくろふ町の中　兵庫　小橋女
花も見て昨日彼岸に入る日哉　山城　木の花
春雨や軒にたゞずむ若菜うり　大阪市　植村艶子
紅梅の鉢をかしづく机哉　埴生　醉花
千曲川や氷におもき水くるま　長野縣　山本操
琵琶抱いて戸をのぞく人や冬の梅　福井　北利子
起出て鶯聞きぬ淀の宿　大阪　山內溪子
うらゝかや鳥影さす歌机　秋田縣　加藤うん子
野の末に牛追ふ聲や夕霞　札幌　高橋末子
春の夜も更けて二人のこたつかな　兵庫縣　三宅房子
若竹や早雨の音風の音　大阪　安達正子
春淺く火桶圍みて梅見かな　五條　阿美
北風や小魚賣の後吹く　水戸　重子
魚はれて水面に亭の灯影哉　和泉　かなた
箱庭の梅の若葉の夏の月　信濃　九山峯子
少年の寢顔や春のあたゝかき　北海道　安達けい
明月に黒潮高き響哉　伯耆　足立春子
谷合に小さき村の櫻かな　近江　石川大子



文壇通信（餘興）

金澤より

むらさき女

金城文壇の概況をお話し致しませう。當地方の人々は一躰に文藝に對して冷淡のやうです。新聞と云ひましても三種しかありませんが其續き物は講談物か幽芳流の新小說でして、たまには秋聲なんかの小說が出ても一般に餘り喜ばれない樣です。俳句は正風と新派とがありますが、正風の方は商人肌の方にむきますし、新派は若い人々がするやうです、和歌は舊派に歌道奬勵會の支部や古學舍と云ふのがあつて、昔風の人々が主になつて月々會を開いてゐます。新派は主に學生がしてゐるのでその中でも男子の方が大抵で第四高校の和歌會、北陸新紙の新歌壇なんかがあります。女學校て新派をする人はごく少なく曉の明星といつた觀があります。雜誌は去年の暮に「潮」といふ純文藝雜誌が四高から出版されました。其外は廻覽雜誌て聖燈、雜木林、荒城の月、靜夜、花露、五稜の華、其他にもあるかも知れません。東都雜誌の投書家は數へる程しかありませんが、主に中學に居る人々が活動してゐます。金澤出身の文士は秋聲に鏡花のお二人位ですが、皆文藝を以て一家をなすと、少しも故鄕を顧りみられないと私共は申して居ります。土曜日の晩なんか書店へゆきますと若い人達がぞろ〳〵と雜誌を引くりかへしたり、み腰を据えてよみ耽つてゐたり、花袋がどうの白鳥がどうのと批評をしてゐるのも見うけます。けれど決して文藝が勢力を得てゐるとは申されません。（天賞）

土佐より

寂靜子

昨日でした、親友のM子樣にx女學校にかくれなき、現代物でも時代物でも目に觸れたもの耳に入つた者は恐らく一物も殘さなく讀むと云ふS子樣といふハイカラを紹介してもらいました。S子樣は每日二三の物は讀むとの

仰せ、オヤ〳〵恐るべき又驚くべき頭の人だと思つて「どんな作がお好き!!と問ふと「妾數多讀みますけど富美子夫人とコブシより面白い好くできた物は無いと思ひます「コブシは何誰のですかね？わざと問ふとそれは〳〵作中の人の名をゴタ〳〵並べ出す。誰の作やら何處が好きやら一向お頓着なし、唯不如歸以上との御意、私の大嫌な發賣禁止や天外の崇拜者では恐縮して終ひました、又御意遊ばすやう「D新聞の八重霞は實に面白うございますね」「エヽッ」あれは頭にまだチヨン髷の殘つてる澁紙色の御人方の人氣物とばかり思つてましたのに、廿世的の女學生の愛讀者こゝにあらんとは。作者は天保生れ、作はお家騷動まづい淨瑠璃の燒直し、此愛讀者に投書だの詩だのと云つたつて啞然たる筈だと思ひました。女學生中にはこんな人が八分以上占めて居るのです。否これ以上の人もあるのです。（地 賞）

大分より

原田澪子

お恥かしい事ですけれど書店は二軒ぎりでして、古本屋が只の一軒あります一寸のぞいて見ましたら算術や國文の敎科書類が主でした。貸本なんてありやしません。そう〳〵此方え來たまぎわでした、熊本でよく見る貸本やの車が通つてましたのでもし〳〵と呼んで後から走つて行きましたら、五十餘の爺さんが『味噌漬かえ』と云ひましたので、私顏が眞赤になりましたの。

一番賣れるのは婦人世界らしうございます。本誌の愛讀者は比較的少ない様です。本月のを求めに行きましたら僅かに二冊ありましたので、何となく悲しい様な情ない感がしました。可笑しいのは「家庭日記」の來る時でした、餘り待ち遠しいものですから毎日〳〵電話で聞いてましたら、驚くぢやありませんか。參りましたと云ふので行つて見たら何時になく五十冊程積み重ねてあるんです、オヤと云つてそれでも心强い思で買つて歸りましたら未だに三分の二程店先にあります。私の電話のかけ樣が多かつた故ではないかと見る度に馬鹿な心配をします。中學高女師範より外高等の學校がありませんので、素見するのは氣の毒な位書店は淋しうございます。女學生間には幽芳のものが歡迎される樣です。夏目さんのを友達に讀みませんかと云ふとそんなのは面白くないと云ひます。味ふと云ふより面白いから讀むものが多いやうでございます。

（人 賞）

福井より　くれがし

新聞には福井新聞に北日本の二紙がありますが前のは主筆が漢學者の士生彰て文藝作品は重に歌俳句ですが舊派が多い。後のは主筆が前縣議の長谷川豐吉で文藝の方は遠山茂といふ三面記者に任かせてあるそうて新派が多い。又雜誌は北陸文壇と夕潮がありますが（まだ外に敎育會雜誌や農事月報がありますが文學には無關係であり柚山集花吹雪等舊派の俳句雜誌がありますが廻覽雜誌のやうてす）前のは新派の俳句の雜誌で主筆散谷汎水は靑々の弟子てす、投書家は重に東京の雜誌へ出しても出ない人ばかりで、後者のは金澤高等學校の敎授の澤島曉村が主筆て夏目先生や牧水先生など著名の人の寄稿がありますが、大方は投書位はしたくなしと云ふ人が重に書いて居るので、どん栗の丈けくらべ、つまらん口論ばかりして居ます、これは和歌中心です。

文藝の會ては舊派の俳句の會は無數、歌の會は越路會とて大分盛なり、新派の方ては俳句のは蝸牛社のみて、和歌の方には北の庄詩社武生詩學社等ありまして、俳句は舊派の方が勢强く、和歌は新派の方が盛てす。

長岡より　みしま子

長岡の文學?、振ひませんわ、石油の樣な實業が盛んな故てもありませうが、市にもなりて文學に關した雜誌一つないのてすよ、今の長岡では文學など殆んど眼中に無いと云つた樣にみえます、土地がこんな風だからといふ事もないでせうが、學校なんどでもあまり喜びませんよ、私の學校なんか小說は勿論雜誌とても講讀せざるをよしとす、もし講讀する時は一種限りとすべし、てすつて、だから作文も楠公の傳、平家の滅亡を論ずなどばかり、たまく振てると思ふのでも東山の初雪をみて感あり、厭になつて終ひますわ、勢ひ生徒各自もこの方には力を殺しませんので隨分文才のありさうな方ても、其儘埋もれて終ひます、つまり其文才を發輝する機會がないのですれ、それかと云つて中央文壇に一旗あげる樣の勇者もありませんし。この勇者は却つて小學卒業後お家にお出の方にたまたまみうけます、佐藤浪子樣、岸初子樣など其例てせう阿部秀子樣も本誌を飾つた長岡の人の一人てしたが、今は雪深い高田にいらつしやるさうてす當地發行の新聞にも文學欄とかありますが、每度同じ人の紋切形の歌など、ほんのしるしばかり並べてあるきり、頗る情けない有樣てすよ、兎に角文學に對しての長岡は、寂漠たるものであると思ひます。

岐阜より　葛の葉

岐阜縣では只今の處、川柳が流行致すように思ひます、西濃の田中蛙骨さんなんて熱心家が川柳專門の雜誌迄出してみへますが、新聞にても大抵は川柳がのつて居ります、新派和歌が此次へつく位で、舊派の和歌にきようはハとか本字忘れましたが、或一部では流行する樣です、市内では日々新聞、濃飛日報、岐阜日報其他名古屋扶桑諸新聞に岐阜附錄をつけてますが、小品の外に矢張川柳などがあります、敎育新聞、うき世新聞、商工新報などありますが、敎育新聞は雜誌山鳩の編輯者小木曾旭晃さんの手になるのですが仲々振つて居ます、うき世の方は文藝俱樂部式のものです、神隨つて名にそむかぬ雜誌が出ます、一寸古風なおんとうな雜誌です、其他師範の校友會とか女學校の同窓會とか年に何回位出ますが餘り振つては居ません、新體詩なども或一部に好む人もあります。

備後より　井上年子

△文學に對する一般の人氣は先づ冷淡と言つて差支へないてせう。文學を單に娛樂的藝術視する風があつて是れを實社會に活用せようとする風がないのは誠になげかはしい次第です。

△一般の好讀家を通じて、比較的多く讀まれるのは雜誌てせうか、それに次いて小說、實業書類等て、哲學じみた書籍の讀者は非常に少くないてす。

△新聞の發行は二三種ありますが、何れも微々たるもので、勢力は大阪朝日每日が最も盛んてす。雜誌はあらゆる種類の者が盡く歡迎せられて居ります。

△和歌の會は、たづその社が唯一てせう。これには佐々木先生や、井上、鎌田、阪等諸先生の選評批判もあつて、歌學雜誌も發行して居りますが歌は概れ舊派て、新派は餘り勢力がありま

せん。つまり新派に趣味を持つ程熱烈に發達して居ないのでせうか、其他俳句や川柳で名を知られた會はありません。
△學校では近頃生徒にチヨイ〲文藝品の創作をやらす様になりましたが、是れは喜ぶべき現象だらうと思ひます。
△貸本屋は澤山ありますが、大抵は講談が重で新らしい小說などは少くないです。
△地方出身で有名な文士のないのは誠に肩身狹く思ひます。
△男女を通じて、投書家の極めて少くないのには一層心細う思ひます。

信濃より　優梨子

文學の方面には、皆様一同一向無頓着の様ですすけれども……。尤も極一部分の、私の眼に寫る人達だけです
たまに文學雜誌に名でも出ると、皆惡い事でもした様に目を丸くして見ます。さも無い人は其寬ものを見様ともしません。
不如歸や乳姉妹こそ皆よく見る様ですが、新進作家のものなど見向きもしないのですもの、情無いでは御座いませんか。
私が讀みさしの「微温」を臥せて置いたのを友が二三頁見て、「貴女恁麼もの讀んで面白くて？」とさも不思議さうに聞きました。先達てゞす。恁麼風ですから私は、誌上にお名の見える皆様がお懐しくて堪りません。

伊豫より　バンジー

「伊豫の人間は伊豫猿と云はれて居つてれ、猿のやうに何んでも、物眞似をすると云ふ事なんだ、文學等は一寸やつて居るよ」とは私が未だ高等一學年の時或る先生から聞いた言葉です、その時は何とも思はずに聞きましたが、頭に刻りつけられたつうに、覺えて居て、此のひとの言葉がやつとわかりました。故子規、鳴雪、虛子、碧梧桐の生地程あつて、中々俳句は盛んに行はれて居りましていたる所に會があります、新聞にのせますが會の名が面白いので（一俳句趣味と云ふのでせうか）見るのが大變好きです（但し會名ぎりですよ）此の間、新聞社主催で俳句大會が公會堂でありました、松山發行の三新聞ともそれ〲文藝欄を設けて盛んに文學を鼓吹して居ります、雜誌は四國文學と云ふのが去年から月刊で出て居ります、地方雜誌としては珍らしく立派な雜誌だと云ふ評判です、貸本屋も圖書館も可成りに賑ふて居る様子です、先づ文學には熱心な方でせう。

山口より　酒向登志子

私が昨年縣下大國學者の某老人の許へ（八十八歲）和歌の添削をお願ひに參りましたらこうです「今頃のなんて新派の歌どもごろうじん事あればどだい歌ぢやないから」まあこんな風です、歌會もないでは御座いませんけど是等の方々の主催で杖の入用な方ばかり、高女校などでも課外なら歌會も御座いますけど、志望者は十人たらずですもの、直様倒れて仕舞ひます、俳句もお寺方になさるがせいさい、新聞雜誌實に文學めいた事はゼロ、實行の良好な雜誌と申しましたら女學世界と婦人世界女子文壇やスバル等は注文しなくては仕入ない始末、貸本屋は有つても不如歸か講談が關の山、古本屋は店は大きくてもハイ子や藤村の詩集はないかと聞きますと、そんな物は御座いませんと濟した返事、さすが圖書館にだけは詩集はそろへて居りますが、新派歌集といつたら夢の華が一册あるきり、實に私は泣きたい程情けなく感じます。

熊本より　波の花

女學校を卒業して詩文に心をよせる人が幾人ありませう、詩を解する人も稀でせう、それよりか御嫁入の仕度でも考へるといふのですもの、小說や詩でもかくとハイカラだといつて、だらくてもしてるやうに云ひます、それで詩集や文學雜誌なんか哀なものです、婦人女學の二界の四百に對して趣味や文章世界などは百にもたらないと申します、從つて投書家なども稀です女學生はひかへ目でせう、近頃新聞に小品文が出ますが紙面をかざるだけでせう、話相手がなくて淋しいのです、和歌や俳句の會も二三聞きますが、皆舊派で、老人の閑つぶしでせう、入會する氣にはなりません。此地はすべて保守的です、向上心のない地方の人がいやです、心細いのです。



誌友倶樂部

交際を望む

○米國より　誌友の皆様、私去年の暮から歸國して居ましたのですが又渡米致しましたから以前通り繪葉書の交換を願ひます、次に姉様の中で去年の女學世界何れでも御不用のがありましたらお送り下さいかならず御禮は致します住所以前通りS. Takeda 154 Gold St., Brooklyn. N. Y.

○二枚櫛　三月一日の誕生日祝として伯母がまき繪の二枚櫛(前とたぼ)をくれましたが少々地味過て私は挿したく御座いませんから若し御年かつこうな方で御入用の方が御座いましたら御ゆづり申したいと存じます。私は十八になりました櫛は廿から二十五六迄の奥様向きて高彫て御座います御入用の方は一寸誌上て(林富美子)

○朝顔の種子　朝顔を培養するは實に趣味多き者てす、今や之れが播種の好時期となりました、夫れて誌友の皆様の内に此種子が御入用なれば書籍、女子用雑誌、編物類、繪はがき(五枚以上等何れかを御送り下さい、其代りに朝顔種子百種交りを御送り申します(大阪市南區天王寺大道三丁目　松澤豊子)

○交換について　此頃の物品交換の有様はどうですか正しいと云はれませうか、先日も私は或る人の願を入れて物品を送りましたが着いたとも何とも云ひません交換の品も送つてくれませんから度々さいそくしてもちつとも返事もくれません又或は寫眞何名まで送るつてありましたり幾人でもいとひません寫眞送りますと云ふてありますがあてにはなりません、うそばかりついて居ます中には正直に送つて下さる人もありますがそんな人は數へる程しかありませんこの手段にかゝつて本當と思つて物品送つたりして困つて居る人はいくらあるかも知れません、そんな、うそをついて皆さんをあざむく人はどんな氣でするのでしようか心がはかりかれます良心にはづかしくないでしようか。私は不つゝかな者ですが、いつもこれをなげいて居ます、どうかそんな不正な事をしてゐた人はあやまつて、心を入れかへてほしいと存じます、私はこれまで幾度だまされたか知れません誌友の皆様の内にもこの事で困つて居るお人がたんとあるだろーと思ひます皆様如何(むらさき)

○世に歌つてゐる女　音樂や小説に深き趣味をお持ちの誌友の皆様よ妾は大和の畝傍陵の下に潯易江のそれならねどブアイオリンに世をうたつてゐるあはれの一少女よ何卒情け深き御許様御交り下さいコブシ青春の小説御持ちの方はゆづつて頂戴(大和國柳本局森本信子)

○次の誌友會　誌友の皆様御親切にもいろ／＼と御本をお送り下さいまして誠に有りが度う存じます。深く感謝致します。去る十日の誌友會はさぞ盛んて御座いましたてせう同じ近くに居りますのに母上が病氣のため參る事がかないませんで實際つまりませんてした、又秋の會の時にはぜひまゐり度う御座います　ぜひ開いて頂戴姉様方御同感てせう如何なのまあ失禮を申して御ゆるし遊せ。(東京深川區東元町一月見草)

○おゆづり　私は、『水彩スケッチ箱』『畫嚢』

及び『油繪道具』等不用ですから、御望みの御方があれば御譲りします。(福井縣武生町旭 山本方、萍)

○御禮　誌友の皆様方に御交際を願ました處それは〳〵お情深き御手紙下すつたのよ誠に有難う以後も宜しく御交際を願ひます 前御交際中上時男子の方が手紙下すたのよ其の方々には御返事出しませんでしたから誌上を拜借致しまして御禮申上ます。(西多摩郡青梅町天ヶ瀬、荒木春子)

○廻狀を待つ　忘な草様の廻狀早く致しとうございますれ私は樂しんで待つて居るのです何卒早くして頂戴れ明石の落葉子様どなたの事かお敎へ下さい誌友の姉様末永く清い御文通を御願申ますきつと御返事は致してよ(兵庫縣明石町の内タルヤ町、立田益子)

○樂器あり　皆様妾れ中古のバイオリン所持してるのですが兄姉様の御方にて手風琴か又は何か他のものにても宜敷う御座いますから御交換下さいませんか勿論付屬品一切付いてます父手風琴御不用の方は妾に御分ち下さいませんか何卒御希望を書いて本欄まで妾宛に願ひます。(願ひ女)

○國文熱心の方　私は字も下手な、不束者で御座いますが、皆様の中に、哲學か漢文學に興味を持たれる方に、御交際を願ひたいのです。國文學に御熱心の方でもかまひません。是非本欄に御芳名を揭げて下さいませ。(牛込、松山智子)

○廻狀の件　山城の永岡せい子様、福岡の井上なつ子様、京都府の田村米子様、及び秋田すみれ會の皆様、かずならぬ忘れな草の説に御贊成下さいまして誠にありがたう存じます。早速實行致したいのですけれど、之だけではすこし人數がたりなくて折角の廻狀も樂しみが少なくはないかと心配して居りますの、如何でせう? もつと各地方のお方の御同意を得たいものでございますれ、尤も弱年の私が前後の顧みもなく考へました事ですから、間違つて居る所も澤山あるでせうと思ひます、どのように致したら一番よいでせう。皆様のお説も伺ひたいわ。(忘れな草)

○御注意　本誌愛讀者の皆様、繪葉書を好む交際を望むと云ふ、岩代伊達郡伊達村大字上郡古寺の栃木藤重子様には御注意遊ばせな、あざむかれますわ、あの御方は女子では有りませんのよ男子ですのよ。(關東、壹女)

○東京の方に　おなつかしいお姉様方私は淋しい片田舎で友もなく母もなくさびしい生活をして居りますものどうか哀れと思召してレターやハンカチーフお惠み下さいまし。それから東京の姉様方私の母は東京におりますて一しほ貴女方が戀しうございます、何卒々々玉章御惠み下さいまし御禮はきつと致します。(愛媛縣伊豫郡上灘村、(江口美都子)

○和歌同好の方に　誌友の皆様漂浪の淋しい境涯を送つて居ります永久眞實に交際して下さる方はどうか御手紙下さいましそして和歌同好の方は交際して下さいませんか御願致します、(三河國御油町淸海寺内、淺井花州)

○お斷り　誌友の諸姉様方に誠に誠に勝手がましく申にくい事でございますが少しく事情がありまして御交際が出來なくなりましたから御交際をおことはりいたしますのどうぞあしからず思召して下さいまし御手紙下すつた方にはあつく御禮申上げます。(淺草區山之宿町、藤井はつ子)

○裁縫所　私は昨年の七月からは女子文壇の愛讀者の中間入を致しましたがまだゑはがきや御手紙の交かんは始めてて御ざいますから宜しく御交際を御れがひ申します、次に當裁縫所の事を申ます裁縫所が出きてからは六年程になります今御けいこしていられます人は皆て三十三人てす其内寄宿して居る人が十四人と通て居られる人が十九人てす其中の私は寄宿して居ります裁縫所は裁縫科が二年と練習科が二年とてすから姉上様の中でのぞみの御方は父上様と御一しよーに御越しになればよいのです寄宿の方は無月謝です。(京都市五條油小路東入大島裁縫所内、中原笑子)

○心變りの無い方に　皆様と交際いたしましたが一時きりで實に悲しくなります心變のない方なれば何人にてもかまいませんから永遠に淸き御交りをして下さいましな。(山城國乙訓郡中久世村、大橋つる子)

○お願ひ　私はヴアイオリンが大好きです皆様のお中で御好みの方は譜を交換して下さいませんか、又姉上様方不束な者ですが御交り下さいませんか、御返事はいたします。(仙臺市六町一ノ三三、菱沼梅子)

○大和より　毎月の文壇を拜しますが、戀らず皆樣の御熱心は實に嬉しいとと思ひほんとうに懷かしく思つていますよ私はれ裁縫校の卒業ですが、はずかしいのよ、てもれ永久にはらからの御交際して下さる方あればレターの御めぐみを願ひますよ。（奈良縣高市郡高取町、湯川政子）

○行く春の京に　淋しく落してゐる、妾に、お交際くださいます方がございましたら妾も心からお交り致します、どうかお手紙くださいませ。（京都市下立賣小川西入、熊澤方、川島すま子）

○何でも　御なつかしの全國の諸孃樣よシチリハンカチフ、寫眞、玉章、繪葉書、リボン、洋畵肉筆、水彩畵繪葉書、なにゝかぎらず御惠みの御方には私の見苦しき寫眞、水彩肉筆、手紙、繪葉書等にて御禮申します、寫眞は前着拾名の御方だけですよ。（大坂市東區空堀通り一丁目七三田中要助方、田中馨子）

○竹田の片田舍より　御親わしき御姉樣方よ願くば寫眞玉章の御交換を願ひます而し一時的は御免下さい御優しい美しい心から同情ある御交りを願ひます私或る方にエハガキで御交際を求めたれば何んとも返じがきませんあまり酷ひですわ察して下さいな。此の地は軍神廣瀨中佐さんの故郷よ妾女ながらも七生報國のつもりだわ……。（大分縣竹田町山川六九〇廣瀨芳子）

○英語か數學に趣味　英語か數學に趣味ある御方と御交際いたしたうございます、御住所は文壇にて御知らせを願ひます。（德子）

○御禮とお願ひ　早速誌上へおのせ下されましたおかげにて滋賀縣甲賀郡水口町池本忠次郎樣方、土山勢子樣より面白い歌と譜とを御送附下されました記者樣と土山さんに、お禮を申上げます此の後も誌友のお姉妹方も御惠み下さいよ。次に私は今年の正月から諸姉妹樣方と同じ愛讀者になりましたして弟と二人きりにて淋しく暮らしておりますから今後御交際下さる樣お願ひ上ます。（淺草區北富坂町廿八、平野くら子）

○仙臺の方に御尋ね　仙臺の諸姉樣に御願ひ上升私は同市北の方に住て居る者ですが琴が好きですが近くになくて困てまた友達にきけば琴を教るやふになつた方で知り合の御家で御教遊す方がある由です（御自分の家ではおしへられぬ爲）との事私もそーゆー方あれかしとぞんじますがもしや御心當もおわしまさば御知らせ下さい誌上で。御禮は忘ませんよ琴も御座いますしけい古する方々も申合ておきました故どうか御願ひ上升（仙臺北部に住む琴女）

○田舍より　なつかしき誌友の皆樣よ私は今散りはてた梅の木の下で土から出たばかりの芍藥の芽を見てこいしい皆樣を想像して居ります何とぞ長く御心をうちとけてお交り下さいませれんげの花さく片田舍から。（和歌山縣伊都郡九度山村、木澤てる子）

○諏訪より　誌友の御諸孃樣私は昨年十二月母樣に逝かれ、やむを得ず女學校を中途で退校致して本誌を相讀しました、希は繪葉書や、玉章の交換をして下さい、諏訪は山間、湖もあります近頃スケーチンクの流行は非常なものです男女の別なく習練します是非〳〵誌友の諸孃樣お遊にお出掛下さい茅野の驛から一里の上穴山の蟹原に住んて居る小女です。（長野縣スワ郡玉川村穴山蟹原、小林ゆわの子）

○同感　四月號の誌友倶樂部へお出しになつた備後の井上年子さんのお說に同感致しました御同感のお方は不束な妾ですが是非御交際下さいまし。（岐阜縣加茂郡和知村牧野二五、淺野つくし）

○仲間入り　本文壇お愛讀の姉上樣方よ、私は三月號より初めて本誌を愛讀する樣になりました者てす。極めて不束な淋しい生活をしてゐる少女ですが――姉上樣方よ、是非今度よりお仲間入りを願いたうムいます。そして、エハガキの交換なり玉章の交換なりと永劫に熱せずに冷えずに願ひます。一時的ならば絕對にお斷りしますよ。エハガキ趣味を以つた人を私は切望して止まないのてよ。私は交際と云ふものが何よりの娛樂としてゐます。勿論肉聲で語るは私元より餘りに好みません。だから他國の人が一番おなつかしいのですよ。永劫に交を爲て下さる姉樣が何處にかあるのでしやうか、拙き私と。あゝ待ち遠うしい。（信濃國諏訪郡玉川村字穴山、玉川星子）

○詩　妾は長詩を作り度いと思つて居ますがお恥しい事乍ら少しも心得ませんて口惜しい事に思つてます詩をお作り遊す市內の御方は何卒お導き下さいませぬか。（名古屋中區西洲崎町七六、寺澤方宮田かづ子）

○御禮　妾し事去る四月號にて皆々樣方へ御交際を御願致しゝ處入方の御姉樣方から結構な

る繪葉書數々下さいまして妾なんとも御禮の申上樣も無いのです、記者樣へも厚く御禮申上ます御便り下さいました方々へはそれ〴〵返事を上げましたが中に千葉の日本赤十字社支部の御方と伊勢のシナ子樣橫須賀の淸子樣は消印の爲め住所不明に付き今一度誌上てなりと御知らせをお願ひ致します、右御便り下さいました御姉孃樣方よ何卒以後とても御見捨置なく御交際あらんことを御願ひ致します。(上野長野原局下、茂木よしえ子)

○造花　妾は造花を常に好む者てすが何卒造花編物などの交換を願ひますよ若し皆樣の內に生花に御熱心の方は御座いませんか ありましたらすみませんが御一報に預りたし妾はもとより淺學無智の者にはあれど生花には長く四ヶ年の苦心を致しましたよ、して妾の流は池の坊てすよ桃花の號は私の稱號です皆樣よろしく交際を願ひます。(岐阜加茂和知村下牧野、日置桃花)

○特に　皆樣の內で愛媛縣喜多郡南久米村、邊の方は、いらつしやらないてすか、友を選ぶのではないてすが特に交際して頂きたいのです(大分縣大分町、山本春子)

○ヴアイオリンの交換　和製五號のヴアイオリン並に附屬品一切持つて居升か不用てすから誰方樣か寫眞器と交換して下さいな其外何品ても宜しいてす委しくは通信して下さい。(茨城縣稻敷郡太田村大字小野新田、齋藤大次郎方つや子)

○土佐より　女子文壇は實によい雜誌になりました。私たちも今後つとめて投書致しますからどうか皆樣、誌上で御交際をねがひます。私は土佐の山間に暮して淋しく過ごして來たものですが、これから氣はらしに澤山歌を作らうと思ひます。私信の文通はあまり澤山の方々とてすから困ります。どうか誌上て私に向つて色々のことを申して下さい。(土佐國土佐山村、入定秦項女)

○花だより　船岡山の邊りから誌友の皆樣に御願ひいたします繪ハガキや玉章御惠み下さいませ、京都もあちらやこちらに櫻がさき出しましたので御惠み下さいました方には花だよりをいたしますわ。(京都市西陣紋屋町、小糸方靜月子)

○皆樣に　此度私等がよりまして八重櫻俱樂部と云ふ名て俳句其他何んても蒐集しまして廻覽誌として文學を研究する爲にこんな會をおこしました、皆樣何んてもよろしいから何卒御投書して下さい御たのみ申します。又俳句七月號の課題は梅雨とほとゝぎす五句以上てすから何とぞ投稿して下さいまれ、投稿所は下名へ(伊勢國瞬町中町、田中みれ子)

○陸前より　妾は田舍に語る友もなく心淋しく暮して居る者てすが皆樣よどうぞアルバム、リボン、雜誌小說など惠み給ひてよ、必ず相當にお禮しますから倂せてヱハガキ玉章の御交換もね、男子にても誠實なる方には御返禮いたしますわ。(陸前、宮城郡七北田村字上谷刈山添內白萩子)

○新婚　大阪の光代子さんは此度良緣あつて大阪市北區本庄橫道町一一八二番米問屋 種谷方に輿入なさいました、倂し以前の通り相變らず皆樣達と御交際をおねがひ いたされるとの事てす。(記者)

○忘れな草さんに　忘れな草樣の廻狀は私も望む處てすからお仲間に入れて頂戴。(埼玉縣草加町、高山かめ子)

○左の方々から何れも淸く樂しき交際を皆樣に求めて居られます、本文は畧して御姓名だけを發表します。

○山城乙訓郡下久世　永岡靜子
○廣島縣賀茂郡莊野村　谷川松枝
○福岡縣相馬郡松ヶ枝村　藤崎ひで子
○鳥取縣米子町立町二丁目　佐々木とき子
○長崎市たま江町三ノ一吉川方　すみれ
○福岡市材木町五、藤田方　三宅キミヱ
○太阪府泉南郡信達村馬場　辻井信子
○府下南千住九四四　吉田淸子
○山城乙訓郡久世村　柴田千代子
○和歌山市小野町三丁目　吉田春子
○岡山縣赤磐郡豐田村　道勇以登
○愛知縣知多郡龜崎町　川合淸子
○小石川區初音町四、荒侯方　成島柳花
○埼玉縣秩父郡皆野町　金子明子
(北海道札幌郡篠路兵村　藤岡雪子
○奈良縣高市郡高取町下土佐　富田幸子
○岐阜縣加茂郡黑川局內鷲見方　高野秋子
○鹿兒島市高麗町一三二　谷山さゑ
○群馬縣邑樂郡小泉町　三宅その子
○淡路三原郡松帆村　濱田留子
○茨城縣西茨城郡西那珂村　土井直江
○千葉縣長生郡豐田村北塚　吉井光子

○伊勢鈴鹿郡關野明神木村方　木村花子
○群馬縣多野郡中里村平原　九山くに子
○千葉縣山武郡鳴濱村白幡　吉澤深雪

持つて居る書物

讀みたい書物

○みだれ髪を求む　兄が大切にして居た晶子先生の『みだれがみ』を遂々なくしまして大變しかられましたから新しいのを買はふとしましたがありません御親切な姉様がたのうちにおち合せの方がありましたら何卒〳〵私の太田三郎先生のスケッチ畫法、蘆花先生の靑蘆集、鹿島櫻巷さんの景情小品、鳴雪先生の俳話と評釋のうちのどれかとおかへ下さいまし尙は『毒草』（與謝野御夫婦の）上製お持ち合せの方がありましたら萩の家歌集（落合先生）あめりか物語（永井荷風先生）練獄へ（高濱長江先生）のうちどれかと御交換願ひます私も京都の兄の處へ近いうちに參りますから何卒兄の處へ直接にお手紙なりお送りなり願ひます。所は（京都寺町通り今出川上ル一丁目、非上重治方岡部とは）

○不如歸　有名の『不如歸』御不用書がありましたら何卒至急御送り下さいませんか御禮は本誌文壇の光立田姫などで致します前もつて御一報下さいませ。（廣島縣比婆郡東城町川西、後藤壽美枝）

○歌集希望　皆様の御内に晶子先生のみだれ髪、佐保姫、それから毒草、むらさき、戀衣、何なりとも御不用のお方が御座いましたら御ゆづり下さい相當の御禮は致します　はじめはがきにて御一報下さい。（北海道札幌郡新琴似中原登美子）

○口繪　姉様方のうち雜誌の口繪についてろあぶら繪お持ちの方は、お送り下さいませんかお禮には少女世界、少女及び福岡名所エハガキなどて必ず〳〵致します又お暇の節には皆様レターお惠み下さいなおかへしきつといたしてよ（福岡市材木町藤田方大庭靜子）

○歌集拜借　どなたか私にみだれ髪か常夏か佐保姫をお貸し下さいませぬか御貸しになつた郵劵と短册とを添へて必ず御返し申し上げます御願を入れて下さるお方は一寸御はがき下さい（西多摩郡小宮村、森屋方よし）

○滋賀の方　本誌愛讀者の御方の內滋賀縣の方が御出でしたら以後御交際御願ひ申ます（滋賀白ゆり）

○蝶と窓　皆様の御手許に御不用の、小山內先生著、蝶、窓等の小說集御持の方は一册でも送つて下さい。文章學院編輯の十一版文章新辭典と婦人雜誌を添えて御禮致します。（大阪東區唐物町三丁目五十二、八木方八木のぶ子）

○誌友の御姉様の內で歲事記御不用の方が御ありならば妾に御ゆずり下さいませんか亦其外俳句雜誌など御持ちならば御ゆずり下さいまし必ず御禮いたします。（長野縣南安曇郡南穗高村、飯沼若太郎方とし子）○私の手許に雜誌『文庫』『新聲』が五六十册御座いますが、諸姉様の內にて一葉全集ツルゲネフ短篇集鐘樓守其他と交換を至急願います。（伯耆米子立町、佐々木とさ子）

○皆様の內で颶風戀風全部御所持のお方は何卒下名へ御借し下さい神に誓ひて不正な事は致しませんてす不束ながら寫眞の交換御願ひます先着五名のみ。（備前國八濱町大字片原町、板崎好枝）○皆様の內にヴァイオリンの本、不如歸の歌、己が罪の歌、乳姉妹の歌の不用なのおもちの方は惠んで頂だいれ。古雜誌入用の方はリボン、ハンカチーフ送り下さい、ちかつて送ります。岐阜の柴田なか子さま女子文壇三部送りましたがつきましたか？（福岡縣朝倉郡小石原局區內、荒川たか子）○皆様の御許に本社發行の家庭日記、昨年九月號拾月號御不用の方が有りましたら御報下さいな私の雜誌と御交換下すつてもよし又少しの間お貸し下すつても相當のお禮をいたし舛から。（山形縣置賜郡吉島村字吉田島貫琴子）○おなつかしき誌友皆様方の內に本誌の增刊新作家、若き婦人、其他小說ハイカラ令孃、颶風戀風、食道樂何にてもお持ちでしたら暫く拜借仕りたいです、必ずゑはがきか雜誌をお禮につけてお返し致しますから何卒お願ひします。（德島縣麻植郡學島村字學村、堤芳野）○モシ〳〵誌友の皆さん、一寸御賴みます、あのね―御手許に、英語ブック、辭典辭書、講義、對話會話などの英書御不用のお方は　ありますかね―御不用のお方あらば、御惠下さいね―御禮は相當に致すもの―　以上皆さんに御賴みます先づは左樣なら。（若松市中六日町宮原一枝）○私は繪葉書熱にうかされて集めた中には風景と花とをはじめとして美人水彩畫舶來などみんなて四百以上あります家政向の書籍や小說や雜誌や其外何でも結搆です御交換下さる方は御持合せの書名を知らして頂戴。（伊豫宇摩郡野田村、石川喜代子）○私は薄倖な身て人生の春も暮れ方の今尙

この田舍で孤獨の寂しみを詩文に慰めて居るものです、博識なる御兄姉樣の內にて靑春、後の不如歸、新不如歸、續後の不如歸、己が罪、金色夜叉、魔風戀風、乳姉妹、病間錄、想夫憐、呪はれたる女、新作家、短篇小說、家庭日記、女學世界、婦人世界、秀才文壇、少女界、女子文壇六年一月より三月迄の內一冊にても宜しいですからどうぞお讓り下さいませ。相當のお禮は必ず〳〵致します。手許に種々の雜誌も澤山有ますからお望により御交換もいたします。(宮城縣宮城郡七北田村上谷刈山添、萱場淸枝子)○誌友の皆樣、私の手許に文藝倶樂部、女學世界、婦人世界、新小說、嫁に行く人などいろ〳〵ありますが、何卒湯島詣うで、魔風戀風、多情多恨、思ひ出の記、强き戀、噫無情の後編などお持ちの方は私の本と御交換下さいませんか、もしも其時ははがきで前にしらせて下さい。(淸國上海三井洋行雲龍、小山天流子)○妾の元に女學世界、ムラサキ、中學文だん、女子文だん少年世界、少女世界、少女、少女の友、小供の一日、新文林、新聲、等昨年迄の古雜誌が三十餘冊ありますが、皆さまの內に、本年二月一日發行の本誌亦二月の增刊若き婦人、亦本年發行の婦人世界、婦人界、婦人畫報、女學世界、ムラサキ一二三月號、小說不如歸、後の不如歸。金色夜叉等御持合にて御不用の御姉樣は妾の元の古雜誌と交換して下さいな、第一着より五着までの御方樣には、妾の見苦しき、しやしんを差上げますから、たとひ一册にてもよろしうございますから、早く送りて頂戴な、送りて下る時は妾の古雜誌の名を記して下さいネ。(上野長野原局區內日影村富澤柳邦方、きく子)○萬天下の文壇愛讀の御姉上よ帝國速成習字學會の習字帳御持ちの御方は私しに御めぐみ下さいませ御禮には小說を差上申します。(信濃國南安曇郡南穗高村字細萱丸山奈苗吉樣方、丸山峰子)○御情深き諸姉樣の內不如歸お持ちの方は下名まで送り下さいませんか御禮には『文壇の光』と『少女世界』とて致します。(廣島縣北婆郡東城町字川西、後藤すみゑ)○私は東北の山家に埋れねばならぬ運命に迫り唯讀書に親んで居る者ですが當地は交通も不便で書籍をたやすく得られないのです。就て御兄姉樣の內に本誌二月號、女學世界昨年五月號、婦人世界四卷二號六號十一號、十四號、新作家、呪はれたる女、己が罪欺かざるの記、言海、一葉著『たけくらべ』御持でしたら一册にても宜しう御ざいますから是非お讓り下さいませ。必ず相當のお禮致します、又お心ある方は文學雜誌、小說お送り下さい、女學世界他の雜誌名所繪葉書等にて屹度お返しいたします。(宮城縣宮城郡七北田村上谷刈、萱場きよの)○誌友諸孃樣よ妾のもとに紀念號がありますから若き婦人號とかへて下さらないでしようか。(愛知縣知多郡東浦村字緒川八神源一郎方筒井みち子)○御情厚き諸姉樣方よ何んな古小說でも古雜誌でも御不用のが御座いましたらお惠み下すつて此の哀れな孤獨の私を慰めて頂戴な、殊に私懇望の怪人鐵塔少女(自初號至二月號)お惠み下さるお方がお座いましたらほんとに嬉しく存じますお願ひです。(岩手縣岩手郡田頭村舘坂國子)○誌友の皆樣私の手許に只今詩集、ふる故鄕集、あやめ草、心中おさよ新七金帆、小說、不如歸、新婚旅行、はんもん、自然と人生、其他の本がございますが、面白い小說や詩集などと御交換下さいませ。(京都市西陣紋屋町小島方靜月子)○妾の手許に金色夜叉合本、魔風戀風全夏子全、噫無情、不如歸、己が罪、血の淚、乳姉妹、自然と人生、女學世界、婦人世界、新體詩學其他古い小說が三册ばかり御座いますが皆樣の寄生木、靑春、伯爵夫人其他最近の小說と御換讀御願いたし度う御座います。(福島縣河沼郡飯谷村大字藤村長谷川光子)○諸姉上樣私には不用の雜誌が多くありますから貴姉樣の不用の雜誌と御交換を願ひます私には歐米名士の家庭と云ふ書物や大農園英語研究和漢新字書等があります、諸貴姉には俳句集一萬句、二萬句か英和字書、新文林、文章世界、秀才文壇等御持の貴姉はありませんかあるならば交換願ひます美麗な熊野百景の繪葉書を添へて送附致します。(紀伊國新宮町中之町浦芝保市方濱口浪子)○今私の手許で伊達の大奥萬國繪端書帖、政治小說、累卵の東洋、武裝の卷、絕島奇談、ハーモニカ等不用ですわ繪葉書も組のもの澤山ありますから小女の戀、不如歸、思ひ出の記、絹製の寫眞掛と交換して下さい。(伊達郡伊達崎村上郡朽木藤重子)○皆々樣今私の手元に小說乙女の戀、新不如歸、山と水前後、野菊の墓、西洋笑府、わがおもひ、奇術種本、天地有情、愛の解剖、オルガン、ヴアイオリンの譜色々ありますが、追恨、妻、靑春、にせ紫、思出の記、ハイカラ令孃など御持ちの御方樣は御交換下さいませんか御交換下さいますなら先一寸御はがきで御通知下さいませ。(大坂市西區天保

町五八、村中富士子)○皆樣のお內で昨年の本誌十月、十一月、十二月號と家庭日記御不用の方は何卒御送り下さい御禮には女學世界、婦人世界、新文林御望のものへシォドかエハガキをそへて差あげます。(下谷區西町十四村上春枝)○私は臨時增刊文壇の花紛失して不都合ですから若や皆樣の中で御不用の方がありましたら御惠下さいな御禮は相當の物にて必ず〳〵致します、又二月の婦人世界、女學世界マダム振り等三册不用ですから御寫眞を添えて御申込の方に差上ます。(茨城縣北相馬郡北文間村大字長沖、宮久保秋水子)○有益な本どんなのでもかまいません、又小說類御送い下さりました方には相當の小說か詩集に手製のしほりか花びんしきをそへて御禮申ます。(糀町區平河町安永咲く花)○私は日本歷史日本風俗史日本史年表元祿世相志行雲流水一蓑一笠大絃小絃龍吹鶴語みだれ箱雜木林國文熟語詳解吉野拾遺詳解漢文熟語詳解明治文選字引懷中玉編マダム振り當世奧樣氣質等讀みたう御座いますからお持ちの方はお讓り下さいませんかお禮には私の持つて居る伊勢の卷七本櫻其他小說詩歌俳句書類雜誌等を差し上げます。(秋田縣仙北郡大曲町米町鈴木方、幸代)○懷しい諸姉樣妾の許に雜誌七十二册、小說三十册、歷史十五部、冒險談二册、中學用地圖二部、畫帖二部、料理四册、修身立志五部其の外に三十四册の不用本がありますが皆樣の中で小說、民法、新刑法、衛生、料理、作文、英語、辭典、繪畫、栽培園藝、傳記等各書類の古くても不用本がありましたら細別目錄を葉書に書いて送つて下さい妾も着次第送りますかられ。(福井縣丹生郡吉川村貳町掛天谷十重子)○皆樣私の所に女カン、女學世界、少女世界、ムラサキ婦人世界八十册ばかり有りますから皆樣の中の金色夜叉、乳姉妹魔風戀風、其他のものと私の本の中と一册御禮として進呈致しますから皆樣お願申ます。(滋賀縣坂田郡醒井村池田初子)○諸姉樣の御手許に『女夫波』ありますなら御送り下さい御禮は必ず私の手製の造花で致します(栃木縣芳賀郡眞岡荒町四三、中野白葉)○皆さんに御たのみ申しますあのハーモニカの獨習書小野鷺堂先生の女子習字書小說御不用の御方は御ゆづり下さいませんか御禮はきつと致します。(伊豫小立江町坂本事務所、秋本みさを)○皆樣の內に孝女白菊。魔風戀風。コブシ下御ありの御方樣何卒御貸し下さいませ必ず御禮は致します、忘れな草樣今時分で時遲れましたが私をも廻狀の友へ御入れ下さいませ何卒委しい御手紙を願ひます。(北海道石狩原田局內發足、池田綠子)○花笑ひ鳥歌うといふ好いときになりました、私の手許に小說きく白菊、新金色夜叉、あわれ妻、我がむれの中、己がつみ、見合の日、三日間、月しろ、いやな人、新雲がくれ後の不如歸等があります三錢切手送り給はば、右を送ります。(麴町下二ノ二〇高林雪香)○御姉上樣妾の手元に不用の小說心と心、金色夜叉魔風戀風、己が罪、女夫波、ハイカラ令孃、夏子、篠子、不如歸、青春、小女の戀、みだれ髮等澤山不用ですから此樣のシヲリ、ヒジツキ又ハンカチーフと交換下され妾の見にくき寫眞さし上ます御手紙や玉章で申し下され。(奈良縣山邊郡柳本分句內名柄西、山崎吉枝)○妾の許に小說朝日櫻上下、繪姿、失戀境、山櫻、玉かつら形見の笄、等不用になつて居ります、同縣同郡のお近い方に限りおゆづり申します、御望の方は、往復葉書でお問ひ合わせ下さい。(秋田縣由利郡象潟町、齋藤りゑ子)○編物、しをり、名所美人繪葉書、ポケット女四書、贊美歌、御送り下さいました方には、此地の繪葉書其他小說古雜誌にて御禮致します。(備後國神戶郡木津和村近藤たつ子)○誌友の皆々樣何の小說本とは申しませんが御不要の御座いましたら御送り下さい御禮は必ずいたします。(羽前國米澤市越後番匠町加藤富次郎方とみ子)○皆樣の內に不用のサアイオリン、女持懷中時計お持ちの方は何方でもよろしいからお送り下さい、御禮は上製西洋人形當地共進會紀念スタンプ付繪葉書數枚古今和歌三代集女禮式中央公論支那文學全書史記列傳講義女子文壇婦人世界少女世界少女界日本少女明治の女子等數册で致します。(福岡市中土居町神吉まさ子)○私は富山房發行日本家庭百科辭彙と寶文館發行註解和英新辭典とを所持して居りますが不用になりましたから御讓したふ御座います御入用の御方ははがきにて下名へ御照會を願ひます、(小倉市室町一丁目、入江貴美江)○誌友の姉樣の內で二月以後の婦人世界お持ちの方は私の女子文壇家庭日記若き婦人と御交換下さいませんか尙又此後も皆樣の婦人世界と私の女子文壇と御交換御願ひ申し上げます、下名まで御葉書下さいませ。(長崎縣南高來郡島原町一七一大澤けい子)○誌友皆樣の御內で編物の栞やひじつきの御不用の御方は女學世界、少女世界、婦人世界、ムラサキハガキ文學や和英字書

英和字書など御交換を願ひます。(大分縣吉入郡竹田町小羽きみ)

繪葉書を好む

○繪葉書の交換を願ひます(山口縣玖珂郡灘村藤生北村秀子)○仝上(岐阜縣土岐郡多治見町小栗重郷方、澤田ヨシ子)○同上(能登鳳至郡砦月町字西村町一五、松井喜久枝)○私は各地の繪葉書を集めて居りますのですが近畿及東京附近にて集りましたが隨分各地の塔がありますから若し御近所に有ります方が御座いますなればどうか送り下さいませ五重でも三重でも多寶塔でさへあれば結搆で御座ります御返禮にて肉筆はがき又は名所葉書てと御好に應じます。(大阪西區京町堀通四丁目五〇中島貴美子)○皆様の中て金川げんろく園、水戸偕樂園、秋田千秋公園、東京小金井東京淸水谷公園、江戸川の櫻花。芝公園、府下荒川堤の櫻花、京都御室の櫻吉野山、紀州和歌山、神戸市の繪葉書お持ちのかたは御送り下さい御禮にはリボン諸雜誌、この地の繪葉書どれもお好み通りいたします又一組御送り下さればそれ相當のお禮いたします(岡山市富田町二十四番地矢木たけ子)○皆々樣妾も同じ趣味に憧れて繪葉書を淋しき慰藉の友として愛し日を送りて居ります何卒交換して下さいませ、そうして御送り下さるなら五枚とか十枚とかかためて送つて下さい妾も京名所を以て返禮します最も名所が結構です。(京都諏訪町松原下ル橋本方、久代)○誌上の皆々様あたしは名所や美人のゑ葉書が大すきのよ姉上様どうぞ末長く御交際を願ますあたしお勝手なことを申ますがお手紙の交かんは餘りすきませんので精々繪葉書て交際を願ます。(京都市諏訪町松原下ル橋本かた、中村ハス子)○誌友姉々様方に不文の身をもかへりみず御交際御願申し度ふございます妾は至て無筆の身ながら大へん交換と云ふことに趣味を持ち、わけて繪葉書や寫眞を望みます。(京都室町萬壽寺下ル杉山彌吉方淸原さわ子)○文壇愛讀者の諸孃樣の中に上等の舶來製の景色美人コッケイ其他の繪葉書御持ちの方は御送り下され御禮には必ず雜誌及米國製繪葉書及び和製の美人又は景色十枚又は六枚一組御送り致します但し封筒にて御賴み申します、(大阪市南區大寶寺仲之町八二、鍵谷さく子)○私の友達は皆エハガキの交換をして居られますので私も今度仲間入りをさしてもらつたので何卒よろしく御賴みいたします、それから男子の御方から來るそうですが、私は淸い御交りなら何時でも致します。(京都市五條通油小路東入大島裁縫所内秋月きみ子)○妾は今年十七才にして兩親には幼少の時死別れ兄弟姉妹も無く只今は親族の家にて淋しく暮して居りまして諸姉上さまより來る繪はがきを樂しみにして居る故誌友の方々永久御交換を願ひます。(神戸市葺合町一九一一梶春子)○玉章や繪はがき送つて下さい岐阜之名所繪はがきを必ず差し上げますから永久御交際を願ひます。(岐阜市松山町松本榮太郎方利子)

記者と讀者

○三月號の、文壇餘興の廣告新聞に出ました美聲良藥の鶯丸、澤山に切手二錢封入して、申込む者がありますので、皆一々あれは、課題の通り、無いものをあのやうに廣告したのだ、と返事をしましたが、中には色々品物を送つてくださつて、藥をくれよと申されますので殆んど困まりました、記者様もあれはないものだと誌上て証明してくださいませ、(福井縣片山千里)(あれを本當にして申込むのは少々常識に缺けてゐるやうに思ひます、けれども中には事情に疎い地方の方もあるでせうから、品物を送られた方などには事情を言つてお返しになる方が宜しいでせう、まさか鼻糞をまるめて鶯丸と稱するわけにもゆきますまいから、此處鶯丸は賣切として置きませう)○記者様私は四十年度より本誌愛讀者となりました去年の末より地方より上つて愛讀してゐます又不束者ながらもつまらぬ投書も怠りませんてすが二ヶ月前からポッになるよーになりました惡いから捨てられたのとは思ひつつ悲しく次の原稿に勇氣がありません何卒一言の批評なりともお願ひ致したう存じます誠に我がまゝを申しまして兎して下さい。(福非、北利子)(記者曰、一寸御あいさつに困りました投書は一々別の選者の手に廻りますから、此欄の係りの者は何事も申上かねます、投書に對する批評も或る場合には出るでせう、何しろ然う云ふ方が澤山あろうとは思ひますけれど、差當り紙上に出た方の幸福を言ふ外はありませんお努めなさい)○過日は圖書切符誠に有がたふございましたあの圖書切符は、女子文壇の前金にさし上げる事は出來ないんてすか一寸うかゞひます。どうぞ誌上ておしらせ下さいませ。(しのぶ子)(記者曰、差支ございません)○失禮

乍ら私の希望を一寸申し上げます、あの誌友くらぶの内へもう一ッ談話室なる一欄を設け下すつて各自の思想そのまゝ、例えば『妾は近頃かよう／＼の事を思つて居るが皆様は如何思召して被居るとか妾の居る處はかよう／＼の物が流行して居るが皆様の被居る處では何うですかと云ふような事をのせて不問不語の間に各地の事情を知らう樣に致し度いと思つて居ます何故なれば女と云へば申すまでもなくあまりたくさんの人とお言葉を交えると云ふ事がありませんから從つて一般の見識が狹く思はれますからこゝに一寸愚言を呈します。（名古屋かづ子）（記者曰お說の通りです、只、特に談話室なる一欄を設けるまでもなく、誌友くらぶ全躰が談話室ですから、皆樣も此方の言はれる通の御投稿下さいましたら、記者は悅んで掲げます）○記者樣お手數乍ら與謝野晶子先生の御所を敎へて下さい。（岡山縣、曉花）（記者曰、神田區東紅梅町二番地です。○大竹ちきの。群馬、石島しづ子。大澤小勇。札幌、淸川雪子。野菊。伊豫、渡邊文子。野百合。伊勢、田中みれ。越後、眞柄廣子。成女學校內一愛讀者。伯耆、足立春子。横濱、みどり子。府下、橋本市。岡山縣、丸山あさ子。尾張、佐分富美子。靑梅、荒井春子。山根ふじ子。以上の諸孃からの記者に宛てた御通信は皆一讀いたしました、其意も了承いたしました。（記者）

短評

△四月號　美文天賞、吉田紫花樣、題が櫻の窓のお給仕でした、讀んで見ると、成程意味たつぷりとした誇張があつて面白く思ひませんでした。之れより私は地賞の『色』の方がよほどよく印象もはつきりとしてゐるやうに思ひました。人賞片矢の濱に立ちては感心しました、好妙な描寫――氣の利いた筆、私はこうした文が好きなのです。日記文は之れと云ふて採るような作品が見へなかつたようです。小說では、小笠原ゆり子樣の『淋しき日』が一番面白う御座いました。『幸に倦んだ人、暴露されたる現實の悲哀に泣く人―よく現はれてゐますこうした作品は葉舟樣が一番お好になるようです。地賞チクタイは馬鹿々々しいようでした。三等の羞耻も余りにあつけなかつた感じがいたします、矢張り天賞の『淋しき日』は出色の作品でしよう。竹久夢二さんが、去つた妻の『たまき』さんの事を戀しいと書いたのは、早稻田文學の德田秋江さんと同じようで、妙なものです。短歌一等の江森樣より、三等の沼倉さんの方がよほどよろしいように思はれました。與謝野先生もこうした二等のような歌を好まれるやうな傾向が見へます。來る可き五月十五日――『都會婦人』私は此の新しい都會の印象記の表れる日を待つてゐます。（以上盲評吾妻白百合）

△短篇小說、淋しき日は本統にいゝ事、チクタイ題が新らしいので面白かつたわ。美沙子が女學生を見送つた時の目が現に見える樣です。寂靜子樣つてどんなお方、妾お目に掛りたいわ。詩、之は妾に出來ないから評する事も出來ませんネ。散文一年後の友のおの／＼、一年で之だけ違ふのですもの十年も二十年も後はどんなに變るでせう。面白く拜見致しました。和歌俳句は矢張舊派が好きですわ。或人曰く、餘り歌が流行するので作る種が盡きたから新派の樣なのが出來るのですつて、そうでせうか。日記去年より春の方が良いと思ひます。論文、主婦の務め心得ればなりません事です。書簡文、奉公先より、妾之を讀んで泣きました。春子樣御自身のお事なら誠に永久御交りを。私の身も同じですから。短文、短かいけれど六ケ敷妾に芽の樣な作はいつ出來るでせうか。作者の見立、題が六ケ敷からどんなものかと思つたわりに何だかあつけない氣がしました。德田樣の未亡人餘り高尙ですネ―。同先生の芒も餘り密し過ぎます。先生は表面は美くしい優しい處あるけれども裏面は針が……そうですネ、アザミ、でなくば鬼アザミ……オットロがすべつて……先生御めん遊ばせ、今度の表紙は本統にようございましたわ。（四谷、さき子）

個人消息

○土佐の寂靜子さまおなつかしうございます、私れ土佐の生れよいろ／＼悲しい事情があつて私一人こちらへきてゐますよ姉や親戚はそちらに居ります御手紙上げたいのだけど御ところも御名もわかりませんからこれをごらんください下名まで。（前橋市本町二號青木時子）

○大阪八穗子樣に　仰の通り私は赤穗町の者で御座います、貴孃はもしや當町の淮田女學校にいらしつた方では御座いませんかちがいましたらお許し遊ばせ、笹舟樣は同加里屋町の方で只今は明石の女子師範學校にいらつしやいます（兵庫縣赤穗町田淵祥子）

雑報

素人にも容易く作り得らるゝ西洋草花

本誌の一記者が横井農學博士を訪問した際、素人でもたやすく作られる西洋花についてお尋ねした、それて博士は左の通り手記して送られた（博士の園藝に關するお話は本欄に載つてゐる）同好の婦人達、宜しく試みたまへ

ダリヤ（天竺牡丹）

素人にも作り易いもので、どんな土に植へても差支ないが、出來るならば重い土の深いがよい濕氣は嫌ふ故、乾燥の所を撰ばねばならぬ、四月頃其所の土をよく耕して、少量の油粕を施し球根を植へ付ける、かくすれば發芽した新莖が伸長する、この時分に竹の如きものを立てゝ、これを結びつけ、風防の注意とすると、六月下旬より十月頃迄、艷麗な花を見る事が出來る、中途て花の絕へる事があつたら、その時は補肥として油粕を施すがよい。

球根の外これは種子によりても仕立てる事が出來るこの法によれば花が種々に變化するから面白い、これをなすには四五月の頃少し高目に苗床を作り、土を粉碎して種子を蒔く。その種子の上に少し許りの土を篩ひかけて、又其の上に切藁を撒布するか、藁を一本列べにして置くがよいかくすれば、床面の乾くのを防ぎ、又種子の雨風のために流動するを防ぐ事が出來る。かくすれば十四五日迄には發芽するもので、二三寸に苗が生長してから、他に移植するのである何れの方法によるも、晩秋地上四五寸の所より株を切りとりて、その上に土を蔽ふて防寒の準備とする、又球根を傷づけぬ樣堀りとりて、濕氣少なき乾燥な所に貯藏してもよい。

ダリヤには多くの種類あるが、就中流行するはカクタス咲にて秋菊の如き小花辨のものである。

つくばね草

花壇用にも鉢植するにも奇麗な草花である、平鉢を用ひて下種するもよし、苗床によるもよい、この種子は微細であるから、豫め細砂土を混じて下種する、さすれば密植の弊を除く事が出來又發芽後の手入に都合がよい苗床にて仕立てるにはダリヤの場合に云つたのと同樣にすればよいが、平鉢には一寸位の厚味に土を篩ひ入れてこれに播種し、又土を極く少量かけて、上に切藁を置く事苗床と同樣である。

發芽後乾燥するときは、適宜に灌水して、一二寸に及へば花壇又は鉢に移す、鉢に移すには花壇に移すより少し早いがよいようである、大くなつたのを移せば下葉が枯れてみつともない。移植後は一二度稀薄な人尿、又は油粕を施すとよく生育して六月頃より、開花する花壇の場合て餘り丈高くなつたら地上二三寸の處から切斷すれば、又新芽伸長して花を見る事が出來る。

コスモス

四月頃苗床を作りて播種し、一二寸に生長してから移植する、生育迅速で丈六七尺位となる。風雨に弱いものであるから是非支柱の必要がある、丈の伸ぶのを抑へるため、一尺位に生長してから心を摘む事がある、近來矮性コスモスと稱して餘り高くならぬものが出來た。

フロックス

四五月床を作りて播種し、一二寸に及んで花壇や鉢に移植する、鉢に移すには花壇に植へ換るより早くするがよい、又鉢に直播してもよい、直播にするにはよく腐熟した培養土を鉢に盛り、四五粒の種子を蒔き、少し許りの土を蔽ふて置く、土の乾燥する時は適宜に灌水する。

スヰートピース（花豌豆）

多く秋に播種するが又春にする事もある、これは移植を忌むものであるから、是非鉢又は花壇に直播にせねばならぬ、培養土を鉢に盛りて、二粒位下種して、土を被ふて置く、蔓性のものだから五六寸の丈に達したならば程よく支柱を立てる、花壇に直播するときも同じである、六七月頃より段々開花する白、赤、紫等の種々の花がある。

乾板の畫

もう春も往つて了つた。青白い後姿が燃えるやうな初夏の强い光線に照らされて、メラ〱と融けて行く、其斷末魔の荒い息、高い喘ぎが强く、燒附けるやうに瞳に觸れる。

あゝ殘された畫の怨み、瞳に生へた毒だみ

の青黑色の廢葉。見よ、其植物性の强い刺戟が注射されたペスト菌のやうに、急がしく脈絡をめぐつて行くのを。かたへの砂地の白い反射の上には、班螫の金綠色と帶黃赤色が誘惑の光を放ち、隱れたる後翅の青黑色は其下にすゝり泣して居る。赤い目まぐろしいやうな空氣毒汁に腐れたやうな生溫い風――それが私の眼を雨のやうに射る。

いつそ眼を閉ぢたい。併し閉ぢても抉つても瞳の印畫は消えない。いつまでも心の乾板に腐蝕して殘つて居る。あゝ春はもう往つて了つたのだ。さよなら只さよならと云へばいゝのだが、舌が剛はばつて云へない。さーよーなーら。

今年の櫻

今年の櫻は一週間咲いゐた、いつも三日位で散つて了ふのを、七八日も花を保つたのは風が無かつたからだ、十日の日曜から次の日曜まで花は盛りであつた。櫻といへば上野か、向島に限られたるものだが、交通機關の便利になるにつれて、飛鳥山、荒川堤、黃金井などの遠方へ出かける人が多くなつた。勿論花を見るのでなく人を見に出るのと見られに出るのとて、何處も彼處も櫻ある處は人間て埋められた、うつかり花でも見て居やうものなら、蹴飛ばされて了ふ江戸川や九段の夜櫻にも人は出たが、何う云ふものか燈火が少いから、暗くて花が見えない、炬火でも焚いてもつと明るくしたら宜からうにと思つた。櫻の花の色に注意してみると、灰白に薄い日と、少し薄紅ゐを帶びてゐる日とある最も場所にも依る、市中の櫻は思ひなしか一體に色がわるい、人間でいへば營養不良のやうに見える、紅ゐがゝつたのは美しいものだが、灰色がゝつた白さは嫌に思ふ、雨のあとは色がわるい、日光の能くさした次の朝などは紅ゐの色が良い八重の濃厚すぎるやうな色をした櫻も好い、八重の多いのは荒川堤で、薄墨櫻、揚貴妃櫻、欝金櫻などは皆同所に多い、少し遠いけれど、櫻の種類を見やうと、思ふ人は荒川に行くのが宜い。なほ荒川の堤を餘程行つて、左へ折れる途を王子の方へ歸る左側に、何とか云ふ草原がある、そこには櫻草が多い。

櫻草摘

花が咲いてゐるのを見付るのは容易いが、咲いてゐない櫻草を見附るのは困難だと云いながら畦道を步いてゐると七人連、案内のM氏はこんな處には無いと云つてサッさと行く、後れたI氏は土筆の闌けたのを一本〳〵拔いて、晩餐の當にするらしい。漸く原へ出たI氏はあるあると叫んだ、なる程其處には櫻草が茅萱の間間に地にくつゝいてゐる、餘りに小さくて堀るのは氣の毒なやうだけれど、中には蕾さへついてゐるのもあるから、M氏先づ携帶の庖丁を取出す全體此原一面に櫻草があるらしい、むやみに人に堀られて根が絕えたら惜いもんだ、公德問題として、此原だけは採集を禁じたら宜からうなどゝ言ふ者もある。それは尤もだ皆贊成したが、矢張然う云ふ御當人がせつせと根を堀つてゐるから、公德問題も一向矛盾してゐる、獨り離れて大きい葉のを探してゐると、籠を抱へて男の子が傍へ來てしやがんだ、見ると一杯櫻草を入れてある、隨分取つたれ、一つくれないかと云ふと、嫌だやれないと云ふ、土着の子供らしいから、そんなら賣つてくれないかと、云ふと、一束一錢づゝなら賣ると云ふ、よしよし皆な有りだけ買つてやると云つて、出させてみるとちやんと、束にして土を拂つて賣るべく出來てある、交涉が濟んだ後へS氏が來た、I氏も來た、これだけ採つたと云つても本當にしない買收したことが、露顯すると、I氏は憤慨して桂內閣を辭職すると云ふ、結局妥協して折角買收した櫻草は皆に分配することゝなつた、見渡すかぎり草原の上には春の人が繪のやうにちらばつて、摘草をしてゐる、春の日は薄い雲に包まれ、東京の方角には低い林が續いて、西の地平線の遠いこと。

或る人曰く

△或る人曰く、水野君の『愛の書簡』が出るさうだが、なか〳〵振つてゐると云ふことだ。

△或る人曰く、新しい雜誌がずいぶん出るがうまく續くか知ら。

△或る人曰く、田舍から初めて東京へ來てみると何も彼も動いてゐます、動いてゐないものはないのが大都會の姿ですれ。

△或る人曰く、刺戟がないと生きてゐられん

△或る人曰く、暫く田舍へ歸つて來やうと思ひます。

△或る人曰く、人間が獸に墮落して、神樣が人間に墮落した。

誌友會雑感

▲女子文壇第一回誌友會の記事は、別項記載の通りで、大半は盡きてゐる、なほ洩れたることを二つ三つ玆に掲げやう。

▲當日來會者一同指名點呼でもして、名乘合をしなければ、誰が誰やら分るまいと心配してゐたが、時間が切迫した爲め其機會を失つたのは甚だ殘念である。記事を見れば大抵見當はつくといふものゝ、なほそれが悉く分らないのだから殘念だ。

▲岐阜から見へた篠田とみ子は一見して其特色があるから分つたが、横濱の磯萍水氏の令閨や八王子の豐泉たま子、熱海の木村おやのなどは一寸分らなかつた、寫眞に洩れた河野槇子姉妹は、餘りに若かつたから眼についたらしく、是も寫眞には隱れてゐる朝井千とせも、幹事の中では働いた方だし、殊に福引掛をしてゐたから能く分つた方だ、幹事側で最もつゝましやかにして居たのは、横濱の小川泉子で、用事を言ふのが氣の毒なやうであつた。

▲お孃樣姿の最も可愛いかつたのは櫻木きみ子だと或る一人が語つてゐた、此の方も床の間の隅の方に、附添人と一しよにおとなしくしてゐられたやうだから殆んど氣の附いた人は少なかつた。

▲一人でいらした方は極く少いやうだ、大抵はお友達とか、妹さんとかと一しよであつた、割合に小さい方の多かつたのは其爲であらう。

▲餘興が思ふやうに出來なかつたのは、來會者の方々に甚だ濟まなかつた、餘興といふものはいろ〳〵差支の起るものだとは知つてゐたが殊にそれを感じた、對話なども實は一回も下稽古をせずに、當日いざとなつてから實演したのだから、あれなら大出來と言はねばならぬ。

▲幹事の一人町田靜江は其前日俄に旅行せねばならぬ事情が生じて、遂に會場には其姿を見ることは出來なかつた。

▲横瀨夜雨君は會の前日入京、會終つてから友人の家をぐる〳〵廻り歩いて居たが、都の一重櫻が到る處に散りかゝる十七日の午前、上野から汽車で歸つた。

▲會が終つた時、四五の幹事達は殘つて、紀念はがきに筆蹟を交換してゐた、大廣室には座蒲團ばかり殘つて、今まで居た美しい人の面影が幻のやうに浮ぶ、パツと電燈が點いた、凡ての色彩は夜と晝との間の光に輝いた、一種の淋しみがあたりに漂ふて、行く春のやうな心持が言ひ知らず興を惹いた。

▲當日先登第一の出席者は本社の寺田よし子オルガンを車に乘せて會場に運ばなければならぬ責任があるので、爾く早かつたのであらう。

▲眞柄農子、前島ゆり子、其他十數名の方から會を祝する意味の來信があつた、此處に一言それらの方々にお禮を述べて置く。

▲此種の集會は一年に一二回はあつても宜いと思ふ、初めの割には豫想外の盛會であつた、次回は更に經驗を積んで面白い集會が開かれることであらうと思ふ。

▲地方でも誌友の多さうな土地なら開いて宜い、多勢でなくても多少文學に興味を持つ方が主となつて開いたなら、他には見られぬ特色ある集會が開かれるであらう(醉茗)

新刊

○相聞　與謝野寛著　明治書院發兌

○收穫　前田夕暮著　易風社發兌

○覺めたる歌　金子薫園著　春陽堂發兌

右三書は本號の本欄で詳評する筈であつたが、紙面の餘地なく已むを得ず次號に廻した、著者及び讀者は是を諒としたまへ。

○秋風曲　鈴木鼓村著

毎に箏曲の上に新意を加へんと努力してゐる鈴木鼓村氏が、秋風曲を作譜したものである、歌詞も作曲も高雅幽玄、之を箏に上せたならさぞ優雅なことであらうと思ふ、此書體裁亦大いに凝つたものである（定價五十錢、今古堂發兌）

○日本歴史畫譚　上田萬年解説

上は日本開闢から、下は伊藤博文の最期に到るまて、日本の歴史上、著名なる物語を約二百件選出し、一件一頁として一頁毎に美くしき繪と簡潔なる解説とを供へしもの、家庭の讀物としては甚だ好い思ひつきである。（正價六十五錢、勉强堂發賣）

○小品二十一篇　水野葉舟著

最近に出版されたる「惡夢」の再版である。最も此集には其夢を除いてあるから小品十一篇となる世に定評ある葉舟氏の得意の作ばかりだから兎や角言ふまでもない。（定價五十錢、易風社發賣）

○三紀行　沼波瓊音著

「莊内の山水」「秋田めぐり」「お伊勢參り」の三紀行文を一册とせしもの、「莊内の山水」には文章に苦心の痕はあるが、寧ろ「伊勢參り」のすら〱として自然なるを愛す、挿畫釘裝何れも風致に富む（定價五十錢、文成社出版）

○裁縫秘術綱要　小出新次郎著

女子裁縫高等學院長小出新次郎氏著で、題の如く裁縫に關する新しい智識を授かるには好個の參考書である。圖を入れて説明も叮重にしてある、裁縫に心掛の深いものは一讀すべきものであらう。（定價五十錢、女子裁縫高等學院出版部發兌）

○翠果集

梅本翠果君は京橋の人、享年十七にして死す、此册子は友人西村小徑、小柳江村の兩君が故人の爲に其遺稿と、友人等の追憶錄とを集めたるものである。（非賣品）

○花嫁の準備と實務　東京婦人學會編

人の妻たるには何う云ふ心掛て居なければならぬか、經濟は何う、交際は何う、教育は何う、と云ふやうなことを説き、更に、醫師、商家、軍人、官吏、學者、文士など〱それ〱嫁入る家々の異るに就いて心得べき事が述べてある嫁入前の婦人には重寳な書物である、（定價五十錢、二松堂發兌）

○文章資料　岩垂憲德輯

古人の創作中より青年操觚家作文の參考たるべき成句を蒐めてある。今の若い者にはこんな書物と首引て文章を作る者もあるまいが。併し參考位には成るだらう。（定價金二十五錢東京神田區猿樂町二建文舘發行）

○女子作文全書　國民中學會編

書簡文の用意、練習、文範、日記文の概要、練習文範等に亘つて、頗る叮嚀懇切に書いてあるが『即ち書簡文にあつては昔ながらの候文體を取つて言文一致体を斥け……たるが如き、微意の存する所を知るべきなり』とある。其微意には敬服することが出來ない。（定價金六十五錢東京神田駿河臺東京國民書院發行）

○世界文藝　第一號

新しく出た文學雜誌である、秋田雨雀氏の靜劇「第一の曉」が卷頭にある、坪内博士の劇談蒲原氏の詩談、小川未明氏の小説、自由詩社諸氏の新作など初號にしては賑やかで整つてゐる。（定價十四錢、世界文藝社發行）

○藝文　第一號

京都の帝國大學の機關で、東京の『帝國文學』と相對峙すべきものである、初號には文學博士文學士の顔揃ひて一見堂々としてゐる、既に根據のある雜誌だから重きを爲すは勿論であらう。（定價十五錢、開成舘發行）

投稿規定

▲原稿は一切女子文壇社宛に送ること▲原稿には女子文壇原稿の文字を書添えて下さい▲文字は能く分るやうに書くこと▲小説と詩と短文には振假名をつけること▲小説は二十四字詰八十行以内、散文は同字詰三十行以内、日記、論文も同上、書簡文は同字詰二十行以内、詩は行數制限なし、和歌と俳句とは一人一首限り、短文は十六字詰七行限りとす▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、凡て半紙、原稿紙、罫紙等に限る▲圖畫は二寸に三寸の大きさにて薄きＨ本紙に限る▲投稿は凡て女子に限る▲投稿は毎月十五日堅く締切る

○女子文壇投稿各種 懸賞定額

（甲乙丙の各欄を通じて最も優秀と認むる作物ある場合に之を呈す）

▲特別賞金五圓

▲甲種（短篇小說、散文）
天賞金參圓。　地賞金壹圓五拾錢。　人賞金七拾錢。

▲乙種（家庭日記、新論文、書簡文、詩）
天賞金貳圓。　地賞金八拾錢。　人賞金四拾錢。

▲丙種（和歌、俳句、短文、餘興、圖畫）
天賞金壹圓。　地賞金五拾錢。　人賞金貳拾錢。

㊟各種とも金壹圓以上の價格當選者には相當の呉服物。小間物。文房具。日用具等凡て物品にて贈呈す壹圓以下は便利圖書切符を以て贈呈す

㊟賞品發送は作物發表の翌月末日に贈呈す、（但他人の作物を剽竊したるものは無効とす）

女子文壇定價明細表

○定期發行分　毎月一回（一日定期發行）

册數	定價	郵税	計
一册（一回分）	定價金拾五錢	郵税一錢五厘	計金拾六錢五厘
三册（三月分）	同前金四拾三錢五厘	同四錢五厘	計金四拾八錢
六册（半年分）	同前金八拾四錢	同九錢	計金九拾三錢
十二册（壹年分）	同前金壹圓五拾六錢	同拾八錢	計金壹圓七拾四錢

○臨時增刊分　年四回（二月、五月、八月、十一月臨時增刊）

册數	定價	郵税	計
一册（一回分）	定價金貳拾錢	郵税二錢五厘	計金貳拾二錢五厘
二册（半年分）	同前金三拾八錢	同三錢	計金八拾壹錢
四册（壹年分）	同前金七拾貳錢	同六錢	計金七拾八錢

○定期發行及び臨時增刊とも全部―十六回

册數	定價	郵税	計
四册（三月分）	定價金六拾三錢五厘	郵税六錢	計金六拾九錢五厘
八册（半年分）	同前金壹圓二拾二錢	同拾貳錢	計金壹圓三拾四錢
十六册（壹年分）	同前金貳圓二拾八錢	同二拾四錢	計金貳圓五拾二錢

▼申込注意
振替にて拂込む時は誌代の外に貳錢登記料增すこと郵便爲替は中橋和泉町局、郵便切手代用は必ず壹割增（收入印紙謝絶）、凡て前金拂込に限る

振替貯金口座　東京参壹七貳九番

廣告料金

	一頁	半頁	一行
特等	一頁三十圓	半頁……	
上等	一頁廿五圓	半頁……	
普通	一頁廿三圓	半頁十二圓	一行四拾錢

部數多く有効に比し無類の割安

〆切 毎號十五日前

特約取扱○日本電報通信社○明治廣告社○弘報堂○博報堂○東京勉強社

明治四十三年四月廿五日印刷
明治四十三年五月一日發行

定價金拾五錢

不許轉載

東京市京橋區大鋸町十一番地
編輯兼發行者　野口竹次郎

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷者　石川金太郎

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷所　株式會社秀英舍

東京市京橋區大鋸町十、十一番地
電話（本局六〇七番）
發行所　女子文壇社

特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

第六年第六號
(每月一回一日發行)

明治四十三年四月廿五日印刷納本

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】

女子文壇 定價金拾五錢 郵稅五厘